

# ほたるの群れ 5

第五話「希（こいねがう）」

向山貴彦



ほたるの群れ

5

第五話

「希（こいねがう）」

# 五倉山の暑い夏休み——。 永児たちは平和な日々を送っていた。

十代の孤児を「駒<sup>こま</sup>」と呼ばれる暗殺者に育て上げ、社会にひそかに送り込む組織「会<sup>かい</sup>」。その仕事の現場を偶然目撃してしまったことから、普通の中学生、高塚永児と小松喜多見は命を狙われることになる。しかし、学校に送り込まれた二人の駒、阿

坂浩助と千原行人に結果的に助けられ、永児と喜多見は度重なる駒の襲撃を紙一重でかわしてきた。そして一学期の最後、五倉山頂上の廃墟で阿坂の所属する「院<sup>いん</sup>」と、千原の所属する「塾<sup>じゅく</sup>」が壮絶な死闘を繰り広げ、永児はその最中、自分を知る白髪の少年と邂逅<sup>かいこう</sup>を遂<sup>と</sup>げる。戦いの果てに阿坂は重傷を負い、千原は生死不明のまま、中学三年生の夏休みは始まった。

たかつかいじ  
高塚永児

寝癖頭のお人好しな少年。数ヶ月間は落ちることのない発光塗料を右手に受けて、それを目印に「会」に狙われている。頭の中の「スイッチ」を切ることで、一時的に理性をなくし、凄まじい能力を発揮する。

こまつきたみ  
小松喜多見

堅物の美少女。「会」の暗殺現場を見たとして拉致されるが、永児の助けを借りて生還する。その後、ASという神経毒を食らったが、死の淵から辛うじて這い戻り、強くなつて周りを守ることを自らに誓う。

ちはらゆきと  
千原行人

「会」の一派である「塾」が二年前から永児たちの学校に送り込んでいた殺し屋。なんらかの理由で永児に近付き、友達として接している。冷静沈着な性格、学校でのあだ名は「会長」。四巻の最後で生死不明となる。

あさかこうすけ  
阿坂浩助

「会」の一派である「院」が千原を葬るために送り込んだ殺し屋。ゴリラ顔でバヤリース好き。成り行きで永児と喜多見の味方になつてしまう。四巻の最後で深手を負うが、持ち前の体力で順調に回復中。

よねはら  
米原アズミ

「院」からやつて来た阿坂の妹分。動きは素早く、気配を消すのは一流だが、生来の優しい性格が災いして、なかなか駒の仕事に徹し切れない。暗殺するはずの永児や喜多見と仲良くなつてしまい、苦悩中。



火花舞い散る空の下  
光と影は交わりて

人に届かぬ静かな音で  
夏の終わりを哀しく報<sup>しら</sup>す

ほ、ほ、ほーたるこい

0

血の臭いがした。

あの時は分からなかったが、今ならすぐに分かる。小銭を手握り込んだあとにする金属の臭い。その中に腹の底から吐き気を催す、タンパク質の臭いが混ざっていた。

足の重みで、ギシッとフローリングの廊下が鳴る。夕方を過ぎたばかりなのに、家の二階の廊下は真つ暗だった。突き当たりのトイレのドア。小さな磨りガラスの窓に、ぼんやりと四角い明かりが灯っている。

「姉さん？」

そう呼びかけた。返事はない。自分の声が空っぽの家の中に気持ち悪く響いただけだった。

「姉さん？ トイレに入ってる？」

もう一回尋ねたが、反応は返ってこない。電気の消し忘れにうるさい姉が、点けっ放しでトイレを出るわけがない。下を見ると、普段ならドアの下の際間から細い明かりが漏れているはずなのに、その隙間を何かが塞いでいた。胸がトクトクと打ち始めて、いやな予感が広がっていく。

思い過ぎだ。そう自分に言い聞かせた。きつと今から一時間後には母さんが帰ってきて、夕ご飯の仕度をしながらキッチンで姉さんと三人で話している。その時には、こんなことなんてみんな忘れてはいるはずだった。

トイレのドアノブをつかんで回す。鍵はかかっていなかった。ただ、いつもよりもなぜかドアが重たく感じられる。何かに内側から引つ張られているようだった。

ドアを開けた途端、金属の臭いが一気に強くなる。ドアの縁から黒いものが床の上に流れ出してきた。一瞬、トイレの床が真っ黒になっているのかと思つたが、そうじゃなかった。真っ赤だった。黒ずんだ赤色の、粘り気のある液体が、トイレのマットを完全に沈めるほど床に溜まつていた。同じものが壁にもこびり付いて、そのまま何本もの線になって流れ落ちていく。姉がトイレの蓋に座った状態で、横の壁にもたれかかっていた。だらりと垂れ下がった手の先は、床に広がった液体と同じように黒ずんでいる。

声は出なかった。床にできた赤黒い水溜まりの中に、無数に落ちていくガラスの破片にばかり目が行つた。――電話しなきゃ。そう思つた。救急車を呼ばなきゃ。

でも、それができたのはもう一瞬経つてからだった。そのわずかな時間はただ、床の上を見つめていた。姉の血が床の上を染めている。姉の大事な命が床の上に流れ出していた。

そんなことは不可能だと知りながらも、頭の中ではどうやったらその血を姉の体の中に戻

せるかを考えていた。――戻さないと、姉さんが死んでしまう。その考えが頭の中をぐるぐる回っていた。

赤い血溜まりの端に何かが落ちていく。ガラスの破片じゃない。それは血で覆われて、角の部分だけが微かに見えていた。――きつと、あと数秒で悲鳴がこみ上げてくる。訳が分からなくなつて、叫び出してしまふ。でも、辛うじて理性を保つていたその一瞬だけは、そこに落ちていくものに意識を奪われた。

紙のように薄いもの。角が曲がつている。何かの模様が見えた。

なんだ――？

そう思つて、高塚永児は血に濡れたその物体に手を伸ばした。

永兎はがくんと椅子の背もたれから落ちかけて、慌てて目を覚ました。

いつの間にか自分が眠っていたことに気が付いて、頭を軽く振る。思わず声を出してしまつたかと思つたが、口は閉じたままだった。目をこすると、『——おいでマルサカー、マルサカーおいで——』と、よく知っているスーパールのテーマソングが頭上で賑やかに響いている。それを聞いてやつと、そこがマルサカの一階にある休憩所だということを思い出した。

水色のプラスチック製の椅子に体を起こして、明るい店内の風景に目が慣れるのを待つ。スナックコーナーからアメリカンドッグを揚げる匂いと、むせ返るようなソースの香りが流れてきて、階段下の窮屈な休憩スペースに漂っていた。何か怖い夢を見ていたことだけは臆気に覚えていた。でも、その内容はもう思い出せなくなっていた。

行き交う人の様子をぼんやり眺めながら、片手で携帯を開く。眠っている間にメールが一通届いていた。——同じ班の平本裕美からだつた。

『週末、これそう？ 返事待つてるよー』

その短い文面のあとに、鮮やかな海の写真が添付されている。澄んだ青が上にも下にも広

がる、涼しそうな写真だった。

今週に入ってから何度目かの、裕美からの誘いのメール。——でも、まだ返事は出していない。ためらいながら返信ボタンを押して、しばらく白紙のメール画面を眺めていたが、結局何も打たないまま携帯を閉じて、ポケットにしまった。そして隣に置いてあったスイカ入りのネットを手に、椅子から立ち上がる。

食品売場を裏口の方に向かって歩き出すと、特売品のアナウンスが店内に流れ始めた。そのアナウンスでも、安売りのスイカのことを繰り返言っていた。——食欲のない母親のために買ったスイカ。三日前からチラシで目を付けていたセールの品物だった。その重みを左手に感じながら、裏口から外に出た途端、むせ返るような夏の熱気に襲われる。

「暑っ……」

八月半ばの日差しはまだ強く、肌を刺すようだった。一瞬でエアコンの冷えが取れて、代わりに重たい湿気が体にまとわりつく。夏休みに入つてそろそろ一ヶ月が過ぎていたが、暑さは和らぐどころか、いつそう厳しくなっていた。

細い路地を歩き出すと、潰れた喫茶店のショーウィンドウが目縁をかすめる。埃で曇つて黒い鏡のようになった窓の中を、右手に包帯を巻いて、左手にスイカを持った自分の姿が横切った。



高塚永児。十四歳。中学三年生。

いつも通り、後頭部には寝癖が付いている。直せないかと押さえてみたが、焼け石に水だった。前からどんな整髪料を使っているのか会長に聞こうと思いつながら、ずつと忘れたままである。そもそも夏休みに入ってから、一度も会長に会っていないかった。

ふいに寂れた路地に低い怒鳴り声が響いた。反射的に声の方向を見ると、高校生らしい三人組が一人の少年を壁に押し付けて、激しく言い争っている。——少年の顔に見覚えがあった。髪を薄い金髪に染めていたが、間違いなく同じクラスの峰剣也<sup>みねけんや</sup>だった。

高校生の一人が峰の胸倉をつかんで、頭突きを食らわせる。ゴスツと音がして、峰の呻き<sup>うめ</sup>声が聞こえた。峰は普段から不良グループに属していて、六組の男子の中でもあまり話したことがない、数少ない一人だった。夏休み前にノートを破られてからは、ほとんど挨拶も交わしていなかった。

やり返そうとした峰が、横の二人から抑え込まれて、壁に叩き付けられる。峰の後頭部が壁にぶつかる重たい音が路地に響いた。誰か大人を呼んできた方がいいだろうか——と左右を見たが、近くには誰もいなかった。

スイカが左手で軽く揺れる。あの時、峰は喜多見<sup>きたみ</sup>のノートも破ろうとした。それを思い出して、路地を離れ始めたが、数歩進んだところで立ち止まった。また峰の呻き声が聞こえる。

唇を噛んで振り返ると、たまたま三人組の一人と目が合った。

「なんだ、おまえ？」

赤いTシャツの高校生が、こつちを見て言った。

「その人、友達なんです」

自分でも奇妙に思いつつと告げると、その声は路地の壁にこえました。高校生の隙間から峰がこつちを見て、解<sup>げ</sup>せない表情を浮かべていた。

赤シャツが峰から手を放して、近付いてくる。胸がとくとんと打った。怖いのか——と思ったが、相手は武器らしいものは持っていないかった。腕の太さは阿坂<sup>あさか</sup>の半分もない。

「こいつ、おれらのものをパクったんだよ」

赤シャツは目の前まで来るとそう言つて、身長差の分、少し高い位置から睨<sup>にら</sup>み付けてきた。向こうではほかの二人が峰の両腕をつかんで抑えている。

「おまえが返してくれんのか」

「ぼくは——」

言い終わる前に、赤シャツに肩を強く突き飛ばされた。体が背後の壁に当たつて、スイカのネットを持った手が滑る。スイカはコンクリートの地面に落ちて、グシャツと大きな音を立てた。転がったスイカは、水分をまき散らしながら靴の爪先に当たって止まる。割れた部

分から中の赤い果肉が見えていた。壁にぶつかった時に舌を嚙んだらしく、口の中に鉄の味が広がっていく。

「文句でもあるのか、中坊」

顔を上げて、赤シャツの方を見る。微かな水音が胸の奥で鳴った。急に路地が暗くなった気がして、右手を握り込むと、包帯の内側でガラス片が冷たく皮膚に触れる。

母さんのスイカ。

そう思った瞬間、赤シャツの後ろの宙に一本、コードが垂れていることに気が付いた。ちらっと上を見ると、空が真つ暗になっている。その暗闇から垂れ下がったコードの先で何かが揺れていた。

赤シャツに胸元をつかまれる。無意識に右手を使いそうになって、必死に自分を押し止めた。何もするな——相手は駒じゃない。そう自分に言い聞かせた。

赤シャツが拳を振りかざした瞬間、ぐつと目を閉じる。でも、衝撃が来る前に、後ろから「ちよつと！ 何してるの！」と、まったく別の声が聞こえてきた。それで目を開けると、辺りの風景はいつの間にか、昼間の明るさを取り戻していた。

「あなたたち、喧嘩してるの？」

続けてほかのおばさんの声がして、一緒に足音が近付いてくる。赤シャツが胸元をつかん

でいた手を放した。思わず足がよろめいて、壁に手を突く。その間に、高校生三人は逆方向へと走り出していた。

「だいじょうぶ？」

と、声をかけられたが、どう答えていいか分からなかった。峰が路地の向こうから「不良に絡まれてただけつすよ」と軽く返すのが聞こえてくる。

「血が出てるわよ」

そう言われて、ようやく顔を上げた。買い物用のエコバッグを提げたおばさんが二人、こっちを覗き込んでいる。ごまかすように地面に転がったスイカのネットをつかんで、おばさん二人に言った。

「ちよつと口の中が切れただけです」

「本当？ 病院に行かなくていい？」

「だいじょうぶです。本当に」

唇の端を拭いて念を押すと、二人のおばさんは心配そうに振り返りながらも、マルサカの裏口の方へ去っていった。再び路地に人がいなくなつて、やつと峰の方を見る。

「おまえ、バカなんか」

目が合った途端、いきなり峰が言った。その声に、少しだけ学校の空気を思い出した。峰

が鼻で笑うようにして続ける。

「喧嘩とかしたことないんだろ」

それには何も言わずに、壁を支えにしてスイカのネットを持ち上げた。スイカはネットの中で無残な形に割れていて、甘い汁がポタポタと地面に垂れている。それを見た峰が、声のトーンを落として言った。

「割れたんか」

「うん」

スイカを両手で持ち上げて、ひびを合わせながらつぶやいた。

「でもまだ食べられるよ」

峰はしばらく黙っていた。路地の隙間から見えるアーケードの大通りを、車と大勢の人が通り過ぎていく。その喧騒から隔<sup>へだ</sup>たった古い裏路地は、静けさと染み込んだ煙草の臭いに包まれていた。峰はやがて軽く首を振って告げた。

「おまえ、マジでお人好しだね」

あきれたように肩をすくめてから、峰が大通りの方を指す。

「おれんとこ、すぐそこだから来いよ。ラップでもやるよ」

それだけ言つて、峰はさつさと路地を歩き出した。スイカを抱えたままためらつていると、

峰がもう一回「来いって」と促<sup>うなが</sup>してくる。それを受けて自分もあとを追つたが、路地を去る前に、一度だけ後ろを振り返らずにはいられなかった。

路地は元通り夏の風景に溶け込んで、灼熱の光が屋根の間から眩<sup>まぶ</sup>しく地面に降り注いでいた。——でも、乾き始めた血の味を口の隅に感じると、まだ所々にさつき目にした暗闇が名残を留めているような気がした。

コードのイメージが脳裏に焼き付いていて、残像が揺れて見える。夏休みの穏やかな日常に浸つて、何週間もそれを見ていなかった。そのせいで、もう見ることはないときえ思い始めていた。でも、今までと形が違つていても、あれが何かはすぐに分かった。

コードの先にあつたもの。

あれは間違いなくスイッチだった。

第五話

こいねがう



「931.....931.....」

小松喜多見は図書館の地下の閉ざされた空気を頬に感じながら、指で本の背表紙をそつと辿り、薄暗い書架の間を抜けていった。冷房で冷えた空気と、大理石模様の硬いタイルは、夏の暑さをまるで感じさせない静けさを館内にもたらしていた。外の凄まじい蟬の声もここまでは届かない。

指先が探していた本の背表紙に触れると、微かに緊張が走った。唾を飲み込んで、一瞬、書架の間へ目をやる。市立図書館の地下はどこまでも本棚と静寂だけが広がっていた。夏でも冬でも変わらない。保管されている古い本と共に、時間がずつと止まっているように思えた。本を抜き出して手に取る。分厚い重みがずしりと両手に落ちて、すえた匂いが鼻を突いた。表紙には昭和の雰囲気漂う文字で「フロスト詩集」とタイトルが記されている。あの白髪の人と言っていた名前だった。

——ぼくはその中の白い蜘蛛だよ。

頭の中で響く声に導かれるように、茶色くくすんだページをめくると、探していた詩はす

ぐに見付かった。英語の先生から教わった通りだった。題の邦訳は「意図」になっていたが、その横に英語で「Design」と原題が添えられている。

えくぼのある一匹の太った白い蜘蛛が

白い万病花の上に蛾かを掲げ

ごわついたサテン布の白い一片の様に捧げた

短い詩の最初の三行が目飛び込んでくると、寒気が体を走る。白い花の上に乗った白い蜘蛛が、死んだ白い蛾の羽を毫ちひるイメージが鮮明に脳裏に広がって、思わずボタンと本を閉じた。気味の悪い映像を頭の中から追い払おうと、携帯で時間を確認する。そろそろ駅に向かわないといけない頃合いだった。

本を胸元に抱え、誰もいない地下の書庫を抜けてから、階段を上る。階段の途中は冷房が効いていなくて、冷えた肌到天窓から差し込んでくる熱が気持ちよかった。

図書館の入口のロビーに出ると、ようやく夏の音が外から聞こえるようになる。なんとなくどこか別の世界から戻ってきたような気分だった。そのまま貸し出しカウンターで手続きをすませて、出口へ向かおうとしたが、その前に後ろから名前を呼ばれて立ち止まる。

「小松」

誰の声かはすぐに分かった。でも、場所が場所だったので、空耳かと疑った。振り返ると、阿坂浩助あさかこうすけがオブジェの彫り込まれた壁にもたれかけるようにして立っていた。

「奇遇だな」

ミニサイズのバヤリースのボトルを口から離しながら、阿坂が言う。

「阿坂さん——」そう応えながらも、ちよつと訝いぶかしげに阿坂を見つめ返した。「もしかして、まだ見張ってたんですか。私のこと」

「そんなんじゃないよ。涼しいんだよ、ここ」

阿坂が天井から降りてくる冷気を指差しながら笑みを浮かべる。こつちも表情を緩ゆるめて、柔らかな口調で言った。

「ケガ、だいぶましになったんですね」

阿坂がギブスのはずれた足先をくるりと回してみせる。

「やつと普通に歩けるよ」そう言っつて、阿坂が首を傾げた。「おまえの方はどうなんだ？ 体に異常ないか」

ほんの少しためらったものの、できるだけ自然な表情を作つてうなずいた。阿坂もうなずきを返して、ポケットからミニサイズのペットボトルをもう一本取り出す。そして「飲むか？」

と言いながら、返事を待たずにこつちへ放り投げてきた。

わずかに距離が短くて、ペットボトルが目の前で床に落ちそうになる。とつさに本を脇に挟み、前のめりに屈んで、それを受け止めた。

「元氣そうじゃねえか」

阿坂が苦笑しながら言う。社交辞令程度に怒った表情を浮かべて、阿坂に言い返した。

「だめですよ。図書館の中なのに」

そう言つて出口の方へ歩き出すと、阿坂が「おい」と言つたが、構わずにそのまま歩き続ける。

「飲むんなら、外に行かないと」

「おまえ、そういう面倒なこと言うから浪人の妻とか言われ」

阿坂がぶつぶつ言うのが聞こえて、本とペットボトルを胸元に抱いたまま、振り返つて阿坂の方を睨んだ。

「それ言つたら怒りますよ」

むすつとして告げると、阿坂が「こわつ」と小さくつぶやく。阿坂には見えないところでちよつと微笑<sup>ほほえ</sup>んで、玄関の自動ドアを抜けた。

外はすごい日差しだった。風の無い日で、コンクリートの歩道にうつすらと蜃気楼が立っている。図書館前のミニ公園からは蟬の大合唱が降り注いできた。それでも夏の音と光はど

んな時でも強い日常感を思い出させてくれる気がして、以前よりもずっと夏が好きになっていた。

「ジュースのお金——」

木の下にあるベンチまで歩いて、借りた本を置く。そして、代わりにバッグから財布を取り出した。小銭を差し出すと、阿坂がシャツをパタパタさせながら、煙たそうな顔でその手を見返してくる。

「いいよ。それぐらい」

「じゃあ、いらないです」

そう言つて、バイリースのボトルを返そうとすると、阿坂が諦<sup>あきら</sup>めた様子で息をついた。伸ばされた大きな掌<sup>てのひら</sup>にお金を落とすと、阿坂がそれをじやつと握り締める。それでやつと手の中のバイリースのキャップをひねった。甘いものはあまり飲まないようにしていたが、図書館の中が乾燥していたせいで、喉はカラカラに乾いていた。一回ぐらいいいことにして、ベンチに腰かけると、阿坂がぼそつとつぶやく。

『妻』っていうか、どつちかっていうと『浪人の母』だぞ、おまえ」

「何か言いました？」

ベンチの隣は空いていたが、阿坂は敢えて木の根元を囲むプランターの端に腰を下ろす。

「いや。地味な色のスカートがよく似合うな、と」

「どうせ浪人の母ですから」

皮肉を込めて返しながらバヤリースに口を付ける。阿坂が反対方向に顔を背けて「聞こえてるじゃねえか」とぼやくのが聞こえた。

バヤリースはあまり飲んだことがなかったが、それほど甘くなく、渴いた喉に染みる感じが心地よかった。こういうタイミングで飲むと癖になつてしまいうで、それが少し悔しい。

「こんなにのんびりしていいんですか」

両手でバヤリースを持つて、阿坂に言った。阿坂が図書館の建物の方を向いたまま、ぞんざいな口調で答える。

「別にのんびりしてねえよ。ほかの仕事も入つて大変なんだぞ、こっちは」

「そうじゃなくて」唇を引き結んで、阿坂に言い直した。「あの夜以来、何もかもすごく普通だから。逆に不安で——」

阿坂がボトルを口に付けた状態でこっちを見る。視線が合うと、膝の上のボトルをひそかに握り締めた。

「夏休み直前だったからな」阿坂が答えながら、バヤリースの残りをぐつと飲み干す。『院』も躍起<sup>やつき</sup>になつてたんだろ。学校が終わつちまうと、二学期までおまえらを見付け出す方法が

ないからな」

ペットボトルの表面を流れた水滴が、手の甲に伝わつて広がる。這う<sup>は</sup>ような感触が気持ち悪くて、スカートで手を拭つた。

「まあ、夏休みの間はのんびりしてろ。どうせそのうち、また忙しくなる」

阿坂がそう言つて、空になつたペットボトルにキャップをしている横で、モンシロチョウが飛んでいるのが目に入つた。何気なく蝶を眺めていると、ふいにさつき読んだ詩の情景がよみがえつてくる。たつた三行の文章が頭にこびりついて離れない。寒気がするような内容なのに、その描写にどこか惹かれていた。——怖いのに、きれいな詩だった。

ガタン、と音が辺りに響く。その音で我に返ると、阿坂が金属のごみ箱に空になつたボトルを投げ込んでいた。音はしばらく蝉の声に混じつて鳴り響き、次第に消えていく。あれだけうるさかつた蝉の音が、すっかり耳に馴染<sup>なじ</sup>んでいることを不思議に思いながら、阿坂に尋ねた。

「阿坂さんも、アズミも、五倉山に残るんですよ」

「ああ」阿坂はブランターから立ち上がつて、尻に付いた埃を両手ではいたいた。「どうやらサダクラでのことはばれてなかつたみたいだな」

「よかつた」と小さく答えると、阿坂がちらりとこっちを見た。横でモンシロチョウが飛び立つ



て、頭上を旋回しながら空へ舞い上がっていく。図書館の向こうには夏の青空が広がっていて、そこに浮かんだ白い雲が、絵画のような鮮やかなコントラストを作り出していた。

立ち去りかけていた阿坂がふと足を止める。そして、ポケットに両手を入れたままで振り向いた。

「そう言えば高塚はどうした？ 元氣か？」

阿坂の後ろに広がる空が高い。どこまでも高くて、果てがなさそうだった。

「会ってないです」そうつぶやいて、視線を逸らしながら付け足した。「夏休みに入ってから一度も」

3

青空に白い雲がぼつかりと浮かんでいた。

それを見上げながら、永児は峰のあとを追って、長い石の階段を上っていた。左右に並んだ家やアパートの前を通り過ぎ、小さな稲荷神社に差し掛かると、階段は急になつて、やがて崖の中腹の窪地で行き止まりになる。その窪地に、木に囲まれた一軒家が隠れるようにして建っていた。

階段の一番上で立ち止まって、上ってきた道を振り返ってみる。錆びた細い手すり是一本付いているだけの階段は、何度か折れ曲がりながら下まで続いていった。石段の下は駅に行く時によく通る道だったが、この斜面にいくつも家があることには、今まで気が付いていなかった。

「ボロくてびびったか？」

峰が玄関の戸を乱暴に開けながら言った。――暑さの中を歩いたために、すっかり現実感が戻っていて、ほっとしながら峰の方を見た。

「いや、別に――」

そう答えて、玄関の懐かしい風情に気を取られながら足を踏み入れる。昔住んでいた中坂の家の玄関とよく似ていた。下駄箱の形も、土間の大きさもだいたい一緒だったので、もしかしたら同じ業者が建てたものかもしれない。

峰はカラフルなスニーカーを脱ぎ捨て、どこどかと廊下を進んでいく。中坂の家と違うのは、こっちには二階があることだった。その二階へ向かう階段を峰が黙って上り始める。

家のほとんどの窓が開いていて、外の蟬の鳴き声がうるさかったが、人の気配はあまりしなかった。一応、台所らしい暖簾のかかった部屋に向かって「おじやまします」と声をかけてみたが、返事は戻ってこない。それで、スイカの汁をこぼさないように気を付けながら、古い木の匂いのする階段を峰の後ろに付いて上った。

二階に上がったところには、左右にひとつずつ部屋があつて、左側の部屋の引き戸が開けっ放しになっている。そこが峰の部屋らしく、ベッドと机と筆筒でいっぱいになった四畳半に、雑然と物が散らかっていた。中に入ると、引き戸の内側や、鴨居のあちこちに古いおまけのシールが貼られて、色褪せている。峰が貼ったものかどうかは分からなかったが、ずいぶん昔からこの部屋に子供が住んでいたことだけは確かだった。シールの上から一枚だけ貼られた、暴走族のステッカーのようなものがやけに目立つ。

「これで包めよ」

そう言つて、峰が絵の具で汚れたラップの箱を机の上に置く。どうしてそんなものが部屋にあるのか不思議に思っていると、峰が筆筒の上にちらつと目をやつてつぶやいた。

「プラモ作るのに使ったんだよ」

ネットに入ったスイカをラップの横に置いて、筆筒の方を見る。そこにはロボットや飛行機や戦車の模型がたくさん並んでいた。雑に置かれていたが、あまり知識がなくても、相当うまく塗装されていることは分かった。マルサカの近くにある模型屋の店頭にも半永久的に飾られているジオラマがあつたが、こっちの方がずっとリアルで、細部まで作り込まれていた。

「プラモうまいんだ」

ラップでスイカを包みながらそう言つと、峰はわずかに顔を背けて、ベッドの端に腰掛けた。

「おもちゃだよ。とつくにやめた。ほしかったら持つてけよ」

スイカを無事に包み終えた途端、正面の格子窓から涼しい風が入ってくる。外はまだ日差しが強く輝いていたが、周りに生えた高い木の陰に守られて、眩しさに邪魔されることなく、窓から町を一望することができた。今の家は三方が住宅に囲まれていることもあって、その風景は鮮烈だった。ずっと向こうに山崎が住んでいる団地が見える。その屋上で何かの旗が小刻みに揺れていた。

「おまえのオヤジって弁護士だったんだろ」

峰がベッドに手を突いて、何気なく尋ねる。峰がそれを知っているのが意外だった。続けて、  
 明るい金髪をかき上げながら、峰が悪びれる様子もなく言った。

「じゃあ、金残して死んだんだろ。うち、借金すごいんだよ。ちよつと貸してくれよ」

思わず固まって、峰の顔を見つめた。すると、数秒もしないうちに峰が立ち上がり、「冗談だよ、バカ」と言いながらベッドの下引き出しに手を伸ばす。そして中から缶ビールを一本取り出し、プシュッと音を立てて開けた。

「これ、さっきの高校生から盗ったんだ。おまえもいるか？」

そう言つて、峰がビールを差し出す。慌てて首を横に振つた。峰は肩をすくめて、ベッドのヘッドボードにもたれかけるように座り直し、ビールを缶から飲み始める。ベッドの縁にかかつていた帽子が床に落ちたが、峰は気にする様子も見せなかった。

「手、洗うところあるかな」

スイカの汁でべたべたになった両手を突き出しながら、峰に聞いた。右手の包帯が薄い赤色に染まっている。ただのスイカの汁だと分かっていたが、落ち着かなかった。——峰はこっちを見ることなく、階段の方を指差す。

「階段下りて右の突き当たりが便所。その前に洗面台あるから勝手に使えよ」

それを聞いて部屋を出ると、日が入る峰の部屋と比べて、家の他の場所は薄暗く感じられた。

瞬きをした拍子に、階段の上にスイカの汁が数滴垂れているのが目に留まる。ポケットからハンカチを取り出して、拭き取りながら一階へ下りると、峰の言っていた場所に洗面台があった。廊下も、洗面台も、昔の自分の家とよく似ていた。洗面台の下に何年分もの雑誌や新聞が積んであつて、その上に洗濯用の洗剤が置いてあるのも、見覚えのある光景だった。

洗面台の前に立ち、ハンカチを口にくわえて、右手の包帯を解こうとした。しかし、糖分で包帯がくっついて、なかなか離れない。なんとか解き終わると、右手に残ったガラス片を素早くポケットに落として蛇口をひねった。

「あら」

手を洗っていると、女の人の声が聞こえて、反射的に振り返る。さっきまで誰もいなかった廊下に、峰のお母さんらしき中年の女性が立っていた。とつきにくわえていたハンカチを手にとって、頭を下げる。それを見て、向こうも頭を下げ返した。

「おじゃましてます」

挨拶しながら蛇口を締めて、ハンカチで手を拭く。

「剣也の母親です」お母さんが変に嬉しそうに告げた。「はじめまして」

全体に疲れた印象が自分の母親のことを思い出させたが、優しそうな人だった。そそくさとその脇を抜けて二階に戻ろうとすると、お母さんが笑顔で付け加える。

「剣也が友達連れてきたの久しぶりだから、嬉しくて。あの子、あんなだから付き合にくいでしょ。でも、ほんととは悪い子じゃないんですよ」

その申し訳なさそうな感じがやはり自分の母親と重なって、足を止めた。「いえ——」と言つぶやくしかなかった。

「あとでジュースでも持ってきますね」

お母さんはそれだけ告げて、背中を丸めて暖簾の向こうへ戻っていった。それを見届けてから階段を上がり始めると、今度は上から「あれ？」と声がする。さつきまで閉まっていた右の引き戸が開いていて、そこに二十歳ぐらいの女の人が立っていた。

「お客さん？」女の人は自分が着ているＴシャツと寝間着を見下ろしながら言った。「ごめんね、こんな格好で」

慌てて視線を逸らす。峰とよく似ていたので、すぐに峰の姉だと分かった。

「剣也の友達来てるって知らなかったから」

お姉さんは髪の毛を赤茶色に染めていたが、雰囲気やしやべり方は自分の姉によく似ていた。姉も外ではおしやれたったが、家の中ではいつもこんな感じの服装だった。

「ぼくの方こそ、すみません——」

そう言いながら、階段でお姉さんとすれ違うと、ふわつといい匂いがした。大人の女の

の匂い。昔、家に遊びに来た末岡が、姉がいい匂いがすると言っていた意味が分かった気がした。自分の家族の匂いは分からなかったが、姉もきつとほかの人にはこんな匂いがあるのだろう。

下りていくお姉さんの後ろ姿を見つめると、喉に何かが支えるのを感じた。家の中に姉がいる感じを久し振りに思い出して、色々な気持ち胸を締め付けてくる。それを振り払うように階段を上がると、部屋では峰がベッドに寝転んでいた。

ちらつと峰がこつちを見る。スイカを取ってそのまま帰ろうかと思ったが、なんとなく峰の机から斜めにはみ出した椅子に腰かけた。峰がゆっくり体を起こして口を開く。

「おまえ、なんでさつき友達とか言ったの？」峰が苛立った風に眉をひそめて言った。「おれ、おまえと友達だっけ？」

ハンカチをポケットにしまいながら、峰に「ごめん」と返す。

「友達とかやめてくれよ。仲良しクラスとかうぜえんだよ。なんだよ、あの組」

そう言い捨てて、峰は再びベッドに横になった。峰のその言葉がしばらく頭の中で響いた。——自分たちが教室で楽しく話している時に、そう感じている人が峰のほかにいるのだろうか、と思うと、苦いものが口の中を走った。確かに自分が「六組」と言って頭に浮かべているのは、たぶんクラスの三分の二くらいで、まだよく知らない人たちも何人かいた。

「剣也」いつの間にか、峰のお母さんがお盆を持つて部屋の戸口に立っている。「ジュース持ってきたけど」

「いらねえよ」

峰が吐き捨てるようにお母さんに言った。お母さんは唇を結んだが、何も言い返さず、その場に立ち竦<sup>すく</sup>んでいた。峰が顔を背けながらつぶやく。

「分かったから、置いて出てけよ」

お母さんはお盆を置く場所を探しているようだったが、机の上はラップに包まれたスイカが占領していた。急いでお盆を受取りに椅子を立つ。

「おいしそうなスイカね」

お母さんはそう言つて、微笑みながらお盆をこつちに渡すと、そのまま部屋を出ていった。それと入れ替わるようにして、Tシャツの上に薄いカーディガンを羽織つたお姉さんが、戸口に現れる。

「剣也、ひどいでしょ！ お母さんに謝りな！」

お姉さんが予想以上の大声で怒鳴つた。その怒つた顔も自分の姉を思い出させた。峰が無視して壁の方に寝返りを打つと、お姉さんは部屋の中まで入ってきて、もう一度「剣也！」と声を上げる。直後に峰が勢いよく起き上がつて、転がつていたクッションをお姉さんに投

げ付けた。

「ふざけんな！ 風俗やつてるビッチに言われたくねえよ！」

お姉さんの表情が一瞬で変わった。クッションがお姉さんの体に当たつて、こつちの足元に転がつてくる。お姉さんは明らかにショックを受けて固まっていた。峰はその様子を見ながら、嘲笑<sup>わらわら</sup>うように言った。

「高塚、童貞捨てたいんなら、そのビッチに頼んだらいくらでもやらせてくれるぞ」

お姉さんはしばらくその場に立ち尽くしていた。外から風が入ってきて、お姉さんの長い赤茶色の髪を数本舞わせる。やがてお姉さんは握り締めていた手を力なく広げて、複雑な表情できびすを返した。去り際に目が合うと、お姉さんはせいじっぱいの苦笑いで「ほんとにごめんね」とだけ言つて、部屋を出ていった。

窓から入ってくる風は何事もなかったように爽やかなままで、その風に晒<sup>さら</sup>された引き戸の古いシールがとても寂しげだった。ベッドの方から峰が舌打ちをするのが聞こえてくる。

「あんなこと言つたら後悔するよ」

そう言つて、スイカを机の端に避けて、空いたところにジュースの載つたお盆を置いた。机の上の棚には、もうずいぶん長い間触られていないように、色々なものが積まれたままになっている。小学生用の図鑑や、ちよつと前のプラモのカタログに混ざつて、一年の時の数

学の教科書がはみ出していた。

「なんだよ」

ベッドの上にあぐらをかいた峰がこつちを睨んで言った。でも、それには反応せずに、机の上に並んだジュースをじつと見た。グラスに入ったオレンジジュースに氷が何個か浮いている。——そう言えば、ジュースを母親が部屋に持ってきてくれた時には、いつも氷が入っていた。思わずグラスの片方をつかみ、一気に飲み干してお盆の上に戻す。

「帰るよ。こちそうさま」

そう峰に言つて、スイカをネットに入れ、両手で持ち上げた。

「なんだよ、急に——」

と、峰が声を上げたが、構わずにそのまま部屋を出た。お姉さんの部屋の引き戸が開いていて、窓辺に座っているお姉さんの背中が少しだけ見えている。それにも何も言わず、階段を下り始めた。

峰が何かを壁に投げ付ける音が響いたが、足を止めることなく、永児はそのまま階段を下りていった。

4

夏休みの喧騒が辺りを包む中、喜多見はエスカレーターで二階のフードコートへと上がりながら、千年台の駅ビルの中を見回した。中央の円柱形の水槽には魚が無数に泳いでいて、そこから広がる青い光がエスカレーターの手すりにまで届いている。

上の階が近づくに連れて、徐々に緊張感が湧いてきて、唾が呑み込みにくくなる。着てきた服の胸元を軽く握って、エスカレーターが上に着くのをおとなしく待った。——ほかの女子が遊びに行く時、どんな服を着ているのか、よく知らなかった。

エスカレーターから降りながら、携帯に表示されているメールの文面を確かめる。——千年台の駅ビル二階。フードコートに三時。書いてある通りの時間と場所。でも、広いフードコートは人で溢れていて、軽く見渡したただけでは探している相手を見付けることができなかった。

「こつちこつちー！」

たくさんの声に混ざって呼ばれた気がして、辺りを見回したが、声の主は見付からない。気のせいかと思っていると、もう一度声が聞こえて、人混みの中で手を振っている相沢みずほの姿が目に入った。

「こっちだつて！」

手招きされて、ぎこちない足取りで家族連れの間を抜け、相沢の待つテーブルへと向かった。一緒の席に穴井千尋も座っている。二人の服装が見える距離まで来ると、自ずと歩幅が狭くなる。自分とはまるで違う感じだった。——こういうところって、ああいう格好で来るんだ、と思いつながら、湧き上がる恥ずかしさを押し殺して、トートバッグの中からプリントのコピーを抜き取った。

立っている相沢の横で、穴井は紙コップのストローに口を付けて座っていた。二人とも華やかなフードコートの雰囲気によく馴染んでいて、制服の時よりもだいぶ大人っぽく見える。穴井の方は軽く髪を染めているのが分かった。

「これ、宿題のコピー」

そう言つて、漢字の書き取りのプリントを相沢の方に向けて差し出す。相沢はそれを受け取つて「助かつた」と大きく息をついた。

「ちゃんとお礼言えよ。わざわざ持つてきてもらったんだから」

穴井が相沢に言うと、相沢はあらためて「サンキュー」と手を合わせる。どのくらいの距離に立つたら自然なのかよく分からなくて、掌が汗ばむのを感じた。裕美と一緒にいる時とはやっぱり違つていた。でも、昔は誰と会つても、こんな感じだった。

「うちから千年台までバスで一本だから——」そのあとに、言い訳のように早口で付け加えた。「それに、その図書館に用事もあつたし、ちょうどよかった」

それだけ言い終わると、ほかに言うことがないのに気が付いて、「じゃ、私——」と口にして、その場を立ち去りかけた。せっかく相沢や穴井と話すチャンスなのに、何やつてるんだろう——と思つたが、すでに手遅れだった。

エスカレーターの方に一步踏み出した瞬間、穴井にトートバッグをつかまれて、いきなりテーブルへと引き戻される。バランスを失つて、小さく悲鳴を上げながら穴井の隣の椅子に倒れるように腰を下ろした。驚いて穴井を見ると、穴井は片手に紙コップを持ったまま、気軽な口調でつぶやく。

「せっかく来たんだからさ、クレープでも食べていきなよ。おごるつて——相沢が」

「はっ？」相沢が首を傾げたあと、すぐに肩をすくめる。「いや、いいけど。私の都合で来てもらつたんだし」

茶色がかつた髪はやはり大人っぽくて、目が合うと言葉が返せなかった。抹茶色のスカートを穿いてその横に座っているのが恥ずかしくなつたが、もうじつはたしても仕方がない。とりあえず膝を揃えて座り直し、トートバッグを抱え込んだ。相沢が横に腰かけて、こっちをちらつと見てから、テーブルの上の自分のバッグを開け始める。



「喜多見も週末、裕美の別荘行くんだろ？」

穴井が紙コップの中の水をカラカラと回しながら聞いた。

「え？」

聞き返すと、穴井が笑みを浮かべる。

「あたしにも裕美に誘われたから行くよ。今年まだ海行つてないし」

「そうなんだ」

そう言えば、裕美がこの前の電話でそんなことを言っていた。裕美には「行けないかも」と返事をしたことを思い出して、それを二人に伝えようとした瞬間、相沢がバッグから煙草とライターを取り出すのが目に入った。——え、と体が凍り付く。相沢がカチッとライターの火を点けると、とつさに周りを窺<sub>うかが</sub>つてしまった。特に誰が見ているというわけでもなかったが、どう振る舞つていいのかわからず狼狽<sub>うろた</sub>していると、普通にしている穴井の姿が目映る。

——そうか。当たり前のことなんだ、と思ったが、それでもうつむくのを止められなかった。「やめろつて」穴井の声が響く。「喜多見が困つてんだろ」

煙草に火を点けかけていた相沢が手を止めた。視線を上げると、穴井がすごい目でテーブル越しに相沢を睨<sub>にら</sub>んでいて、慌てて首を横に振る。

「あ、いや、私……」取り繕<sub>つくろ</sub>うように言つた。「私、別に——」

「あたしがいやだからやめろ」

穴井が冷たく言い放つた言葉で、自分も黙つた。相沢が苦い表情で煙草をバッグにしまい始める。それを見ていると、嫌われたくない一心で行動している自分が恥ずかしくなった。

穴井が椅子の背に体重を預ける音がする。相沢は気まずそうに足を組み直した。

しばらく三人ともしゃべらなくて、長い沈黙が喉に支える。その間も賑やかなフードコートのはざら騒<sub>さわ</sub>は高い天井にこだましていて、何か言わなきゃ——と、焦っていると、ふいに相沢が「クレープ買ってくるよ」と言いながら横で立ち上がった。

「喜多見、なんにする？」

相沢に促<sub>うなが</sub>されて、フードコートの隅にあるクレープ屋へ目を向けたが、あまり頭が回らず、浮かんできた名前を適当に答えた。

「じゃ……じゃあ、スパイスチョコ」

そう言っていると、相沢と穴井が顔を見合わせた。そして二人で笑う。

「さすが——」穴井が楽しそうに言つた。「渋いね」

「変だった？ ちょっと前に——」と、言いかけたが、自分に視線が集まっているのを感じて、「な、なんでもない」と急いでごまかした。相沢が「りょーかい」と告げてクレープ屋の方へ歩き出す。



「あ、お金——」

そう言って立ち上がりかけたところを、穴井にまた引き戻される。

「いいから。相沢がおごりたいんだろ。察してやって」

相沢がクレープ屋の方へ去っていく。穴井が「ごめんな」とつぶやきながら座り直した。

「あいつ緊張すると煙草吸う癖あるんだ」

穴井はそう告げて、安心させるように笑った。重たかった空気がその笑みでずいぶん軽くなった気がした。教室で穴井を見る度、ずつと憧れていた笑い方だった。どうやったらあんなに自然に、明るい感じで笑えるのか、不思議で仕方がなかった。

穴井は深々と椅子の背にもたれかけて、魚が泳ぐ水槽の方を眺めている。間が持てなくて相沢の様子を窺ったが、相沢はクレープ屋の前にできた列の後ろに並んでいて、まだしばらく戻ってきそうになかった。——今度こそ何か話さなきゃ、と思つて無理に穴井の方を向くと、いきなり穴井とまつすぐ目が合った。

「ち……千尋ちゃん——」

勢い余つて、大きな声が出たので、穴井はちよつと驚いたようだった。顔が赤くなるのが自分でも分かったが、視線を下げるのだけは何んとか食い止めた。ただ、何を話すつもりで穴井を呼んだのかは、まったく分からなかった。

「ア……アメリカに留学するの？」

とつさに出てきた質問だった。クラスの誰かからそのことを聞いて、なんとなく頭の片隅にひつかかつていた。

「あー」穴井はストローに口を付けながら、ごく当たり前に答えた。「手続きは進めてるけど、まだ分かんないよ。選抜試験が年末にあるから、それ次第かな」

穴井は態度もしゃべり方もいつも通りだった。相沢と二人で話している時と何も変わらないう。又聞きしただけで、本人から聞いた話題でもないのに、それを気にしている様子はなかった。過剰に緊張している自分がますます不自然に思えてきて、いくらか意識して声のトーンを落とす。

「じゃあ、日本では受験しないの？」

穴井が小さく首を傾げた。

「するよ。向こうって学期始めが九月だからね。それまで学校さぼつてゐるわけにもいかないし」「どこ受けるの？」

なんとか普通に聞くことができて、手の力を抜いて座り直した。相沢がトレイを持って戻ってくるのが視界の隅に映ると、さらに気持ちが落ち着く。

「瀬名南か根城かな」

穴井は飲み終わった紙コップをテーブルに戻しながら言った。ちょうど戻ってきた相沢がクレープの載ったトレーをテーブルに置く。会話が聞こえていたのか、相沢は座りながら「おまえら、成績いいからなあ」とぼやいてみせた。

「みずほちゃんはどこ受けるの？」

相沢にも尋ねると、相沢はクレープの載ったトレーをこっちに押し出して答える。

「バカだからなあ、あたし。——まあ、どこか行かないと親うるさいから考えるけど。喜多見はどうなの？ やっぱり瀬名南？」

「分らない」

そう答えると「なんで？」と相沢が聞き返した。当たり障りのない理由が浮かんだが、それを口にするのは思い留まった。

「私、親いないから——。高校は義務教育じゃないし」

本当のことを言ってから、相沢の顔色が変わるのに気が付いて、すぐに後悔した。でも、もう止めるのは無理だった。

「出して欲しいなんて簡単に言えない額だし」

言い終わると、重たい沈黙が空気を満たしていく。いつも周りを暗くしてしまうのがいやで、中学に入ってからではできるだけしゃべらないようにしてきた。この前、相沢と渡り廊下で話

して、それを改める決心をしたばかりだったが——またこのパターンだ、と思うと、目線が下がるのを止められなかった。そこへ、穴井があつからんと尋ねる。

「じいちゃんと住んでるんだっけ？」

嫌味のない声だった。それに救われて、辛うじて話し続けた。

「本当のおじいちゃんじゃないんだ。正確にはおじいちゃんの弟さん」

「やあこしつ」

相沢も穴井に合わせるように言った。自分もなるべく軽い感じで付け加える。

「そうでもないよ。みんなからいらないうって言われて、残ったのがおじいちゃんだっただけ」

会話が途切れて、相沢と穴井が再び顔を見合わせる。またおかしなことを言ってしまったのを悟って、顔が引き攣つたが、直後に相沢と穴井が同時に吹き出した。

「さらっとヘビーなこと言うね」穴井が笑いながら言った。「喜多見見ると、あたしら苦労してないって思うわ」

「ごめん——」

謝りかけたところで相沢に「ま、クレープ食べろって」とトレーを押し付けられて、やつと手元を見た。クレープはきれいな花束の形に巻かれている。永兎が持ってきてくれたクレープは半分潰れていたのだ、その状態で見るのは初めてだった。「ありがとう」と言いながら、

クレープを手にとると、じわっと嬉しさがこみ上げてくる。かぶりつくと、生クリームとシナモンの香りが口の中に広がった。

「おいしい」

そう言っていると、相沢と穴井の表情も緩んだ気がした。大人っぽさがいくらか消えて、クラスで会ういつもの二人の面影が見えてくる。もしかしたら二人もそれなりに緊張していたのかな、と思つてクレープを食べていると、ふいにいろんなことの辻褄が合うのを感じた。――漢字のプリントをまだやっていない友達なんて、きつと穴井にはいくらだっているはずだ。待ち合わせの場所も別にどこでもよかった。それなのに、わざわざここで会おうと言ってきたのは、きつとあの時、もつと二人と話したいと言つたことを覚えていてくれたからだつた。

「よし」穴井がうなずいたあと、おもむろにテーブルに両手を突いて立ち上がった。「今日は予定通り、裕美んとこに着ていく水着を三人で買う」

いきなりのことに、クレープを食べる手を止める。穴井の方を見たが、冗談を言っている顔ではなかった。

「え――私、学校の水着あるから――」

青ざめて言い淀んだが、口元に笑みを浮かべる穴井に腕をつかまれ、クレープを持ったまま、椅子から立たされた。

「喜多見はけつこう胸あるつてみんなが言うから、どうも気になつてた」穴井がそう言つて、腕をひっぱる。「一緒に試着室入つてひんむく」

「ひんむくつて――」

顔が真っ赤になりながらも、穴井にお店がある方へひっぱられていくのが、ちよつと楽しかった。あまり感じたことのない高揚した気分、裕美の誘いを断るつもりでいたこともすっかり忘れていた。さつきまで座っていたテーブルの方へ振り返ると、残つたトレーと紙コップを回収している相沢と目が合う。自分にしては珍しく、かん高い声が出た。

「みずほ、助けて!」

それを聞いた相沢はトレー片手に軽く肩をすくめ、訥々とつぶやいた。

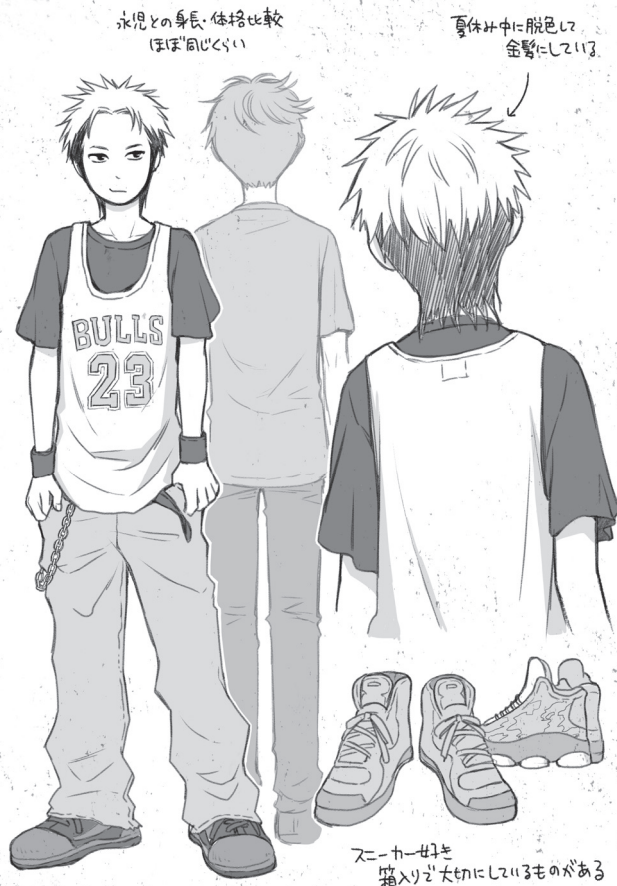
「やつと、『ちゃん』取れたな」

「一度は目を覚ましかけたんだ。希望はある。お姉さんは生きようとしているからね」  
先生は神妙な表情でそれだけ告げて、廊下へ出ていった。安心させようとして言ってくれているのは分かったが、先生の言葉にはどこか不安を感じることの方が多かった。二人の看護師も、それぞれ札をして部屋を出ていく。副主任の水田<sup>みずた</sup>さんの方はちらつとこつちを見て、軽く笑顔も残してくれた。できるだけ笑顔を返すように努めたつもりだったが、うまくでき

「永くん。ごろうさま」  
先生が小さく会釈をするのに倣<sup>なま</sup>って、自分も頭を下げる。回診を終えた先生はそのまま病室を出ていこうとした。でも、脇を通り過ぎる寸前に立ち止まって、右肩にポンと手を置いてくる。

できるだけ音を立てないように、永児は姉の病室のドアをそつと開けた。だが、静かな集中治療棟ではそれでも音はしっかりと響いた。回診の最中だった担当の榎原先生と二人の看護師が、チャートに何かを書き込みながらこちらへ振り返る。邪魔にならないようにドアを閉めて、そのすぐ内側に立つと、先生が声をかけてきた。

5



たかどうかは分からなかった。

ドアが閉まると、姉と二人きりになる。呼吸器と心電図のいやな音をなるべく意識しないようにして、ベッド脇の丸椅子に腰を下ろした。

「姉さん、ごめんね」変わらず深い眠りの中にいる姉に話しかける。「起きた時になくて」

先生から聞いた話では、夏休みに入る直前、姉は束の間、意識を取り戻したらしい。何かつぶやくのを看護師が聞いて、慌てて先生を呼びに行ったが、スタッフが駆け付けてきた時には、姉の意識は再び途切れていたようだ。——それを聞いた時、本当はその看護師を問い詰めて、姉がなんと言ったのか、しつこく問い質したかった。なんでもっとしつかり聞いておいてくれなかったのか、責めたくなった。もしかしたら姉の気持ちを知る、最後のチャンスだったかもしれないのに——。

でも、何も言わなかった。

そんな風に考えちゃだめだ。そう自分に言い聞かせて、口を閉ざした。意識が回復する可能性は数パーセントしかないはずなのに、そのわずかな可能性の中をくぐり抜けて、姉はこの世界の水面まで戻ってきてくれたのだ。それだけでも、感謝しないと罰が当たりそうな気がした。

「しばらく小松さんに会ってないんだ」電源を切った携帯を握り締めながら、眠っている姉に

義務のように報告した。「会いたいけど、学校じゃないと、なんか怖くて。でも、メールは毎日してるよ」

そう言って、しばらく姉の閉じた目を見つめた。姉の声が聞こえてくる気がする時もあったが、今日は何も聞こえなかった。ただ、呼吸器と心電図の機械が代わりに単調な音を返してくる。

ふと、姉のベッドの後ろに垂れている機材の延長コードが目に残った。あの路地で見た黒いコードを思い出す。倉庫なんかにあるような太い電源コード。その途中に、電気のスィッチが付いていた。じっと見ていると、コードが重なって揺れるような錯覚を覚える。

古い家のスィッチ。飾り枠のスィッチ。コードの先のスィッチ——。

しばらくそのまま丸椅子に座っていた。けつこう長くそうしていた気がしたが、集中治療棟を出た時には、入ってから十五分も経っていなかった。自動ドアを抜けると、急に周りの空気が軽くなった気がして息をつく。ここから出られない姉や、秋山の妹には悪いと思つたが、ほっとするのは否定できなかった。

「永児くん、ちよつと——」

ナースステーションの紙に退室時刻を書き込んでいると、水田さんがカウンターの向こうから近付いてくる。その申し訳なさそうな表情を見て、話し始める前になんとなく用件を悟っ

た。

「ごめんね。言いにくいんだけど、先月分の個室料金がまだ——」

水田さんには姉の入院以来、ずっとお世話になっていた。とても優しくて気遣いのある人で、今もすまなさそうな様子で、言葉を選んでくれているのがよく分かった。

「お母さんが見た時にお伝えしようと思ってたんだけど、最近なかなかお見えにならないから——」

水田さんはどうしていいか分からないように、請求書の紙を胸の辺りに持ったままで見ている。それを見て、自分からカウンターの手に手を差し出した。

「母はちよつと疲れているので、ぼくから渡してもいいですか」

すると、水田さんはほつとしたのと、申し訳ないのが半分ずつ混ざった表情になって、請求書をこつちへ渡してきた。受け取つてすぐに紙はポケットに入れたが、ちらりと見えた請求額は思つていたよりも桁数があつて、心の中を冷たいものが過ぎつた。

看護師たちに頭を下げてロビーを歩き出す。——姉が意識を回復した時に病院からの電話を取り損ねてから、母親はまた自分を責めることが多くなつていた。支払いや食事のことも忘れていた時がほとんどなので、お金をもらつたらなるべく節約して貯めるようにしていた。でも、さっきの額はどう考えてもその程度でどうにかできる数字ではなかった。

母さんに言うしかない。

そう考えると、気持ちがあぐつと重くなる。それに比例するように頭も下がっていつて、そのせいで最初、ロビーで擦れ違つた相手に気が付かなかつた。

「お」

声を聞いてから、わずかに間を空けて頭を上げる。そして、相手の顔を見た。

「あ——」

通い慣れた病院の五階のロビーに、秋山竜平の姿があつた。いつも学校で見る間の抜けた顔で、片手には売店のレジ袋を提げている。白い無機質な空間の中では、その姿はあまりに異質で、その場に暫し茫然と立ち尽くした。

「ひさしぶりじゃね？」

秋山がどこか気まずそうにつぶやいた。明るい学校の教室と、生命感のない病棟の間には果てしない隔たりがあつて、二つの世界が決して交わらないように感じていただけに、いとも容易くその壁が崩れたことに戸惑いを覚えた。秋山も多少は緊張しているように見えたが、すぐに秋山らしく、へらつと表情を緩めた。

「美人の姉ちゃんの見舞いか」

教室と変わらない口調で秋山が尋ねる。病院の緊張感がそれだけで少しほぐれる感じがし

た。音もなく流れていくエスカレーターや、微かな靴音さえはつきり聞こえる廊下の静寂——そんな空気を秋山の声が簡単に壊してしまうのが不思議だった。

「へいは妹さんのお見舞い？」

聞き返したその声も、ちゃんと学校での声になっていた。ここでしゃべる時はいつも自分の声じやない感じがしていたので、同じ声が出せることに驚いた。

「ああ。なんか初めて会ったな」

「うん。ちよつとびつくりした」

ロビーで向き合っている脇を、看護師が車椅子の患者を押して通っていく。それが通過する間は二人とも黙っていた。車椅子には点滴台が繋がれていて、そのカラカラという音が廊下の向こうへ消えるまでは、なんとなく病院の空気が勝っている気がして、口を開くことができなかった。

「妹さん……どう？」

車椅子の音が聞こえなくなると、やっと秋山に聞いたが、そうしながらも聞いていいことかどうか分からなくて、言葉の最後は曖昧に濁した。秋山は気にする様子もなく、両手を頭の後ろで組んで、たいしたことでもなさそうに返事をする。

「まあ、おんなじかな。普通に元氣だよ。そのうち手術するとか言ってたけど」秋山は言いな

がら、視線を逸らして窓の方を見た。「なんか暑<sup>あ</sup>ちーよな、今日」

エスカレーターの横にある一面のガラス窓から、午後の強い日差しが入ってきていた。ロビーのカーテンは引かれていたが、エスカレーターはその日差しを容赦なく食らって、金属の部分が白く光っている。

「八月だからね」

そう返すと、秋山は「だよなー」と言いながら近くの長椅子にドカッと腰を下ろして、レジ袋を横に置いた。教室で椅子に座る時と同じ乱暴な座り方で、秋山が病院でもまったく変わらないうちにたまらない安心感を覚えた。

「あーあ。夏休みも半分以上終わっちゃったな」

長椅子にだるそうに手を突いて、秋山がぼんやりと宙につぶやく。その時ふと、秋山の髪の毛がいつもよりもだいぶ短いことに気が付いた。元々短髪だったが、短く切ったというよりは、坊主にしていたのが少し伸びたという程度だった。

「髪型変えた？」

そう尋ねながら秋山と斜めに背中合わせで腰掛ける。秋山は聞かれてやっと髪のことを思い出したのか、情けなさそうな顔で笑って、妙に不揃<sup>ぞろ</sup>いになった頭頂部を撫でた。

「加藤に切られたんだよ」秋山が小さい声で言う。「あいつ美容師目指してるんだって」



クラスで一番明るくて笑い上戸の女の子、加藤友香——「トモちゃん」の顔が浮かんだ。いつも何にでも大声で笑っている印象しかないトモちゃんが、将来の目標をきちんと定めていることが少し意外だった。でもよく見ると、秋山の髪は耳の上も、左右の長さも、何もかもがバラバラになっている。危うく洩れかけた笑いを無理に微笑みに抑えて言った。

「……か、かつこいいね」

がんばってはみたものの、声が上がするのはごまかせず、秋山に睨まれる。

「おまえ、本気で言ってるのか」

「いや、ひどいと思うけど……」

秋山は溜息をついて、頭頂部の髪の毛を確かめるようにひつぽる。

「これでもだいぶましになったんだぜ」

「じゃあ、床屋行ったんだ」

そう聞くと、秋山は渋い顔でこつちを見た。

「ちげーよ。加藤に責任取らせてやってんだよ。毎週、切られてんだぜ」

秋山が身をよじって悶えた拍子に、横に置いてあるレジ袋から雑誌の角がはみ出した。緑色の表紙。以前、秋山の妹が読みたがっていた雑誌だった。出たばかりのはずの最新号の表紙を見ていると、秋山が気が付いて、雑誌を袋にしまい直す。

「最近これ読んでんだよ」

秋山が素っ気なく言って、レジ袋を長椅子の逆側に置き換えた。でも、秋山が読んでいるのが同じ発売日に出る別の雑誌なのは知っていた。たぶんそちは立ち読みしてきたのだろう。

そのまま秋山は窓の外を眺めていた。お互いに何も言わなかったが、学校とは違うその場所、二人で長椅子に座っていると、どちらも同じことを感じているのが分かった。三年六組が二人いれば、どこでもそこがクラスになる。たとえこんな真つ白な、寂しい病院の中でも。

——それが分かると、どれだけ自分が学校を欲しているのか気が付いた。学校がないと、何をしたらいいのかもよく分からなかった。

「じゃあ、そろそろ行くね」

そう言って長椅子から立ち上がり、エスカレーターの方に向かい始めた。でも、その途端、頭を逆さまに傾けた秋山に「ツカ」と呼び止められる。

「おまえも週末、裕美の伯母さんそこ、行くだろ。保健の先生がバスで送ってくれるから、電車賃もいらないうって言うしさ」

その秋山の言葉で、下唇を噛んだ。目の前に広がる病院の光景が一瞬かき消えて、裕美からの写真で見た眩しい海の様子が脳裏をかすめる。



「あ……」姉の病室に声が届かないよう、小声で言った。「行けたら行くね」

それ以上何も言うことができず、素早くエスカレーターに乗り込む。姉にそのやり取りを聞かれた気がして、早くそこを離れたかった。幸い、秋山の返事を聞く前に、エスカレーターが下の階へと運んでいつてくれる。動く手すりにつかまったまま、落ち着かない気分で見え外に目をやると、どこまでも広がる青い空が遠く見えた。

ふと、家に置いてきたスイカを、母親が食べたかどうか気がなった。

6

「おっさん」

阿坂は事務所の戸口から中に向かってそう呼びかけた。

おっさんは事務机の下に四つん這いになって、何かごそごそやっている。ツナギを着たその尻をしばらく見ていたが、いつまで経ってもおっさんはこつちに気が付かない。しびれを切らして、もう一度呼んだ。

「おっさん。おれだ」

それでもまだおっさんは気が付かず、ごそごそという音だけが続いた。「背後から近付く人間は気配で分かるようになれ」と言つて、よく後ろから殴ってきた奴の成れの果てがこれかと思うと、苛立ちがこみ上げてくる。

「じじい！」

声を上げると、ガン！と、机の下で頭を打つ音が聞こえた。ごそごそという音が止まって、「いてえ」と唸り声が響いてくる。思わず、額に手を当てて溜息をついた。

「何やってんだよ。それでも元字かよ」

そうつぶやいている間に、埃まみれのおっさんが机の下から這い出してくる。手にはタコ足配線になったコンセントのタップを握っていた。おっさんはくしゃみを一回してから、そのタップを机の下に放り出す。

「うるせえな。こっちはおまえらと違って、昼間っから机に座って、のうのうと給食食つてるような身分じゃねえんだよ」

おっさんが言うのを鼻で笑い飛ばしながら、近くにあった事務用の椅子をひっぱってきて腰を下ろした。

「夏休みつて聞いたことあるか、おっさん」

おっさんが壁に掛かったカレンダールの方を見る。今が何月かを確認しているようだった。最近は見える度に老けているような気がして、心底情けなくなる。おっさんが「そういや——」と言いながら、ツナギのポケットから小さな箱を抜き出して、放り投げてきた。片手で受け取って、見ると絆創膏ばんそうこうの箱だった。

「頼まれてた新型のパッチだ」

おっさんはそう告げて、埃まみれの手をツナギで拭いてから、机の上の唐揚げ棒を一本取り上げた。それを皿シグナルの上のマヨネーズに付けて、煙草のように口にくわえる。

「しよつちゅう信号シグナルが消えると変だからな。今回はゴーストが家に帰るようになってる。アズ

ミにも渡しとけ」

それだけ言うとおっさんは唐揚げ棒をくわえたまま、また机の下に潜り込んだ。長年挿しっぱしになつていたタコ足配線をやり直そうとしているらしく、コンセントの線にひっぱられて、机の上のパソコンや電気スタンドの位置が全部歪んでいる。そのせいもあってか、事務所はいつもよりもいつそう埃臭くなっていた。

尻を残して机の下に消えたおっさんをよそに、壁に掛けられたおぼさんの写真をぼんやり見上げた。ずいぶん長い間放置されているのか、写真はすっかり色褪せている。それでも、なんとなくまだおぼさんの声がその辺りから飛んできそうな存在感を放っていた。

「なんでも、またやばい仕事押し付けられたそうじゃねえか」

くぐもつた声が机の下から響いてくる。絆創膏をポケットにしまつて、椅子に座ったまま、近くのファイルキャビネットに足を載せた。奥の作業場からは今日も熱心に鉄くずを壊す音が聞こえている。たぶん壁に付いている冷房は電源が入っているのだろうが、作業場の溶鉱炉の熱も手伝つて、事務所の中はまるで涼しくなかった。

「やばいつてほどでもねえよ。的確まことは『踏切屋』とか呼ばれてる自殺補助グループだ」

そう答えながら、近くの掲示板から適当な掲示物を千切り取って、暇潰しに紙飛行機を折り始める。

「ちようどクラスの奴の親が食い物にされてるらしくてな。おれんところに回ってきた。普通の仕事だよ」

「普通じゃねえ」

いきなりおっさんが机の下から厳しい声を出す。それを聞いて、「ああっ？」と返した。

「普通の仕事じゃねえぞ、それ」尻だけをこつちに見せた体勢で、おっさんが「そぞそやりながら続けた。「そいつらは『社』の零しだ」

「零し？　なんだそりゃ？」

聞き返すと、「そぞそ」という音が一瞬止まる。

「昔から裏切り者はそう呼ばれてる。『踏切屋』ってのは零しの資金源のひとつだ。前から噂されてたが、院も本腰上げて調査に乗り出したんだろ」

一瞬、紙飛行機を折るのを止めて、手元を見た。紙の表面に「重要」と書いてあるのが目に入る。だが、気にしないことにして、また紙を折り始める。

『社』が裏切るなんてあり得んのか。聞いたこともねえぞ」

つぶやくと同時に、おっさんの尻がくねつと動く。それが気持ち悪くて舌を鳴らすと、尻の向こうからおっさんの低い声が響いた。

「時代だ。昔じゃ考えられん。一人や二人はともかく、集団での零しは初めてだ」まじめな口

調と尻だけの姿に違和感がある。「それも黒幕がまったく分かってない。しばらくは気を付けてろ。見えないところで何かでかいことが動いてるのは確かだ」

おっさんの手が下から出てきて、机の上をパタパタとむやみに触り出す。電気スタンドのスイッチを探しているようだった。「もつと右だ、右」とがなると、おっさんの手がやつとスタンドに触れる。パチンという音がしたが、スタンドは点かない。手が引つ込んで、また「そぞそ」が始まった。

「踏切屋の頭は駒崩れた。腕は鈍ってるだろうが、それなりに使うぞ」おっさんの声が再び机の下から聞こえる。「せつかくだから、手伝ってもらったらどうだ——塾の仲良しこよしのあいつに」

紙飛行機を折り終えて、妙にいらつとする感じに突き出たおっさんの尻に向かって言った。「そのきたねえケツに掌底食らいたいかな」

鬱陶しい声は一旦止まったが、「そぞそ」は止まらなかった。またおっさんの手が出てきて、スタンドの位置を見失う。わざとやっているのかと思うくらいだったが、「右つってんだろ！　ボケてんのか」と怒鳴ると、今度はスタンドの電気が点いた。

「じゃあ、あいつはどうだ。高塚永児つたつけ、あのガキ。あれが蘭の女が探してる奴じゃねえのか」

おっさんの声が、微妙に外連味<sup>けれんみ</sup>を帯びている。紙飛行機の尖った先でこめかみを掻きながら、ツナギの尻を睨み付けた。おっさんはこっちの反応を完全に無視して、勝手に付け足す。「アズミよりはるかに使えるぞ。あいつ、サダクラで何人潰したと思ってる」

「意識失ってたんだ。知るかよ」

そう答えると、今度のおっさんの声には若干の含み笑いが混ざっていた。

「院の直属の部隊を少なくとも六人か七人、一人でやってる」

黙って、おっさんに向けて紙飛行機を放った。紙飛行機の先は見事におっさんの尻を捉えたが、おっさんは気が付く様子もなく、作業を続けている。アホらしくて、キャビネットに足を載せたまま、椅子の背にギシツともたれかかった。相変わらず、何もかもが錆付いてるところだった。

「やけに高塚のこと、面白がつてねえか？——いいのかよ、『会』のこと知ってる素人を放つといて」

言っている最中に、おっさんが机の下から這い出してきて、机の上にあるパソコンの電源を入れる。モニタにしっかりと光が灯った。

「何言つてやがる。院に黙つてたのはためえだろうが」鉛筆削りに試しに鉛筆を突っ込みながら、おっさんが言った。「だいたいうちの仕事は準備と掃除だ。やばいと思つたら、とつくに

おまえがどうかしてるだろ」

傍らに立つたおっさんが再び唐揚げ棒をくわえて、こっちを見下ろしてくる。投げた紙飛行機はいつの間にかその足の下で踏み潰されていた。立ち上がりついでに、椅子を元通り机の下に蹴り込んで、「帰るわ」とおっさんに告げた。

「バッチの金、月末までに振り込んでけよ」

アルミ材でできた安っぽいドアを開けると、後ろからおっさんの声が飛んでくる。ドアから一步踏み出したところで足を止め、振り返って言った。

「孤児院の静寂<sup>しじやく</sup>つて字がサダクラから帰ってなかったぞ」

反応を見定めようとしたが、おっさんの表情にはまるで変化がなかった。唐揚げ棒の串をゴミ箱に放り込みながら、おっさんが「そうかい」とだけつぶやく。

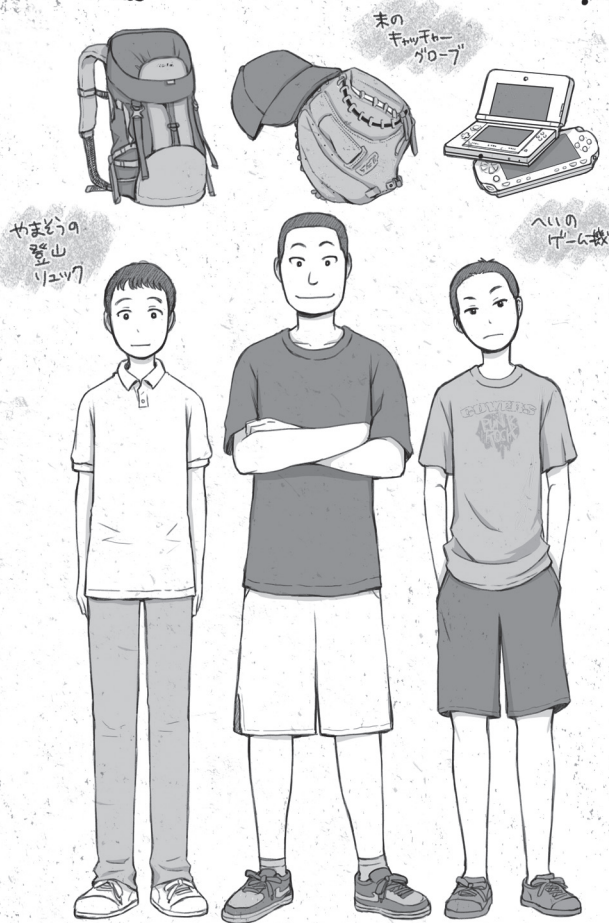
「塾の下っ端の駒や、アズミが倒せるような相手じゃねえ。倒せるとしたら、向こうの塾長か成駒だろうが、あいつら、どっちもおれと一緒にダウンしてたからな」

そう言ったあとで、笑みを浮かべて聞いた。

「もしかして、おっさんじゃねえのか」

三本目の唐揚げ棒がマヨネーズと一緒におっさんの口の中に消える。白髪だらけの髪の毛はボサボサになって、埃があつちこつちに付いていた。おっさんはだるそうに自分の腰を拳<sup>こぶし</sup>

で叩いて首を振り、作業場の方に向かいながら言った。  
「アホなことぬかすな。とつくに引退した身だ。そんなことできるか」



阿坂が寂れた町工場に入っていつて、そろそろ二十分が経っていた。

米原アズミは隠れた電柱の陰から半分顔を出して、工場の入口を盗み見た。暮れかけた太陽がトタン屋根に反射して、目を細めないと遠くは見にくかった。

人通りがないのをいいことに、大きく頭を突き出していると、持っていたアイスキャンデーがずるりと棒から抜ける。とっさにつかもうとしたが、片手に提げているバッグが邪魔をして、ラムネ味のアイスはそのままちゃつとアスファルトの上に落ちた。

小さく溜息をついて、残った木の棒を未練たらしく口に含む。わずかに残るラムネの味に慰められていると、ボタンとドアが閉まる音がした。見ると、工場の入口に積み上げられた部品の山の間から、阿坂が姿を現している。慌ててアイスの棒をバッグにしまい、背中を塀にびったりくっつけた。そうして、阿坂が通りに出てくるのを待った。

阿坂は何かばやきながら、空の石油缶を蹴って、駅の方へと歩いていく。電柱の後ろでそれを一旦やり過ごしたあと、阿坂が少し離れるのを見計らって、陰からそつと踏み出した。

途端に阿坂が足を止める。背中を向けたままで「アズミか」と尋ねられて、びくつとなつたが、

なんとか「うん」とだけ答えた。

「なんの用だ」

阿坂が振り返って言う。その声がいつもより微妙に硬かった。ちよつと腰が引けて、塀の方へと一歩後退る。治っているはずの額の傷が痛む気がして、わずかに鼓動が速くなるのを感じた。

「阿坂に……聞きたいことがあつて」

うつむくと、出てきた声はか細くなっていた。視線の先の地面に阿坂の影が伸びて、ゆつくり近付いてくる。その影に自分の小さな体が呑み込まれて、顔を上げると、逆光になった阿坂の体が目の前に大きく立ちはだかつていた。

見下ろしてくる鋭い視線に唾を飲む。あまり見たことがない、怖い表情だった。それでもどうか口を開いて、途切れるような声で告げる。

「前から気になってたんだけど、シスターが探してる『蛍』って高塚のことだよ？　なんで阿坂は院に報告しないの？」

阿坂が目細めるのが分かる。皮膚が痛くなるほど緊張していたが、辛うじて続けることができた。

「もしかして、蜘蛛がいなくなったことと関係ある？」

急に阿坂の表情が消える。——でも、もうやめられない。まくし立てるように、矢継ぎ早に言葉を紡いだ。

「おかしいの。五倉山に行った日から、一度も蜘蛛と連絡が取れないんだ。お姉ちゃんに聞いても知らないって言うし、さつき携帯に電話したらつながらなくなってた」

言いながらも、指先が微かに震える。もうだいたい前から聞こうと思っていたことだった。ただ、その勇気をかき集めるのに、何週間もかかった。

「蜘蛛は高塚のことを追ってたんでしょ？ それなのに高塚が無事で、院に正体もばれてないって変だよな？」

阿坂は瞬きひとつせず、感情のない目でこちを見下ろしていた。阿坂の大きな影に覆われて、背中に塀の凹凸が当たるのを感じながら、乾いた唇をもう一度開く。

「蜘蛛……死んだの？」

夕暮れ時の工場街が静かにその言葉を呑み込んだ。答えは返ってこなかった。徐々に冷たくなっていく指先で、目の前の阿坂のシャツを軽くつかむ。暑いのに、汗で濡れていない乾いたシャツ。それを引き寄せて、絞り出すように声を上げた。

「お願い。教えて、ヤベ」つい昔の名前で阿坂を呼んでいた。「蜘蛛、どうしたの？」

阿坂は黙っているだけだった。こみ上げてくる不安を抑え切れずに、阿坂のシャツをひっ

ぱりながら叫んだ。

「教えてよ！」

途端に胸倉をつかみ返されて、かかとが地面から浮き上がる。声を出すこともできずに、後ろの塀に強く叩き付けられた。同時に耳の横を何かがかすめて、塀がすごい音で軋む。息を詰めて横を見ると、阿坂の掌底が塀の表面を叩かせていた。

肩越しに散る埃が、残った陽射しで白く光って見える。手の中のバッグがどさつと地面の上に落ちた。息が止まって、声が出なかった。すぐるように上を見ると、阿坂の形相に全身の血が凍り付く。

「蜘蛛のことは誰にも聞くな」右手を塀に突いたまま、阿坂が耳元から数センチの距離で告げた。「少しでも長生きしたかったら、二度と口に出すな」

それだけ言っただけで、阿坂がいきなり手を放す。力が抜けたように、塀に沿って身体がずり落ちた。怖くて、知らないうちに目の縁に涙が溢れていた。

「おまえは言われたことだけやってろ。余計なこと考えるな」

阿坂の声が冷たく耳に染み込んでくる。涙を隠そうとしてうつむいた先に、青いアイスの染みが広がっていた。何も言えずに、じっとその染みを見つめていると、やがて頭の上で阿坂が溜息をつく気配がする。



「仕事だ」そう言つて、阿坂が半分に折つたメモ用紙を突き出した。「あした、その家を見張つてろ」

手の中に押し付けられたメモを広げると、住所が走り書きされている。

「面は見られるな。同じクラスの奴が住んでるからな」

小さくうなづくのでせいじっぱいだつた。阿坂は確かめるようにもう一度こつちを見たあと、両手をポケットに突っ込んで、駅の方へと歩き出す。しかし、数歩も進まないうちに足を止めて、ポケットから片手を抜き出した。その手に何かが握られていた。

ゆつくり戻つてきた阿坂が、手の中のものをこつちに差し出す。それが目に入つた途端、胸がどくんと激しく鳴つた。眼鏡だつた。蜘蛛が片時もはずさなかつた、縁の太い、お気に入り眼鏡。とても大事にしていたのに、今はつるが片方取れ、レンズはひび割れていた。

両手でその眼鏡を受け取ると、暗く、重たい闇が体の中へ入つてくるのを感じた。

「阿坂が……殺したの？」

思わずそう尋ねた。阿坂の顔は、もういつものゴリラ顔に戻っていた。――殴られるかと思つたが、阿坂はただ寂しげにぼつりとつぶやいただけだつた。

「まあ……そんなとこだ」

それだけでこつちに背を向け、阿坂は再び駅の方へ歩き始めた。大きな背中がどんどん離

れていく。それを茫然と見ていたが、どうしても我慢できずに声を上げた。

「なんで!? 阿坂、なんでなの!？」

大声で叫んだが、阿坂は立ち止まることも、振り返ることもしないまま、道の向こうへと姿を消した。あとに一人残されて、どうしていいのかわからずに手の中の眼鏡を見る。眼鏡は思った以上にボロボロだつた。うっかり握り締めると、ピキッと危なげな音がして、慌てて手の力を緩めた。

レンズの割れた眼鏡をそつと両手で包んで、抱きかかえるように胸元に持ち上げた。すると、眼鏡からはまだ微かに蜘蛛の匂いがした。森のような香水の匂い。今にも消えそうなその匂いは、もうそこにしか残つていなかった。

「蜘蛛――」

口に出して名前を呼ぶと、蜘蛛が最後に孤児院の部屋へ来てくれた時のことがよみがえつた。ちよつとからかうようなことを言つて、出ていっただけだつた。いつもの蜘蛛。ドア越しに「またな」と告げた蜘蛛は、その時もこの眼鏡をかけていた。

泣いちゃだめだ。駒は泣かないんだ。――そう思つて堪えようとしたが、無理だつた。足元の青い染みの中に透明な液体が一滴落ちる。すぐにもう一滴、同じ場所に落ちて、青色に混ざつて滲んだ。



いつの間にか、落とした自分のバッグをかかとで踏んでいたことに気が付いた。それでも、その足を避けるだけの力がなくて、しばらく夕暮れの中で蜘蛛の眼鏡を握ったままでいた。バッグから飛び出した折りたたみ傘が、青い染みの横に転がっている。

よく晴れた夏の日の夕暮れには、折りたたみ傘も、自分と同じように役立たずだった。

8

気が付くと、天井の様子はすっかり見えなくなっていた。

いつの間にか暗くなった部屋で、永児はベッドに横たわったまま、ぼんやりと窓の方へ頭を傾けた。外はもう真つ暗で、隣の家の上階の窓明かりだけが、ぼつりとカーテンの間から見えている。窓から入ってくる風も涼しくなつて、夜の匂いがした。

病院から帰ってきて、どのくらい時間が経つたのか分からなかった。覚えている限り、ずつと天井の様数を数えていた気がした。でも、いくつまで数えたのか思い出せなかったのだ、少し眠っていたのかもしれない。

右手には携帯を握ったままだった。その液晶に『メールを送信しました』というメッセージがまだ表示されている。返事の戻ってこない、待ちぼうけのメール。夏休みに入ってから何度メールを送つても、会長からの返信は一度もなかった。

しばらくそうして、風が額に当たるのを感じていた。暗闇で白いカーテンが静かに揺れるのを見てみると、どこかへ連れていかれそうな気がする。このところ、ずつと病院と家との往復ばかりで、同じ毎日を繰り返しているような錯覚に陥っていた。おかげで感覚がすつ

かり麻痺していたのに、峰の家で家族のいる空気を味わってから、また鈍い痛みが少しずつ戻ってきていた。普通に家の中が動いていると、どれくらい時間がさらさらと流れていくのかを強く思い知らされた。

ゆっくりベッドから起き上がって、部屋を横切り、電気のスวิตช์を点ける。パチンという音と共に、天井の蛍光灯が瞬いて、青白い明かりが部屋の中を照らし出した。一本だけ遅れた蛍光灯がちらつき、手こずってから明るくなると、机の上の皿に重なった二枚のスイカの皮が目に入る。母さんが食べなかった分のスイカだった。

ベッドの縁に腰かけ、携帯を手にも、また窓の外を眺めた。——長い夏休み。末岡たちと小さな花火大会を見たのを最後に、ほとんど誰とも会っていなかった。でも、今日久しぶりに秋山と峰と顔を合わせて、学校のある日々がたまらなく愛おしくなっていた。

手元の携帯に視線を落として、ここ最近届いたメールの件名をスクロールしていく。みんなの名前が次々に目に入って、ちよつとだけほつとした。喜多見の名前もまばらに目に付く。サダクラでの夜以来、安全を確認するために、毎日一通はお互いにメールを送るのが習慣になっていた。

『今日、千年台で穴井さんたちと会いました。高塚くんが前にくれたクレープと同じのを食べました。すごくおいしかったです』

いつも通りの、多少ぎこちない喜多見のメールを読み返すと、微かに口元に笑みが浮かぶ。実際に喜多見と話せたら、もつと心が安まる気がしたが、会うことはわざと避けていた。

携帯を握る右手に、いつもの包帯が巻かれている。蛍光灯の下では、塗料の付いた右手もほとんど光を発していなかった。でも、これが消えない限り、喜多見の側にいるのは危険だと分かっていた。逆に二人でいるところさえ見られなければ、喜多見は安全なはずだった。

再び仰向けにベッドに横たわる。うつすらと綿埃わたぼこりが舞い上がって、馴染んだ布団の匂いに全身が包まれた。携帯を天井にかざして、メールの件名をいくつか戻すと、裕美が送ってくれた海の写真が液晶に表示される。

『週末、これそう？ 返事待つてるよー』

八王子の花火も帰りにみんなで見ようね！』

写真に添えられた裕美の明るいメッセージが訴えかけてくる。それを見上げているうちに、夏の青空が天井を覆って、花火大会の音と、海の潮騒が部屋の中に響く気がした。しかし、その幻もすぐに消えていつて、あとには寂しげな蛍光灯の明かりだけが残る。

下唇をぐつと噛み締めた。静かに返信ボタンを押して、白紙のメール画面が出てくると、そこに『メールありがとう』とだけ打った。一泊分の着替えが入ったスポーツバッグは、だいたい前から机の下に用意している。でも、返事を出そうとする度、ベッドに横たわる姉の姿

が浮かんできて、どうしても『行く』と言うことができなかった。

口の中に溜まった唾を飲み込んで、一緒に罪の意識も呑み込もうとした。病院のロビーで秋山に会って、東の間学校の空気に触れてから、無性にみんなに会いたかった。

でも、指先が『ぼくも一緒に』とメールの続きを打ち始めた時、いきなり一階から引き裂くような悲鳴が上がった。反射的にベッドから飛び起きて、ドアの方を見る。そして一瞬の間、右手の包帯を解きながら、転がるように廊下へ飛び出した。

「母さん！」

止まらない悲鳴が耳を劈く。階段を下りる時間がもどかしくて、携帯をズボンのポケットに突っ込み、二階の手すりを一気に飛び越えた。そのまま階段の途中にまっすぐ落下して、両足同時に着地する。すごい音が家の中に響いたが、それさえ母親の声がかき消していた。

「母さん!! どうしたの!？」

ガラス片を握り締めて居間へ飛び込み、辺りを素早く見回した。母親は一人、薄暗い居間のソファで、頭を押さえて横たわっていた。その横に滑り込んで、震える母親の肩を両手でつかむ。

「母さん、返事して！」

母親の目は開いていたが、こっちの姿はまったく映っていないようだった。まるで知らな

い人のような表情で、母親は天井を見つめながら、まだ小さく叫び続けている。

「電話——」母親の口から言葉が洩れた。「——病院から電話が——」

それを聞いて、電話機の方を見たが、受話器はフックに置かれたままで、留守番電話のランプも点滅していなかった。ローテーブルの上にある母親の携帯を調べても、着信の表示はない。そもそも電話の着信音を聞いた覚えがなかった。

「電話、かかってきてないよ」

手の中でもがき続ける母親をどうにか押さえ付けて言う。母親を力で押さえ込もうとする自分がひどい息子に思えて、強い罪悪感で吐き気がこみ上げてくるのを感じた。家族を置いて、自分だけ逃げようとしたことがばれている気がした。

「母さん! お願いだからしつかりして!!」

耳のすぐ側でそう怒鳴ると、急に母親の声は止まった。母親の目の焦点がゆっくり合うのが分かる。

「永児……」

母親がそう囁くのを聞いて、ようやく肩をつかんでいる手を緩めた。母親は茫然とした様子でソファに体を沈めて、こっちを見つめていた。たった今、夢から覚めたような表情だった。

「……右手、どうしたの？」

そう言われて、一瞬まだ母親が夢を見ているのかと思つたが、すぐに包帯をはずした自分の右手がうつすら光っていることに気が付いた。慌てて右手を母親の視界の外に下ろし、ガラス片をポケットに落としながら言つた。

「なんでもないよ。マジックのインクが付いただけ」

「病院から電話なかった？」

母親が力のない声で聞く。なるべく冷静な口調でそれに答えた。

「夕方から家にいたけど、電話鳴つてないよ。それに昼間、姉さんに会つた時、何も変わったことはなかった」

それだけ聞くと、母親は大きく息を吐いて、安心したように目を閉じた。その頬を涙が細く伝つて、母親のシャツの胸元に落ちる。シャツの同じところに、何滴も似たような染みができているのは、わざと見ないようにした。

クーラーが冷たい風を部屋中に送つていた。床に落ちているリモコンを拾つてみると、設定温度が二十度になっている。それを二十七度まで上げてから、リモコンをソファに置いて、ずれたローテーブルを元に戻した。テーブルの脚にラグがひっかかつていたので、全体を軽く持ち上げて、ラグを整える。

「ごめんね」

目を閉じて横たわつたまま、母親が今にも泣き出しそうな声でつぶやいた。それには何も答えず、ソファの片隅に押し込められていた毛布をはたくようにして伸ばし、寝ている母親の上にかけてやる。子供の頃、母親が寝る前によくしてくれたことだった。母親は毛布を頭の上まで引き寄せ、隠れるようにその下に潜つた。

しばらくその場で見守っていたが、母親は毛布にくるまつたまま動かなかった。もう何もできることがないのを悟つて、テーブルの上の空いたガラスコップを拾い集める。

「また何かあったら呼んで」

毛布越しにそう告げたが、母親はまた眠ってしまったようで、反応はなかった。コップを台所まで持つていき、流しに全部突つ込む。途端に強い疲労感に襲われて、電気も点けないまま、真つ暗なダイニングの椅子のひとつに座り込んだ。

窓から忍び込む外灯の明かりと、自分の右手の光だけが部屋を照らしている。その薄い闇の中で、ポツポツと灯る台所の電化製品のLEDが、余計に静けさを際立たせていた。いつも父親や姉の笑い声が響いていた場所は、今は冷蔵庫の音しかしなかった。

ズボンのポケットに突つ込んでいた携帯をゆっくり引き抜く。紙が擦れる音がして、病院で受け取った請求書が一緒に出てきた。金額を見たくなくて、請求書の方は強引にポケットの中に押し戻す。

これを見たら、きつと母親は無理にでも仕事に戻ろうとする。そうしたら毎日、電車に乗ることになるはずだ。混み合った駅のホームで、黄色い線の手前にぼんやりと立つ母親と、ホームに入ってくる電車の轟音を想像しただけで、全身に鳥肌が立つのを感じた。

ダイニングのテーブルに肘を突く。体は石のように重たかったが、やらないといけないことがひとつだけ残っていた。携帯を開くと、不自然に明るい光が辺りを包み込む。それを受けて弱まった右手の光の中に、書きかけの裕美への返信が映し出された。

『ぼくも一緒に』と書いた文字を、後ろからひとつずつ消していく。そして、痺れるような鈍い感覚の中、メールの文章を打ち直した。

『メールありがとう。でも、ごめん。行けそうにない』

それだけ打ち終えてボタンを押す。メールの送信音が空っぽの部屋にこだまするのを聞きながら、ダイニングテーブルにうつ伏せた。すぐに眠気が容赦なく襲ってくる。こんなところで寝ても、もつと疲れるだけなのは分かっていた。でも、部屋に戻りたくなかった。部屋のベッドで眠ったら、また朝が来て、同じ一日が始まってしまう。だから、このまま眠りに落ちていくことを自分に許した。

少しだけ。——少しだけここから離れさせて。  
そう考えながら、永児はダイニングテーブルで緩やかな寝息を立て始めた。



なだらかな山の稜線<sup>りょうせん</sup>から差し込んでくる午前中の陽射しが、温泉旅館の庭を眩しく照らし出していた。旅館は深い森の中に建っていて、山間<sup>やまあい</sup>から心地良い風が絶え間なく吹いてくる。県道を離れて、車でさらに数時間の山奥にある、四国の小さな村。——こんな森と川しかないようなところでも、場所と天気によっては携帯がつかないことがあった。

その携帯の通じるわずかな場所——休憩所の濡れ縁<sup>ぬい</sup>に置かれた藤<sup>とう</sup>の椅子に座って、千原行人は乾き切っていない前髪を払い、浴衣の袖から携帯を取り出した。メールの受信ボタンを押すと、サーバに溜まったメールが一斉に画面に表示される。そのうちのひとつに目が留まって、それを開いた。

『会長、旅行ってどこなの？ 写真くらい送ってよ』

昨日送信された永児からのメールだった。湯上がり<sup>ほ</sup>の火照った体を冷ますように、浴衣の襟元を緩めて、長い息を一度つく。そうしている間にも、三角巾で吊った左手ではずつとコインを転がしていた。この温泉に来るまで、左手の感覚はもう回復しないことも視野に入っていたが、湯治<sup>とうじ</sup>を始めて半月が経った今、小指以外はだいぶまともに動かせるようになって

いる。下足番<sup>げそくばん</sup>が強く勧めた温泉だけのことはあった。

もう一度永児のメールを読み返すと、何気なく表示されている「会長」というあだ名に視線が止まる。ずいぶん久しぶりにその名前で呼ばれたような気がした。それが自分の名前であることも、五倉山から遠く離れたこの場所では、あまり実感が湧かなかった。

少し着信メールを遡<sup>さかのぼ</sup>ってみると、一定の間隔で永児から何通もメールが届いている。

『会長、どうしたの？』

『海外にいるの？』

『返事待ってるんだけど』

段々不満そうになっていくメールに笑みを浮かべていると、うつかりコインが指の間から抜け落ちる。コインは休憩所の床を勢いよく転がり、売店の横に置かれた自販機の脚に当たって止まった。

しばらくの間、黙って左手の指先を見ていた。中指と薬指との距離が、ほかの指よりもほんの少し広い。——骨が微妙に歪んでいるな、と思いながら携帯を浴衣の袖にしまい、藤の椅子から立ち上がった。右足を固めている包帯に動きを制限されて、歩き方はぎこちない。それでも左足は数日前から湯に沈められるようになって、飛躍的に回復していた。もう松葉杖も突かなくて済む。



軽く右足をひきずりながら、濡れ縁から中に入り、売店の隣に並んだ二台の自販機のところへ向かった。片方は比較的新しいペットボトルの自販機だったが、もう一方はカップラーメンを売っている年代物だった。

日に焼けた朱色のタイルカーペットに、コインは転がっていた。膝を曲げるのは難しかったので、床のコインを右手の人差し指で弾き上げて、同じ手の甲で受け止める。そのまま指の溝を転がして、コインをペットボトルの自販機に入れた。袖口から取り出した残りの五十円は、指の間でぐるりと回してから投入する。右手の方はまったく違和感を感じなかった。

自販機のボタンに赤いランプが灯る。そのままスポーツ飲料のボタンに手を伸ばしかけて、ふと隣に並んでいるオレンジ色のペットボトルに気を取られた。わずかにためらっていると、売店の中から出てきた老齢のおばさんがこつちに声をかけてくる。

「バヤリースがええよ。あんまり甘くないからね」おばさんが笑みを含んだ、柔らかなイントネーションで言った。「それとコーラくらいやねえ。私が若い頃から変わつとらんのは」

そのままにこのこと見守り続けるおばさんに作り笑いを返して、仕方なくボタンを押す。ガタンと音を立てて、下の取り出し口にオレンジ色のペットボトルが落ちてきた。取ろうとすると、おばさんが横から手を出してきて、「ええよ、ええよ」と言いながら、代わりにボトルを取ってくれる。

「すみません」と言いながら、おばさんからボトルを受け取ると、見慣れたオレンジ色のペットボトルが、勝ち誇ったように手の中に収まった。

「学生さんやったね？」

店頭に戻りながら、おばさんが尋ねた。自販機から取り出したボトルはキャップも開けずに、右手ごと袖の中にしまう。

「東京から療養にきました」

爽やかな大学生らしい声で答えると、おばさんは三角巾で吊った左手に視線を送ってきた。

「この湯は骨折には靨面（えんめん）やもんね」

おばさんは話しながらも、売店の小さな通用口を開けて、吊してあるティッシュやライターなどの補充を始める。

「それにしても、よくこんなところまで来たもんやな。東京なら、箱根やら伊豆やら、もつとええところもあるに」

「この辺りの民間伝承に興味があったから、いい機会だと思って」

そう答えると、おばさんはしわのたくさん寄った笑顔で言った。

「私はこの生まれやけど、面白い話なんかないですよ。見た通りなんもないところやから」

その言葉で、濡れ縁の外を見やった。壮大な四国山溪のパノラマが庭園の向こうに広がっ

ていた。独特の平たい三角形の山々はどこまでも奥へと連なつて、朝靄で霞んだ遠景に吸い込まれるように消えていく。鮮やかな山の緑は靄の中できれいなグラデーションを作り、目を懲らせば、微かな虹色が雲の襷の間に見えた。

おばさんはくすくす笑いながら、売店の中へ戻つていこうとする。ふと思ひ立つて、その丸くなった背中に見えた。

「この辺りに大きな塔があつたつて話、聞いたことありませんか」

「塔？」おばさんがちよつと不思議そうに首を傾げながらこつちを見た。「さあ、聞いたことないねえ。何しろこの辺は電線も迂回しとるくらいやから……携帯も、この東側の一部しか通じんのよ」

「そうですか」おばさんに向かってにこやかに告げた。「ありがとうございます」

売店から濡れ縁の方へ戻ると、温泉の濃い硫黄の臭いが辺り一面に充満していた。藤の椅子に再び腰かけて、邪魔なペットボトルをガラステーブルに置くのと同時に、袖の中の携帯が着信を訴えてくる。またツカさんか——と、思いながら開いた携帯は、電話の画面になつていて、液晶に蘭静の名前が表示されていた。きつちり数コール待つて携帯を耳に当てると、聞き慣れた騒がしさが電話の向こうから流れ出してくる。

『具合どう、千原くん？』

無数の声と音に紛れて、静の声が届いた。

『おかげさまで、だいぶ』

そう言うのと、静は『よかつた』とつぶやいたが、すぐに誰か生徒に声をかけられて、少し遠い声で早口に何かを話し始めた。向こうはいつも通り、忙しそうだった。静の話が終わるのを待つている間、携帯から耳を離して、束の間、山の景観を眺めた。

『ごめんね。バタバタしてて』

やつと静の声が戻つてきて、携帯を耳に当て直す。

『いつも通りで、安心しますよ』

靄に沈む山の頂上を見上げながらそう言うのと、電話の向こうの騒音がいくらか落ち着く。おそらくどこか人のいない部屋にでも入つたのだろう。そろそろ三時間目の授業が始まる時間だったが、まだ遠くで生徒の声が響いている。

『少し気になることがあるの』静の声がわずかに低くなった。『早めに戻つてこれそうなら助かるわ』

『院が動いたんですか』

そう聞き返すと、『ううん。そうじゃなくて』と静が答える。

『社の中で何かが起きてるみたい。はつきり分からないから、また帰つてきたら詳しく話すわ』



「分かりました」と告げると、静の声は普段の明るいのに戻る。

『例の塔のこと、少しは調べることができた？』

ちらりと売店の方を見る。おぼさんは売店の中の使い古された椅子に腰かけ、目を閉じて、眠っているかのようにじっとしていた。隣の古い自販機と同じくらい長い年月、そうやって過ごしてきたのだろう。この辺りでは、ほとんどすべてがそんな感じだった。

「いえ。特には何も——」静かな濡れ縁に自分の声がこだまする。「逆に何もなさすぎて奇妙なくらいです。実在するなら、こういうところかもしれないですね」

『そうね。ありがとう』静の急いだ声が電話の向こうから返ってきた。『——私、ちよつと行かないといけないから、また連絡するわ。小松喜多見さんが道場に来てるの』

一回、瞬きをしているうちに、通話は切れた。思わず携帯を耳から離して、通話時間が表示された液晶を見る。——相変わらず、忙<sup>せわ</sup>しない人だった。

「小松さんね」

そうぼつりとつぶやいて、コインをまた一枚取り出し、左手の指の間に這<sup>は</sup>わせる。静の空想に付き合つて、もうしばらく「塔」を探していた気持ちにはあつたが、どうやら日常に戻らなければいけない頃合いだった。

コインを転がしながら、もう一度永児のメールを表示する。『写真くらい送つてよ』という

文面を見て、濡れ縁の隅に置かれた大きな狸の置物へカメラを向けた。その腹の「恋愛成就」という擦<sup>かす</sup>れた文字を写真に撮つて、『そんなに寂しいなら、帰つてあげてもいいよ』とメッセージを打ち込む。しかし、打ち終わつたのと同時に、電波の強さを示すマークがいつの間にか「圏外」になっていることに気が付いた。大方、雲の位置か何かが変わったのだろう。

書きかけたメールを液晶に残し、肩をすくめて携帯を閉じる。そして、「永児の友達」に戻するために、会長は静かに眼鏡をかけた。

屋の十二時を告げるチャイムが、水無瀬総合学習塾の建物内に大きく鳴り響いた。それを聞きながら、喜多見は休憩に入る前に、もう一度だけ弓を手に立ち上がった。屋根のない弓道場は夏の陽射しに曝されていたが、じつと的に集中していると、不思議と暑さは気にならなかった。

タン、ととなりの的から音が響く。残心を十分に味わってから、同じ中学三年生の女の子が弓を下ろした。ここに来るようになってから、何度か顔を合わせている眼鏡の子だったが、名前は知らなかった。静から同い年だと聞かされていたが、向こうから話しかけてくることはなかった。自分からも話しかけないようにしていた。

ゆつくりと矢を弦に番える。そうすると、いつものように気持ちが落ち着いた。周りの景色が少しずつ視界から消えていって、この瞬間だけ、忘れかけていた母親の面影を近くに感じる事ができた。

一の矢を放つ。矢は的の中心からだいぶ離れた位置に刺さった。まだ十分に集中できていない。体からできるだけ無駄な力を抜いて、二の矢を指の間で回す。右手の神経に微かなノ

イズが走って、空いた天井から入ってくる風が弓道着の裾を揺らした。

集中しろ。

自分にそう言い聞かせて、二の矢を頭上で番え、弦を引きながらゆつくり弓を下ろしていく。それに合わせて、左目を閉じた。途端に的がぐつと近く見える。右目と右半身が急速に熱くなって、あの時の感覚がよみがえってきた。

集中しろ――。

左目をよりいつそう強く閉じると、視界が徐々に赤くなって、右のこめかみがドクドクと脈打ち始めた。的が引き寄せられるように近付いてくる。手を伸ばせば、直接触れそうな気さえた。

「だめよ」

いきなり後ろからそう言われて、うつかり弦を引く手を放してしまう。矢は的を大きく外れて飛んだ。肩に手がかかるのを感じて振り向くと、静が後ろに立っていた。

「それはやつちやだめって言ったでしょ」

静の顔が怖かった。息が乱れて、足元が大きくふらつく。手の中から弓が落ちかけて、持ち直そうとすると、右手に痺れるような痛みが走った。そのまま倒れかけたところへ静が腕を伸ばして、ほかの生徒から分らないように体を支えてくれる。

「右目が真っ赤よ。しばらく閉じてなさい」

静に囁き声で言われて、うなずきながら目を閉じた。そのまま、しばらく静の肩を借りて立ち尽くす。ほかの生徒たちが昼食を摂るために出ていく足音が弓道場全体に響いて、やがて鳥のさえずり以外、広い空間から音が消えていった。弓道場が空っぽになったのが分かって、少しほっとする。

「体の右側に神経を集中させると、あの時みたいにすごく感覚が鋭くなるんです」

息が落ち着いてくると、目を閉じたまま静に言った。声は人のいなくなった弓道場全体に響いた。

「おそらく体内に残留してるASの影響よ」静が耳の側で告げる。「二度とも右側に強いASを受けたから、右半身の細胞に蓄積されているんだと思う。完全に排出されるには何年もかかるかもしれないわね」

次第に手の痺れは回復してきたが、指先にはまだ何か固いものが貼り付いているような違和感が残っていた。右目の熱が引いたのを感じて、ゆっくり目蓋まぶたを開ける。すると、視界からは赤みが消えて、正常な色合いに戻っていた。

「あまり体内のASを活性化させちゃだめ」眼球を確認するように覗き込んできたあと、静は小さく溜息をついて言った。「あなたはASにかなりの抗体ができていますみたいだけど、それ

でも体にとっては強烈な異物だから。あまりやったら、命に関わるわよ」

自分の部屋の天井のイメージが脳裏を過ぎつて、口の中が乾く。やつと感覚の戻った右手を軽く握って、静につぶやいた。

「早く弓が撃てるようになりたいんです」

静が無言でこつちを見返した。的に集中している時には感じなかった暑さが一気に襲ってきて、うつすらと皮膚が汗ばむ。

「一ヶ月そこらでどうにかなるほど、簡単なものじゃないわ。それに弓は引くものよ。撃つものじゃない」

静はそう告げて、そっと手を放した。ふらつきはもう止まっていた。まっすぐ立ってみせると、静は一度うなずいてから、「ちよつと待ってて」と言い置いて倉庫に弓を返しに行く。その間に弓道着の裾を直して、小さく深呼吸をした。

なかなか上達しないことに焦っている。最初より少しはましになっていると思いたかったが、あまり進歩している実感はなかった。

独り、弓道場の真ん中で待っていると、しばらくして静が倉庫から戻ってくる。その手には、さっきまで持っていなかった細長い布袋のようなものが握られていた。弓を入れる布袋に似

ていたが、普通の三分の一くらいの長さしかない。きれいな桜色に染められた袋は、片端が鮮やかな朱色の紐で結ばれていた。

「この前、言っていたものよ」

静が布袋から微かに反った木の棒を取り出して、左手で水平に掲げる。そして、にこつとしながら後ろに一歩退がり、木の棒を持った左手をくると回して体の側面に持つてきた。途端に棒は上下に伸びて、弓の形に展開する。その一端に付いた輪から弦を引っ張り出して、反対側の端にひっかけると、一瞬にして目の前で小さな和弓が完成した。舞のようにも見える、淀みのない美しい動きだった。

「回転させながら糸を引く。練習すれば、一秒で展開できるわ」

弦ははずして、再び弓を回転させながら畳むと、静はそう言って弓をこつちに差し出した。いくら茫然としたまま弓を凝視していたが、「どうぞ」と促され、おそるおそる弓を手に取る。普通の弓よりも格段に軽くてしつかりした手触りは、木のようにも、合成樹脂のようにも感じられた。

「社が特別に作った折りたたみ式和弓——『弓月』よ」

静がそう告げるのを聞いて、反射的に「弓月？」と聞き返しながら顔を上げた。

「弓月がデザインしたの」静は弓を見つめながら言った。「完成したものを彼女は見ることに

できなかったけど——あなたが使ってくれたら、弓月も喜ぶと思うわ」

「でも——」

と、言いかけて黙った。手の中の弓の感触が温かくて、その先を言うことができなかった。たった数秒持っているだけで、すっかり手に馴染んだ気がしていた。

——これが終わったら、遊びにおいでよ。

弓月自身がもういないことを知っていても、弓月の言葉があつたから、意を決してここに来ることができた。その弓を握っていると、まるで弓月が歓迎してくれているような気がした。「よかったら、小松さんもやってみて」

そう言われて、ちよつとためらったが、静がじつと見守っているのので、数歩後ろに下がって弓を持ち直した。そして、さっきの静の真似をして、一気に弓を回転させる。

でも、何も起こらなかった。

「あれ？」

顔が赤くなるのを感じて、慌ててもう一度弓を回してみる。今度は弓が一瞬伸びかけたが、すぐにまた縮んでしまった。静の方を見ると、静は変わらず笑顔を浮かべていた。

「慣れるまで、ちよつとかかるかもしれないわね」

静が優しく言葉を添える。だいぶ顔が赤くなっているだろうと思つたが、なんとか気を取

り直して、力加減を変えながら弓を回してみた。弓は五回目ぐらいの挑戦でやっと伸びてくれたが、今度は弦の輪をひっぱるのに手こずる。なんとか弓の形ができ上がったのは、ずいぶん時間が経ってからだった。

自分の手際の悪さが心底恥ずかしくなつて、弓をさつきと畳もうとする。でも、それも同じくらい難しく、結局弓が元の形に戻った頃には、静の方を見ることもできなかった。

「私、ほんとに不器用で……ほかの人が持った方がいいと思います」

そう言つて、気まずい思いで弓を返そうとしたが、静はそれを受け取らなかった。それどころか、残つていた桜色の弓袋もこつちに差し出してくる。

「その弓は、あなたしか使えないわ」

言葉の意味が分からず、ただ静を見つめ返した。静は黙つて弓袋を持ったままでいる。仕方なく、袋を手にとると、絹のような滑らかな肌触りが指先を包み込んだ。

「なんで……私なんですか？」 手の中の弓袋に視線を落しながら静に聞いた。「私、まだまともに構えもできないのに」

「この弓、矢が付いてないでしょ」

静がぼつりとつぶやく。

「矢？」

聞き返すと、静は少し含みのあるような笑みを浮かべた。

「この弓は、矢も特殊なの。それはあとで渡すわ」

静はそれ以上説明しようとせず、出口の方へと歩き出す。弓袋に弓をしまいながら、慌ててそのあとを追つたが、袋の紐に弓がひっつかかつて、また手こずった。先を歩く静に追いつくと、その後ろ姿はいつも通り壮麗で、自分も背筋が伸びる思いがする。サダクラに向かうバスの中でも、同じ背中を見上げてそう思った。でも——だからこそ——ずっと気になつていることがあつた。

「静さん——」

静の背中に向かって呼びかけると、静が「うん？」と振り返つた。きれいな笑顔だつた。あの日、サダクラ製薬の四階で、朦朧<sup>もうちよう</sup>としていた時でさえ、静はきれいだった。

——高塚くんのお父さんが、会のことを……。

静がうわごとのようにつぶやいた言葉がよみがえる。そのことをずっと聞きたくて——ほかにもたくさんのことを聞きたくて——でも、それができないまま時間が過ぎて、弓ばかり引いていた。喉元まで言葉が出てきたが、静の笑顔に負けるように「なんでもないです」と、また胸の奥にそれをしまい込んだ。

「弓月さんにお礼……言えますか」

代わりにそう尋ねると、静は少し口ごもったが、どこかでそんなことを予期していたのか、やがて落ち着いた様子でうなずいた。

「上に位牌があるわ」

「上」がどこのことか分からなかったが、今まで入ったことのないところなのは確かだった。不安を感じながらも、『弓月』をしつかり握り締めて「行きたいです」と答えると、静が穏やかな声で答えた。

「弓月が喜ぶと思う」

一瞬覗いた哀しそうな表情に、唇を合わせる。でもすぐあとに、静はちょっと情けない顔になって、弓道着の上からお腹を押さえた。

「でも、先に食堂に寄っていてもいい？ おなかぺこぺこで——」邪気のない顔で、静が携帯の画面を向けてくる。「さつき生徒が写真送ってきたの。今日の定食のゴーヤチャンプルー。おいしそうですよ？」

一気に緊張感が緩んで、表示された料理の写真を見ながら、ちょっとだけ笑ってしまふ。確かに美味しそうだった。でもそれ以上に、やっぱり私、この人が好きだ——と思うのを止められなかった。

静はまた流れるような身のこなしで前へ向き直って、弓道場を出ていく。胸の中に残った

言葉は体の奥へ重たく沈み込んだが、それでも手の中の手が慰めてくれている気がした。私もゴーヤチャンプルーにしようかな——と考えながら、弓道着の裾を払って、喜多見も無人の道場をあとにした。

キコ、キコとペダルを漕ぐ度に、チェーンの軋む音がする。  
油差さなきや——。永児は漠然とそう思いながら、線路沿いを自転車で走り続けていた。上

空に貼り付いた大きな雲が、薄い影を地表に落としているおかげで、暑さはいくらかましだった。それでも雲を通り抜けた日の光が、レールや垣根の所々で眩しく反射している。

ダイニングテーブルで寝てしまったせいで、寝不足で体が重かった。前のカゴに入れたスイカ半玉も自転車の動きを狂わせていて、時々車体が大きくふらつく。ペダルがひっかかって、またキコッと鳴った。自転車の油はいつも父親が差していたから、どこにどのくらい差せばいいのかわからないまま、二年以上が経っていた。

道の先の方で踏切がカンカンカンと鳴り始める。レールの振動が徐々に大きくなつて、線路の向こうから電車がやつてくるのが見えた。自転車のスピードを落として、踏切のところに差し掛かると、そこに会社の制服を着た、中年の女性<sup>たなず</sup>が佇んでいた。

母さん——？

ふいにそう思つて、背筋を冷たい汗が伝う。強く握り込んだブレーキがキィツと耳障りな





音を立てた。

その音をかき消すように、電車が大きな音で真横を通過する。生温かい風が一緒に吹き抜けて、しばらくすると踏切の音が止まった。遮断機が斜めに上がり始め、女性は何事もなく線路を渡っていく。——その顔は、母親とは似ても似つかなかった。

掌が汗で濡れている。母親が同じように線路沿いに立っているところを想像すると、自転車のペダルを漕ぎ出せないほど体が強張った。ズボンのポケットに突っ込んだままの請求書もひどく重く感じられる。

「たかつかー」

突然名前を呼ぶ声が聞こえてきて、線路の向こう側を見た。

「たかつかー、こつちー」

ちょうど踏切の向こうで、裕美が手を振っていた。そのすぐ横には野球部のユニフォームを着た末岡がいる。裕美の方は学校の制服を着ていた。

「どうしたの？ 二人で」

珍しい組み合わせだと思いながら、裕美たちの方に向かって、自転車で踏切を渡り始めた。裕美がいつもの大らかな笑顔で答えてくれる。

「部活。学校で末岡と一緒にあったの」

「おつす」と、末岡が言った。見ると、着ているユニフォームは腰から下が土で汚れている。

「末つて、もう野球部引退したんじゃないの？」

二人の目の前まで来たところでブレーキをかけて、自転車にまたがったまま尋ねた。末岡はちよつと気まずそうな表情で、額を掻きながら視線を逸らす。

「新エースのデビュー戦だったんだよ。一応、見とこうかと思つて」

「見とくつて……」裕美がにやけた表情を浮かべて言う。「サヨナラホームラン打つてたじゃん」

「いや、あんまり不甲斐ないからさ、一年が」

そつぽを向きながら、早口で末岡が言い返した。五倉山中学の野球部は夏休みに入る直前、最後の公式戦で敗退していた。そのあと三年生は全員受験のために部活を引退したはずだったが、ずつと悔しがついていた末岡がそんなに簡単に身を退くとは、端から思っていなかった。「そう言えば高塚、あした、ほんとにだめなの？」裕美が何気なく自転車のハンドルに手をかけて聞く。「せつかくだからみんなで行きたいと思つてただけだ」

末岡も一歩自転車に近付いて、「穴井たち、ビキニ買うつつてたぞ」と耳元で言ってきた。本人は囁いたつもりのようだったが、裕美に丸聞こえの大きな声だった。

「えつと——」

なんと言つていいか分からず口ごもっていると、包帯をした右手のすぐ側に裕美の手があ



るのが目に入る。さりげなく右手を横にずらしながら、二人の顔を交互に見た。二人ともしばらく見ない間に、ずいぶん日に焼けていた。

「喜多見も来るってさっき返事あったよ」裕美が笑顔のままざらりとつぶやいた。「あとは高塚が来れば全員揃うんだけど、無理かな？　バーベキューとか、キャンプファイアーとか、きつと楽しいよ。帰りはちょうど八王子の花火大会だし」

「ごめん」無理に笑顔を作って言った。「行きたいけど、今、母さんがちよつと——」

裕美と末岡の顔から笑みが消えて、二人がちらつと視線を交わす。気まずい沈黙が落ちるのと同時に上空の雲が動いて、陽射しがまともに降り注いできた。後ろのタイヤが遮断機の線にかかっていたので、自転車を進めると、二人もそれに付き添うように後ろへ下がった。キコ、とチェーンがまた軋む。

「お母さんの具合ってだいぶ悪いの？」

急にまじめな顔で裕美が尋ねる。とつさにぐつと唾を飲み込んだ。横で末岡が裕美の制服の背中をひっぱって、こつそり「平本——」とつぶやくのが聞こえる。

「ごめん。私よく知らないから」裕美はそれでもまじめな顔を崩さずに続けた。「家族の人、誰か入院してるんだよね。それがお母さん？」

「よせつて」

もう一度、今度ははつきり聞こえる声で末岡が言った。ちよつと怒ったような口調だった。裕美が末岡の方を振り返る。末岡は何も言わずに唇を結んでいたが、裕美には伝わったようだった。裕美はこつちへ向き直って、少し視線を伏せながらつぶやいた。

「ごめん。いやな思いさせるつもりじゃなかったんだけど。心配で——」

その一言で、喉に熱いものがこみ上げてくる。秋山以外のみんなは知らないと思っていた。でも、だいたい分かっていて、その上で敢えて黙っててくれたんだ——と、初めて気が付いた。末岡は一度もそんな素振り（そぶ）を見せなかったから、絶対に知らないし、聞いていないのだと思っていた。

裕美がもう一度「ごめん」とつぶやく。それに被せるように首を振った。

「いいんだ。ぼくの方こそ、ごめん」裕美と末岡の目を見ることができず、自転車のハンドルを握り締めた。「ちゃんと言うべきだったんだけど、色々あって——」

アスファルトが白く見えるほど日の光に照らされていた。反射した熱が足元から立ち昇ってくる。その中で、裕美も末岡も汗を拭うことさえせず、黙ってこつちを見つめていた。

「入院してるのは姉さんなんだ。母さん、それでまいって……あんまり一人にしときたくないんだ」

手元に視線を逃がしながら言ったが、裕美の方は一瞬も目を逸らさなかった。ただ自転車

のハンドルに手をかけたまま、黙って聞いてくれていた。

「あんまり泳ぐのは得意じゃないし——」わざとそう付け足して、ペダルに再び足をかける。「だから、気にしないで楽しんできてよ」

末岡が微妙にうつむいていた。あまり見たことのないその表情が目に入ると、それ以上その場に留まっていられなかった。

「じゃあ、ちょっと用事あるから——」

それだけ言つて自転車を前に押すと、裕美がためらいがちにハンドルから手を放す。そのまま、二人から離れるように自転車を漕ぎ始めたが、数メートルも進まないうちに、裕美が背後から強い口調で聞いてきた。

「高塚は？ 高塚はだいじょうぶなの？」

意外な質問に、思わずブレーキをかけた。錆び付いた音と共に、カゴの中のスイカが揺れて、車体がわずかに傾く。振り向くと、裕美はいつものほんわかした顔とは打つて変わった、真剣な表情でこつちを見つめていた。——女子つてこんな顔ができるんだ、と思いながら、裕美の目を見つめ返した。

「ぼくは——」声に力が足りないことに気が付いて、途中から言い直した。「ぼくはだいじょうぶだよ」

それで再び前へ向き直つて、自転車のペダルを漕ぎ始めた。キコッキコツと錆びた音が鳴る。二人がこつちを見つめているのを感じたが、振り返ることなく線路に沿つて走り続けた。少しでも振り返ると気持ち崩れてしまいそうで、これでいいんだ、と自分にずっと言い聞かせていた。

姉さんはあの病室から一步も出られない。母さんもいつも暗い部屋で自分を責めている。ぼくはこうしてどこにだつて行けるのに、贅沢ぜいたくなことを考えちゃだめだ。

やつと後ろを振り返ることができたのは、道が大きく曲がつてからだつた。でも、その時にはもう裕美も末岡もとつくに見えなくなつて、降り注ぐ陽射しでできた垣根の影だけが、ずっと先まで伸びていた。

自転車階段の下に停めて、永児はスイカの入ったビニール袋を持って、昨日と同じ長い石の階段を上っていった。最後の方は足が重くなって、一回休まないと、峰の家までたどり着くことができなかった。

「ごめんください」

軽く息を乱しながら、峰の家の呼び鈴を押すと、奥の方からジリリリという音が聞こえてくる。そのまましばらく玄関先でスイカを片手に返事待ったが、家は静かなままだった。留守なのかな——と、思いつつ、玄関から一歩引いて、二階を見上げてみる。屋根越しに差し込んでくる日の照り返しがすごくて、反射的に右手で視界を庇<sup>かば</sup>った。と同時に、携帯がポケットの中で振動する。

開いてみると、『私も昨日、千年台で水着買った！』とトモちゃんからメールが届いていた。さつきから続々とメールが送られてきていて、トモちゃんのメールはちよつと前の愛実<sup>あいみ</sup>への返信で、愛実のメールはさらに前の秋山への返信だった。

『明日が楽しみ！』という件名に、行をはみ出すほどたくさんの返信マークが並んでいるの

を見て、その盛り上がりつぷりにちよつと笑ったが、同時に一抹の寂しさも感じた。でも、裕美が送ってくれた海の写真は本当にきれいだったから、みんながはしゃぐ気持ちは分かった。

そうしている間にも、また携帯が振動する。今度は裕美自身からのメールだった。しばらく電源を切っておこうかと思ったが、寸前で手を止める。病院や母さんから連絡があるとまずい。——そう思つて、メールの画面だけ閉じてから、携帯をズボンのポケットに落とした。再び上を見ると、抜けるような青空が、まるで逆さまになった海のようにだった。

もう一度呼び鈴を押してみる。スイカの入ったビニール袋がやけに重たく感じた。暑さと睡眠不足のせいで、体も重い。時々強い眠気が襲つてきて、気を抜くと立つたまま眠つてしまいそうだった。

「何やってるんだろう、ぼくは……」

空に向かつてつぶやきながら、もう帰るべきかと考えていると、ふいに玄関脇の物置沿いに積まれた、古い新聞紙や雑誌の山が目がいった。どれもひどく色褪せていたが、その一番上の記事に見覚えがあった。どこで見たんだろう、と思つて、すぐに気が付く。昨日、この家の洗面台の横に積んであったものだった。

奇妙な違和感を覚えて見ていると、ガチャッと音がして、玄関のドアが開く。続けて、エ

「プロンとほかむりを付けた姿で、峰のお母さんが土間に現れた。」

「ごめんなさい。裏にいたから気が付かなくて。剣也なら二階にいると思うけど」

掃除の途中らしいお母さんは、心なしか昨日より明るい顔をしていた。こんな暑い時に大掃除——？ と、ちよつと不思議に思いながらも、スイカの入ったビニール袋をお母さんの方に差し出す。

「これ、残りもので悪いんですけど、よかつたら——」

「あら」

お母さんはスイカを受け取ると、とても嬉しそうにビニール袋の中を覗き込んだ。その反応にまた苦いものがこみ上げてくる。マルサカのタイムセールが始まるのを待っている間、ずっと期待していた母親の反応だった。峰のお母さんは「ありがとう」とお礼を口にしたあと、あらためて尋ねた。

「何くんだったかしら——」

「高塚です」

「高塚くんね」

それと同時にドタドタと階段を下りてくる足音がして、お母さんの背後から峰が現れる。「高塚くんがスイカ持つてきてくれたわよ」

お母さんがそう言うと、峰は「分かったから」とだけ言つて、お母さんを押しのけるようにして玄関の土間に降りてくる。

「ちよつと外行こうや、高塚」

半ば無理矢理、峰に外へ連れ出されて、玄関のドアが閉まる。お母さんの姿が見えなくなると、即座に峰はいやな表情でこつちを睨んできた。ドンと肩を突かれて、軽く後ろによろめいたが、倒れるのだけは堪えた。

「なんでくんだよ」峰はドアの方を気にしながら抑えた声で言つた。「うぜえつて言つただろ」

「ごめん。スイカ持つてきただけだから。もう帰るよ」

そう返すと、峰の表情が固まる。そのまま、峰は探るような目付きでこつちを見ていたが、やがてあきれた様子で舌打ちと共につぶやいた。

「おまえつて、ほんと、わかんねえやつだよな」

峰は動いていないエアコンの室外機に腰を下ろして、暑そうに項垂れた。家の周囲は木陰がきれいに囲んでいたが、玄関の前だけはどの木の枝の影も届いていなくて、陽射しに曝されていた。すごい暑さの中、峰が斜めにこつちを見上げる。熱で頭がぼんやりするのを感じて、何も言わずに軒下に入り、峰の横に立つた。峰がもう一度舌打ちをするのが聞こえてくる。

東の間、気まづい沈黙が落ちた。でも敢えてそこに立つたまま、雄々しく張り詰めた楠木

の枝葉を見上げていた。葉っぱの間にキラキラ光る陽射しはきれいで、横に積まれた古い雑誌の山とは対照的だった。その雑誌の山の向こうにも、透明なビニール袋に入ったゴミがいくつも積まれている。袋のひとつには、女性ものの靴ばかりが入っていた。

「引越してもするの？」

峰にぼつりと聞いた。峰は怪訝な表情を浮かべたが、すぐにこっちの視線の先に気が付いて、ゴミの山に目をやりながら無関心に答えた。

「夜逃げでもすると思っただろ」

峰が横目でこっちを見る。その顔を見返すと、峰はしばらくしてから嘲笑うような声を出した。

「お袋が大掃除してるだけだよ。借金ならもういいんだ」峰が室外機の上にスニーカーごと片足を上げて、たいしたことでもなさそうに話した。「お袋がどつかの会社に頼んで、チャラにしてもらったらしい」

「そんなことできるの？」

驚いて聞き返すと、峰の表情が目に見えて曇る。でも、峰はそれを悟られたくないように、スニーカーに付いた泥を指先で落としながら言った。

「なんかあんだろ。知らねえよ」

「だって、変じゃない？」声が少し高くなるのを感じながら、どうしても新聞紙の山が気になって言った。「お母さん、なんか危ないことしようしてるんじゃないかな」

「関係ねえよ」

「関係ないって……家族だろ！」

思わず声が強く出た。同時に峰がシャツの胸倉をつかんできて、とっさに前につんのめる。「じゃあ、どうしろってんだよ！ 働けんのかよ、中学生が！」

峰と至近距離で目が合う。峰が本気で怒っているのが分かった。でも、それ以上に怖がっているような顔だった。――働けない。その通りだった。実際にアルバイトの情報サイトにいくつも登録しようとしたから間違いない。自分も峰も、社会では無力な年齢なのはよく分かっていた。

「おまえだって同情してるような顔して、優越感に浸りたいだけだろ？」峰の声は微かに震えていた。「おまえとか、クラスの連中とか、みんないい人面してむかつくんだよ。おまえら、世の中のことなんかなんにも知らないだけだ。だからそんなんでいられんだよ」

どうにか中腰の姿勢を保っていたが、さらに強くシャツをひっぱられて、倒れないように峰の肩口に片手を突いた。それでもまともに立っていられず、足元がぐらつくのを感じる。峰は一度変な笑い方をしたかと思うと、こっちの耳元に顔を寄せてきて、囁くように言った。

「末岡はキャプテンなんかやってるけどな、あいつ、一年の時に野球部の先輩殴って、退部しかけてんだぞ。先生と一緒にだって野球部がもみ消したから、記録に残ってないだけでさ」

耐え切れず、片方の膝が地面に突く。陽射しの中に土煙が軽く舞い上がった。

「秋山とか、二年の時はおれとつるんで万引きしてたの、知ってる？」  
また峰が笑いながら言った。でも、寂しそうな笑い方だった。自分でも語るのを止められなくなっている感じがした。

「相沢もちやらい大学生の男と歩いてんの見たぞ。あれ絶対やりまくってるよな。援交かもしれねーし。あいつの家、母親が浮気してんのばれてぶっ壊れてるから、不思議じゃねーけどな」  
ポケットの中でまた携帯が振動する。それを左手で押さえた。そうしないと、この会話がみんなに伝わってしまう気がした。峰はそれでもまだ話し続ける。

「穴井なんて女王様面してるけどな、二年の時に同じクラスの女子にハブられて——」  
「やめろ！」

そう言って、足に力を入れ、峰に胸倉をつかまれたまま立ち上がった。今度は峰の方がひっぱられて体勢を崩し、室外機から落ちかける。その峰の胸元をつかみ返して、大声で怒鳴った。  
「それ以上言うな！」

覗き込んだ峰の目がちよつと驚いていた。峰が口をつぐむと、代わりに携帯がブーッと音

を立ててポケットの中で振動する。その微かな音が、はつきり辺りに響き渡った。しばらく振動音に耳を傾けたまま、お互いのシャツをつかみ合っていると、峰が先に力を緩める。

「おまえだつて人に言えないことぐらいあんだろ？」急に落ち着いた声で峰がつぶやいた。「そんなもんだろ、人間なんて。最終的にはみんな他人なんだよ」

大きな雲が上空を横切つて、一帯が急に影に覆われる。峰の顔を見たまま、何も言えなかった。自分も胸元をつかんでいる手を放して、気まずい空気の中、一步距離を取る。

足元に落ちた涼しさで、日を完全に遮った分厚い雲が頭上を移動していくのが分かる。地面が動いているように、薄い影が二人の下を流れていた。峰が面倒臭そうに息をついて、室外機に座り直す。

「昨日、峰のお母さんがスイカおいしそうって言ってたから——」そう話かけると、峰は黙ってうつむいたが、構わずに続けた。「母さんが食べられなかった分、もったいないと思って持ってきただけなんだ。気を悪くさせたら、ごめん」

それだけ言い終わると軒下を出て、階段の方へと戻り始めた。そうしながらも、さつき峰が言っていた末岡や秋山の「秘密」が頭から離れなくて、ぐつと奥歯を噛み締める。それを聞いて、いくらか動揺している自分が情けなくて、悔しかった。

「ぼくは好きだよ」せめてその場に立ち止まって、峰の方を見ることなく言った。「うちのク

ラス。六組でよかったと思ってる」

自分の口から出た言葉を、ゆっくり自分で受け止めた。それから再び立ち去ろうとすると、急に峰がぼつりと言う。

「そんなマジになんなよ。嘘だよ。さっきの全部、嘘だつて」

せいっぱいフォローするような口調だった。振り返ると、室外機の上でうつむいている峰の姿が目に入る。——いつも冷たい視線を交わすだけでも、毎日一緒に机を並べて、顔を合わせているクラスの一人には違いなかった。まだ峰のシャツをつかんでいた感触が手に残っている。それだけでも、この広い空の下では十分なつながりに思えた。

「もうくんよ」

峰が室外機から降りながら、あくまでこつちを見ずに言った。その声には張りがなく、代わりにいつもどこか違う、穏やかな空気を含んでいた。

「こんなとこ来てもいいことねえから。秋山とでも遊んどけ」

峰は苦笑いのようなものを浮かべながら、ほんのちよつと顔を上げて「スイカ、ごちな」と付け加えた。そして、スニーカーの裏を地面の砂地にこすりつけて、玄関のドアを開けて入っていく。

ドアが閉まる音を聞きながら階段を下り始めると、上つてきた時よりも階段が長く感じら

れた。体はさらに重たく、足は鉛でできているようだった。

「何してるんだろ……」

また独りでつぶやいて、無意識にポケットの中の携帯を触った。いつの間にか、振動が止まっている。メールのやり取りが一通り終わったのだろう。

——高塚はだいじょうぶなの？

裕美の声が耳の奥で聞こえてくる。

分からなかった。

本当によく分からなかった。



一回重たく軋んだあと、エレベーターの扉が左右に開くと、階数表示ランプにはない「十四階」に喜多見は足を踏み出した。同時にビルの中とは思えない、和風の旅館のような光景が目の前に広がって、すっかり言葉を失う。玄關脇の小部屋から小学生ほどの身長しかいないおじさんが現れて、深々とお辞儀をしながらスリッパを用意してくれたが、おじさんに礼を返すことさえできなかった。

「この人たちはみんな『会』の一員なんですか」

あとからエレベーターを降りてきた静にぼつりと尋ねる。静は下足番のおじさんの方を見て、目で何か合図を交わした。そのあとで、いつもの優しい口調で答える。

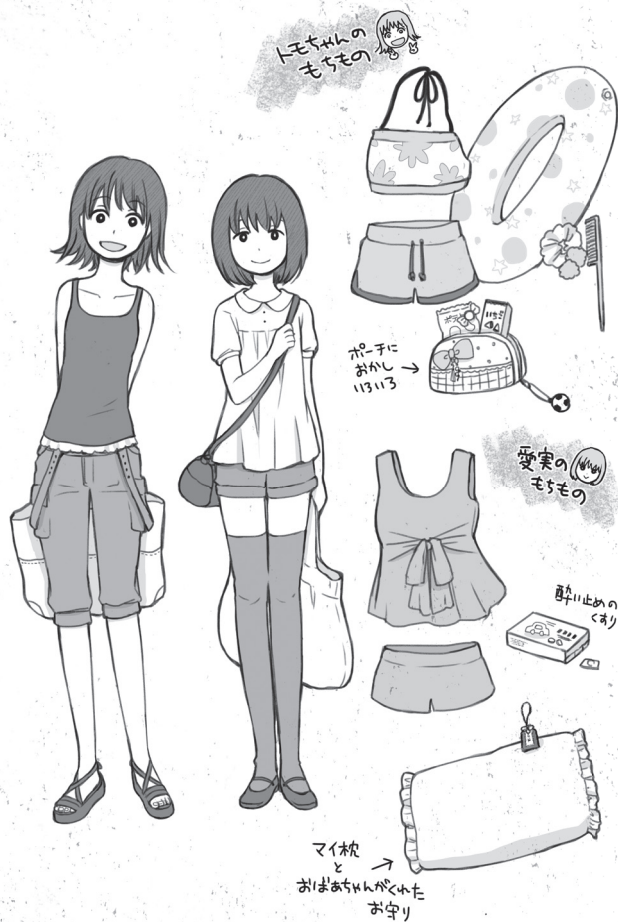
「一般の人は出入りできないから、そう思ってもらって間違いないわ」

「……入っていいんですか？」

尋ねる声が少し震えた。ちょうどその瞬間、背後でエレベーターの扉が重い音を立てて閉まった。エレベーターは扉の向こうで、低音を響かせながらゆっくり下の階へと降りていく。

「弓月が遊びにおいでって言ったんでしょ？」

13





静はそう言いながら雪駄せつたを脱ぎ、廊下の床板上がった。その雪駄を、すかさず下足番のおじさんが拾う。

まだ弓道着姿の静と違って、自分の方は更衣室ですでに私服に着替えていた。足元もいつもの靴で、それを脱ぐと、すぐに下足番のおじさんが素早い動きで回収にくる。丁寧に靴を揃えたものの、あらためて見ると履き古したストラップシューズはずいぶん形が崩れていた。おじさんが拾い上げる前に、急いで靴を取り上げ、弓袋と一緒に抱え込む。

「自分でできますから——」

そう告げると、下足番のおじさんはちよつと驚いた顔をして、斜視の目で笑顔を作った。

「遠慮なさらずに」

そう言つて、おじさんはそつと手を差し出して、気が付くと懷から靴を抜き取つていた。決して速い動きではないのに、一瞬で奪われた感じだった。慌てておじさんに頭を下げる。

「す、すみません——」

小部屋に戻りかけたおじさんが振り返つて、じつとこつちを見た。静は廊下を進み始めていたが、その視線に囚われたように、しばらくその場で固まつていた。やがて、おじさんは最初と同じように深いお辞儀をしてから、囁くような声で言つた。

「あなたは優しい子だ。そして、お強い」

それだけ告げると、おじさんは隣の小部屋へと消える。その背中を暫し見送つてから、やつと静のあとを追つて廊下を歩き出した。ふと見ると、廊下の壁には、一輪挿しの花と短歌が飾られている。足早にその前を通り過ぎながら、流れるような筆文字で書かれた歌を目で追つた。

『白雲の 流れ消えゆく その果てに

ゆめも見ずただ 空は広がる』

きれいな歌だった。作者の名前は添えられていなかったが、なんとなく静のものだという気がした。同じ「くも」でも、あの詩の「くも」とは全然違う——そう思うと、借りた本の一節が、被るようによみがえつてくる。

スノウドロップの蜘蛛、泡の如き花、

そして紙風かみたこさながらに抱えられた屍しかばねの白い羽根

何があの花を白たらしめたのか？

昨日の夜、寝る前に何度も読み返したので、ほとんど暗唱できるまでになつていたが、意味を理解できていかどうかは自信がなかった。でも、道端の白い花に留まつた白い蜘蛛が、同じ白色の蛾を捕らえている映像は、鮮烈に頭の奥に焼き付いていた。

――ぼくはあの中の白い蜘蛛だよ。

白髪の少年の声がまた聞こえてくる。静は確か「拇つま」と呼んでいた。その少年のことも静に聞きたかったが、あの夜の話は些細なことでも口に出すのが憚はばられた。白い雲と、白い花のイメージが意識の中をゆっくり広がっていく。そうして静の背中を見ながら歩いていると、視線に気が付いたように、静が肩越しに振り返った。

「そう言えば、高塚くんは知ってるの？ あなたがここに来ていること」

突然の言葉に、足取りが軽くもつれた。なんでもない質問に思えたが、初めて訪れたこの場所で聞かれると、答えるのに一瞬ためらう。長い廊下には逃げられそうなおドアも窓もなかったし、後ろのエレベーターは自力で開けられそうもない。とつさに嘘をつくことを考えたが、気が付くともう答えていた。

「……言つてないです」

永兎だけじゃない。ここに来ていることは、自分以外、誰も知らなかった。「心配させたくなかったから？」

静が肩越しの笑みを深めて聞く。それには何も答えずに、ただ歩き続けた。そのうちに、廊下の突き当たりにとどり着いた静が、土壁の一部に手を当てる。すると、風景に馴染まない青い光が壁の一部から洩れ出して、スキャンするように静の掌をなぞつた。数秒後、壁の内側で何かがはずれる音がして、静が土壁に模した扉かぎを押して開ける。

奥は襖ふすまが並んだ細い廊下になつていた。ほんの少し躊躇ちゅうちよして、弓袋を握り締めながらエレベーターの方を振り返っていると、静が「取つて喰くつたりしないわ」と苦笑いで促うながしてくる。それでやつと扉の内側へ足を踏み入れた。よほど防音が優すぐれているのか、下の階にいた時には聞こえていた外の音が、ここでは一切聞こえなかった。市立図書館の地下のような静けさが周囲に満ちていた。

足元の細い床板の左右には、苔こけむした小さな石や、きれいな色の砂利じやりが敷かれていて、一瞬、自分が都会の真ん中のビルにいることを完全に忘れてしまう。何もかもが本音かどうかわからない、奇妙な世界だった。

いくつかの襖を通り過ぎて、床近くまである黒い暖簾をくぐると、微かにお香の匂いが漂い始める。廊下も黒い漆色の材質に変わって、すぐと同じ材質でできた存在感のある引き戸が現れた。戸には見たことのない赤いマークが刻まれている。静がその引き戸を開くと、お香の匂いが一気に強くなった。

静は何も言わずに暗い部屋の中へと入っていく。ついその場で足を止めたが、もうためらっていないも仕方がなかった。唾を飲み込んであとに続くと、中に電灯らしきものはなく、薄い暗がりに包まれる。でも、すぐに部屋の奥に視線を奪われて、息を止めた。蛾燭の仄暗い明かりに照らされて、壁一面に取り付けられた白木の棚がそこにあった。階段状の棚には小さな木像が蛾燭と共に無数に並べられ、中央にある数体の前には香炉が置かれている。そこに供えられた線香から細い煙が立ち昇って、暗い部屋の中に雲散していた。

声が洩れないように手で口を押さえて、数歩、棚まで近付くと、蛾燭の緩やかな明かりに助けられて、香炉の近くにある十数体の像がはつきりと見える。像はすべて違う顔をしていた。

「みんな……駒なんですか」

囁くと、静は「そうよ」と低い声で答えた。はつきりとした数は分からなかったが、棚には五十体以上もの像があるように見えた。その大半は黒ずんだ色になっていたが、それだけに中央にある真つ白の像たちが、痛々しく暗闇に浮かび上がっていた。

駒の仕事は人を守ること——サダクラのロビーで聞いた静の言葉を思い出した。その言葉を噛み締めているうちに、一体の像が目飛び込んできて、動けなくなる。新しい像の真ん中に並んだ、細身の像。その像の顔に見覚えがあった。

「弓月さん——」

抑え切れず、声が洩れた。手の中の弓袋を握り締めて、弓月によく似たその像を見つめ続けることしかできなかった。よく見ると、その横の像の顔も知っている。背中に竹刀のようなものを背負った像。ほかにもいくつか見覚えのある顔が並んでいた。——みんな、あそこで亡くなった人たちだった。

強く弓袋を握り締めたままで、必死に涙を堪えたが、無理だった。弓月があの時、自分を安心させるために話してくれた言葉が頭の中で響いて、それが辛くて仕方がなかった。

——あたしも普段は当たり前に大学行ってるよ。美大で油彩とかやってんだ。

希望に溢れた口調で弓月が言っていたのを、今でもまざまざと思い出せた。もつと話したかった。いろんなことをいっぱい話せそうな人だった。それなのに、この小さな像以外、何も残っていないなんてあんまりだった。床に両膝を突いて、手を合わせようとしたが、指先が震えてなかなかそれができなかった。それでも弓袋を膝に横たえ、無理矢理手を合わせて、目を閉じた。

涙が頬を伝うのが分かったが、そのまま頭を下げて、ただ祈っていた。それが正しいやり方かどうか分からなかったが、いつも両親の墓にやっているように、ひたすら心の中で小さな像に語りかけた。

目を開けた時には、すぐ側に静が立っていた。だいたい暗さに目が慣れてきて、静の頬にあ

る涙の跡も見える。自分の頬も掌で確かめたが、涙は止まっていた。

「ありがとう、小松さん」

静がそつとつぶやく。

「私——」と、言いかげながら弓袋を持ち直し、ゆつくり床から立ち上がる。しかし、続きを言うことができる前に、いきなり部屋の扉が開いて、小柄な人影が戸口に現れた。

「——小松喜多見か？」

そう鋭く尋ねた人影を見て、静が「山田——？」とつぶやく。同い年くらいの少年かと思っただが、よく見るとショートカットの女の人だった。山田と呼ばれた女性性は、扉を開けたままでこつちへ近付いてくる。浅黒く焼けた肌が廊下の光でぼんやりと浮かんで見えた。——次の瞬間、いきなり頬を力いっぱいひっぱたかれる。

バシンという音と、頬に走った痛みに茫然としてみると、山田がもう一度手を上げる。しかし、その手が振り下ろされる前に、静が二人の間に割って入った。

「やめなさい！」

静の強い声が耳の奥に何重にも響いた。鼓膜が揺さぶられて、音が頭蓋の内側を跳ね回る。

「なんで、こいつがここにいるんだ！」

叫ぶ山田を制して静が何か言ったが、山田の声しか聞き取れなかった。微かに頬の内側に

血の味がして、叩かれた箇所には左手を添えると、頬は熱くなっていた。

「おまえのせいで弓月たちは死んだんだ！」

いろんな音が混ざる中、山田の声が耳を貫いてくる。耳に一度強い痛みが走って、栓が抜けるような音と共に、周囲の音が急にはっきり聞こえるようになった。同時に、奇妙に我に返る感覚を覚えて立ち尽くす。

「あなたは弓月に代わって、小松さんを守る義務があるでしょ！」

「こんなやつに守る価値なんかあるか！」

静と山田が怒鳴り合っていた。まだ頬はジンジンとしていて、目の前で起きていることがすべて遠くに見える。

「これは命令よ。——山田」

部屋を出ていこうとする山田に向かって、静が告げた。山田は立ち止まり、振り返って焼け付くような目でこつちを睨んでくる。怒りのこもった視線だったが、怖いとは思わなかった。それよりも、その目はどこか弓月を思い出させた。きつと年も弓月と同じくらい。しゃべり方も少し似ている気がした。

結局何も言わずに、山田は扉を開けっ放しにして、部屋を出ていった。小柄な割に重たい足音が廊下を遠ざかっていって、やがて聞こえなくなる。静が扉を閉めようとしたが、なん

となくそこで力が抜けたように手を止めた。

「ごめんなさい、小松さん」静が力なく言った。「山田と弓月は幼なじみで——。あんなこと……すると思っただけなの」

静に向かって小さく首を横に振った。痛みの名残で、キンという音が耳の奥で鳴る。その不快な音が徐々に痺れに変わっていった。——こんな痛みも、生きてるから感じるんだ。そう思いながら、手の中の桜色の弓袋に視線を落とした。

「本当に私が持つていいんですか。これ——」

弓の重みを感じながらそうつぶやくと、戸口に立っている静がこつちを見る。

「言っただでしょ」静の声が少し疲れていた。「それはあなたしか持てないものよ」

眉をひそめて、袋の上から弓をしつかりつかむと、弓が応えるように手の形に反る。その弓の温かさに少しの勇気をもらって、視界の外にいる静に思いきって尋ねた。

「私……静さんを信じてもいいんですか」

戸口に視線を向けると、静の背中から廊下からの光を浴びてシルエットになっていた。その足元で、弓道着の白い布がわずかに透けている。

「信じられなくなったら、その弓を私に向けたらいいわ」

さらりとした口調で静が言った。そして、暗い部屋から明るい廊下へと一歩踏み出しながら、

招くようにこつちに微笑んだ。

「付いてきて。矢を渡すわ」

容赦なく襲ってくる眠気と戦いながら、永児は長い階段を一段ずつ下りていた。その途中で一瞬立ち止まって、目を細める。――下の方から、やたらと派手な服装の男性が二人、階段を上ってきていた。こんな平凡な住宅地に似合わないその二人組は、見た目は二十代と三十代くらいで、つやつやした生地シャツに、大きすぎるアクセサリを身に着けていた。

三十代の男の耳の辺りで、何かが眩しく太陽を反射する。その光にくらつとなつて、思わず手すりをつかんだ。そのまま左手で錆びた手すりを伝いながら、足取り重く階段を下り続けると、男二人がやつとこちに気付く。でも、どちらもまるで避ける様子なく、階段の幅いっぱいには広がって上がってきた。仕方なく、手すりに背中をくっつけて道を譲ると、三十代の男の袖口が体をかすっていく。強い香水の匂いと共に、男の耳の辺りで光るもののはつきり見えて、それがピアスにはめ込まれた宝石だと気が付いた。

「――八王子は日曜日、花火だろ」

三十代の男が擦れ違い様、そう言うのが聞こえた。二十代の男が「駅は激混みでしょうね」と返して、さらに階段を上っていく。入れ違いに階段の中腹まで下りてから、小さな稲荷社<sup>いなりやしろ</sup>

の前で足を止めた。後ろを振り返ると、男たちはまだ階段を上っている。でも、もう上には峰の家しかなかった。

さつき会った峰の母親の顔が頭に浮かんで、そのどこか達観したような表情に、不安がこみ上げてくるのを感じる。きつと考えすぎだと思ったが、それでも男たちが峰の家の方へ姿を消すまでは、その場でじつと男たちの背中を見守っていた。

体が重くて、あまり頭が回らなかった。お姉さんが風俗で働いていると言っていたから、その関係者なのかもしれない。――どのみち、自分にできることなんて、何もなかった。

陽射しを遮っていた雲は完全に頭上を通り過ぎて、古いコンクリートの階段は、眩しいほどの光を浴びている。ところどころ、コンクリートの割れ目から雑草が緑の葉を覗かせて、端の方では長く伸びたツタが階段の隙間を突き破っていた。

暑さでいよいよ頭がぼんやりしてきて、どこかで休まないと――と思いながら、周りを見回した。すると、階段から一步入ったところにある稲荷の木陰が目に残まる。朱色の神殿からは微かに線香の匂いが漂っていた。しばらく手すりを握って呼吸を整えたあと、そっくへ向かおうとすると、急に後ろでガサツと音がする。直後に、背後から首筋にびたつと何かが当てられた。

「動くな」

女の子の声だった。手すりを持ったまま、ゆつくり首元を見ると、折りたたみ式の傘が喉に当てられていた。ガラス片を握る手を緩めて、ほっと息をつく。途端に不満そうな様子で、後ろからアズミがひよいと覗き込んできた。

「だめだよ、高塚。そんなんじや殺されちゃうよ。もつと周りに注意しないと！」

赤い頬を大きく膨らませているアズミの方を見る。久しぶりに見たアズミの顔は相変わらず子供供つぽくて、大きな目が潤んだように光を湛<sub>たた</sub>えていた。その表情に思わず力が抜ける。

「なんでこんなところにいるの？」

アズミが好奇心いっぱいの声で聞いてきた。

「この上に友達に住んでるんだ」

反射的にそう答えて、自分でちよつと意外に思った。しかし、そのことを考えているうちに、ぐらつとまた視界が歪む。とつさに手すりをつかみ直して、慌ててアズミに言った。

「座つてもいい？」

アズミはちよつと驚いたように「え？ あ、うん」と言いながら、折りたたみ傘を喉元から引いた。そのまま気まずそうに佇むアズミの前を通つて、鳥居の真下の段差に腰を下ろす。稲荷の上にそびえ立つ大きな楠木が辺りに広い木陰を作っていて、その中に入ると、驚くほど涼しかった。

「ぼーつとしすぎだよ。私だったからいいようなもんだけど」

アズミが近くまで寄つてきてそう告げる。折りたたみ傘を後ろ手に持ち直したアズミは、大きな麦わら帽子にショートパンツ姿で、いかにも夏休みを満喫している格好だった。

「米原さんもぼくを殺そうとしてなかったっけ？」

「そうだけど——夏休みだし——」

どこか言い訳がましくつぶやくアズミを横目に、横のブロック塀にもたれかかる。コンクリートの冷たさがこめかみに気持ちよかった。稲荷の後ろの林からもわずかに風が流れてきて、表面の汗がゆつくり乾き始める。楠木の重い影が陽射しを完全に遮つて、眠気がどんどん強くなってきた。

「高塚、なんか変だよ。どうしたの？」

その心配そうな声で、早くも眠りかけていたことに気が付いて、どうにか体を起こす。

「だいじょうぶ。ちよつと疲れてるだけ——」

そう答えながらも、体からまた力が抜けて、眠気に呑み込まれていく。木の葉の擦れ合う音が、遠くから聞こえる潮騒に似て、裕美が送ってくれた写真の風景が頭をいっぱいにした。

——高塚はだいじょうぶなの？

「だいじょうぶだよ」



そう目を閉じながら答えた。誰に答えたのかは、よく分からなかった。「寝ちゃだめだって」困ったようなアズミの声が遠くから聞こえてくる。「武器持つてる敵が目の前にいるんだよ。刺されてもしらないよ」

ちよつとだけ笑った。意識はどんどん深い眠りへと落ちていたが、近くにアズミがいる気配はずつと感じていた。不安に思わないといけないのに、むしろ安心感があつた。

「高塚、あのさ——」

あらたまつた声でアズミが何か言いかけていた。でも、声はますます遠くなつていく。

「もしかして蜘蛛つて人、知らな——」

アズミがそこまで言つたところで、永児は小さく寝息を立て始めた。アズミは途中で言葉のを止めて、「高塚？」と、もう一度呼びかける。その時にはもう、永児は完全に眠つていた。

しばらくの間、手の中の折りたたみ傘をいじりながら、アズミは黙つて永児の寝顔を見つめていた。空を動いている雲も、蜃気楼を起こすほどの陽射しも、木陰を作る大きな楠木も、夏の風景の中に佇む二人を静かに見守っていた。上空の青空を割るように、きれいな飛行機雲が横切っていく。

わずかに傾きかけた太陽が、永児の顔に光の筋を一本だけ落としていた。アズミは小さく息をつくつと、折りたたみ傘を開いて、守るようにそれを永児の頭上にそつとかざした。

峰の母親は右手を胸の前で握り締めたまま、食卓に置かれた一枚の紙切れをじつと見つめていた。台所の窓から陽射しが入つてきて、食卓の上のビニールマットに降り注いでいる。外では蟬がやかましく鳴いているはずだったが、その鳴き声はほとんど耳に入つてこなかった。家の中はとても静かに思えた。ただ、握つた右手だけが微かに震えていた。

喉にずっと固いものが詰まっていて、飲み込むことができなかった。クーラーのない暑い台所においても、汗は乾いている。

食卓の向こう側には男が二人座つていた。その後ろの壁に、ずいぶん昔に貼つた写真が見えている。幼い時の凜と剣也の写真。今ではすっかり色褪せて、そんな笑顔を二人が最後に見せてくれたのがいつだったか、思い出せなくなつていた。——あの笑顔を二人に返せるのなら、惜しいものなんて何もない。

「暑いんだよね」ピアスをした西野という男が言つた。「早くしてもらえませんか？ おれたちも次の仕事があるんで」

西野の耳元で大ぶりのピアスが光を反射する。それを見て、無理に唾を飲み込んだ。そして、

男二人に向かつて、確かめるように尋ねた。

「お金は……お金が振り込まれたのは、確認させてもらえるんですか」

沢田というもう一人の男が事務的な声で答える。

「ちゃんと直前にお見せしますよ」

それにうなずいて、もう一度剣也が生まれた頃から住んでいる家の中を見回した。こんなに古くて寂れた家なのに、真夏の光の中では、それがとても愛おしく感じられた。この家のあつちこつちに子供たちとの思い出が染み付いている。壁のへこみや、柱の傷。どれひとつ取ってもよく覚えていた。——これからもずっとここに居て、子供たちの帰りを待とう。たとえ、子供たちにはもう気が付いてもらえなくても。

「いい話だと思ふけどね」西野が自分の髪の毛をいじりながら言つた。「もちろん、ほかに選択肢があればいいけど」

それを聞いて、握り込んでいた右手を開き、判子<sup>はんこ</sup>を指先に取つた。それでも手の震えは押さえられなかった。だから、無理矢理もう一方の手を添えて、深々と二人に頭を下げる。

「どうか、よろしくお願いします」

そう言つて、書類に判子をついた。

とてもきれいな——哀しいほどきれいな、夏の夕方だった。

16

夜の七時を回つても、まだ空はわずかに明るかった。

永児はスーパリーの袋を片手に、玄関のドアを押して開けた。思つたより長く稲荷で眠っていたみたいで、起きた時にはアズミの姿はなく、代わりにイチゴ模様のハンカチが頭の上を覆っていた。もともと水に浸されていたらしく、ハンカチは乾いてしわしわになっていた。おかげで体はだいぶ楽になっていたが、全身の気怠<sup>けだる</sup>さは取れていなかった。

スーパリーの袋を上がり口に置いて、靴を脱ごうとしていると、後ろでボタンと玄関のドアが閉まる。家の中は静かで、廊下の方に目をやると、居間のドアの下からだけ、微かに明かりが洩れていた。それ以外は台所も、廊下も、階段も真つ暗だった。——自分は帰り道に特売のサンドイッチを食べていたが、母親はまだ何も食べていないはずだ。お弁当を持っていかなきゃ、と思つたが、なぜか今日は真つ暗な廊下を進んでいく気になれず、玄関に力なく座り込んだ。

さつき脱いだ靴が、土間にバラバラに散らばっている。以前はどんな形で脱ぎ捨てても、次に玄関を出る時には靴はきちんと揃っていた。——でも、今は脱ぎ捨てた靴をこの形のま

ま、きつともう一回履くことになる。片方が裏返しになった靴をしばらく眺めたあと、それを拾い上げ、きちんと揃えて置き直した。それだけ終えると、玄関の脇の壁にもたれかかって、唯一点いている玄関の明かりを見上げた。

弱々しい光を放つ、白いプラスチック製の電灯の内側には、光に吸い寄せられた小さな虫の死骸が何匹か溜まっている。中には蛾の羽のようなものもあった。——どうやって入ったんだろう、と思いつながら、電灯を見上げてみると、たまたま寂しくなってくる。

誰かと話したかった。でも、みんなが合宿の話題で盛り上がっている時に、ほかのことでメーラルをする気にはなれなかった。——もしかしたら、それが理由で峰のところへ行ったのかもしれない。そう思った拍子に、峰の声が勝ち誇ったように頭の中に響く。

——同情してやるような顔して、優越感に浸りたいだけだろう？

そうなのかもしれない。そうじゃないと思いたかったけれど、自信がなかった。

無性に誰かの声が聞きたくなつて携帯を取り出し、アドレス帳から「千原行人」の番号を呼び出して、通話ボタンを押す。——会長に嫌味のひとつも言われれば、きつと少しは気分がましになる気がした。

でも、電話は一回の呼び出し音もなく、すぐに『この電話番号は現在……』というアナウンスに切り替わる。ぐつと下唇を噛んで、もう一回会長の番号を選び直したが、やはり同じ

結果だった。それでもリダイヤルを繰り返して、五回目にスピーカーからアナウンスが流れるのを聞くと、電話を持った手をそのまま膝の上に下ろす。

「……どこ行っちゃったんだよ……」

そうつぶやいて、ゆっくり後頭部を壁に付けると、斜め上に飾られた父親の写真が目に入った。写真の中の父親の笑顔は四角いフレームに収まったまま、何も答えてはくれなかった。相変わらず天井に付いた菱形の弱い電気だけが辺りを照らしていた。

「父さんは……もう何もできないもんね」

そう言って、一回目を閉じた。どこか体の奥にまだ少しは力が残っていると信じて、それを探した。やっと目を開くと、お弁当の入ったビニール袋が床に置きつ放しになっている。小さく息をついて体を起こし、ビニール袋を取って立ち上がった。そして、電気のスイッチを点けて歩き出そうとしたその時、急に居間のドアが内側から開いた。

「母さん——？」

驚いて、開いたドアに向かって尋ねると、部屋着の上にカーディガンを羽織った母親が、戸口の陰から現れた。その表情からだけでは調子がいいのか悪いのか、よく分からなかった。「どうしたの？」

不安を感じながらそう聞くと、母親はこつちを見つめたあと、口を開いた。

「末岡くんからさつき電話があつたわよ」

「――末から？」

なぜ携帯の方にかけてこなかったのか、不思議に思いながら聞き返す。すると、母親が少し微笑んで言った。

「自分が代わりにうちに泊まるから、永児をあした海に行かせてやつてくれって」

スーパ―の袋を握り締めて、廊下の真ん中に立ち尽くした。母親の背後からクーラーの冷気が廊下へ流れ出して、足元を通過していく。

「そのあと、入れ替わりに山崎くんからも電話があつて、末岡が行かないと盛り上がらないから、留守番は自分がするって」

母親が静かな口調でそう付け加えると、完全に言葉を失った。今日の昼、踏切のところでした話した末岡と裕美の顔が頭に浮かぶ。自分が去つたあと、二人は何を話したのだろう。――さつきメールが途絶えていた間、どんな話が交わされていたのだろう。

「ほんとにいい友達ね。あの子たち」

母親が優しい声でつぶやいた。笑みを湛えたその母親の顔を見上げていると、目の縁に涙が一滴、溜まっていく。なんとか我慢しようと思つたが、できなかった。母親が気が付かないことを祈るしかなかった。

「氣を使わせてばかりでごめんね。母さんなら心配ないから、みんなと一緒に行ってきなさい」  
久しぶりの母親らしい声が嬉しかった。でも、それだけで十分だった。さすがに末岡や山崎に留守番をしてもらうわけにはいかなかった。

「大丈夫だよ。ぼくは――」

そう言いかけたのを母親が遮る。

「明日の夜、病院に泊まることにしたの」

それでまた言葉を失う。そう言えば、母親の肩越しに見える居間はいつもより片付いていて、ソファの端には中身の詰まったトートバッグが置いてあつた。

「たまには沙希の側にいてやりたいし」母親はどこかにはかんだ様子で、穏やかに続ける。「それなら永児も心配しないですよ」

答えに窮<sup>きやう</sup>して黙っていると、母親はもう決まつたことのように言い切つた。

「末岡くんや山崎くんには、永児も参加するって伝えといたから。明日の朝八時に学校に集合だつて。だから、仕度して今日は早く寝なさい」

「でも――」

何か言おうとしたが、言葉が出てこなかった。黙つてうつむくことしかできずにいると、母親に「ほら」と促されて、茫然としたまま廊下を進み、弁当の入つたビニール袋を母親に

手渡した。

「これ。無理して食べなくていいからね」

その言葉に、母親が申し訳なきそうに視線を落とす。

「昨日のスイカ、ごめんね。どうしても食欲がなくて……わざわざ買ってきてくれたんでしょ？」

「いいんだよ」また目が潤んでくるのが分かって、急いで階段の方へ向かった。「でも、今日はできたらベッドで寝てね」

母親がうなずくのを確認してから、一気に階段を駆け上った。ペランダに続く掃き出し窓から月明かりが差し込んでいて、澄んだ光が廊下の床や壁を照らしている。二階の手すりをつかんで、自分の部屋の前に出ると同時に、その場で立ち止まって目を閉じた。目の奥に溜まっていた涙が温かかった。

——高塚はだいじょうぶなの？

耳元に裕美の声が響く。

手すりを持ったままで、床の上に膝を突いた。涙がどんどんこぼれ落ちてきて、それを拭うこともできず、一階に聞こえないようにだけ気を付けて、何度もしゃくり上げた。

手の中の携帯が振動する。一度じゃなく、二度、三度とその振動は繰り返された。滲んだ

目で液晶を見ると、裕美、愛実、山崎、それに秋山から一斉にメールが届いていた。どれもたいしたことは書いていなかった。『明日遅れないでね』とか、『お菓子持つてく』とか、いつもの他愛ないメールだった。秋山のメールに至っては、鼻の穴を見せて笑っている写真が一枚、添付されているだけだった。

携帯を両手で握り締めて、廊下に完全に座り込んだ。その間にも手の中で携帯は震え続ける。秋山に対抗して、山崎が鼻に鉛筆を刺している写真と、末岡が自分の胸をもんで悶えている写真が次々に届いて、それに猛烈に抗議する女子たちのメールがすぐに続いた。泣きながら吹き出してしまって、自分の涙に咳き込んだ。苦しくて、おかしくて、また涙が出てくる。一人でそこに座っていても、携帯が震える度に、みんなの存在を近くに感じた。

みんながいれば、どこだってそこが六組だった。

「先生！ 先生そこ！ そこ右に曲がって！」

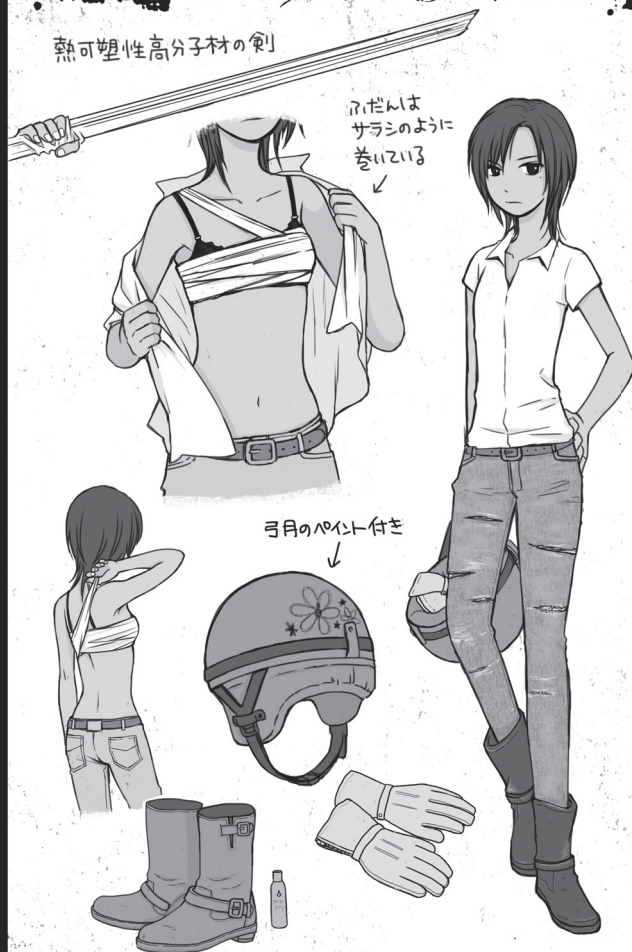
裕美の声がマイクロボスの中にこだまして、運転席から養護の篠原先生が「ここ!? ここ  
でいいの?」と大きな声で叫び返した。前の席に陣取った裕美とトモちゃん、携帯の地図  
を片手に「そこ!」と一緒に答える。それを受けて、バスが強引に道を曲がったので、喜多  
見は膝の上に広げていた「フロスト詩集」を危うく落としそうになった。

隣の席では間宮愛実がぐったりと窓に寄りかかっている。もう一時間以上前からこの体勢  
だった。「だいじょうぶ?」と声をかけても、愛実は親指で丸を作るのがせいじつばいで、返  
事すらできないようだった。愛実の座席の前に挟んであるエチケット袋が気の毒で、「吐きそ  
うになったら言って」と耳打ちしていたが、愛実は最後まで我慢するつもりらしかった。

バスが角を曲がり切ると、いきなり外が眩しくなる。大きなフロントガラス一面に青い海  
と空が広がって、太陽を激しく照り返していた。末岡が横の窓をバンと開ける。カーテンが  
内側へ舞い上がって、吹き込んできた潮風にバスの中が一気に歓声に包まれた。

「うひょー! ビキニ、ビキニー!」

17





秋山が叫んで、末岡の後頭部をバシバシ叩きながら、海岸の方を指差す。砂浜には色とりどりの水着姿の女の人がいて、海の家から洩れた炭火焼きの匂いが、潮風の間を縫って鼻に届いた。

「先生、もうちょつと先で斜め上に行く道があるから、そこ上がつて！」

裕美が先生に指示を出していた。バスはお土産屋や、釣具店の並ぶ海岸沿いの古い商店街を通り過ぎたあと、たくさんの方き輪が結び付けられたフェンスに沿ってカーブしていく。そのバスの揺れに身を任せながら、バタバタと風でページがめくれるのを押さえて、手元の本に視線を戻した。

何が同種の蜘蛛をあの高みまで導き

夜闇の中白い蛾をそちらへ手繰り寄せたのか？

血も凍る暗黒の意図、それ以外にあり得ぬ

もし斯様に些末な出来事にすら意図があるというならば

何があの高みまで――。

窓の外の空を見上げると、白い花に留まった白い蜘蛛が、たまたまやってきた白い蛾を捕

まえる光景が脳裏に浮かんで消えていく。ささやかな偶然。美しくて、残酷な一瞬――。

――光が目印になるつてことは、この世界は闇だつてことだ。

白髪の少年の言葉を思い出して、自分の右手をじつと見た。五倉山の森で握ったダーツの感触がそこにまだ残っている。あの時間いたグチュツという音や、飛び散った血もはつきり覚えていた。

すべてが意図だとしたら、いつたい誰の意図なんだろう。――そんなことを考えていると、バスが悪路でゴンと跳ねた。立っていた末岡が天井に頭をぶつけて「いてっ！」と叫ぶ。先生の「座つてなさい！」の声が飛んで、それで一旦、本を閉じた。

通路を挟んだ隣の席では寝ていた穴井が目覚まして、アイマスクを顔から引き下ろしている。穴井と目が合うと、穴井は騒ぐ末岡たちの方をちらつと見てから、あきれた様子で肩をすくめてみせた。それに微笑みを返して、息をつく。今はとにかく、ここにいることを楽しもう――そう自然に思うことができた。頭の中のどんな記憶よりも、現実そこにある青い空と海の匂いが、気持ちを晴れやかにしてくれていた。

坂道を上がっていくと、小高い丘の上に三角屋根の平屋が何軒か並んでいる。裕美がそのうちの軒を指差した。

「あそこ！あの家の横に停めて、先生！」



バスがゆっくり停車すると、みんなが一斉に席から立ち上がって、頭上の網棚や座席の下から荷物をひっぱり出し始める。自分も足元のカバンを抜き出して、その中に本をしまった。愛実の方を見ると、愛実ほほととした表情で、座席の前のエチケット袋をバッグに詰め直している。前の方では永児が山崎颯太に急かされながら、網棚に載せたスポーツバッグを下ろしていた。

状況をはつきりとは知らなかったが、末岡や山崎のおかげで永児が来られるようになったことだけは、裕美からのメールで知っていた。きつとなんらかの形で、お母さんのことを心配しなくてもよくなったのだろう。遠目に見ても、永児の表情に久しぶりに昔の明るさが垣間見えるのが、とても嬉しかった。

「水着に着替えようぜ。女子、着替えるの遅いんだから、急げよ」

末岡がバスから降りながら言った。

「そんな焦んな」相沢がにやつと笑みを浮かべて末岡に言い返す。「慌てなくても、あとでたっぷり見せてやるから」

それを聞いて、裕美とトモちゃんが怪訝な顔をしていたが、それでもみんな笑っていた。そして、大きなバッグを抱えた愛実を先に席から出してやってから、バスの通路を降り口に向けて歩き出す。途中で後ろを振り向くと、最後尾から穴井がサングラスをしてついてきて

いた。——やつぱり大人っぽいなあ、と溜息が洩れそうになる。

「水着持ってきた？」

穴井が後ろから聞いてくる。「うん」と答えたが、そのあとに小さな声で囁いた。

「やつぱりあれ着なきゃだめ？」

「私も相沢も同じなんだから、いいだろ」

「でも、着たことないから——」

「どうしてもいやだったら、上に着るのに私のＴシャツ貸すから」

そう言って、穴井がサングラスの下からちよつとだけ笑みを見せる。——それで、まあいいか、と考えた。どうせみんなが見ているのは穴井や相沢で、自分の方なんて誰も気にしていないはずだ。まあ、一人だけ見ているかもしれないが、その一人だったら、別に平気だった。穴井と共にバスを降りると、海の雰囲気呑まれたのか、みんなテンションが上がりまくっていた。裕美とトモちゃんが手を握り合ってピョンピョン跳ねていて、秋山はバナナの形の浮き輪を膨らまし始め、末岡はすでに上半身裸になっている。

「平本！荷物どこに置けばいいんだ？」

末岡の質問に、裕美が「こっち！」と答えて、みんなが家の玄関へ向かおうとする。しかし、その前にバスの運転席が開いて、パンパンと手を叩く音がした。

「ちょーつと待つて」バスを降りてきた篠原先生がそう呼びかける。「走り去る前にみんな聞いて」

それでみんなが顔を見合わせて、バスの方へと戻ってきた。すると、先生は深呼吸をしてから、大まじめな顔で告げる。

「うるさく言うつもりはないけど、一応送ってきた責任あるから言つとくよ。お酒とクスリとセックスだけはやらないで。私の首が飛ぶから」

全員が顔を引き攣<sup>つ</sup>らせながら、お互いを見た。末岡が一番赤くなつていて、愛実は完全に凍り付いている。束の間の沈黙のあと、最初にちょつと怒った様子で声を上げたのは裕美だった。

「先生！ 中学生ですよ、私たち！」

それを聞いて、先生が惚<sup>ほ</sup>けた表情を浮かべる。

「最近中学生でもそのくらいするでしょ？」

また全員の表情が引き攣<sup>つ</sup>る。周りをちらつと見ると、堂々と先生を見返しているのは女子だけで、男子はみんなうつむき加減だった。

「や！ 先生、本当に教員免許持つてるの？」

トモちゃんが冗談っぽく尋ねると、先生が膨れつ面で返す。

「うるさいわね。持つてるわよ。バイトだけど」

「そうなんですか？」と、裕美が聞くと、先生は小首を傾げながら答えた。

「産休の先生の代わりに、あっちこちの学校に臨時で入ってるのよ。——とにかく明日迎えに来るまで、平本さんの伯母さんの言うこと聞くのよ」

「はい！」裕美が敬礼しながら言う。「大丈夫！ 信じて！」

先生はうなずいたあと、「よろしい。じゃあ、解散解散」と言つて、ひらひらと手を振った。それで裕美を先頭にまたみんなで家の方に向かい始める。その時に一瞬、永児の方を見ると、永児はポケットから携帯を出していた。お母さんに連絡かな——と思つていた矢先、いきなり秋山が永児に向かって叫ぶ。

「ツカ！ ツカ、写真撮つてくれ！」

永児がちよつと慌てた様子で携帯から顔を上げた。そして、山崎たちと肩を組んでいる秋山に返した。

「古い携帯だから、あんまり写真撮れないんだよ。すぐメモリーいっぱいになるんだ」

「そんなボロい携帯あんのかなよ」

つまらなそうに言つた秋山を、後ろから末岡がぼかすと殴る。秋山は振り返つて「何すんだよ——」と言いかけたが、末岡が本気で怒った目をしているのを見て口を閉ざした。でも、

永児は特に気にする様子もなく笑っていた。

「じゃあ、これで撮るからみんな入って!」

裕美がデジカメを空中に掲げながら、みんなから反対の方向へ走り出す。愛実とトモちゃんが末岡たちの横に加わり、永児は山崎の隣に並んだ。それをなんとなくぼんやり眺めていると、「ほら」と後ろから相沢に押されて、穴井と三人で集団の後ろへ移動する。

なんだか夢の中にいるように、明るくてきれいな場所だった。足元の砂は真っ白で、建物越しに見える群青色の海は、裕美が送ってきた写真そのままに、どこまでも美しく澄んでいた。「平本さんも入ったら。私が撮るから」

先生がそう言つて裕美を促すと、裕美は先生にカメラを渡して、こっちに向かって駆けてくる。来るぞ、来るぞ——と身構えたが、裕美はやはり「きたみい!」と言いながら、全力で抱き付いてきた。うっかり姿勢を崩して、穴井と相沢を巻き込みながら前の列へと倒れ込む。その瞬間に、カシャッとシャッターを切る音がした。

「お約束かよ!」と相沢が怒鳴つて、裕美が「もう一枚!」と先生に叫んだが、もう末岡たちは待ち切れない様子だった。

「いいから行くぞ! 海がおれを呼んでるんだ!」

末岡の怒号に穴井が「呼んでんの水着だろ」と冷静に突っ込んでいたが、さすがにみんな

の勢いは止められなかった。大きなバッグを抱えて、一人一人が伯母さんの家に向かって砂地を走り出す。でも、その集団の前いきなり裕美が飛び出して、玄関の前に立ち塞がった。

「ちょっと待って、みんな! 海に行く前にいっただけ——」

裕美が切り出すと、みんな一斉に不満そうな顔になる。そう言えば、着いたらまずひとつだけ何か手伝つて、とバスの中で裕美が言っていたのを思い出した。

「なんだよ」末岡が腰に手を当てながら急かすように聞く。「早く言えよ」

裕美はちよつとつむぎながら、困ったように頭を掻いていた。軽くいやな予感が背筋を走る。あれは裕美が「美少女スケッチさせて!」みたいな無理を言い出す時の表情だった。

「ごめん。言にくいんだけど——」

裕美が気まずそうに口を開いた。

「なんだよ、これー」

秋山の大声が広い書庫に響く中、永児は抱えていた雑誌の山をなんとか床に降ろした。その拍子に、霧のように舞い上がった埃をうっかり吸い込んで、ケホケホと激しく咳き込む。さらにまとわりついてくる埃を手で払っていると、三角巾とマスクで完全防備した裕美が後ろを通りながら言った。

「マスク着けた方がいいよ。だいぶ埃たまつてるから」

「そうじゃなくてさー」秋山が本棚で埋め尽くされた書庫の中を両手で示しながら叫んだ。「なんで海まで来て、片付けしなきゃなんないんだよ！ 聞いてねえよ！」

「ごめん。書庫の掃除する代わりに泊めてもらいう約束なんだ。これだけ終わったら自由だからさ」

裕美が秋山に両手を合わせて、申し訳なさそうにつぶやく。そこへ相沢があごまで雑誌の山を積み上げてやってきた。

「ごちゃごちゃ言つてないで動けよ」相沢が秋山の方に向けて、床の空き箱を蹴り付けながら

言い放った。「早く終わったらそれだけ早く泳げんだろ」

「信じらんねー」とぼやきつつ、秋山はふてくされた様子で書庫の真ん中に座り込み、バナナの浮き輪を抱きかかえた。

ほかのみんなも、それぞれ裕美に頼まれた仕事で、本棚がひしめく書庫の中を忙しく動き回っていた。トモちゃんと愛実はずいぶん本棚を拭いていて、山崎と末岡は雑誌の山を次から次に紐でくくっては外に運び出している。穴井と相沢はさつきから一緒に雑誌を棚から降ろす作業をやっていた。――確かにちよつとだけ騙された気はしたが、それでも書庫の窓から吹き込んでくる潮風は心地よかったし、海岸まで行かなくても、充分海の雰囲気は伝わってきた。止まっていた時間がゆつくり流れ始めるのを感じて、小さく深呼吸をする。久しぶりに会ったみんなの様子を見ると、当たり前前のその風景がひどく愛おしかった。自分がその中にいられることがあまりに大切に思えて、朝から普通に振る舞うのが大変だった。

――普通。

その言葉を口の中で噛み締めて、海の水と一緒にはき込む。みんないると、否応なく自分も「普通」になっていく。まだそこに戻れることを確認できただけでも、たまらなく安心感があつた。

もう一度息をついて、目の前の本棚を見ると、ちょうど本棚に載っていた分厚い本が向こ

う側から引き抜かれて、反対側にいる喜多見と目が合った。一瞬、本の隙間を通して二人で顔を見合わせる。そのまま軽く微笑むと、喜多見も小さく笑って返した。

隙間を雑巾で拭いてから、喜多見が本を元通り棚に差し込むと、隙間は埋まって、喜多見の顔がまた見えなくなる。それを名残惜しく思いながら、自分も作業に戻ろうと次の雑誌を手にとった。

「これ、みんな捨てるの？」

愛実が古い雑誌の束をめくりながら、裕美に尋ねるのが聞こえてくる。ハタキで棚の埃を払っていた裕美は手を止めて、古い建物の中を見渡してから、ちよつとだけ寂しそうに微笑んだ。

「今年で叔父さんが仕事辞めたから、この家、引き払うんだって。ここ、お年寄りには色々不便だから」

「そうなんだ」と、愛実がつぶやく。

「だから、今年はどうしてもみんなで来たかったんだ」

そう言つて、裕美は優しい手付きで近くの本棚を撫でたあと、元通りの明るい表情でハタキ掛けに向かった。愛実も自分の仕事に戻っていく。それを横目に、手の中の雑誌を床に置くと、黄ばんだ雑誌の表紙が目に残った。ここに積み上げられている新聞や雑誌の中には、

発行日が自分が生まれる前の日付になっているものもたくさんあった。隣で秋山がくくつている新聞の山もすっかり変色していて、峰の家にあつたものと同じように、長い間部屋の空気を吸っていたことを物語っている。

「へいつて峰と友達なんだっけ？」

新聞の山をじつと見つめながら、秋山にそう尋ねた。できるだけ自然に言つたつもりだったが、それでも意外だったらしく、秋山が「え？」と、驚いた様子で顔を上げる。

「いや、二年の時に一緒だったけど、友達ってほどでも——。あいつ、なんかヅカにちよつたいでも出してんのか？」

秋山の顔が少し真剣になる。病院で会つた時でさえ見せなかつた表情に、慌てて首を横に振った。

「そんなんじゃないよ。ちよつと話す機会あつて」

秋山が新聞の束を手になち上がった。そして、ちよつと考えるような顔をしたらかと思うと、視線を伏せながらつぶやいた。

「あいつ、前はもつと明るかつたんだけどさ。色々あつたからな。ほんととはそんな悪い奴でもないんだぜ」

「うん」とうなずいてから、珍しくまじめな秋山の表情に見入っていると、いきなり誰かに背

中をドンと突かれた。前につんのめって、反射的に本棚をつかむ。

「何するんだよ——」と、振り返ると、上半身裸の末岡が後ろに立っている。途端に秋山はまじめな顔をどこかへ消し飛ばして、ゲラゲラ笑い始めた。

「えーじ、マジな顔して誰の水着想像してんだよ」

末岡が首に腕を回してきて、「白状しろ、こら」と言いながらヘッドロックをかけてくる。怒った時の姉ほどきつくはなかったが、体重がかかると抜けられなかった。

「すえー」

ふいに相沢の声が響いて、首にかかった力が弱まる。その隙になんとか脱出すると、相沢がにやにやしながら横にいる穴井を指差して言った。

「千尋のタンクトップ、色つぼくね？」

続けて相沢が「ほれ」と、穴井のタンクトップの胸元をひっぱる。伸びた襟の隙間からちよつとだけ穴井の下着が見えて、末岡が一気に真つ赤になった。直後に穴井が相沢の顔面に裏拳を入れる。相沢が鼻を押さえてうずくまると、通りがかった裕美がそこへさらに小さく蹴りを入れていった。

「や！ あたしは裕美のＴシャツかわいいと思ってた」

トモちゃんが無邪気に話題を逸らしてくれたが、末岡は完全に固まっていた。穴井は目に

見えて不機嫌な顔になっている。その横で、秋山が「末岡は穴井に惚れ——」と言いかけたので、とつさに足の裏で秋山を蹴つて黙らせた。

「そう言えば、高塚は好きな人いないの？」

いきなり裕美から話を振られて、茫然としながら「え？」と返事をした。危なく喜多見の方を見てしまうとところだったが、幸い喜多見は本棚の裏側にいた。——どう反応していいかわからずにいると、うつむいていた末岡が急に勢いを取り戻して大声を上げる。

「そうだよ。おまえだけ秘密にしてんじやねえぞ、えーじ！」

トモちゃんも「知りたい！」と続ける。立ち上がった相沢と、穴井もじつとこつちを見ていた。

「……え？」

そう繰り返した途端、秋山にバンと肩を叩かれて、横に倒れそうになる。

「吐いちまえよ、えーじ。誰かいんだろ」

そう囁いてくる秋山の笑みがどこことなく邪悪だった。

「高塚だけ、私、全然分かんないんだよ」裕美がトモちゃんに向けて聞く。「ねえ、トモー。気になるよね」

「気になる！」

トモちゃんが大声で囁<sup>ささや</sup>き立てる。愛実も目をきらきらさせていた。本棚の陰で喜多見がど

んな顔をしているのか、とても見る勇気がなかった。部屋のあっちこっちから「誰？」という声が飛び交い始めて、その中心で凍り付いているのがせいいっぱいだった。

「もしかして、この中にいる？」  
穴井の言葉に一同からどよめきが上がる。わずかに顔が赤くなるのを感じて、「違う——」  
と言いかけた瞬間、喜多見の顔が視界をかすめた。途端に額にどつと脂汗が噴き出してくる。  
「あ、おれ分かった」

いきなり秋山が手を上げて宣言した。全員が一瞬押し黙ったあと、「誰!? だれ!?’という声があっちこっちから上がる。脈がどんどん速くなつてきて、どう言い訳するか必死に考えていると、脇で秋山が「まあ、落ち着け。おれ分かるから」と全員を両手でなだめてみせた。  
「なんとなく前からそうじゃないかと思つてたんだ」

腕を組みながら、秋山がもつたいぶった口調で言う。みんなが息を呑んで静かになった。自分の心臓の音がみんなに聞こえそうで、呼吸をすることもできなかった。  
「誰?」

あからさまにワクワクした声でトモちゃんが秋山を急かした。秋山がにやりとして、人差し指を上げる。一瞬、秋山に飛びかかって黙らせようかと思つたが、秋山はどんな駒よりも速い動きで、その指を女子の集団に向けて振り下ろした。

「——相沢!」

「へっ? 私?」

相沢は「何言つてんの?」と混乱した表情で周りを見回していたが、秋山は人差し指を勝者のポーズで天高く突き上げて、聞いていなかった。喜多見ではなかったことにほつとして、逆に顔に血が上つてくる。目敏くそのことに気付いたみんなが、「マジで?」「うそ!?’と口々に言い出して、一気に書庫の中は興奮状態になった。

「二人、別室行きだね」

穴井がつぶやいて、相沢をみんなの輪から押し出した。末岡と秋山が同じように後ろから押してきて、無理に相沢の横に立たされる。焦つて喜多見の方を見たが、喜多見は視線を逸らして、その場に佇んでいた。

「別室つてどこだよ」

相沢が顔をしかめながら聞いた。穴井が無言で掃き出し窓の方を指す。同時に大きな拍手と歓声が上がった。

「ペランダじゃねーか!」

毒づく相沢をあつさり無視して、みんなが背中を押してくる。そのまま、強引に二人でウツドデッキに押し出された。



「海が見えてロマンチックだよ」

裕美が後ろで囁くのが聞こえたが、その間も目は喜多見を探していた。さつき一瞬見えた喜多見の表情がなんとなく冷たかった気がして、それがひどく気になった。でも、喜多見を見つめられる前に、中から容赦なく窓とカーテンが閉められる。

「やめろよ——！」と、言いながら窓を開けようとしたが、窓は内側からしつかりロックされていた。中の書庫からはしゃぐ声が聞こえてきて、振り向くと、ウッドデッキの欄干にもたれかかった相沢と目が合う。あまりの気まずさに反射的に唾を飲み込んだ。畳一畳分くらいのウッドデッキは急な斜面の上に張り出していて、飛び降りでもしない限り、出られない構造になっていた。

「まあ、いいか」相沢が軽く肩をすくめてつぶやいた。「ちょうど煙草吸いたかったし」

そう言つて、相沢がポケットから煙草の箱とライターを取り出す。そのあつさりした様子に、勢いよく打つていた心臓も徐々に落ち着き始めた。——そこでやっと、自分より相沢の方がよほどいやな思いをしていることに気が付いた。

「ごめん」

小さく頭を下げて言う。相沢は「高塚が謝つてどうすんだよ」と苦笑混じりに返した。

海沿いのきれいな空気がウッドデッキいっぱいに広がつて、涼しい風が潮の匂いを運んで

くる。周囲を囲む木の枝がざわめいて、聞き取れない歌を歌っているようだった。裕美が言っていた通り、相沢のはるか後方には鮮やかな海の風景が広がっている。それを背に、相沢がくわえた煙草の先を風から守りながら、ライターで火を点けようとする。

「煙草、あんまり吸わない方が——」

思わず、そう口に出していた。

「あ？」

相沢に睨まれて、言葉に詰まる。それでも、なんとか続けた。

「いや、吸い過ぎないで。——お願い。心配だから」

相沢の手の中で、ライターの炎が揺らめく。そのまま相沢がこつちを見ているのを、ただ心配で見返した。余計なことなのは分かっていた。でも、峰が言っていたことが頭の隅にひつかかっていたし、相沢が好きで煙草を吸っているように思えなかった。

やがて、ライターの火を消して、相沢が煙草をポケットに戻し始める。

「つたく、みんな揃つてほんとに……」

相沢がぶつぶつ言つたが、怒っている感じはしなかった。そうして煙草をしまうと、相沢はまた欄干にもたれかかり、意味ありげな笑みを浮かべてこつちを見る。

「喜多見だろ」

相沢がふいにつぶやく。

「え？」

一瞬、本当に意味が分からなくて聞き返したが、相沢は何も言わずにこつちを見つめているだけだった。そのうちにじわじわと顔が赤くなつていく。相沢がふつと笑みを深めると、顔は完全に真っ赤になった。

「なんで——」

そう聞くと、相沢は海の方を振り返りながら静かに告げた。

「だと思つたよ」

相沢の横顔と、欄干にもたれかかったシルエツトが、すごく大人っぽかった。同い年のはずなのに、女子だけがいつの間にか大人になっている気がした。てつきりからかわれると思つて、動揺しながら掃き出し窓の方を見たが、相沢はただじつと海を眺めていた。

「分かるよ、そりゃ」相沢が続けた。「あれだけいつも見てて好きじゃなかったら、逆に怖いわ」赤くなりすぎた顔を隠すようにうつむくと、相沢が首を窓の方に傾げながら聞く。

「せつかくこういうところなんだし、コクればいいんじゃないかね？」

相沢の爪先がこつちをコンコンと蹴っていた。からかっているのではなく、本当に励ましてくれている口調だった。

「もう振られたんだ」顔を上げて、相沢にはつきりそう答えた。「だいぶ前に」

「そうなん？」と、相沢は一瞬キョトンとしてから笑う。

「やるねー、喜多見も」

それには自分も笑みを浮かべた。——そのやり取りだけで、相沢がきつとこのことをみんなに内緒にしてくれると確信して、肩の力が抜けていく。

ちょうど様子を見に来た秋山が、カーテンの向こうからこつちを覗き込んでいた。それを見つけた相沢がガンとガラスを蹴って怒鳴る。

「開けろ、こらー！」

秋山が窓から飛び退き、代わりに裕美が横から掃き出し窓を開けてくれた。中は相変わらず賑やかで、暫しのペランダの静けさも幻のように消えてしまう。相沢は「どけ」と秋山を押し戻して中に入りながら、最後にちよつとだけこつちを振り返って言った。

「保健室の時、助けてくれてありがと。ガチでうれしかった」

ほんの一瞬のまじめな声に、何も答えられないうちに、相沢の姿は書庫の中へと消えていく。その背中を見送って、しばらくペランダで風に吹かれていた。森の緑の匂いと、遠くの波の音。空気がすごく清らかな感じがして、気が付くと、何もかもが「普通」に戻っていた。あんなに気持ちちが落ち込んでいたのに、たった数時間でそれを全部吹き飛ばしてくれたみんな

が、本当にすごいと思った。

カーテンの隙間から、相沢に羽交<sup>はが</sup>い締めにされた秋山が、末岡のドロップキックを食らっているのが見える。その隣では、喜多見と裕美が一緒に笑っていた。確かに気が付くと、いつも目の端で喜多見の姿を追っている。でも、学校ではそういうことに敏感な裕美がすぐ側の席にいたので、ばれないように特に気を付けていた。だから、なんで相沢にばれたのかが不思議だった。そもそも相沢の席からは、真後ろにでも振り返らない限り、自分の席も喜多見の席も見えないはずだ。

——あれだけいつも見て好きじゃなかったら、逆に怖いわ。

その言葉を思い出しながら、窓越しに相沢の姿を眺めた。床にダウンした秋山を相沢が踏み付けている。さっきの大人っぽさはどこかへ消えて、普段教室で見ているのと同じ相沢だった。

小さく息をついて、永児は首を横に振ってから、書庫の中へと戻っていった。

# 19

ザブン、と押し寄せてきた波が砂の上で弾けて、足元へと流れ込んでくる。そしてまた、何かにひっぱられるように、ゆつくり海の方へと返っていく。海に来たのは数年ぶり——たぶん父さんが死んでからは初めてだったが、子供の時には当たり前感じていたその光景が、今はとても不思議に思えた。

永児は市民プールに行く時の水着を着て、砂浜に敷かれたビーチマットの上に座り、どこまでも続く水平線を眺めていた。イカとトウモロコシを焼く匂いが辺りを支配していたが、たまに風が海の方から吹いてくる時だけ、爽やかな磯の香りを全身で感じる事ができた。それなりに混み合った砂浜も窮屈に感じるほどではなく、ちょうどいい賑わいだった。ビーチボールを跳ね上げる音。散歩中の犬の鳴き声。それに青空高く響く、みんなの元気な雄叫び。——そこにいると、何もかもを忘れてしまいそうになる気持ち良さが一帯に満ちていた。

「できたー！」

後ろで裕美が声を上げる。振り返ると、ビーチパラソルがやっと固定できたようで、さっそくその下に山崎が寝転がっていた。末岡はパラソルを砂浜に差し込む役目を終えて、誇ら

しげに力こぶを作っている。波打ち際には愛実とトモちゃんがバシバシヤと水飛沫<sup>しぶき</sup>を上げていて、少し先では、秋山のパナナの浮き輪が波に上下していた。

ちらつと堤防の上に目をやったが、喜多見はまだ穴井と相沢と一緒に着替えているらしく、姿が見えなかった。さりげなく視線を海の方に戻すと、その途端、視界に裕美の顔がにゅつと入り込んでくる。

「だいじょうぶ、高塚？」

いつもの屈託のない表情で裕美が聞いてきた。その質問に、やつと素直に「うん」と答えることができたが、裕美が聞いたのはそういうことではなかった。

「まだ右手の包帯取れてないからさ」裕美が右手を指しながら言った。「海に入れるのかな、と思つて」

それで初めて包帯のことを思い出した。あまりに当たり前になつていて忘れていたが、確かにケガが治るには遅すぎた。とつさに言葉に窮して、苦笑いで「まかそうとする。」

「入れるよ。傷はもういいんだ。でも跡が消えるまで包帯してなきゃいけないくて」

「そっか。そんなに掃除手伝わせてごめんね」と、裕美がにこつと笑つてからつぶやいた。「でも、よかった。これで」

いつの間にか、裕美の後ろから末岡と山崎もこつちを見ていた。三人の顔を順番に見渡すと、

言いたいことがいろいろ浮かんだが、口から出てきたのは一言だけだった。

「ありがと」

せいっぱい気持ちを込めてそう告げると、末岡と山崎がちらつと視線を交わす。でも、二人が何かを答える前に、裕美が湿っぽい雰囲気吹き飛ばすように、背中をパンと勢よく叩いてきた。

「さ、遊ぼう！ もうすぐ千尋たちも——ほらきた！」

裕美が指差した堤防の上を見ると、穴井、相沢、喜多見の三人がこつちに向かってやつてくる。穴井と相沢は二人ともビキニ姿にサングラスで、とても中学生には見えなかった。穴井の大きな白い麦わら帽子がすごく華やかで、末岡が緊張でくつと唾を飲むのが分かる。

「うそ!? 喜多見、水着——」

そう言つて、裕美が突然口元を両手で押さえた。とつさに喜多見の方を見たが、喜多見は水着の上からTシャツを羽織つていたので、一瞬、裕美が何を言っているのか分からなかった。だが、次の瞬間、裕美がこつちを振り返つて、今までにない興奮した声で告げた。

「あのTシャツの下、あれビキニだよ！ めっちゃ萌えるんだけど——！」

末岡が獣のような喜びの声を上げる中、三人が堤防から砂浜へと降りてくる。喜多見は真つ赤になりながら「裕美！ 声大きいよ！」と手を振つていた。やがて、三人がビーチパラソ

ルのところへ近付いてきて、喜多見の姿がはつきり見えるようになる。本当だった。白いTシャツの下には紺色のビキニが微かに透けている。とてもまっすぐ見ていられなくて、堤防ではためいている吹き流しの方へ視線を逃がすしかなかった。

「千尋たちがこれくらいじゃないとおかしいって——」

パラソルの下に荷物を置きながら、喜多見が誰にともなく言った。でも、すぐにほかの女子の保守的な水着に気が付いて、裏切られたような顔で穴井の方を振り返る。

「み——みんな、違うじゃない！ 千尋が中三でそんな人いないとか言うから——！」

でも、その抗議の最中に、相沢が喜多見の手をつかんで、波打ち際の方へひっぱっていく。喜多見は「ちょ、ちょっと待って！」と慌てていたが、即座に反対の手を裕美につかまれて、三人一緒に波の中にザブンと突っ込んだ。一際大きな水飛沫が上がって、宙に虹がかかる。

「男子、行くよ！ 何してんの、末！」

そう言つて、穴井が麦わら帽子をフリスビーのようにパラソルの下に放り投げた。それを合図に、末岡と山崎が次々に海へダイブする。自分も立ち上がつてあとに続こうとしたが、その前に一瞬、夢みたいにきらめいているその光景に、足を止めて立ち尽くした。

なんて明るいんだ。

と、思うのと同時に、胸が強く締め付けられる。その圧倒的な光の中では、右手に染み込

んだ塗料も見えることはなく、そこに立っていると、世界のどこにもおかしなことはないように思えた。ついさつきまで、姉や母親や、ここにはいない峰に悪いという気持ちはどこかにひっかかっていたが、それすら消し去ってしまうほどの眩しさが目の前に広がっていた。

穴井が歩き去った先で、喜多見が大きな声で笑っている。喜多見のそんな声を初めて聞いた気がして、胸の中が切なさで満たされていくのが分かる。水はきれいに澄んでいて、限りなく青かった。

「えーじー」「高塚！」と、みんなから呼ばれて、自然と足が前へ動き出す。止まっていた時間はずい勢いで流れ出して、青い風景が三百六十度自分を包んで、飲み込んでいくようだった。

世界がどれほど明るいのか、ずっと忘れていたような気がした。

昼を過ぎて日の差す方向が変わると、阿坂は隠れ場所を木の後ろから、峰の家の側面に變更した。塀のすぐ向こうが絶壁になつてゐる狭い空間は、ちょうど排水溝の上だったので臭いが辛かったが、風の通り道になつてゐる分、暑さは凌ぐことができた。

風に当たりながら、階段下の駄菓子屋で買った六十円のカップラーメンを、人差し指よりも短いプラスチックのフォークですする。お湯はもう冷めていて、麺もとくにのびていた。せめてまともな食い物を手に入れたかったが、今朝早くやってきた踏切屋のチャライ二人組がずっと家から出てこなかったで、あまり遠くへ行くわけにもいかなかった。

やたら塩辛いラーメンのカップを目の高さまで持ち上げると、海岸沿いで力こぶを作つてゐるゴリラのイラストが目に入る。アズミの勧めで買ったそのラーメンは、「真夏のゴリララーメン」という商品名だった。

「なんでゴリラがシェーフード味なんだよ」

そうつぶやいて残りのラーメンを吸い上げたが、全部食べてもろくに腹の足しにならなかった。苛立ちながら汁まで飲み干して、すぐにそれを後悔する。ただでさえ汗で水分を失つて

いるのに、これでしばらく喉の渇きにも悩まされることになりそうだ。

壁にもたれかかつて様子を窺うと、家の中は静けさを保つていた。すぐその台所は電気が消えて、誰もいない。姉は出かけていて、峰は二階——母親は自分の寝室にこもつてゐる。踏切屋の二人は玄関先で、母親の様子を見張つてゐるようだった。

ラーメンのカップをサンダルで踏み潰して、携帯電話を取り出す。永児の番号を呼び出すと、さつき試した時と同じく、携帯は「電源が入つていないか、電波のつながらない場所」にあつた。仕方なく舌を鳴らして、喜多見の携帯にかけると、すぐに呼び出し音が鳴り始める。

二回、三回、四回。切りかけた五回目のコールで電話がつながつて、予想よりずっと遠い喜多見の声が『はい。小松です』と答えた。その後ろでは何人もの声がこだましている。

「いつたいどこにんだ、おまえ」

すべてを差し置いて聞くと、喜多見が何か言つたが、声は極端に聞き取りにくかった。思わず大きな声を上げそうになり、口元を左手で包み込む。

「なんだって？ 聞こえねえんだけど」

『海です』

声を潜めて尋ねると、今度はかなりはつきりと喜多見の返事が聞こえた。言われてみれば電話越しに微かに波音が響いている。つながらない永児の携帯のことを思い出して、試しに

尋ねてみた。

「もしかして高塚も一緒か」

『クラスの何人かで海に合宿に来てるんです』

答える喜多見の声がいつになく楽しげで、顔に苦みが走る。幅が四十センチくらいしかない、排水溝の上の小汚い隙間で、ゴリララーメンを食っている自分の姿が急に客観的に見えてきて、痛ましい気分になった。ラーメンのカップの表面では、海岸のゴリラがまだ笑っている。

「おまえ、こっちは働いてるつてのに——」

そう言う、ちよつと笑いを含んだ喜多見の声が返ってくる。

『阿坂さんは「中学生」が仕事だから、仕方ないじゃないですか』

いらつとしたところに、さらに電話の向こうから喜多見のことを呼ぶ声がある。「電話なんかしてないで、早くー！」という声は、たぶん喜多見の前の席に座っている、あの変わつた絵描きの女だった。

「おまえ、海行くならちよつと声ぐらいかけ——」

『阿坂さん、ごめん』喜多見がさくりと途中で話を切る。『昼ご飯だから私、行かないと』

喜多見がそのまま電話を切りそうになったので、慌てて「おい。待て、小松」と呼び止めた。『はい？』と、若干ぞんざいな雰囲気の声が返ってくる。最初は目を合わせる度に震えていた癖に、

もう怖さの欠片も感じていない声だった。

「今、仕事で同じクラスの峰の家を見張ってる」

そう言う、『峰くん？』と喜多見が聞き返したので、声量を落として告げた。

「そいつの親が仕事の案件に巻き込まれてる。よく分かんないんだが、高塚が首突つ込んでるかもしれないから、ちよつと気を付けて見張ってる。あいつを聞わらせるな」

『あ、はい——』と、喜多見が電話の向こうで答える。でも、それは背景の「イカ焼けたよ、きたみー」という声に返事したただけかもしれないかった。

「小松、聞いてんのか、おい？」

電話に向かって毒づくと、『分かりました』と喜多見が言つて、『じゃあ』とあつさりした一言で通話が切れる。途端に賑やかな海の音が途切れて、あとにはツーツーという電子音を発する携帯と、蒸した空気と蟬の声が残った。しばらく口元を歪めて、手の中の携帯を見つめる。やがて海で遊ぶ連中の様子が頭に浮かぶと、ラーメンのカップを蹴飛ばして、さらにガシガシと踏み付けた。

「——決まつたぞ」

いきなり台所から男の声が響いて、とつさに体を縮める。例の二人が入ってきたようだったが、こちらに気付いた様子はなかった。



「明日、決行だ」

耳をそばだてると、ピアスをした男の声が聞こえてくる。確か西野という奴だった。

「何時ですか？」と、若い方の沢田が尋ねる。

「七時二十分の中央線だ。八王子駅に母親を待機させる。花火の最中だから、ちょうどいい混雑になるはずだ」

二人の男はそこからさらに声を落として話し続けたが、一番必要な情報はもう聞き取れていた。すぐに携帯に『19時20分 中央線 八王子』とメモして、そのまま院の方へ送信する。そのメールを受信したら、別働隊が踏切屋の事務所の向かいで待機する手はずになっていた。——とは言え、事務所に残っているのはおそらく下っ端の数人くらいで、踏切屋の本隊は現場に出ている西野と沢田、それに車で待機している運転手の古賀の三人で間違いなかった。

西野と沢田が話を終えて、台所から出ていく。それで携帯を閉じて、大きく息をついた。思ったよりも決行のタイミングが早いおかげで、排水溝の上でラーメンを食べるのは今日一日だけで済みそうだ。

「つたく、海なんか行きやがって」

一人でつぶやいて、右手の指をバキッと鳴らす。喜多見の後ろから聞こえていた楽しそう

な海水浴の音を思い出すと、今すぐにでも家の中に乗り込んでいつて、踏切屋を叩き殺してやりたくなる。

「どうせスクール水着だらう、小松は」

そうばやきながら、排水溝の蓋に腰を降ろし、峰の家の壁にもたれかかった。何度となく繰り返している中学校の夏休み。——そう言えば海に行ったことは一度もなかったな、と思いながら、阿坂は海の色とよく似た青空を一人見上げた。

パチツと枝が弾ける音がして、炎の中で火花が散った。砂浜に座った喜多見はその様子に目を細めながら、夜風が髪の毛を撫でるのを楽しんだ。夕食のあと、また全員で海岸に出てきて、焚き火をおこし終えたところだった。枝の先に刺したマシユマロが、火に炙られて甘い香りを放っている。その香りに混ざって、末岡の焼くスルメの匂いが焚き火の向こうから漂っていた。

「もう！ 雰囲気台無しなんだけど」

隣に座っている裕美が、半分笑いながら言った。

「だけど、うまいぜこれ」秋山が裂いたスルメを分けてもらって、くちやくちや噛みながらつぶやく。「スパーのとなんか違うんだけど」

「そりや、干し立てだからね」と、答える裕美を横目で見ると、なんとなく笑顔がこぼれた。見上げた空はすっかり夜になって、東京ではめつたに見えない星が一面に輝いている。――さすがに少し疲れが出たのか、みんなあまりしゃべらなくなっていたが、それでも気まずくない静けさが心地よかった。

両膝を抱えて目を閉じると、波の響きと、焚き火の音の間に、聞き慣れた声が時々混ざる。炎の優しい温もりが体の表面を均等に温めてくれて、昼間の賑やかさはまた違った安心感が全身を満たしていた。波音が沖へ引いていく度に、意識も少し海へひつぽられていく。船にでも乗っているような感覚を味わいながら、ぼんやりと潮の満ち引きに身を任せていた。

「マシユマロ、落ちたー！」

トモちゃんの声が聞こえる。そつと目を開くと、愛実がうつらうつらしているのが炎越しに見えた。濡れた髪をドライヤーで軽く乾かしたただだったので、いつもよりも子供っぽい印象だった。

「あ、高塚が帰ってきたー！」

裕美が堤防の方を見て声を上げた。つられてそつちを見ると、永児がいつぱいになったレジ袋を抱えて堤防の上を歩いていた。さつそく裕美が出迎えに立ち上がる。その後ろに隠れるように座ったまま、抱え直した膝に耳を付けて、近付いてくる永児の姿を見守った。

横向きになった風景の中、柔らかく辺りを包み込む焚き火の光を通して、永児の輪郭が堤防の上を移動していく。砂浜へ下りる階段でつまずきそうになりながらも、永児は無事に火の側まで戻ってきて、コンビニで買った飲み物をみんなに配り始めた。

炎の向こうで揺らめく永児が、眠る愛実の足元にオレンジジュースを置く。山崎はスポー

ツドリリンクのメーカーが違うと文句を言っていたが、永児は無視して、そのまま穴井たちのところへ向かった。——誰がコンビニまで飲み物を買に行くかでじゃんけんをした時、負けたのは愛実だった。でも、愛実が疲れているのを見て、永児がいつの間にか代わりに行っていた。

なんであんなに優しいんだろう。

いくら思い出そうとしても、永児が誰かに冷たく振る舞うところなんて一度も見ることがなかった。どうしてそんなに他人を大切にできるのか、中一の頃からずっと不思議で仕方がなかった。きつと自分は一生あんな風にはできない。——そう思いながら、飲み物を配る永児をずっと見つめていた。

「ウーロン茶——」永児がこつちにやってきて、レジ袋からペットボトルを取り出す。「——でいいよね？」

「ありがとう」

言葉を囁み締めるようにそう告げると、永児はちよつと瞬きをしたが、そのあとに笑顔でボトルを差し出した。それを受け取ろうと手を伸ばした時、包帯を巻いた永児の右手が目に残まる。いつも以上にしっかりと巻かれた包帯の下に、黒いビニールのようなものが薄く透けていた。そのせいか、右手の光はまったく見えなかった。

軽くなったレジ袋を提げて、永児が末岡たちの方へと歩き去っていく。その背中を少しだけ目で追ってから、黙って手元のウーロン茶のボトルを開けた。

「ね？ 詐欺じゃなかったでしょ」

カフェオレを持った裕美が、再び隣に座りながら言った。いつも買っているのと同じ、紙パックスのブランドだった。

「まあ、八割ぐらいは」

口元に笑みを浮かべながら、裕美に言い返した。裕美がちよつと目を見開いてから、焚き火の方へと向き直る。その横で、自分も燃えていく枯れ木の山をじつと眺めた。火の向こうではトモチヤんと末岡がまだぶざけていて、穴井と相沢は少し離れた波打ち際で、二人でペットボトルを飲んでいた。

すごく安らかな気持ちだった。膝を丸めて座っていても、体がいつものように強張っていないのが分かる。——初めは抵抗があった水着も、海岸に出て十分もしないうちに慣れてきて、気が付いたら思いきりはしゃいでいた。自分があんな風に振る舞えるなんて、今思い返しても、なんだか信じられなかった。

「喜多見？」裕美が首を傾げながらこつちを見る。「ぼーつとしてるよ。おなかでも痛い？」

ウーロン茶を両手で持ったまま、裕美の方を見返して、小さく首を横に振った。

「うん。ちょっと考え事してただけ」

そう答えると、裕美は安心したように微笑んで、距離を詰めるように座り直す。そうして二人で焚き火に当たっていると、やがて裕美がこっちの肩口に頭をもたせかけてきた。ちよつとためらってから、自分もその裕美の頭にこめかみをもたせかける。

「あと半年もしたら、みんな卒業してバラバラになっちゃうんだよね」

裕美がぼつりとつぶやく。肩に乗った裕美の頭の重みを感じながら、小さく「そうだね」とだけ答えた。一際大きな波が流れ込んできて、重たい波音が海岸線を伝わっていく。焚き火の中では何本もの枯れ枝が、火花を散らしながら弾けていた。

「いつか、こんな時があったって思い出したりするのかな」

小さな声で裕美が続けた。裕美にしては珍しく、少し寂しそうな声だった。ちよつど同じようなことを考えていたので、なんだか自分の声を聞いているような不思議な気持ちになる。

——もしかしたら、みんな似たようなことを考えているのかもしれない、と思いながら、もう一度「そうだね」と繰り返した。

夜空に浮かぶ真つ白の月が、海面に幻影として映り込み、波に揺られていた。トモちゃんの焼くマシユマロの匂いが焚き火の周りに立ち込めてきて、切ない気持ちを呼び起こす。きつと長い間、この匂いを忘れないような気がした。

「ゴリラーのジジにー」

ふいに横から耳に馴染んだ歌が聞こえてきて、頭を起こす。裕美が何気なく、合唱コンクールで歌った歌を口ずさんでいた。それを聞いて、うつらうつらしていた愛実が顔を上げる。そして、半分寝ぼけた声で一緒に歌い始めた。

「愛されるなんてー」

二人が徐々に本気で歌い出すと、末岡と山崎が男性パートで入ってくる。

「思ったこともなかったのですー」

どこからかコーラスが聞こえてくると思ったなら、こっちへ戻ってくる穴井と相沢の声だった。秋山も手拍子を打ちながら歌に加わり、そこへトモちゃんがおもむろに立ち上がった、一番大きな声で歌い出した。

「私はージジがー好きでしたー」

鼻歌が本気の合唱になって、静かな海岸に響き渡った。澄んだ空気のせいか、コンクールの時よりもきれいな歌声に聞こえた。——これなら優勝できていたかもしれない。

永児も焚き火に枯れ枝をくべながら、コーラスに加わっていた。歌声がひとつになつていくのを感じて、本当に時が止まってしまえばいいのに、と願いながら、自分も一緒に歌い始めた。

たぶん、あの詩の言っていることは間違っていないかった。確かに世界は残酷なところだった。ひどいことばかり平気で起こすのに、こんなにきれいな、宝物になるような優しい瞬間も与えてくれるなんて、あんまりだった。これじゃ、世界を嫌いなんでなれなかった。

足元に伸びる三本の白い線。

カビのような古い匂い。

そして、天井まで届く背の高い本棚。

自分が夢を見ているのはすぐに分かった。それどころか、どこで寝ているのかも思い出すことができた。裕美の伯母さんの家。それぞれ部屋を割り当てられていたが、けっきょく居間の床に布団を敷き詰めて、みんなで雑魚寝していた。カビ臭いのはきつとあまり使われていない布団の匂いか、昼間積み上げた古書の匂いのどちらかだった。

それが分かっている、夢から覚めることができず、ただ一人、知らない図書室のような部屋にぼつんと立っていた。髪の毛が濡れていて気持ちが悪い。お風呂を借りたあと、髪は乾かしたはずなのに。

「名前、なんて言うの？」

どこからか子供の声が聞こえた。振り向くと、赤いカーテンの後ろに、白い髪の子が立っていた。

「えいじ」

そう答えた自分の声も、子供のものだった。

「君は？」と聞くと、白髪の男の子は優しい声で囁いた。

「ぼくは名前はないんだ」

どこまでも高くそびえる本棚に囲まれていると、自分がとても小さく思えた。でも、当然だった。自分はまだ幼くて、できることはほとんどなかった。この部屋の重たい扉も、一人では開けることさえできない。

「行つた方がいいよ。君も閉じ込められる」

白髪の男の子がそう言つて、ドアの方を指した。

「無理だよ。だつて、重たくて——」

その途端、ガチャツと音がして、ドアが開く。でも、開いたのは家のダイニングのドアだった。隙間から父親が顔を覗かせて笑つてゐる。「おかえり」とつぶやくと、「お姉ちゃんはどうした？」と父親が笑顔のまま尋ねた。ずいぶん久しぶりにその声を聞いたような気がした。

「二階のトイレだよ」

父親は「そうか」とだけ言つて、ダイニングのドアを閉める。笑顔でそれを見送つたが、すぐに不安がこみ上げてきた。父さんを止めないと——そう思つて、ガタンと椅子から立ち上

がる。そして、テーブルの横に回ろうとしたが、周囲には古い家から引つ越してきた時の荷物が山積みになつて、道を塞いでいた。

階段を上がつていく聞き慣れた足音がする。父親が二階に向かつていた。

だめだ、父さん。行っちゃだめだ。

トイレには——。

昔のおもちゃや姉のぬいぐるみを払い退け、荷物の上を踏み越えて、気が付くと、真つ赤な廊下を走つてゐた。いくつもの窓が次々に後ろへ流れていく。果てしなく感じる長い廊下を走り続けていると、次第に廊下にぼつぼつと黄色い光が灯り始めた。廊下の壁と窓は、やがて無数の木の幹へと姿を変えていく。

ふいに右手が誰かの手に触れた。その手をぐつとつかんで、ほたるの舞う森の中を走つた。どこへ向かつてゐるのかも分からない。とにかく、走らなきゃ——。それしか考えることができなかつた。

殺して。

辺りに小さな声が響く。いつも聞こえてくる女の子の声だった。思わず息を詰めて、その場に立ち止まる。森一面に、ほたるが舞つてゐた。

殺して。

声は何重にもこだましながら、木々の間を広がっていく。すべての神経を耳に集中させると、光が点滅する音も一緒に聞こえるような気がした。右手を握ると、つかんだ手が握り返してくる。それに助けられて、辺りをゆっくり見回した。

殺して。

今度は耳のすぐ近くで声が出た。――全身の皮膚が泡立つような感覚に襲われて、束の間、その場に凍り付く。つかんだ右手に爪の食い込む感触を覚えて、ゆっくり、ためらいながら振り返ろうとした。暗い風景の中をほたるの黄色が滲んだように流れていく。右手の先には、ボロボロの服を着た女の子がうつむいて立っていた。

女の子が顔を上げる。その後ろにほたるの光が歪んで見えた。ぐちゃぐちゃになった髪の毛から、魂の抜けた目がかつちを見つめ返す。

「永児」

青くなった唇が、自分の名前を呼ぶ。握っている手は、ぞつとするほど冷たかった。

「永児」

姉だった。

小さい頃の姉だった。

「みんな殺して」

その声と共に、バンと、目の前に黒いコードが勢いよく落ちてくる。一緒に世界が全部、頭の上から崩れ落ちてきた。

全身汗まみれで、永児は布団から飛び起きた。息が乱れて、一瞬、自分がどこにいるのかまったく分からなかった。目の前で黒いコードが一本、揺れている。とっさに悲鳴を上げそうになって、両手で口を塞いだ。――裕美の別荘の居間。必死に周りの情報を取り込もうとする目が、辛うじてそう教えてくれた。

落ち着け。夢だ。と、自分に言い聞かせたが、心臓は飛び出しそうなほど強く打っていた。手を放したら悲鳴が洩れてしまいそうで、口を押さえたまま布団から起き上がる。肩にコードが当たって、とっさに払い退けると、ぶら下がっていたのは細い電気のコードだった。古いアニメのストラップがその先で揺れている。

周りには友達が何人も寝ていた。全員疲れて熟睡しているようで、誰も動く気配はなかった。夢の感覚は徐々に遠ざかり始めていたが、まだあの姉の姿だけははっきり脳裏に焼き付いていた。何よりもあの声――。

片手で枕元の携帯をつかんで、いびきをかいている末岡の頭をまたぎ越す。そして、山崎の荷物を飛び越えて、玄関へ向かった。土間に並んだ無数の靴の中から自分のスニーカーをひっかけ、鍵を開けて外に出ると、月明かりが地表を照らし出していた。その中をほとんど



無意識に海岸の方へと走り出す。

「永児」——声がまだ闇の中から聞こえてくる。それから逃れるようにさらに速く走った。でも、後ろから声がついてくる。絶えず、すぐ後ろにいるようだった。

永児。

みんな殺して。

たぶん深夜零時を過ぎていた。——海岸沿いは静かな闇に包まれて、月が映っているところ以外、海面も真っ暗だった。白い砂と黒い水のコントラストだけで、波打ち際が遠いのが分かる。永児は堤防までたどり着くと、やっと足を止めて、ぜえぜえと息を乱しながら両膝に手を突いた。

汗が額から前髪を伝って、地面に落ちる。こめかみがズキズキと痛んだ。そのまま小さな外灯の明かりに照らされたコンクリートの地面を、息が整うまでじっと凝視し続ける。

なんだ、今の夢——。

そう考えただけで、脳裏にまた姉の姿が浮かんでくる。小さい頃の姉の声なんて、聞くまで完全に忘れていた。

包帯で強く締め付けられた右手が激しく脈打っている。下には黒いビニールシートも巻いているのに、熱を持った右手はそれでもわずかに光を洩らしていた。まるで包帯の下から何かが出てこようとしているようで、思わず左手で右手を押さえ付けて、鼓動が落ち着くのを待った。

やがていくらか呼吸が収まってきて、ゆっくり上体を起こす。右手に握り込んでいた携帯はすっかり汗で濡れていた。それをズボンで拭いながら顔を上げると、夜の海の光景が視界いっぱいに広がっていた。穏やかな波音がなだめるように周囲に響き渡る。その景色に包まれてみると、ようやく夢の名残が頭から消えていくのを感じた。

とても怖い夢を見た。  
それだけだった。

「高塚くん——？」

いきなり後ろから声をかけられて、反射的に振り返る。部屋着姿の喜多見がそこに立って、紅潮した顔でこっちを見つめていた。その姿が一瞬、夢の中の姉に重なって、息を呑む。「小松さん？」と、確かめるように聞き返すと、喜多見は胸に手を当てて、呼吸を整えながら言った。「高塚くんが出ていくのが見えて——」

よほど慌てたのか、喜多見の髪は後ろで雑にまとめられている。その手には、見慣れない桜色の布袋が握られていた。

「ごめん」喉につかえた言葉をやつとの思いで絞り出す。「変な夢を見ただけなんだ」

途端に、喜多見が不安げな面持ちになる。それを見て、無理に笑顔を作って尋ねた。

「小松さんも起きてたの？」

まだ完全に息が回復しないまま、喜多見はこくりとうなずいて、何歩か堤防の方へと足を進める。そして、隣の席くらしいの距離に来たところで、暗くなった海の方を見て言った。

「なんだか眠れなくて——」

そうつぶやいた喜多見の表情は、昼間に海ではしゃいでいた時とはまるで違っていた。どこか寂しげで物憂げな表情。喜多見は深呼吸を一回してから、ちよつとほつとした様子でこっちを見た。

「ちゃんと話すの、久し振りだね」

そう言って、喜多見が苦笑する。小さくうなずいたが、あとに何も続けることができなかった。昼間に屋台に並んでいた時や、焚き火でペットボトルを配っていた時、何度か喜多見に話しかけようとした。でも、周りにみんながいたこともあって、どんな口調で話せばいいのか、よく分からなかった。考えてみると、喜多見と話す時はいつも二人きりだった。

「お母さん、だいじょうぶ？」

喜多見が心配そうな声で聞いてきた。

「うん」覚えてくれていることが嬉しくて、少し声のトーンが上がる。「今日は姉さんの病室と一緒に泊まってる」

喜多見は「そうなんだ」と言って、安心した笑みを見せた。そのあとで、また視線を暗い

海の方へと流す。沖の方に船が一隻、ほとんど闇に紛れるようにして動いていた。その上に浮かぶ銀色の月が、船のすぐ側の海面でも揺れている。

「静かだね、夜の海って」

喜多見が遠い水平線の方を見ながら、囁くように言った。

磯の香りが周囲に漂い、空気は肌で感じるほど湿っている。堤防沿いにはぼつりぼつりと外灯の光が浮かんでいるだけで、ほかに人影は見当たらない。薄い外灯の光が喜多見の輪郭を儼々<sup>はかな</sup>照らし出していて、五倉山を遠く離れ、喜多見と二人で深夜にこんなところに立っているのが、なんとなく不思議に思えた。

二人になったら話そうと思っていたことはいつぱいあつたはずなのに、いざとなると、何ひとつ頭に浮かんでこなかった。それよりも、ただ一緒に立っているだけで、気持ちが悪く着くのを感じる。夢から覚めたあとも、ずっとまとわりついていていた黒いコードのイメージが、やつと薄らいでいた。

「こんなところについて、相沢さんが心配しない？」

海をぼんやり見ていると、ふいに喜多見がちよつと意地悪な言い方でそう聞いてきた。相沢さん——？ と、言いかけて、すんでのところで思い止まる。昼間の書庫の様子が頭によみがえってきて、少し気まずい思いで喜多見を見返した。喜多見ははにかんだように笑って、

結んだ髪の毛を片手で解き始める。

「帰ろう。誰か起きたら大騒ぎになるから」

そう言い直す喜多見の肩の上で、長い髪がふわりと舞って、肩口へと流れ落ちていく。そこに月の光が反射して、瞬間、息を呑むほどにきれいだった。

「こま——」

口が勝手に喜多見の名前を呼びかけて、すぐにそれを呑み込む。「うん？」と喜多見がこつちを見た。その不思議そうな表情に、右手で必死に携帯を握り締め、色々な気持ちを抑え込んだ。

「写真、撮ってもいい？」

呑み込んだ言葉の代わりに、とっさにそう告げていた。喜多見がキョトンとして、瞬きをする。

「あ——」すごく変なことを言ったのに気が付いて、慌てて首を横に振った。「ごめん。昼間は水着だったし、悪いと思って、一枚も撮ってなくて——」

喜多見の華やかな水着姿を思い出して、顔が赤くなってくる。でも、喜多見の方は特に気にしている様子はなかった。

「末岡くん、百枚くらい撮ってたよ」喜多見がにこつとしながら言った。「主に千尋だったけど」

「一年の時の集合写真くらいいいかないんだ、小松さんが写ってる写真。だから、一枚だけ撮ってもいいかな」

できるだけ素直な気持ちで喜多見にそう尋ねた。喜多見が「でも、こんな格好だし——」と、ためらう素振りを見せる。あきらめて携帯を下ろしかけたが、喜多見は微妙な表情でこつちを見つめ続けていた。いつそう気まずい思いで下唇を嚙むと、喜多見は目を細めて、外灯の弱い光をそつと見上げる。

「この明かりでも写る？」

そう聞かれて、一瞬、喜多見の顔をただ見返した。でも、すぐに我に返って、携帯のカメラを急いで立ち上げる。確かにかなり暗かったが、外灯の真下に立っている喜多見の顔はちゃんと液晶に映し出されていた。

「だいじょうぶ。映ってる」

むしろ幻想的な光の加減がいつもよりも喜多見をきれいに見せて、声が緊張するのが自分でも分かる。喜多見が部屋着の胸元をちょつと直してから、手を体の前で揃えて、姿勢を正した。落ち着かないと手ぶれを起こしてしまいそうで、携帯を両手で構え直す。シャッターを切るタイミングを探していると、喜多見が多少困ったような声で尋ねてきた。

「笑った方が……いいよね？」 喜多見が外灯の下で首を傾げる。「うまく笑えるか分からない

けど」

「いつもの小松さんでいいよ」

そう言うのと、喜多見は「どんなのがいつもか分からないよ」とつぶやきながら、恥ずかしそうに笑った。その笑みがとても喜多見らしかったので、反射的にシャッターを切る。カシャッという音が海岸に響き、カメラはその一瞬を時間の流れから切り取って、永久に画面の中に保存した。

喜多見がすぐにこつちへ駆け寄ってくる。

「見せて」

真剣な声でそう言って、喜多見が携帯を覗き込んできた。アルバムを開いて、今撮った写真を選ぶと、外灯の下に立つ喜多見の笑顔が液晶に表示される。思った以上にかわいく写っているのを確認して、安心しながら喜多見の横顔に目をやった。しかし、喜多見はなぜか写真を見つめたまま、押し黙っていた。

「ごめん。いやだったらすから——」

気に入らなかつたのかと思つて、怖々とそう告げる。しかし、喜多見は何も答えず、じつと写真を見つめていた。もう一度口を開こうとした瞬間、喜多見が顔を上げる。近い距離で目が合つてどきつとしたが、それを気にすることなく、喜多見が固い声で言った。

「高塚くん、これ——」

そこで言葉を切つて、喜多見が液晶の写真を指差す。外灯の光と、その下に佇む喜多見の姿。——でも、喜多見の指はそれを素通りして、背景の暗いところを指していた。深い闇の向こうには、町の明かりがいくつかが写り込んでいる。その明かりのひとつが目に留まると、思わず息を呑んだ。

液晶に映し出された写真をしばらく凝視する。そのあと、ゆつくり顔を上げて、外灯の向こうに広がる実際の風景を見た。写真とまったく同じ夜の闇には、たくさんの方家の屋根が沈んでいる。その奥に、昼間は日の光に隠されていた看板が浮かび上がっていた。

五倉山で見たのと同じロゴ。ここからでもその文字がはっきりと見て取れる。

——サダクラ製菓。

24

足取りは徐々に早歩きになって、早歩きはやがて小走りになつた。細い坂道を登つていくに従つて、山の方から風が吹き下りてくる。山際に微かに見える看板の文字を目印に、そのまま進み続けると、やがて坂の頂上で、左右に伸びる高い金網が行く手を阻んだ。その向こうには、小さな港町に似つかわしくない、四階建ての大きな建物がそびえ立っている。少しずつ歩幅を落としながら金網に近付くと、途端に強い風が全身に吹き付けてきた。

「サダクラ製菓——」

永児は壁面に大きく書かれたその名前を口にして、建物を見上げた。五倉山の施設とほとんど瓜二つの建物がそこに建っていた。一階は同じガラス張りのロビーになつていて、建物の裏側には斜めにジグザグに取り付けられた非常階段が見えている。壁面にはいくつも窓が並んでいたが、屋上の縁にわずかに非常灯が点滅している以外、建物のすべての電気は消えていた。

「やつぱり同じ会社だね」

息を乱しながら、喜多見がすぐ横に追い付いてきて、そうつぶやく。そして、一緒に並ん

で建物を見上げた。下唇を軽く噛んで、金網に沿って歩き始めると、喜多見もためらいがちに付いてくる。山から下りてくる風が金網を揺らしながら、足元を吹き抜けていった。

見れば見るほど、建物は五倉山の施設に酷似している。唾を飲み込もうとしたが、喉が渇いていて、うまく飲み込めない。何もかもがあの夜と似すぎていて、いやな記憶が一気によみがえってくるのを感じた。

そつと右手を開いて、包帯の巻かれた自分の掌を見る。胸がトクトクと小さく打っていた。左右を見渡すと、金網の一番遠い角に、赤いLEDの灯る監視カメラがひとつ設置されている。お盆近くの週末。——中に人はほとんどいないはずだった。

「高塚くん——？」

喜多見に呼びかけられて、金網の前で立ち止まった。

「だいじょうぶ？ 戻った方がいんじゃないかな」

喜多見がか細い声で尋ねる。その手にはまだ、桜色の布袋がしっかりと握り締められていた。

「たぶん『社』の施設だから、駒はいないと思うよ。でも、小松さんは先に戻ってて」

できるだけ平静な声で喜多見にそう告げてから、右手を金網にかけた。

「ぼくはちよつとだけ中を見ている」

喜多見の表情が一瞬で凍り付く。

「だめだよ」喜多見がほとんど反射的に右腕をつかんできた。「何言ってるの、高塚くん!？」

喜多見の表情が沈痛なものに変わった。その間も、風は途切れることなく吹き続けている。金網の付近は山風の通り道になっているみたいで、自分のTシャツも、喜多見の部屋着も、どちらも絶え間なく風で波打っていた。

「メールには書かなかったけど、あれから一回、五倉山のサダクラ製薬に行っただんだ」

あらためてそう告げると、喜多見が眉をひそめた。

「一人で？」

小さくうなずいて返す。そして、金網越しに再び建物と、その脇の非常階段を見上げた。

「その時には建物も中身も、全部跡形もなく消えてたけど——」  
「なんで？」

喜多見の問いかけに一瞬口ごもって、金網にかけていた手を放した。それでも喜多見の方は腕を放してくれない。仕方なく、軽く息を吐いてから、手首の包帯止めをはずして、くるくると包帯を半分ほど解いていく。その下から現れた黒いビニールシートを手首のところまで引き下ろすと、内側から黄色い光と共に、ポロポロになった右手の皮膚が現れた。

「少しでも落ちないかと思って、色々なもので洗ってみたんだ」

喜多見が息を呑む音が聞こえてくる。その顔を直視することができず、うつむいたまま

続けた。

「でも、何をしてても、光が消えないんだ」

荒れた手の甲を返して、掌を上に向けると、海水に触ったせいで、手はいつも以上にあかざれていた。しかし、そんな荒れた皮膚でも光は霞むことなく、均等に右手を包んでいる。まるで手の内側から光が染み出しているようだった。

「五倉山の建物の資材室には、これと同じ蛍光剤が残っていた。——だからきっと、蛍光剤を落とす薬もあると思うんだ」

風の軌道を描くように、解けかけた包帯が宙で踊り狂う。ちらつと喜多見の表情を伺うと、喜多見は口を軽く開けたままで、その唇がわずかに震えていた。

「だいじょうぶだよ。見付かっても、きっと中学生の悪戯でごまかせるから」

安心させようと思つてそう言つたが、喜多見は右腕をつかんだまま、腫れ上がった掌をじつと見つめていた。そのうちに、喜多見が腕をつかんでいる手を、ゆつくり手首の方へと動かし始める。ボロボロになった右手を触られたくなくて、とつさに腕を引いた。その勢いで、背中がガシャンと金網に当たる。

「私——」

喜多見はつぶやきながら、赤くなつた手首を優しくつかんでいた。その時、ふいに喜多見

の手にも、小さな傷がいくつもあることに気が付く。傷は指先の辺りに集中していたが、包丁か何かで切つたにしては細かくて、数が多すぎた。

「私も高塚くんに言つてないことがあるの」喜多見の声が風の合間に、驚くほど穏やかに響いた。「夏休みに入ってから、ずっと静さんの弓道場に通つてるんだ」

潔さに満ちた表情で微笑みながら、喜多見は傷のある人差し指を軽く伸ばしてみせた。

「ごめんね、黙つてて。でも私、どうしても強くなりたくて——」

喜多見の声が一瞬だけ詰まつて、月の光で目が潤むのが分かる。吸い込まれるほどにきれいな輝きだった。夏休みの間、毎日交わしていた他愛もないメールの内容が頭を過ぎる。その向こうにいるお互いが、まったく見えていなかったことに、今やっと気が付いた。

「そうしないと——」喜多見が絞るような声で囁く。「高塚くんがどんどん一人で暗いところに行つてしまふ気がして——」

右手の手首を握つたまま、喜多見がそつともたれかかつてくる。その柔らかい重みで、背中が金網に食い込んだ。喜多見の頬が自分の頬をかすめて、お互いの耳が束の間、触れ合う。喜多見に握られた右手は、金網に押し付けられていた。

「私も行くからね」喜多見の声が耳元で聞こえる。「どんなに暗いところでも、必ず一緒に行つて、高塚くんを見付けてみせるから」



自分の肩口に埋もれた喜多見の顔は見えなかったが、涙をすすするような音は時々聞こえてきた。いつもの果物の匂いもわずかに鼻に届く。いつの間にか喜多見の手は手首からずれて、半分解けた包帯の上から、中に隠しているガラス片ごと手を握っていた。右手の光が喜多見の手も包み込んで、ぼんやりと輝きを放っている。

「私が必ず高塚くんを連れて帰る」喜多見が耳元で力強く、でも、とても優しくつぶやいた。  
「――六組の教室まで」

喜多見の体の重みと、その温かさに包まれて、耳元で響く言葉をただぼんやりと聞いていた。左手はだらりと体の横にぶら下がったまま、どうすることもできなかった。向こうの民家の屋根越しに、海岸沿いの灯台が見えていて、その光をなんとなくぼんやり眺めていた。緩やかに回転する灯台の光は、一秒おきに暗い海を照らしている。

喜多見の体から微かにトク、トクという鼓動の音が伝わってきた。ずっと遠くから聞こえる波の音と、その鼓動がきれいに重なっていく。

「ぼくは――」

ぐっと目を閉じた。喜多見の手を傷付けないように、大切にそっと握り返す。同時に、小さな嗚咽が喉から洩れた。

「四堂さんが言ったんだ。――小松さんを守れて。でも、ぼくはどうしたら守れるのか分か

らないんだ」

出てきた言葉は泣き声のように詰まった。そのまま、喜多見の肩に力なく額をもたせかける。お互いの肩に頭を預けたままで、風で揺れる金網に寄りかかるようにして立っていた。シャツの肩口のとこに温かさが広がっていくのを感じて、息がうまくできなかった。熱いほどの温もりと、背中に食い込む金網の冷たさに挟まれて、どうしたらいいのかわからなかった。

しばらくして、喜多見が顔を上げる。その気配で、自分も目を開けた。すぐ近くにある喜多見の顔は、目こそ赤くなっていたが、涙の跡は付いていなかった。視線が合って、お互いに笑みを交わす。喜多見は気まずそうにそっと一歩離れると、「ごめん」と顔を軽く背けて、目元を手の甲で拭うような仕草をした。それを見ているのが悪い気がして、建物の方へと視線を逸らす。

なんとなく三階の窓が目に入って、金網にこめかみをもたせかけるようにして、その窓を見上げた。一ヶ月前の自分の幻影が、窓の向こうからこつちを見下ろしている気がした。ほたるの光と、五倉山の町明かりを見下ろしている自分。たぶん、あの窓の向こうは休憩所で、その先にガラスのドアと、下へ続く階段があるはずだった。

――その子、守ってやれ。

耳の奥に四堂の声が聞こえてくる。それと同時に、窓に立っていた自分の幻影が消えて、

代わりに片目を失った四堂の姿がそこに浮かんできた。

——おれみたいになるな、高塚。

金網にもたれかかったまま、目を細める。きつと四堂と自分はよく似ていた。友達から「浪人の妻」と呼ばれるくらい頑固なこの人が、なぜかとても大切で、何をしてでも守りたかった。そのためなら、自分の命も、人の命も惜しくないと思う瞬間があった。

でも、それは四堂さんみたいになることなんですか。

四堂の幻影は何も答えてくれなかった。ただ窓の向こうで揺らいで、ゆっくりと闇の中へ消えていく。静かに息をついて、幻影の消えた窓をまだしばらく眺めていたが、その刹那にふとあることを思い出した。

血まみれのドアにもたれかかった背中。なくした右腕。それでも刀を放さずに、ドア越しにつぶやいた四堂の最後の一言。それはくぐもった声で、よく聞き取れなかったために、ずつと頭の隅に追いやっていた。でもこうしていると、耳に残った言葉の断片が、今までよりもはっきりよみがえってきた。

——を信じるな。

確かに四堂はそう言った。あの時はあまりに追い詰められていて、その言葉さえ、ほとんど頭に入っていなかった。最初の部分も聞いた気がしたが、その部分の記憶にはノイズのよ

うなものがかかっていた。

窓を見たまま考えていると、急に遠くでガシャンという音がして、いきなり我に返る。音の方を見ると、監視カメラがバチッと火花を上げながら、首を垂れていた。赤いLEDの電球はすでに消えていて、薄い煙が立っている。

何が起こったのかと思つて振り返ると、喜多見がいつの間にか弓のようなものを握つて立っていた。口にはあの桜色の布袋がくわえられている。喜多見はまだじつとカメラの方を見たまま、背中からはゆらりと浮き立つような気配が漂っていた。

「小松さん……。」

パチパチと最期の火花を上げて、カメラは遠くで沈黙する。喜多見が弓でカメラを撃った。——それは分かったが、矢のようなものは持つていなかった。もう一度、監視カメラの方を見ても、カメラに何かが刺さっているようには見えなかった。

「これで右手の光は映らないよ」

喜多見が緊張した表情のまま、弓袋を肘にかけて言った。そして弓の弦をはずし、何度か上下に振ると、弓は三分の一ほどの長さに縮む。凍り付くほどに緊張していた表情は、弓を袋に戻す時には少し緩んでいた。喜多見がふうつと息をついて、微かに紅潮した顔でこっちを向く。

「行こう。みんなが起きる前に戻らないと」

-----  
25

「つたく、青春しやがつて」

そうぼやきながら、阿坂は小さな七輪の中に息を吹きかけて、炭が赤く燃え上がるのを確かめてから、網の上にみりん干しを並べ始めた。海——は遠かったので、代わりに千年川ちとせの河原に出て、逆さまにしたビールのケースに腰かけ、持参した七輪を組み立てた。人目を避けるために橋の下を選んだのはよかったが、あっちこっちに描かれた小汚い落書きがどうにも目障りだった。

「……今頃、あいづら一線越えてんじゃねえだろうな」

舌を打ちながら、みりん干しを手でひっくり返そうとして、思わず「あちちち」と声を上げる。火傷した指を耳たぶで冷やして、「くそっ——」とつぶやいてから、もう一回団扇うちわで炭の間に空気を送り込んだ。ただでさえ暑いのに、熱せられた空気が体にまとわりつくのは拷問だった。シャツを脱いで、横へ放り投げる。黒のランニング一枚でもまだ暑い。クリーニング屋でもらったしよぼい団扇で、自分と炭火を交互に扇あおぐしかなかった。

ふつとその時、舞い散っていた火の粉の流れが変わる。——後ろに誰かが立っていた。いつ

からそこにいたのか、まったく分からなかった。

「よう」顔を七輪の方に向けたままで言った。「やつぱり生きてたか」

橋桁の影から、じやりつと足音が響く。煙を避けて回り込むような足音が続いたが、気にせずに七輪を扇ぎ続けた。そのうちに、すらつと伸びた二本の足が視界に入る。それでやつと七輪から視線を上げると、左腕を三角中で吊った成駒が川辺に立っていた。

しばらくの間、黙ってその姿を見ていたが、ついに堪えきれなくなつて、盛大に吹き出す。三角巾を指差して「まだ治つてねえのかよ。体弱えーな、おい!」と告げると、さくつと頭に何かが刺さつた。それでも笑うのを止めようとせず、頭のトランプを引っこ抜いて、脇へ投げ捨てる。

「まあ、飲め」

コンクリートの上に置いてある缶ビールを一本手に取つて、成駒の方へ投げた。そして、自分もビールのプルタブを開ける。

「冷てえよな、高塚も小松も。海行くのに、誘つてもくんねえんだぜ。——しょうがねえから、はぶられたもん同士で飲もうと思つてさ」

成駒は手元のビール缶を見つめていた。それをよそに、ビールに先に口を付ける。コンビニで買ったビールは早くも冷たさを失い始めていた。

「夏も終わりだし、ビールぐらい飲んでも、バチ当たんねえだろ。こっちはプロの中学生なんだし」

そう言っている間にも、七輪の上ではみりん干しがジュージューと音を立て、煙を上げていた。

「つたく、何度も助けてやつてんのに、恩知らずだよな、あいつら——」

海岸と水着を想像しながら独り言を言っていると、成駒の立つている辺りからプシュッとプルタブを押し込む音がする。見ると、成駒がきれいなシルエツトでビールを傾けていた。

——かつこつけやがって、と思ひながら、いい匂いを上げ始めたみりん干しをひっくり返し、熱さに苦戦しながら一片をちぎり取つて口に放り込む。炭火で炙つたみりん干しは絶品だった。

「ほれ」成駒を促して言った。「おまえも食えよ。うめえぞ、これ」

割り箸をわざわざ割ってから成駒の方に放ると、成駒はそれを右手の指だけで二本とも受け止める。反射神経は片手でも落ちていないことを確認して、川の方に目をやりながらつぶやいた。

「おまえ、何回くらい中学生やつてる?」

煉瓦色になつて泡立つみりん干しを、ちよつとずつちぎつていく。どうせ返事はないだら

うと思つてみると、いつの間にか七輪のすぐ向こう側に成駒が立つていた。

「覚えてると思うのか」

意外に穏やかな声が響いたかと思うと、成駒が裂いたみりん干しを眺めながら、七輪の反対側に屈み込んだ。パチパチと音を立てながら、甘い匂いと共に、みりん干しの身がひとつひとつ反り返っていく。ちょうどいい焼き加減だった。成駒がみりん干しを一枚、口へと運ぶ。そして、しばらく囁んでいたあと、黙つてもう一枚、みりん干しを箸で取った。

「うまかつたんだろ」

涼しい表情を斜めに覗き込みながら聞くと、成駒は何も言わず、代わりに二枚目のみりん干しを口にする。「うまかつたんじゃないやねえか」と、勝ち誇った笑みで、新しいみりん干しを網の端に二枚並べた。ついでにコンビンで売っていたししゃもも数本、空いているところに置く。明かりのない川辺はすっかり暗くなつていた。七輪の出す弱い赤色の火だけが一帶を照らし出して、その火を挟んで座つたまま、しばらく成駒と交互にみりん干しを食べていた。後ろを流れていく川面に赤い光が反射して揺れている。

たいして好きでもないビールも、濃い味のみりん干しと合わせると、まづくもなかった。一本目を飲み終わって、もう一本ビールを取ると、成駒が当たり前のように手を差し出してくる。首をこきつとやつて、缶を七輪越しに成駒に渡した。

成駒は石に腰を降ろして、滴るししゃもの油で火柱が上がるのを器用に避けながら、みりん干しをひっくり返していた。こいつなら割り箸一本でも十分武器になるのは分かっていたが、気にもせず、団扇で炭を扇ぎ続けた。

「こんな記事を図書館で見付けた」

そう言つて、ポケットから折り畳んだコピー用紙を取り出して、成駒の方に差し出す。成駒は七輪の上のししゃもをきれいに並べ直してから、紙の方を見た。しばらくして、それを受け取つた成駒が、箸を網の縁に置いて紙を開く。

そこには一昨日図書館で見付けた永児の父親——高塚栄太郎たかづか へいさぶろの記事のコピーが載っていた。十年くらい前の新聞のアーカイブから見付けたものだった。成駒が無言でそれに目を通して

いる間、炭を扇ぎ続けながら語った。  
「高塚たかづかのオヤジは反社会的な組織と争つてた人権派の弁護士だ。新聞にも何度か名前が載つてる」

成駒が紙から目線を上げて、こつちを見る。何か言うかと思つたが、成駒はそのまま再び箸を取つて、ししゃもをひっくり返し始めた。

「おまえもなんか知つてるんなら教えろよ。——二度も殺し合いやつた仲だろ」

こつちも追加のみりん干しを指で返しながら聞く。七輪から立ち昇る煙がすぐくて、ちょっ

と咳き込んだ。成駒はその煙にも影響を受けないように、涼しい顔で一本ずつししゃもをひっくり返している。——息してねえんじやねえか、こいつ。と、東の間、本気で考えた。

ししゃもの腹が割れて、油の乗った黄色い卵が弾け出る。もともと期待はしていなかったが、成駒は何も答えない。「ちつ」と、また舌打ちをして、首を振りながら、みりんでべたつく指で成駒の方を指した。

「おまえだつて気になつてんだろが。高塚のあの異様な潜在能力とか。小松を守る一心であなつてるとか言うんじやねえだろうな」

成駒の口角が微かに上がった。やはり永児の話になると、微妙に表情が緩む。——馬鹿馬鹿しくなつて、成駒の手からコピー用紙を奪い取り、くしゃつと潰して、網の隙間から炭火に晒した。そして、一気に燃え上がる紙をしばらく宙にかざしたあと、火が指先に届く前に、川の流れへと投げ込む。ジュツという音がして、一瞬赤くなつた川面が<sup>かわも</sup>あつという間に火を飲み込んだ。

「呼び出したのはそれだけか」

成駒が聞く。

「いや」と、答えた。

成駒は小まめにししゃもをひっくり返していた。その向かいでみりん干しをちぎり取り、

ガムのように噛みながらつぶやく。

『社』の一部が裏切つてゐるのは聞いているか」

成駒の眼鏡が赤い炎を反射していて、その向こうにある目は見えなかった。きれいな黄金色に焼き上がったししゃもを高く持ち上げ、頭から先にししゃもにかじり付く。成駒もししゃもを一本、箸先で半分に折つてから、その尻尾側をつまみ上げた。

「今、おれはそいつらの資金源のひとつを追つてゐる」ししゃもの卵が口の中で弾けるのを楽しみながら言つた。「借金で首が回らなくなつた連中を電車で飛び込ませて、ダイヤ狂わせるのが商売の畜生どもだ」

川のはるか向こう側の土手を、夜更かしの学生が数人、自転車走つてゐた。中学生か高校生かは分からない。大声で笑いながら何かがなり合つてゐるのが、ここまで聞こえてくる。その自転車のヘッドライトが橋の向こうに消えるのを見届けてから、ししゃもを飲み込んで続けた。

「一部とはいえ、『社』が裏切るなんて、うちの組織も落ちたもんだ」蒸気で曇つた成駒の眼鏡に向けて囁く。「まじめに殺し合つてゐるこつちの身にもなれてんだよな」

成駒は黙つて、ししゃもの尻尾を食べていた。

「まあ、おまえには関係ねえか。——なんか知つてゐるかと思つただけだな」

そう言つて、肩をすくめて次のみりん干しに手を伸ばした時、その指を成駒の箸がカチツと止める。

「おい——」

箸をかわして、みりん干しを取ろうとすると、その指先も成駒の箸が横へ弾く。その間にもみりん干しは、網のほかの場所に移動されていた。成駒が悠然とそのみりん干しをひっくり返す。三度舌打ちをすると、収まり始めた煙の中で、ぽつりと成駒が口を開いた。

「昨日まで四国にいた」

突然の一言に顔を上げると、成駒は珍しく視線を逸らした。眼鏡が赤く光ったまま、川の流れの先を眺めている。成駒が囁くような声で続けた。

『塔の村』って、聞いたことあるか」

「いや」とだけ返した。すると、成駒はビールを一口飲んでから続ける。

「人並み外れた五感を持った、『塔の一族』が閉じ込められてた村だ。何世代にも渡って隔絶された結果、血が濃くなつて、『駒』と呼ばれる異能な戦士が産まれるようになった」

思わず、七輪越しに成駒の方をじつと見た。眼鏡の縁から成駒もこつちを見返す。間に挟まれた七輪の上で、ししゃもの尻尾に火がついて燃え上がるのを、手で扇いで消した。成駒は無表情のまま、訥々と語り続ける。

「その代償として、塔の村ではほとんど男が産まれなくなつたらしい。だから代わりに孤児を引き取つて、駒として育てるようになったさうだ」

橋の上をダンプカーが通つて、大きな音が響く。天井がガタガタと揺れて、やかましい音が鳴る間、七輪の炎越しに成駒とずつと視線を合わせていた。そのうち成駒の眼鏡から曇りが取れて、その奥の涼しい目が現れる。

「本当の話か、それ」

そう聞くと、成駒は肩をすくめるような仕草を見せる。

「昔話だ。——その『塔の村』があつたと思われるところに行つてきたが、何も見付からなかった」七輪の炭がそろそろ弱くなつていた。網の上にはもうししゃもも半分しか残つていない。そのししゃもを取つて、ぽいつと口に放り込む。それから七輪を足の裏でひっくり返して、焼けた炭を地面の上に転がした。

「おまえは信じてんのか？」

聞きながら、赤い炭をひとつずつ川の中へ蹴飛ばしていく。川に落ちた炭が水煙を上げながら沈んで、水蒸気の匂いを橋の下に充滿させていた。白い煙が足元にこぼれ出して、その煙の中に見え隠れしながら、成駒が目を細めた。

「ASが実在しなければ、笑い話ですむところだ」



その一言に眉をひそめる。

「あの毒薬がどうかしたのか？」

今日初めて、成駒の顔に明確に表情——あるいはこいつの場合、それに一番近いと思われるものが現れるのを見て、こつちも動きを止めた。成駒は暫しの間のあと、おもむろにつぶやく。

「おまえ、もしかしてASが何か知らないのか？」

足元に残った赤い炭が土を焼く音がする。そのぼんやりとした光が、血の色のような赤を辺りに振りまいていた。それも川の中へ蹴り飛ばすと、成駒の眼鏡がゆっくりこちらに傾いて、その奥の冷たい目がさらに細く絞られる。

「何って、毒だろ？」

そう言うとき、成駒が小さく首をひねった。

「違う。ASは——」

非常階段の三階の踊り場まで上がると、地上にいた時よりも強く風を感じる。重い階段の鉄柵が風に揺れて、微かに軋んでいた。かなりの強風だったが、涼しくはない。海から運ばれてくる湿気を含んで、体にまとわりつくいやな風だった。

喜多見は桜色の弓袋を手には握り、場に立ち、肌に緊張を覚えながら周囲を見渡した。今のところ、人の気配は感じられない。少し先を行く永児は、すでに三階の窓にたどり着いて、中を覗き込んでいた。

「見える？」

と、近付いて聞くと、永児が小さく首を横に振る。窓の内側はしつかりブラインドが閉められていたが、それでもわずかな隙間から、永児はあきらめずに中を覗いていた。真剣なその横顔を見ていると、さっきの荒れた手の様子が頭をかすめて、胸の奥が軋む。さっき言った言葉のひとつひとつが、時間が経つに連れて、全部自分に跳ね返ってきていた。助けてもらってばかりなのに、なんて言い草なんだろう、と思いつつ、永児の横顔をずっと見ていた。

永児が窓から一歩離れて、こつちを見る。金網を越えてから、ほとんど言葉を交わしてい

なかったが、永児はずっと何かを考えているように見えた。その顔を見る度、胸の軋みは大きくなる。

「小松さん」

いきなり名前を呼ばれて、びくつとなった。

「右目、赤いみたいだけど、だいじょうぶ？」

永児が自分の目を指しながら聞く。

「だいじょうぶ。さつきこすったから——」

慌てて顔を背け、早口で答えた。永児はただうなずいて、さらに上へ向かう階段の方へ目をやる。一階も二階も当然のように施錠されていて、残されたのは四階と屋上だけだった。中へ入る手段が何もなかったら、永児はどうするつもりなんだろう——と不安が胸を過ぎったが、今はそれを考えないようにした。

永児が階段へ向かい始める、それに続こうとしたが、一步踏み出したところで、急に永児が右手を横に突き出した。

「待って」

永児がそれだけ告げて、動きを止める。何かに耳を澄ませているようだった。自分も左右を見渡したが、相変わらず人<sup>ひと</sup>気はなく、物音も聞こえてこない。どうしたの、と聞こうとし

たが、その前に「動かないで」と、強い声で止められた。その表情は、一瞬で怖いものになっていた。

柵の下を見た。裏庭が広がっているだけで、誰もいない。風の音以外、何も変わった気配はなかったが、永児の表情はどんどん険しくなっていく。それを見て、弓袋の紐に手をかけようとした時、急に永児が叫んだ。

「伏せて！」

詠も分からず、金属製の床に倒れるようにしやがみ込む。同時に黒い影が階段の上から降ってきて、すごい勢いで手すりを蹴った。一瞬、非常階段全体が揺れるのを感じて、どうにか鉄柵を握り締めて堪える。

影は永児の右腕をつかみ、体ごと窓ガラスへと叩き付けた。凄まじい音でガラスが内側に吹き飛び、破片がこつちまで降り注いでくる。飛んでくるガラス片から必死に目を守っていると、視界の端でブラインドが引き千切れるのが見えた。それと一緒にくたになって、永児の姿が窓の中へと消える。

真つ暗な部屋の中で赤いランプが点滅を始め、非常ベルのけたたましい音が鳴り響いた。顔を守っていた腕を降ろし、すぐに永児のところへ駆け寄ろうとしたが、その前にカツンという音で、踊り場に人影が降りてくる。ガラスから洩れる赤い光が、そのシルエットをチカ

チカと断続的に映し出していた。褐色の肌と、ショートカットの髪。——暗い中でも、すぐにそれが誰か分かった。

「山田さん——!?」思わず声を上げる。「なんでここに——?」

山田は冷たい目でこつちを見下ろしながら、無言で首の後ろに手を差し込む。そして、シャツの襟から細い剣のようなものを引き出し始めた。山田の小柄な体にはとても隠し切れないほどの長い剣が襟首から現れて、どんどん伸びていく。あ然としたまま見ていると、プラスチックのような白い剣は、やがて山田の身長のおよそ三分の二ほどの長さになった。

「塾長を裏切ったな」

山田が剣をぶんと横に振りかざし、凄然<sup>せいぜん</sup>とした声で言った。

「ちが——」

山田の視線に圧倒されて、言葉が途切れた。剣を構えた山田が一步、距離を詰めてくる。反射的に後ろを見たが、すぐそこに鉄柵があつて、下がるころはどこにもなかった。下の踊り場へ跳ぶしかない——そう思つて身構えたが、その時、山田の背後の暗闇に、黄色い光がぱつと灯つた。

窓の向こうで影が揺らめく。次の瞬間、暗闇の中から黄色に光る手が飛び出して、山田の腕を後ろからつかんだ。山田の顔に瞬間、驚きが過ぎつたが、それを消し飛ばすように、黄

色い光が山田をすごい勢いで窓の方へひっぱる。まるで闇の中へ吸い込んでいくようだった。

「な——!?」

山田は一瞬抵抗する様子を見せたが、そのまま残つた窓ガラスを巻き込んで、激しい音と共に建物の中へ引きずり込まれる。そのあとに、血の付いた包帯がふわりと宙を舞っていた。

「高塚くん——!」

叫んだ声を非常ベルの音がかき消して、風が強く吹き付けてくる。その風に乗って、包帯がこつちへ飛んできた。とつさにそれをつかんで部屋着のポケットに入れ、弓袋から弓を出そうとする。だが、もたついているうちに、建物の中からガラスが割れる音が響いて、続けて重たい衝撃音が聞こえてきた。弓を片手に、割れた窓に飛び付くと、赤い非常灯が点滅する中で、二つの影が交錯するのが見える。

ガシャンと金属の棚が揺れて、上に載っていたものが床に転がり落ちる音がした。奥歯を噛み締めて、弓袋を紐で手首にかける。そして、窓枠を乗り越え、真っ暗な部屋の中へと飛び込んだ。

「高塚くん、どっ!?」

いきなり山田の白い剣が目に入つて、とつさに左へ飛ぶ。今までいたところを剣が白い弧を描いて通過して、金属の窓枠が真っ二つに切れた。背筋に寒気が走るのを感じて、なんと

か弓を開こうと必死に足場を探ったが、足元には点滴の瓶のようなものが無数に転がっていた。資材室だ——と思って、足に当たった瓶のひとつをつかむと、窓から入ってくる月明かりで瓶のラベルがぼんやり見える。AS—732、という無機質な文字がそこに記されていた。「AS——!?」

危うく手の中の瓶を落としそうになって、なんとか持ち直す。自室の天井の景色が頭を過ぎって、それだけで手が震えるのを感じた。記号のあとにも数字とアルファベットが並んでいたが、続きを読む取れる前に、暗闇の中の黄色い光に目を奪われる。光を追うと、赤い非常灯の中に永児の輪郭がぼんやり浮かび上がった。それと対峙する形で、山田の形をした影が窓を背にして剣を構えている。

息が止まるような光景だった。反射的に弓に弦をかけようとしたが、手が勝手に止まる。山田を撃てるはずがなかった。——弓月さんの友達だった。それを弓月さんの作った弓で撃つなんて許されるわけがない。

非常ベルが狂気を誘う激しきで部屋を包んでいく。どうしていいのかわからず、硬直したままでも永児の方を見ると、永児の光を纏った右手には、同じASの瓶が握られていた。全身で危険を感じて、「高塚くん、やめて!」と叫んだが、もう遅かった。黄色い光の尾を引きながら、永児が山田に向けて瓶を投げる。その動きが、点滅する赤い光の中で、ストロボのよ

うに細切れに見えた。

割れる——。

そう思って、ぐっと目を閉じる。そして、ガラスが碎ける音を息を吞んで待ったが、いつまで経っても音は聞こえてこなかった。代わりに非常ベルが鳴り止んで、目を開けると同時に、部屋の明かりがぱつと灯る。すごい眩しさに、瞬きを繰り返した。

「はい、そこまで」

割れた窓の外から男性ののんびりした声が響く。目が慣れてくると、永児が山田の前でガラス片を片手に立ち尽くしているのが見える。山田は瓶を避けた拍子に後ろに倒れて、床に片膝を突きながら、辛うじて剣を構えていた。肩口に携帯電話を挟んだ男性が、ガラスの割れた部分から中を覗き込む。その手には、さっきの瓶がしっかりと受け止められていた。

「ええ。大丈夫です」そう携帯に向かって言いながら、男性が窓の中に手を伸ばして、内側からドアの鍵を開ける。「すみませんね。うっかり窓割っちゃいました」

ドアがガチャッと開いて、入ってきた男性は電話に「どーも」と告げてから、通話を切った。そして、困ったような笑みで部屋の惨状と、そこに立ち竦む全員を見渡した。

「こんな時間に何してるんだ、君たちは」男性は溜息をついてから、軽く肩を落としてみせる。「もう少し常識がある子たちだと思っただが」

直感的に、その人も駒だと思った。でも、今まで見てきた人たちとはだいぶ雰囲気違った。年齢はかなり上のようで、二十代後半くらいに見える。大人の落ち着きのある人だった。

男性が山田の方をちらつと見る。すると、殺気立っていた山田の顔が、途端に気まずそうなものに変わった。

「特におまえは何やってんの」

そう言つて、男性は永児に「ちよつとごめんね」と断ると、永児の前を通つて、山田の頭をゴスツと殴り付ける。部屋の四方に響くほどの音がして、永児が一步後ろに引いた。山田は低く呻き声を上げたが、何も反論することなく、剣を片手に壁際へと引き下がる。さっきまでの激しさが嘘のように、山田がおとなしくなるのを見て、肩から力を抜いた。

男性は手に持つている瓶のラベルを確かめて、それを近くの棚に置いた。そして、じつと身構えたままの永児の方に、興味深げな視線を送る。永児はまだ強い緊張を孕んだ表情で、男性を見ていた。黄色く灯つた右手の中には、ガラス片がしつかり握り締められている。強く握り過ぎて、永児の手の内側から一滴、血が床に滴っていた。

「高塚永児くんだね」

男性が言つた。永児は何も答えなかった。もう一滴、血が床の上に垂れる。

「ぼくは香坂誠こうさかまこと『塾』で学習主任をやらせてもらっている」

永児が一瞬だけこつちを見た。でも、その視線はすぐにまた香坂の方へ向き直る。香坂は続けて、壁際の山田へ頭を傾けた。

「そのそそっかしいのが部下の山田。塾長から見張つてろつて言われて来たんだが、思った以上にひどいことになって驚いたよ。何か探しものでもしてたのかい？」

「私たち——」

そう言いかけて、はたと気が付く。手に持ったままの瓶の中で、透明な液体が音もなく揺れていた。表面に貼つてあるラベルが蛍光灯の光の下で、今度こそはっきりと読み取れる。

「ARARAGI——？」

思わず声に出してラベルの一行目を読んでみた。そのあとには「SERUM」という単語が続いていて、頭文字は「AS」だった。おそろおそろ瓶を目の高さにかざすと、英語の横に小さく日本語で「血清」という文字が添えられているのが分かった。

「探してたものはそれじゃないだろうね」香坂が指一本で頬をかきながら言つた。「そいつはやたらと危険なものだぞ」

「ASって——」

ふいに瓶から手を放したくなるほどの気持ち悪さに見舞われて、全身に鳥肌が立つてくる。

急にいろんなことの辻褄が合うような気がした。蘭は——確か、静の名字だった。

「ASってなんなんですか——？」

声が怯えるのを隠せずに聞くと、山田の声が先に返ってくる。

「おまえたちに関係ないだろ！」

しかし、山田は香坂に視線を送られて、すぐに口を閉ざした。香坂が顎先の無精髭を撫でながら、ふうむ、と迷ったような素振りでごつちを見る。唾を飲み込んで、微かな震えを堪えつつ、その視線を見返した。やがて、香坂は軽く肩をすくめる。

「血だよ」香坂があつさりと言った。「蘭家の血液から抽出された体液だ」

重い両開きの扉を抜けて、書斎の隅に並んだ本棚の前に立つ。そこにかかった血のように赤いカーテンを眺めながら、<sup>ほまれ</sup>誉は口を開いた。

「大事な報告があります」

そう言うと、中から「入りなさい」と告げるシスターの声が響いてくる。誉はカーテンを軽く引いてから手を止め、三度に分けてカーテンを開いた。そうして本棚の裏側に作られた小部屋に入ると、畳一畳ほどの小さな部屋は、電球の薄明かりひとつで照らされていた。シスターはその中央で粗末な安楽椅子に座って、壁に貼ってある古い絵をじつと見つめている。誉は内側からカーテンを再び三度に分けて閉め、言葉を続けた。

「内偵の駒から連絡がありました。やはり『零し』<sup>ろし</sup>からアジアの『魚群』<sup>イサナ</sup>に資金が流れているようです」

誉が言い終わると、シスターは絵を見たままで返事をした。

「そうですか」

小さな電球の明かりではほとんど見えなかったが、その絵には宗教画のようなタッチで、

高くそびえる塔が描かれていた。東洋のものとも、西洋のものともつかない、不可思議な造形をした塔だった。

シスターは自分の左手の甲につながっているプラスチックの管に、そつと右手を添えながら続けた。

「いずれはこういうことがあると思っていました」

管の中には赤い液体が流れていて、その先は安楽椅子の足元に置かれた奇妙な機械につながっていた。そこにセットされたガラスの瓶の中へ、赤い液体がポタポタと落ちていく。ガラスの瓶はもうほとんどいっばいになっていた。それを見ると、シスターは管の途中にあるクランプをカチツという音で閉じる。それでガラス瓶の中に落ちる液体が止まった。

「目的は間違いない、これでしよう」

そう言いながら、シスターはガラス瓶を機械からそつとはずし、管の方に差し出した。管はそれを受け取って、部屋の片隅にある小さな金属製の箱へと持っていく。箱の取っ手をつかんで引くと、蓋が開いて、中から白い冷気が床の上に流れ出した。

箱には管が持っているのと同じガラス瓶が五本入っていた。すべてが凍り付いている。そのうち、二本を端に避けて、できた隙間に今渡されたもう一本の瓶を置いた。三本ずつ、六本、赤い液体の入った瓶が冷たい金属の箱の中に並ぶ。蓋を閉じると、白い空気が軽く足元で舞

い上がって消えた。小さな部屋は暑かったが、その間だけ、ほんの少し部屋の温度が下がる。

シスターの頬はいくらか瘦けていた。手の甲に消毒綿を当てて、針を抜いたシスターが、立ち上がろうとして足元をよろめかせる。管は反射的に前に出たが、シスターに横へ押しやられて、ドンと背中を壁にぶつけた。何も言わない管の傍らで、シスターはよろめきながらも、倒れることなくまっすぐに姿勢を正した。

「憑の者から定時の報告が届いています」シスターが変わらず落ち着いた声で言う。「抗体を持つ少女の名前は、小松喜多見というそうです」

再び暑さに満たされ始めた小部屋で、シスターは修道着の袂から写真を一枚抜き出して、安楽椅子の設置きに置く。それから、修道着のしわを指先で丁寧（たしな）に直して、小部屋の入口のカーテンを開けた。

「不思議なことに、一度その子の名前が上がっていて、何者かの手で抹消されていました」

書斎は深夜の静かな空気に満たされていた。古い本の匂いが小部屋の中に入ってくる。管が設置きの上の写真を取り上げると、弓道着の少女が不器用な手付きで弓を引いている姿が写っていた。

「その子を調べなさい。その子の周辺にきつと『蛭』もいます。『蛭』に協力している者も、みんな分かるはずです」



シスターがそう言い残して去っていったあと、誉はしばらく小部屋の中で、写真を眺めていた。その右手の指先に、いくらか血が付いている。さつき瓶を受け取った時に付着したのだろう。

「小松喜多見」

誉はその名前を何か無機質な用語のようにつぶやいて、血の付いた指で弓道着姿の少女の上に円を描いた。ひとつでは落ち着かなかつたので、そのあと、さらに二つ円を描いた。三つ重なった赤い丸は、まるで弓の的のようだった。

「返してくれるかい、それ？」

香坂が手を差し出してきた。――血、という言葉が頭の中を渦巻いていて、一瞬、喜多見は香坂の言っていることが分からなかった。「ASが体の中に残留している」という静の言葉を思い出して、気持ち悪さが胸の奥からこみ上げてくる。

その間に、手の中の瓶を香坂に抜き取られていた。はつとして顔を上げると、香坂は瓶を片手に、空いた手で携帯を取り出している。

「君たちのおかげで塾長にどやされるよ」

そう言って、香坂が携帯のボタンを押そうとする。思わず「待つて――」と言いかけた。でも、その前に、部屋の隅からガラスを踏むジャリッという音が聞こえてくる。

「電話を置いて下さい」

永児の声が部屋の中に響いた。香坂が手を止めて、声の方へ視線を流す。その後ろで山田も剣をつかんで、一歩踏み出していた。自分も同じ方向へ視線を送ると、永児が右手にASの瓶を持って立っていた。蛍光灯の下でも、まだその右手はうっすらと光っている。

「動かないで」永児が前に一歩進み出て言った。「もし動いたら、瓶を割ります」

香坂が電話をボタンと閉じる。それを確認してから、永児はASを武器のようにかざして、部屋の真ん中に立った。手の光が、無色透明のASをわずかに黄色く染めている。左手にはまだガラス片が握られていた。

「小松さん、だいじょうぶ？」

永児がこつちを見ないまま尋ねてくる。つい無言でうなずいてから、慌てて「平気」と言い直した。永児は香坂をじつと見つめていた。香坂も薄い笑みで永児の方を見返している。

「どうするつもりだい、高塚くん？」

携帯をしまいながら、香坂がどこか楽しげな声で尋ねる。永児はためらわずに答えた。

「蛍光剤を落とす薬がどこにあるのか、教えて下さい」

「なるほど」香坂は顎をこすりながら、永児が持つっている瓶にちらりと視線を落とした。「侵入したのはそのためか。——しかし、高塚くん、700番台のASは致死性だ。瓶を割ったら、君や小松くんも含めて全員即死だが、それでいいのか？」

「小松さんは二度、ASを生き延びてます」

永児は躊躇せず、そう言い返した。

その言葉で、また全身を流れる血液を感じて、微かに体が脈打つ。ずっと右手の先がしび

れていた。それが緊張のためなのか、ASのためなのかは、よく分からなかった。ただ、しびれはどんどん広がっていく。

しびれを抑え込もうと弓袋を握り込んでいると、ふいに山田の剣先が床から離れるのに気が付いた。とつさに口を開きかけたが、一瞬早く、香坂の方が声を上げる。

「——山田、動くな」

それで山田の動きがびたつと止まる。後ろにいたはずなのに、なんで——と思って、背筋がぞくりとする。それでも、さして緊張している様子もなく、香坂は耳の上をかきながら永児に告げる。

「分かったよ、高塚くん」

とてもあつさりそう言つて、香坂がこつちを見た。

「悪いけど、その奥のB列に『FR』って書いてるボトルがあるから、持つてきてくれないか」  
反射的に「はい」と返事をしてしまう。学校で先生に言われるのと同じような感じだった。ちらつと永児の方を見たが、永児は香坂から一瞬も視線を逸らさない。——その理由はなんとなく分かった。この人は怖い。今までの駒とはまるで違う、静によく似た、完成された雰囲気を持つていた。

弓袋を紐で手首に提げてから、足元に転がる瓶に注意して、列の切れ目から奥を覗いた。

棚にはどれもアルファベットの文字が記されていて、Bと書かれているのは一番奥の棚だった。その棚の端には、確かに蛍光剤と思われる黄色い液体の入った瓶が見えていた。

一回だけ永児の背中に目をやってから、棚の間へ踏み出して、そのまま急いでB列のところへ向かった。割れたガラスが時々、足の下で音を立てる。通過していく棚はどれも無数の薬品で埋まっていたが、それらが普通のものなのか、特殊なものなのか区別が付かなかった。血液から毒を作る——その異様な感覚が薬の列から伝わってきて、駆け抜ける間、寒気が止まらなかった。

B列にたどり着くと、黄色い液体の前を一気に通過して、奥にあるプラスチックのボトルを一本手に取った。ラベルには「FR-006」とだけ記されている。ほかのボトルも見たが、全部同じものだった。そのボトルを手に、列の間を駆け戻ると、永児たちはまだ同じ状態で睨み合っていた。

「ありました」

そう言って、ボトルを持ったまま、永児の横に立つ。

「蛍光剤と一緒に置いてあったから、たぶん本当だと思う」

永児に囁くようにそう告げた。永児はまっすぐ香坂の方を見たまま、動かずにいる。すると突然、香坂は大きな溜息をついて、持っていたASの瓶をすつと頭の上に振り上げた。後

ろにいる山田が「何を——」と、一歩身を引く。永児も体を硬直させたが、それしかできなかった。香坂がASの瓶を力いっぱい、床に振り下ろす。全員が凍り付く中、瓶はゴスツという重たい音で床に当たって、跳ねることもなく、その場に転がった。

「叩き付けたくらいじゃ割れないよ、この瓶は」

香坂が床の瓶を爪先で蹴りながら言った。瓶は中に入った液体を波打たせながら、永児の足元まで転がってくる。香坂は今までのことが嘘のように、瓶を構えたままの永児を無視して、近くの棚へと歩いていった。

「仮に割れたとしても、700番台は呼吸器には影響しないから、意味はないだろうな」

香坂は苦笑しながらそう言って、棚の前に屈み込む。そして、「ごそごそ」と何かを探し始めた。

「じゃあ、なんで——」

力が抜けたようにつぶやいて、永児がASの瓶をゆっくり脇へ下ろす。何かがぶつかる音と「いたた」というつぶやきが響いて、次の瞬間、香坂が棚の奥からプラスチックの洗面器を引き出してきた。頭をさすりながら、香坂が永児の前の床に洗面器を置く。

「使ったらいい」

それだけ言って、香坂はまた頭をさすりながら、山田のところへ戻っていった。

永児が初めてこつちを見る。持ってきたプラスチックのボトルをそつと永児に差し出すと、

代わりに永児の手からA Sの瓶を取った。永児は左手のガラスの破片をポケットにしまつて、慎重な手付きでボトルを受け取る。

四人の視線が束の間、部屋の真ん中で交差した。山田はまだ剣を握っていたが、その前には香坂がしつかり立ち塞がつていた。永児は香坂の方を見たまま洗面器の横にしゃがみ込み、ボトルキャップをひねる。キャップの封が切れるパキパキという音が、部屋の中にやけに大きく響いた。

永児がボトルを傾けると、薄い水色の液体が洗面器の中を満たしていく。瓶の中身が全部なくなると、洗面器はほとんどいっぱいになった。かすかに薬品っぽい匂いがしたが、比較的馴染みのある、洗剤のような匂いだった。

永児が空になったボトルを横に置くと、部屋の中に、奇妙な緊張が満ちてくる。これで本当に落ちるんだろうか——と思つて、自分もA Sの瓶を床に置き、手首に提げた弓袋を無意識に握り締めた。

永児がボロボロになった右手を開いて、掌をそつと液体に浸ける。小さく痛みを我慢する声が出れて、一瞬、手が水面で止まった。でも、すぐに永児は右手を一気に液体の中へと沈める。傷にほぼ染みるのか、永児の眉間に深いしわが寄った。水面にいくつかの泡が浮いてきて、時間がじわじわと過ぎていく。それでも、薄い青の液体はそのままの色を保ち続けた。

永児が右手を揺すつても、薬液の中で黄色い光は微かに灯ったままだった。

「蛍光剤が落とせるのは、付いてからせいぜい二十四時間以内だ」香坂が無慈悲な声で告げる。「気の毒だが、それはもうとつくに細胞まで染み込んで。量にもよるが、半年は取れないはずだ」

それでも永児はあきらめようとせず、左手も洗面器に突っ込んで、右手をこすり始めた。永児の呼吸が速くなっていることに気が付いて、「高塚くん——」と声をかけたが、永児は手を洗うのをやめなかった。あまりに強くこすりすぎて、薬液の中にうつすらと赤いものが混ざり始める。

「高塚くん、やめて!」

そう言つて、永児の右腕をつかんだ。血が水面をどんどん広がっていく。

「これが落ちないと——」永児は独り言のように言つて、手をこすり続けた。「もう母さんも限界なんだ。こんなこと、もう続けてられないんだ——!」

右手の甲が切れて、赤い筋が水の中で渦を描く。

「高塚くん、お願いだから!」

そう叫んで、永児の手をひっぱつて、無理矢理液体から引き上げた。手が空気に触れた瞬間、永児は押し殺した悲鳴を上げて、右手の手首を握り締め、床に膝を突く。赤く染まった液体

が手からポタポタと洗面器の液面に落ちていた。右手は真っ赤になって、尚、弱い光を發し続けている。

慌てて周りを見渡し、布巾のようなものが棚に積んであるのを見付けた。そこから何枚かをひたたくて戻ってくると、永児の右手をそれで覆った。うつむいた永児の口からは、まだ激痛を堪える声が洩れている。それでも、心を鬼にして、布巾の上から両手で右手を包み込んだ。

二重に重ねた布巾の表面にまで、赤いものが染み出してくるのを見て、奥歯を噛み締める。永児は力なく床に座り込んで、右手を押さえたまま、深く項垂れていた。永児の口からとつさに出た母親の名前に動揺して、何も声をかけられなかった。――夏休みの間、何度もメールをしていたのに、いつだって永児はだいいじょうぶ、としか言わなかった。海岸でも、同じような答えしか返ってこなかった。でも「だいいじょうぶ」なはずはなかった。「だいいじょうぶ」というのは、永児の口癖みたいなものだった。――分かっていたはずなのに。

「高塚くんは根性があるな。その傷で除光液に手を入れたら、火で炙るぐらい痛いはずだ」

それを聞いて、永児の右手を両手で握ったまま、香坂を睨み付けた。

「知っててやらせたんですか!」

考えるより先に、怒りでそう叫んでいた。思ったよりも大きな声が出て、山田が剣を構え

直して前に出る。

「やってみないと、納得してくれそうもなかったからね」

香坂はそう言いながら、山田の左肩をつかんだ。山田がそれでいきなり、「――っ!」と声にならない声を上げて、身を縮める。

「どうした、山田。脱臼でもしたか?」香坂の声は優しくなかったが、どこか口調が怖かった。「治してやろうか」

「いいです」

山田は拒むようにそう言つて下がったが、香坂は同じ優しいトーンで繰り返した。

「遠慮するな」

「いいですって!」

心底いやがつている様子で、山田が壁際まで後退する。しかし、すぐに香坂に追い詰められて、どうすることもできずに左右を見回した。あつけに取られて見ていると、香坂がいやがる山田を喜々としてつかまえる。そして、山田の華奢な体が壊れるかと思うほどの勢いで、ゴキッと肩の関節を押し込んだ。頭蓋の内側に響くような鈍い音と共に、堪えきれない山田の悲鳴がはつきりと聞こえてきた。

香坂が軽く微笑みながら、山田の体を放す。山田は剣を持ったまま、床に両膝を突いて崩

れ落ちた。

「ありがとうは？」

容赦ない笑みで、香坂が山田に聞く。山田はかすれた声で辛うじて「ありがとうございます……」とつぶやいた。それにうなずいて、香坂は非常階段に続くドアの方へと去っていく。

「ぼくは先に帰るけど、君たち二人も五分以内に敷地外へ出ろ。いいな」

それだけこつちに告げると、香坂はカチャツとドアを開けた。そして、一回外へ出てから、思い出したように立ち止まり、まだ痛みで虚ろな表情になっている山田に言った。

「仲良くしろよ、山田。分かっているな」

山田は小さくうなずくのでせいいっぱいだった。

「それと、残ってこの掃除な」

最後まで笑顔の香坂に、山田は「腕が上がりません」と不満げに訴えたが、香坂の返事はすげなかった。

「二本あるだろ」

それでドアがパタンと閉まる。非常階段を降りていく香坂の足音が徐々に遠ざかって、完全に聞こえなくなると、山田はやつと体を起こして息をついた。そして、さっきまでとは違って変わった、膨れたような顔でこつちに向かつて言った。

「母親——いるだけいいだろ」

それを聞いて、永児もゆつくり顔を上げる。山田はぼつが悪そうに、咳払いをしてから続けた。

「母親を知らない人間だっていっぱいいるんだ。いるだけ感謝しろよ」

乱暴な口調だったが、その声には不思議とどこか優しい響きがあった。何も言い返すことができず、しばらく黙ったまま、永児と二人で山田の方を見つめていた。すると、山田は壁を支えに立ち上がって、プラスチックの剣を近くの棚に置いた。そして空いた手で、いきなりシャツのボタンをはずし始める。突然のことに、え——？　と思つたが、その間にもシャツの下の小麦色の素肌がどんどん露わになつていく。

思わず、永児の視線を遮るように前に出た。ボタンを全部はずし終えた山田が、ためらいなく床にシャツを脱ぎ捨てる。黒いレースのブラだけになった山田は、もう男の子には見えなかった。

「早く出てけよ」

そう言つて、山田が棚の上の剣を取り上げ、それを自分の肩口に当てる。途端に剣は肌に接した部分から、布のような柔らかさに変つた。その柔らかくなつた剣を、山田はサラシのように自分の体に巻き付け始める。つい見入っていたことに気が付いて、永児の腕を取り、

導くように非常口のドアへと向かった。そして、永児を非常階段に押し出して振り返ると、ブラのホックに剣の先をひっかけている山田の姿が目に残った。

「それ……熱可塑性ねつかそせいなんとかつていう素材ですよ？」

気が付くと、そう聞いていた。山田がシャツの袖に再び手を通してながら、こつちを見る。

「塾長に聞いたのか？」

うなずくと、山田はちよつと黙り込んだあと、シャツを軽く羽織ったままで背中を向け、奥にあるロッカーの方へと歩いていった。それを横目に外へ出て、ドアを閉めた途端、小さな悲鳴が口から洩れる。右腕を抱えて鉄柵にもたれた永児の体が、鉄柵の外に倒れかけていた。慌てて永児のシャツをつかんで引き戻すと、永児はそのまま踊り場の床に倒れ込む。——でも、その目はずつと鉄柵の向こうの何かを見ていた。

「塾長だ」

永児の堅い声に、思わず凍り付いた。

「やつと思ひ出した」

永児の視線は建物の三階の窓に向けられていた。つられてそつちを見ると、月明かりで窓の向こうがうつすらと透けている。ちょうど四堂がいたところと同じような、ガラスのドアと階段がそこにあつた。額に汗が浮かんでくるのを感じて、永児の方を振り返ると、永児は

ぼんやりと宙に視線を向けながらつぶやいた。

「死ぬ前に四堂さんが言っただ」

汗がこめかみを流れ落ちる。

「『塾長を信じるな』って——」



今日もまた、正気を失わせるような真夏日になりそうだった。

まだ昼前にも関わらず、すでに地表は最高気温に達する勢いで熱を帯び、道の先には蜃気楼がうつすらと立ち昇っていた。阿坂はその中を、シャツの首元をパタパタさせながらゆつくり歩き続けた。二日酔いの頭に蟬の声がやたらと響く。見上げると、真つ白に輝く楠木の向こうに、峰の家へとつながる長い階段があった。

頭がズキンとなって、目を閉じる。拳で殴ってみたが、頭痛は一向に去る気配を見せない。

——飲み慣れないもの飲むもんじゃねえな、と後悔しながら立ち止まり、塀に手を突いて、痛みの波が去るのを待った。

成駒も今頃は二日酔いで寝込んでいるはずだと信じたかったが、頭に浮かんでくるのは涼しい顔の成駒のイメージばかりで、余計に頭痛が増していく。帰り際に空き缶を数えてみると、向こうの方が一本多く飲んでいたことにも腹が立った。

「……やつぱり殺してえ、あいっ……」

ぼそつとそうつぶやくのがせいじっぱいだった。今度は吐き気がこみ上げてきて、口元を

手で押さえる。そのまま情けない姿勢で、アスファルトにできた影を見下ろしていると、昨夜の自分の惚けた声がよみがえってくる。

——血？ AS って血でできてるのか？

後頭部をじりじりと焼く熱を感じながら、壁に体重をかけて、吐き気を堪えた。地面に映った影の周りで、アスファルトがガラガラと光を反射する。

——ほとんど人間の血液だ。調べても検出されないのはそのためだろう。

そう答える成駒の声を思い出して、一瞬、猛暑の中で寒気を感じる。

蘭の家は何か不思議なものを持っている——。

おっさんが言っていたことの辻褄が嫌な感じに合い始めていた。そんなことさえ知らずにいたなら、ほかにどれだけ知らないことがあるのか見当もつかなかった。

そのうちに頭痛と吐き気の大波が去り始めて、塀から手を放し、階段の下までどうにか歩いた。ここ一週間、何度も上っている階段だったが、毎回その長さにうんざりさせられる。

「つたく、おかしなとこに住みやがって……」

そうつぶやきながら、恨みがましく階段の上を見ると、十段ぐらい先を峰の母親が上っていた。一瞬、隠れるべきか迷ったが、すぐにそんな必要がないことを思い出した。見られたところで、どのみち今夜には終わることだった。それで階段の手すりをつかんで、一段目に

足をかけながら、峰の母親の背中を見上げた。

両手にいっぱいになったレジ袋を二つずつ持って、その重みで体を左右に揺らしながら、峰の母親はぎこちなく階段を上っていく。年齢はいつて五十前くらいだろうが、それよりまだいぶ老けて見えた。足か、腰か、どこかその辺が悪いのだろう。一段ずつ、ひどく時間をかけて進んでいる。上までの残りの段数を考えると、こつちの気が遠くなるような上り方だった。

遠い記憶が頭の隅をかすめる。こうして夏の日に見上げた風景。ひとつ持つのも大変なレジ袋を、三つも四つも持って歩く後ろ姿。あまりよく知らない「母親」という言葉が、その背中からはやけに現実的に感じられるのが不思議だった。

頭痛と気持ち悪さを堪えながら、あとに付いて上り始めると、峰の母親がくらつとなる。「おい」と反射的に声を出して、階段を駆け上がりかけたが、母親はこつちに気が付きもせず、独りでうまくバランスを取り戻していた。そして、ふらつくのも予定に入っていたかのように、落ち着いてまた階段を上っていく。百段はあるこの階段を、何度もこうして荷物と共に上り下りする——辛くなることはあっても、決して楽になることはない作業に、ただ慣れている人間のやり方だった。

ヨタヨタと母親は階段を上り続ける。その脇を通り過ぎながらちらりと見ると、母親の前

髪からは汗が滴り落ちて、顔は暑さで紅潮していた。そのまま階段を数段上ったが、母親の必死の表情が脳裏にこびりついて離れなかった。仕方なく溜息をついて、階段の途中で後ろを振り向く。

「持つてやるよ、おばさん」

そう声をかけた途端、おっさんの事務所にある古い写真が頭を過ぎって、誰かのことをその名前前で呼んだのが久しぶりだと気が付いた。手を差し出すと、母親が「あ——」と戸惑った声を上げる。それに構わず、さっさと何段か下りて、片手のレジ袋二つを母親の手から奪い取った。母親が「でも——」と言っている間に、もう片方の手からもレジ袋をつかみ取る。

「重いのに、悪いですよ」

母親が言うのを無視して、先に階段を上がり始めた。母親は慌てて付いてくる。「すみません」と言う声が後ろから何度も聞こえてきたが、その申し訳なさそうな顔を見たくなくて、「いいよ、いいよ」と軽く返しながら上り続けた。頭痛が著しく悪化していることには、この際、気が付かないことにした。

「それにしても、ずいぶん買い込んだな、おい」

両手のレジ袋を見て言うと、母親は「すみません」と意味もなく謝る。謝り方も哀しいほど慣れていた。中に入っているのは缶詰やレトルトパック、インスタントラーメン、それに

日用品のストックばかりで、この先、数週間は持ちそうな量だった。風邪薬や絆創膏なども袋の上の方に入っている。

「今日もいい天気ですね」

母親が後ろで暢気につぶやく。いい天気——というよりも殺人的な天気だったが、母親は本当にそう思っているようだった。だから一言「ああ」とだけ答えて、住宅の切れ目から見える空に目をやった。雲がほとんどない、紺碧の青空が広がっていた。

「今日の花火は混むだろうな」

そう言うと、母親が微かに笑った。

「八王子の花火大会ですか」

「ああ。七時から言ってたな」

「七時——」母親はそう繰り返して、落ち着いた声で続けた。「そうですか」

そのあとはほとんど会話はなかった。ただ時々、母親の「ここでもいいですよ」「悪いですから」という恐縮した声が背後から聞こえてくるだけだった。それに背中を向けたまま、階段のてっぺんまで荷物を運んでいく。やがて家の玄関にたどり着いても、母親はなぜそこが自分の家だと分かったのか、それさえ疑問に思わず、ただすまそうに頭を下げていた。

母親が玄関の鍵を開ける。その背中が、記憶の中のおばさんの背中に似すぎていた。ある

いは母親の背中というのは、みんなこんなものなのかもしれないが、自分に分かるはずもなかった。

「じゃあな」荷物を全部玄関先に置きながら言った。「おれはそこのお稲荷さんにお参りしてくるわ」

「ありがとうございます、本当に」

母親がもう一度深々と頭を下げると、半分ぐらい白くなった髪の毛が見える。その斑になった髪から母親の人生が痛いほど伝わってくるのがいやだった。

「おばさん——」玄関先に積み重なった荷物を目をやって、笑みを浮かべながら告げた。「これだけ重いもん、よく一人で持ってたな。たいしたもんだ」

その瞬間、母親はわずかに驚いた様子を見せ、すぐに綻ぶような笑顔で「慣れますから」とつぶやいた。その束の間の笑顔に、昔はけっこう美人だったのかもしれない——と思う。若い頃の華やかさは時間の重みで微塵も残っていないかったが、それでも、笑みの縁には枯れた愛嬌がまだ微かに生きている気がした。

アズミが交代にくるまでは、この辺りにいないといけなかったが、とにかく母親に手を振って、一旦家の前を去った。慣れます、という母親の声が頭に残って、苦笑と溜息が同時に洩れる。

慣れてるか——。

階段を二段ほど下りたところで立ち止まって、そこからもう一度、頭上を見た。空が驚くほど青くて、雲が高い。二日酔いがまだ後ろ頭を締め付けていたが、ひとつのことしか思い浮かばなかった。

19時20分、八王子——。

この天気なら、きつと予定通りに七時から花火が上がる。それなら、せめて二十分だけでも、峰の母親は花火を見ることが出来る。下ばかり見ていたのだから、最後までいはい上を見て死ぬのも悪くないはずだった。

ブロロロと、マイクロバスのエンジンをふかす音が、辺りに響き渡っていた。海水浴場の駐車場に停めたバスを、篠原先生が必要以上にアイドリングさせていて、その音が浜辺全体に急かすようにこだましている。時間は午後三時を回っていた。——まもなく五倉山に向けて出発の予定だった。

永児はいくつも並んだ土産物屋のひとつで、太めのボールペンを手に取った。それを目の高さにかざすと、いつも以上に嚴重に巻かれた包帯が傷口を締め付けて、ずきつと右手の甲に痛みが走る。その痛みを顔に出さないように気を付けながら、ボールペンをゆっくり回転させてみた。

透明なプラスチックでできたボールペンは、内側が水族館のようになっていて、振ると水色の液体の中を魚が数匹、ひよこひよこ泳ぐ。値段の割にはかわいい。ペン先があまり尖っていないのも、安心感があつた。

それを母親のお土産に決めて、姉のために選んだ小さなスノードームと合わせて持つ。真夏の海でスノードームは変な気もしたが、カラフルな珊瑚や海草の入ったガラスの球体は昨

日潜った海とよく似ていて、帰ったら姉の病室に飾りたいと思っていた。

一応、値札を確かめてみる。ペンとスノードームで千百円——前に母親からもらった二千元で十分まかなえる金額だった。それで小さくうなずいて、二つのお土産を手にレジに向かおうとすると、また右手に痛みが走って、思わず立ち止まった。

奥歯を噛み締めて、痛みから意識を逸らそうとキーホルダーのラックに目をやる。ラックにはたくさん小さな瓶が吊されていて、その上に手描きの看板が掛かっていた。「幸運を呼ぶ奇跡のお土産 星の砂 400円」と宣伝する貧相な看板は怪しさに満ち溢れていたが、瓶の中には本当に星のような形をした砂粒がたくさん入っていた。

並んだガラスの瓶を眺めていると、瓶越しに店の奥に佇む喜多見の姿が目に入る。珍しく髪を上げた喜多見は、鮮やかな金魚模様の浴衣を着ていた。店のあちこちににいるほかの女子たちも浴衣姿になっている。末岡たちがギリギリまで泳ぐとごねたので、女子たちは直接花火大会に行くため、すでに伯母さんの家で着替えを終えていた。

喜多見はトモちゃんと愛実と何かを話して笑っていたが、外の屋台の声や、海岸の波音がうるさくて、声はほとんど聞こえなかった。そのせいか、喜多見の存在が遠くに感じられて、昨夜のこともすべて夢の中の出来事に思えた。弓を構えている喜多見の姿も、外灯に浮かび上がった笑顔も、昼間の明るい浜辺ではまるで幻のようで、つい携帯の写真を確認したくなる。

でも、そんなことをしなくても、昨夜のことが紛れもない現実なのは、右手の痛みが分かりやすく教えてくれていた。

喜多見の姿を見つめながら、そっとラックに手を伸ばす。右手にまた鈍痛が走って、顔を引き攣らせながらも、なんとか瓶をひとつラックからはずした。サラサラとした星粒がガラスの中を流れていく。——幸運。奇跡。たとえば四百円で買えるような安っぽいものでも、どちらも惹かれる言葉だった。

小松さんはこういうのは好きなんだろうか。——そんなことを考えながら、中の星粒を眺めていると、いつの間にか側にいた裕美が横から声をかけてきた。

「会長さんにお土産？ 仲いいもんね」

浴衣姿の裕美がニヤニヤしながら尋ねる。一瞬、意味が分からなくて聞き返した。

「会長——？」

「もう。照れなくてもいいよ」

そう言って、裕美が背中をパンと平手で叩いてくる。その衝撃が右手の先にまで響いて、危うく瓶を落としかけた。裕美が「ちょ——ごめん」と、慌ててそれを受け止める。

「割れたらお土産にならないよ」

裕美がにこっと笑って、瓶を差し出してくる。右手が震えていることを悟られないように、

慎重に掌を広げると、裕美が瓶をそこに落とした。ごく軽い瓶の重みでも、手は肘までしびれた。

「なんか顔色よくないけど——」裕美が心配そうに言った。「どっか具合悪いの？ あんま寝られなかった？」

「あ、ううん——」

「今日は泳がなかったみたいだし」

次々に尋ねてくる裕美にたじたとしていると、レジのおじさんがタイミングよく会話に割って入ってきた。

「兄ちゃん、買うの？」おじさんは肩に手ぬぐいをかけて、無感情な声で告げる。「全部で千五百円だけど」

「——買います」

とつさにそう言って、おじさんの方に千円札を二枚差し出した。おじさんはそれをぞんざいに受け取り、五百円玉をひとつだけ返してくる。袋もレシートもくれなかった上、星の砂も一緒に買わされたことに、その時になってやっと気が付いたが、もう手遅れだった。

「会長さん、喜ぶといいね」

勝手に納得した裕美が楽しげに鼻歌を口ずさみながら、喜多見たちのところへと去っていく

く。おじさんも次のお客さんの方へお金を巻き上げに向かったので、仕方なくペンはシャツの胸ポケットに差し、スノードームはズボンのポケットに突っ込んだ。星の砂はだいぶ迷ってから、携帯と一緒に反対側のポケットに強引に詰め込む。

ラックの向こうでは、裕美が喜多見に後ろから抱き付いていた。喜多見は転びそうになって、裕美に笑いながら怒っている。その音もやはり遠くに聞こえて、テレビの向こうの風景を観ているような気にさせられた。

土産物屋から堤防の道に出て、昨日写真を撮った辺りに視線をやると、あの時ははつきり見えなかった港町の雑多な街並みが広がっていた。外灯の下には、地元の高校生が自転車や原付で集まって、大声で騒いでいる。昨夜の静けさが嘘のようだった。

結局、あのあと伯母さんの家に戻ると、みんなはぐっすり眠っていた。ほとんど夜が明けかけている時間だったので、喜多見と話す余裕もなく、急いで布団に潜り込むしかなかった。そうして、朝になったら何事もなかったように普通の一日が始まって、喜多見は女子と、自分分は男子と行動を共にしていたため、ほとんど顔を合わせることもなかった。

昨日喜多見に触れた頬に指先を当ててみる。せっかく買ったのだから、星の砂を喜多見に渡せたらいいな、と思ったが、考えただけで顔が赤くなるのを感じて、とても無理な気がした。喜多見はこちらに気が付いていないのか、背を向けたままで愛実と絵はがきの棚を物色して

いる。

一足先にバスの方へ戻り始めると、急にポケットの中で携帯が鳴り出した。左手で携帯を取り出して開くと、見たことのない番号が液晶に表示されている。病院の番号でないことはほっとしたが、それでも不安は抑え切れず、誰も見ていないのを確かめてから、バスの陰に駆け込んだ。そして、ためらいながら電話に出る。

「もしもし？」

向こう側から聞き覚えのある声が返ってきた。

『アズミだよ』

その声を聞いて、少し肩の力を緩める。一応バスの中には聞こえないように、車体から離れて返事をした。

『どうしたの？ 何かあったの？』

『そうじゃないんだけど——』アズミが弱気な口調で言った。『高塚の番号、阿坂に教えてもらったんだ。話してもいい？』

風向きが変わって、バスの排気ガスがこつちまで漂ってくる。その臭いから逃げるようにバスの側面を何歩か移動すると、堤防の道をこつちへ走ってくる末岡と秋山の姿が見えた。二人ともついさつきまで泳いでいて、やつと着替え終わったようだった。秋山はまだ手の中

でバナナの浮き輪を萎ませようと奮闘している。二人に見付からないように、再び死角へ回り込みながら、電話の向こうのアズミに囁いた。

「いいけど、あんまり長く話せないかも。ごめん」

『あ、私もこれから仕事に出るところだから』

そのあとに、すうつと息を吸い込む音が聞こえて、頭の中にアズミが緊張して居住まいを正す姿が浮かんでくる。

『この前のあれ、高塚のことをつけてたとかじゃないからね』アズミの固い声が電話の向こうで響く。『たまたま見かけたから、声をかけようと思っただけだったんだ』

声だけ聞いていると、アズミはクラスの女子と何ら変わらず、恋愛の悩み事でも話しているかのようにだった。一瞬、何も反応せずにいると、アズミが焦った様子で付け加える。

『ほんとだよ。襲おうとしたんじゃないからね。あのあと高塚が寝ちゃったから、結局、話はできなかったけど——』

アズミの言葉で、徐々にあの時のことがよみがえってくる。峰の家へ行ったこと。擦れ違った二人の男。涼しい稲荷の影。睡眠不足で疲れて、このまま目が覚めなくてもいいと思いがら、目蓋を閉じたこともよく覚えていた。

「ハンカチ、かけてくれてありがとう」そうアズミにつぶやいた。「ちゃんと洗って返すよ」



『あ、いいよ。だいじょうぶ。安いやつだし、三枚セットだったからあと二枚あるし——』

落ち着かなげにそうまくし立ててから、アズミが言葉を切った。何か言おうとして言えない気まづさが電話の向こうから伝わってくる。ふいに視線を感じて、バスの窓をちらつと見上げると、山崎が窓に頬を貼り付けて、ふぐみたいな顔でこつちを覗いていた。思わずびくつとなつて、バスに背中を向ける。

「——話したいことって何？」

そう聞くと、アズミはか細い声で言った。

『あ——それなんだけど……』

でも、そこでまた言葉は途切れて、アズミが黙り込む。その沈黙をバスのアイドリングの音が埋めている間に、アズミは辛うじて話し出すだけの勇気をかき集めたようで、ゆつくり口を開いた。

『……私、一学期始まったら、また高塚のこと狙わなきゃいけなくなる。いやだけど、でも命令には従わなきゃいけないし、どうしたらいいのか分からなくて——』

浴衣姿の喜多見たちが土産物屋から駐車場に戻ってくるのが見える。みんな気持ちはすでに花火大会に向かっているようで、履き慣れない下駄に苦戦しながらも、路面に軽やかな音を立てていた。

『夏休みがずっと続けばいいんだけど——』

辺りの風景に、アズミの言葉が重なるように響く。微かな排気ガスの臭いと共に、潮の香りと波音が漂ってきて、海の上に反射した太陽が宝石のようにキラキラと光っている。砂浜では今日も大勢の人が暑い夏の一日を楽しんでいた。

「右手が光っている人間を狙えて命令なんだよね」

携帯を強めに握って、アズミに聞いた。『うん』という声に向こうから返ってくる。

「じゃあ、ぼくだけを狙って。小松さんやほかのみんなには手を出さないで」

強い口調で電話にそう告げると、言い終わる前にアズミが慌てた声で言い返した。

『もちろん！ そんなこと絶対にしないよ！ 高塚、信じて。私、ほんとに——』

末岡たちがバスの近くまで戻ってきて、バタバタとした足音が耳に届く。篠原先生が「間に合わなくなるよ！」と女子の集団を急かしていた。

『——でも、高塚はそれでいいの？』

戸惑った声でアズミが聞いた。右手に視線を落として、ただれた皮膚の痛みにも構わず、包帯ごと右手を握り締めて答える。

「いいよ」

しばらく声が途切れた。そのあとで、アズミが小声で『高塚……』と囁く。稲荷の前に佇

むアズミの小さな姿が頭を過ぎった。でも、何か言おうにも、みんながすぐそこにいた。  
「ごめん。行かなきゃ」とアズミに告げて、電話を切ろうとする。その刹那、アズミが『あ、高塚蜘蛛の——』と言いかけた。

「えーじ、何やってんだよ！」

いきなり末岡が全身でぶつかってきて、反動で携帯の「切」ボタンを押していた。アズミの声が周りの音にかき消されて、プツリと通話が切れる。

「早く帰ろうぜ！」末岡が大声で勝手なことを言っていた。「花火大会までに戻れねえぞ」

「未、いつまで待たせんの」

先にバスに乗っていた穴井が、近くの乗車口のところまで出てきて、腰に手を当てている。いつからそこにいたんだろう、と胸が鼓動を飛ばしたが、末岡と秋山は穴井の冷たい視線を気にすることもなく、バスのステップを駆け上がっていく。トモちゃんも浴衣の袖を振り回しながら、勢いよく通り過ぎていった。自分も続けてバスの乗車口に足をかけようとしたが、その前に、後ろにいる喜多見たちの様子がおかしいことに気が付く。

愛実だけが少し手前で足を止めて立ち竦んでいる。その表情は、鮮やかなオレンジ色の浴衣とは相容れない、思ひ詰めたものだった。

「どうしたの、愛実？」

裕美が聞くと、愛実は申し訳なさそうにカバンを両手で抱えて言った。

「私、やっぱり長時間の車はだめみたい。悪いけど、私だけ電車で帰ってもいいかな？」

「いいけど、一人で平気？」裕美が心配そうに聞き返してから付け加えた。「誰か一緒の方がよくない？」

それを聞いて、ドアの脇にいた穴井がさりとつぶやく。

「私、浴衣じゃないから、カバンだけ乗せてつてくれたら、愛実と一緒に帰ってもいいよ」

喜多見も横で小さく手を上げる。

「あ、私も電車で大丈夫だよ。荷物少ないし」

いつの間にか果物の匂いがするほど近い距離に喜多見がいて、ちょっと体が強張る。でも、喜多見はこつちを意識している様子はなかった。裕美は穴井と喜多見の顔を見比べたあと、なぜかちよつと面白がっているような表情で喜多見たちに言う。

「じゃ、そつちは三人で帰りなよ。カバンは私のうちで預かつとくから」

二人の付き添いに挟まれた愛実は気まずそうに「悪いよ」とつぶやいたが、穴井は「まあ、いいんじゃない」と肩をすくめる。喜多見もうなずきながら、ちらつとこつちを見た。でも、その視線はすぐにまた別の方へと逸れていく。

「花火大会の会場で合流しよ。八王子に着いたらメールするから」

裕美が三人に告げると、穴井は「じゃ、行くよ」と言つて、さつさと駅の方へと歩き始めた。喜多見と愛実も小さくこつちに手を振つて、下駄を鳴らしながらそのあとに続く。それに手を振り返す裕美は、少しだけ残念そうに首を傾げていた。

「喜多見の浴衣姿、明るいうちにもつと堪能したかったな」

そうぼやきながら、裕美が後ろで手を組んで、バスの中へと去つていく。その場で一人、遠ざかつていく三人を見送つてみると、だいぶ離れてから喜多見がほかの二人から見えない角度で後ろを振り向いた。目が合つた気がしたが、それも一瞬のことで、すぐに表情が分からない距離になつてしまう。

「えーじ、行くぞ！ 何やつてんだよ！」

バスの窓から末岡に言われて、自分も急いで乗車口のステップに上がった。でも、最後にもう一度だけ、名残を惜しむように海を振り返つた。きれいな景色を目に焼き付けて、バスの中へ進もうとする。その時、突然、胸に小さなざわめきを覚えた。

喜多見と離れたからかもしれない——と考えたが、そうではない気がした。何かが頭の隅にひつかかつているのに、それがはつきりと分からなくて、もやもやとしたものがこみ上げってくる。

バスの席に座ると、篠原先生が「じゃ、いくよ」と声を上げて、バスを発進させた。そ

の震動でうつかり右手で肘置きをつかんでしまつて、痛みで奥歯を噛み締める。窓から駅の方を見たが、喜多見たちの姿はすでに見えなくなつていた。

バスが静かに海岸を離れていく。その間も、胸の奥にひつかかったものは、手の届かないかゆみのように、ずっとそこにあった。何かが気になる。でも、それが何か分からなくて不安だった。

二時間半ほどの長いドライブのあと、バスは五倉山の町へと入った。

帰り道は渋滞することもなく、篠原先生のスピード感のある運転も手伝って、日が暮れる前に、予定より少し早く東京にたどり着いていた。周りが見慣れた景色に変わり始めた頃、遠くの空にパンパンと報せの花火が数回響き渡る。末岡と秋山がそれに反応して、「やった!」「間に合った!」と雄叫びを上げるのを、永児は上の空で聞いていた。バスの中が涼しかったので、右手の痛みは少しましになっていったが、海岸を出た時に覚えた不安感はまだ胸の奥に燦<sup>きら</sup>つていた。

「喜多見たちも東京駅に着いたって」携帯から顔を上げた裕美が独り言のように伝える。「今、乗り換え中みたい」

それを聞いて、少し安心した。窓の外に目を向けると、遠くの夕空に煙がゆっくり消えていくのが見える。八王子の駅の方角だった。何万人という人出が詰めかける大きな花火大会のため、合図の花火は遠くからでも聞こえるように、何箇所かで上げられていた。家のペランダから見える五倉山のこじんまりとした花火大会も好きだったが、東京中から人が集まる

今日の花火大会はまるで違う規模のものだった。

車が五倉山の駅前に差し掛かって、所々に浴衣姿の人たちが目立ち始める。このイベントに便乗した屋台も、駅前の商店街にいくつか並んでいた。まだ日が落ちていないうちから、光るサイリウムの腕輪をして走り回っている小学生の姿も目に付く。こめかみを窓にもたせかけてその光景を眺めていると、峰の家のある丘が遠くに見えた。

胸の中のざわめきが再び増してくる。木々の間に稲荷の屋根がわずかに覗いて、アズミと交わした電話の会話が頭を駆け巡った。——たまたま見かけたから声をかけた、とアズミは言っていた。

こめかみを窓ガラスから離して、手の中の携帯をじつと見る。——あんなところにたまたまいることなんてあるのだろうか。もし自分を見張っていたんじゃないのなら、アズミはなんのためにあそこにしたのだろう。

これから仕事に行く。さっきアズミはそう言った。

胸がトクトクと打ち始める。峰の家の前に出ていた新聞紙や雑誌の山がずっと気になって、いた。相当長い間放置してあったはずのものを、わざわざこの暑い時期に片付けるなんて、どう考えても不自然だった。裕美の叔母さんみたいに引越すのならともかく、それ以外にいきなり片付ける理由が思い付かなかった。

古新聞の横には、ゴミ袋の山もあった。――靴。中身は確か女物の靴だった。でも、新しいものじゃない。若い峰の姉が履くような種類の靴じゃなかった。その下の服が詰められた袋も、ベージュとか薄い青とか、地味な色のものばかりだった。

あれは全部お母さんのじゃないのか。

そう思った途端、背筋に寒気が走る。道のすぐ向こうを走っている電車の線路が目に入って、踏切で待っていた中年女性の姿が頭を過ぎった。急にいろんなことが、パズルのピースのように頭の中で組み合わさっていく。あのピアスの人たち――あの人たちはなんのために峰の家に来たんだ？　なんで峰の母親はまだ使えるような服や靴を捨てていたんだ？

――母さんはもう限界なんだ。

自分が言った言葉が昨日の夜から戻ってきて、反射的に前の背もたれをつかんで、ガタンと席を立った。滲み出した汗が染みて、右手が鈍い痛みを訴える。前の席で寝ていた山崎が「何すんだよ」と文句を言ったが、気にしていられなかった。フロントウインドウから前方を見ると、峰の家へ続く階段の下に白いセダンが停まっている。その運転席に、階段で擦れ違った若い方の男が座っていた。

あの服と靴――。

もういらないから捨てたんだ。

そう思うと、全身に冷たい汗が噴き出して、横に座る末岡の膝を踏み越え、後ろの席の秋山へ振り返った。

「へい」携帯でゲームをしている秋山の肩をつかんで、慌てて聞いた。「峰の携帯って分かる？」

「峰？」びっくりして秋山が顔を上げた。「あいつ、携帯持っていないと思うけど」

汗が右手にどんどん染みていく。バスは信号で停車していた。再び窓から外を見ると、白いセダンもすぐ近くに停まっている。

「家電は？」

重ねて聞くと、秋山はその声のトーンに押されるように、携帯のゲーム画面を閉じた。

「ちよい待って」

そう言って、秋山は携帯を操作して、『峰』とだけ書かれた固定電話の番号を画面に表示させ、それをこつちに見せる。その番号を自分の携帯に打ち込んで、通路を前へ歩き出しながら、携帯を耳に当てた。

「こら、座りなさい！」と、篠原先生が言っていたが、背もたれをつかんで電話の呼び出し音を聞き続ける。その間も、すぐ側のセダンに意識は釘付けになっていた。バスが動き出して、四回目の呼び出し音で電話がつながる気配がする。それで一瞬安心しかけたが、直後に前触れもなく電話は切れた。ツーツーという音が耳に届いて、急いでもう一度リダイヤルしたが、

今度は電話はただ呼び出し音を繰り返すだけになった。バスは階段の前を通り過ぎて、峰の家からどんどん離れ始めている。

「高塚くん、座らないと怒るわよ！」

篠原先生がもう一度言うのを聞いて、運転席の横に出た。

「先生。ここで降ろしてもらっていいですか？」

そう聞くと、バスの中がざわめいて、末岡や山崎が席から半分立ち上がる。「高塚、花火は？」とトモちゃん聞いていたが、返事をする余裕はなかった。

「何かあったの？」

篠原先生がバスを路肩に寄せながら尋ねる。なるべく平静な声で「ちよつと用事があつて」とだけ答えた。

「どうしたんだよ、ツカ？」

秋山の不安の混じった声が、ざわめきの中に一際はつきりと響いた。開いたバスのドアから急ぎ足でステップに降りながら、みんなの方を一度だけ振り返った。裕美がバスの通路に立って、とても心配そうな顔でこつちを見ていた。踏切で会った時と同じ顔だった。

「高塚、だいじょうぶなの？」

同じことを聞かれて、唾を飲み込む。みんなに嘘を言いたくなかった。だから、なんとか

無理に笑って、嘘じゃないことだけを口にした。

「だいじょうぶ。合宿、すごく楽しかったよ。ありがとう」

それだけ告げてバスの外に降りると、まだ残っている陽射しが一気に降り注いでくる。バスの窓のひとつが内側から開いて、末岡が顔を突き出してきた。

「えーじ、カバン！ カバン忘れてるぞ！」

末岡に「ごめん、預かつといて！」とだけ言い返して、クラクションに急かされたバスが動き出すのを見送る。末岡はまだ窓から首を出したままで、後ろの窓から相沢が納得のいかない顔でこつちに軽く手を振っていた。それに一回だけ手を振り返したあと、峰の家の方を睨んだ。

胸を激しく叩いてくる不安と戦いながら、歩道を走り出す。胸のポケットから、お土産のペンが危うく落ちかけていた。それを片手で差し直し、浴衣姿で歩く人たちの間をすり抜けるようにして、ただ一心に峰の家を目指した。

花火大会まであと一時間。――暑さはまだ過酷だったが、陽は傾きかけていた。

「どこ行くんだよ」

階段から下りてきた峰は、玄関先で母親に出くわして、反射的にそう聞いた。自分の声が、夕方の静寂に空っぽに響く。母親は瞬時に顔色を変えて、凍り付いた様子で振り返った。

「剣也——」

その表情も変だったが、何よりも一度も見たことのない革のコートとズボンが不気味だった。母親が靴を履くために、そそくさと玄関先に座り込む。そして、こつちに背中を向けたままで言った。

「台所に手紙を置いたから、あとで読んで」

母親は明らかに急いでいる様子だった。それに何か言い返そうとして、奇妙なものが目に入る。玄関脇の固定電話のコードが切れて、床の上にとぐろを巻いている。壁のプラグから抜かれたのではなく、根元から引きちぎられていた。それを見た途端、異様な感覚がこみ上げ、口の中が一気に乾く。

「どこ行くんだって聞いてんだよ」

せいっぱい凄んで言いながら、母親の肩口をつかむと、母親は黙り込んだ。同時に玄関が開いて、このところ毎日来ている西野というピアスの男と、名前も知らない太った男が入ってくる。いつも来る若い男は、今日は姿が見えなかった。西野がこつちを見下ろしながら、丁寧なのに、どこか威嚇するような口調で言った。

「お母さんは、お金を返しにいくんだ」

その言葉で、喉がぐつと詰まる。西野は髪型がやけにきれいに決まっていて、高そうな腕時計をしていたが、胸元はシャツの第二ボタンまではだけていた。最初に見た時から普通じゃないのは分かっていたが、そのことにできるだけ気が付かないようにしていた。

西野に促されて、母親が無言で立ち上がりとする。その肩をつかみ直して言った。

「おかしいだろ。待てよ。なんだよ、その格好」

それでも母親が何も言わないでいると、腹の底から気持ち悪さがこみ上げてくる。整理された家の中の様子で、何が起きているのか、すでにどこかで悟っている部分があった。

「おふくろ！」

そう大声で叫ぶと、西野が小さく溜息をついて、「古賀」とつぶやく。即座に後ろにいた太った男が踏み出してきて、腕をつかまれた。振り払おうとしたが、今まで経験したことのない力で押さえ付けられる。学校で喧嘩するような相手とはまるで違った。大人の容赦ない力だっ



た。

それでも「放せよ！」と抵抗を続けると、古賀に軽く押し飛ばされる。そのまま廊下の床を滑って、後ろの階段の縁で腰を強く打った。痛みでとつきにうずくまると、母親が悲鳴のような声を上げる。

「やめてください！ 子供には関係ないって言っただじやないですか！ 剣也！ 剣也、だいたいようぶ——!？」

前に自転車で事故を起こした時と同じ声だった。それで顔を上げて、久しぶりにはつきりと母親の姿を見る。小学生の頃、家に帰ってくる笑顔で迎えてくれた母親は、今、古賀に抱きかかえられるようにして、無理やり抑え込まれていた。

その光景になぜか意味もなく涙が溢れてくる。母親が他人の暴力にあっているところを見た途端、動けなくなるほどのショックが全身を駆け巡った。古賀は母親の髪を毛をつかんでいた。まるで、ものでもつかんでいるような感じだった。

黒く磨き込まれた革靴を脱いで、西野が玄関にそつと上がってくる。そして、目の前にしゃがみ込むと、笑っているような、無表情のような、寒気のある視線を目の高さに合わせてきた。「革製品はね」西野はほとんど口元を動かさずにしゃべった。「車輪に巻き込むと、除去するのに時間がかかるんだよ」

その声に微かに楽しそうな響きが混ざっていて、聞いているうちに呼吸が乱れてくる。母親が台所で何かの書類にサインしているのを見た。いきなり家の掃除を始めたことも、変だと思っていた。高塚に聞かれた時には、それがなんでもないことのように強がつてみせた。——でも、なんでもないわけがない。あんなにたくさんさんの借金を簡単に返せるはずがないことぐらい分かっていた。

「何言ってるんだよ」

そう言いながら母親の方を見る。母親は髪を毛をつかまれて、片腕を後ろにひっぱられたまま、震える声でつぶやいた。

「ごめんね、剣也。これしかなかったの」母親の声があきらめているのが、何よりも怖かった。「この人たちを恨んじやだめ。この人たちのおかげで剣也も凜もやり直せるのよ。だからお願い、凜とも仲良くして」

スツと西野が立ち上がる。咽<sup>む</sup>せるような香水の匂いが鼻を突いて、また吐き気がこみ上げてきた。でも、手も足も動かなかった。その時、急に母親が何かに気が付いたように目を見開いて、西野に向かって叫んだ。

「凜は——？」母親は声を荒げながら、階段の方を見た。「娘はどこ？」

玄関に降りた西野が丁寧に革靴に足を入れ、下駄箱にかかっていた靴べらでかかとをしつ

かりと差し込む。それから、母親の頬にボンと手を当てて、静かに告げた。

「豊田駅にいますよ。八王子からひとつ東京寄りの。知ってるでしょ?」

それを聞くと、母親の生気のない顔に、急に血が昇っていく。どちらもこの十四年、ほとんど見たことのない顔だった。今起きていることが現実のものだと信じられなくて、座っている廊下に自分の体が溶けていくように感じた。

「なんで——」

母親はそれだけ言つて、絶句していた。玄関を出た西野は沈み始めている太陽を気持ちよさそうに眺めながら、とても軽快な口調で語つた。

「保険ですよ。娘さんには七時二十五分の電車に飛び込んでくれれば、お母さんは助かると伝えてあります。娘さん、なかなか勇氣のある人だ。あれは飛び込める顔ですよ」

「何言ってるんですか!」母親の顔が絶望に歪むのが分かった。「それは私の役目でしょ!」

「たまに土壇場のためらう人もいますよ。あなたが先に八王子駅で七時二十分の電車を止めれば済む話です。そうしたら電車が豊田に着くことはありません」

まだ茫然としている母親を古賀がひっぱるようにして、西野のあとに続かせる。母親は一瞬抵抗しかけたが、まったく敵わず、子供のように簡単にドアから外に連れ出された。そうしながらも、母親はなんとかこつちを振り返り、早口で告げる。

「剣也、ごめんね! お母さん、ちゃんと借金返してくるから。お願い! 体には気を付けて、お姉ちゃんと仲良くして!」

震える手足で起き上がると、大声で叫びながら母親の方へ駆け寄つたが、古賀の蹴りが先に飛んできた。蹴りを食らって体勢が崩れても、構わずにもう一度飛び付こうとした。痛みなんてどうってことない。そう思ったが、二回目の蹴りが腹に直撃した瞬間、息ができなくなつて、そのまま玄関の土間に頭から倒れ込んだ。頭が陶器の傘立てにぶつかつて、鈍い衝撃が首全体に走る。

「やめてください! 行きますから。私、ちゃんとやりますから!」

母親の泣き叫ぶ声が聞こえたが、土間に溜まつた土埃しか見えなかった。その埃を舞い上げて、目の前に西野の靴が降りてくる。母親が狂乱状態で叫んでいるのに、体が言うことを聞かなかつた。悔しさに流れた涙が土間を濡らしていく。

「剣也! お願いだから、この人たちの言う通りに——!」

そこまで言つたところで、母親の口が古賀の手で塞がれたらしく、あとは聞こえなかった。なんとか顔を横に向けると、西野がサッカーボールを蹴る前のように、後ろにスーッと靴を引くのが見える。——やめろ、と思つた。こんな距離で顔なんか蹴られたら死ぬだろう、と考えたが、その瞬間、想像もできなかった速度で靴が飛んできた。あまりの痛みで声も出なかった。

喧嘩で殴られたことは何度もあったが、そんなものは暴力じゃなかった。暴力は——もつとはるかにひどいものだった。

悲鳴を上げながら、土間に鼻血と涙をこぼしていると、また西野が靴を引く。死ぬ。本当に死ぬ、と思ったが、何をすれば助かるのか分からなかった。両腕で頭を庇うと、母親のくぐもった声が遠くから聞こえてくる。もう一回蹴りが来る時にはスローモーションで見えた。靴が腕の間を抜けて、鼻の頭に当たるまでに、心の中でたくさん助けを求めた。そして、実際に鼻に当たった時には、自分の鼻の骨が折れる音がはっきりと耳に届いた。

「剣也くん」ぐるぐる回る世界の中で、西野の声が聞こえてくる。「君は何も聞いてないし、何も言わない。夜まで黙って家にいて、テレビでお母さんの事故のニュースが流れるのを待つんだ。そして、連絡が来たら、警察署に行つて黙って遺体を引き取る。いいね」

血がいつぱい手に付いていた。でも、鼻から流れているのか、ほかのどこから流れているのか分からなかった。下級生を殴り飛ばして、そいつが自分の鼻血にびびって泣くのを笑って見ていた自分の姿が否応なく頭に浮かぶ。——「たかが鼻血じゃん」と言つて、またそいつの尻を蹴った。それだつてちゃんと加減したから、たいしたことじゃないと思つていた。でも、痛みは内側からきた。ずっと内側からきた。

「君さえ黙っていれば、お母さんかお姉さんのどちらかは生きて帰ってくる。借金もなくなる。

でも、ニュースが流れるまでにこの家を一步でも出たら、二人とも帰つてなくなるし、借金も残る。分かるよね？」

口の中も血でいっぱいだった。駅前で何人も、こうやって脅して金を巻き上げたことがあった。きつとあの時、相手の耳には自分の声はこんな感じで聞こえていた。なんでそんなに怖がるのか不思議だった。抵抗したらいいだろう、と思つていた。抵抗しない向こうが悪いとさえ思つていた。

「警察に……」

やつと、泣いているような細い声で言つた。そんな声でも、出すのが気を失うほど怖かった。西野の声はすごく高いところから聞こえてくるようだった。

「連絡してもいいけど、お母さんは遺書を残してるし、自分の意思で飛び込むんだからね。君みたいな子供の言うことを信じてくれるといいね」

西野はそう言つて、はつきり笑つた。そして、古賀に「行くぞ」と一言告げて、玄関の外に踏み出す。一瞬母親の「剣也——」という声が聞こえて、血で土間にくっついた頬をなんとか上げて、母親の方を見た。玄関の踏み石の陰になって、母親の姿はほんの一部しか見えなかった。でも、母親の手が必死に別れを告げるように、こっちに向かって伸びていた。

「母さん——」

体をひきずって起き上がったが、風景が渦のように回っていて、世界全部が崩れ落ちてくるようだった。しゃべろうとすると、鼻孔に溜まった血が喉に流れ込んできて咽せる。どうしたらいいのかわからなかった。もつと勉強して、もつと体を鍛えていけばよかった。——きつとたくさん人を傷付けたことが、全部戻ってきていた。でも、それなら自分で自分じゃなくて、母親や姉のところに戻ってくるのがわからなかった。もつと蹴ればいいと思った。もつと自分を痛め付けばいいから、母親は助けてほしい。そう言いたかったのに、三人ともすでに姿が見えなくなっていた。

腰も首も熱くなっていて、痛みが体中に広がっていく。それも遠い意識でしか感じていなかった。助けて——と思った。でも、誰も助けてくれないのは分かっていた。誰の助けもいらないと思ったことも覚えていた。そして、他人を無意味に助けてくれるような人間がこの世界にいないことも知っていた。

それでも母親と姉の顔が浮かぶと、自然と口から声が漏れた。

「助けて——」涙と血が流れ込んだ口をせいいっぱい開けて、古びた家の天井に向け、峰は濁った声で叫んだ。「誰か助けてください——」

その声は開けっ放しの玄関から夕方の庭にこぼれ出したが、そこで風にさらわれて消えた。眼下に広がる五倉山の町には決して届かない、小さな声だった。

「誰か……助けて……」

玄関の脇にある物置の後ろ——そこに透明なボールペンが一本、落ちていた。その声を励ますように、プラスチックのペンの中では、魚の玩具が微かに揺れている。横には強く駆け出したような足跡が地面に付いていた。

急げ。走れ——。

永児は峰の家の脇をすり抜けて、稲荷の裏に広がる林の中へ飛び込んだ。あいつらの後ろをついていけば、階段ですぐに見付かってしまう。土の斜面はかなり急だったが、木の幹から幹へと伝うようにして滑り降りながら、なんとか峰の母親の背中を追った。時々、建物や木々の隙間から、階段を下りていく男二人の姿がちらちらと見える。——その度、足を取られそうになりつつも、もつと速く、もつと速く、と念じて、夕日に照らされた丘の斜面を駆け下りていった。

湿った葉っぱの束で足が滑って、とっさに木の枝をつかむ。でも、枝は手の中で折れて、そのまま勢いを殺せずに後ろへ倒れかけた。一瞬早く、誰かの手が背中を支える。反射的に右手のガラス片を握り締めたが、振り返って見ると、そこにいたのはアズミだった。

「高塚、聞いたの？ 今の話——」

アズミが大きな目をぎゅっと縮めて、緊張した声で聞いた。それにうなずきながら、アズミの肩を借りて体勢を立て直し、すぐさま斜面をまた降り始めた。森の中はまっすぐ進むこ

とができないため、どんどん母親との差が広がっていく。下にはあの白いセダンが待っているはずだった。

「高塚——！」

アズミが横を走りながら、必死に呼びかけてくる。木の支えも必要とせず、アズミは完璧なバランスを保ちながら、差し込んでくる夕日の光線の中を駆けていた。

母親を連れた連中が、階段の下に着いていた。意を決して、木の幹をつかむのをやめ、最後の数メートルを重力に任せようとしたが、その寸前にアズミが抱き付くように全身でぶつかってきた。振り解こうとしても、アズミは両手でしがみ付き、足を土にめり込ませてブレーキをかける。

「高塚、待つて——！」

バランスを崩して、土の上に手を突き、アズミを睨んだ。舞い上がった土煙が、斜面を覆うように広がっていく。

「ごめん」珍しく静かなアズミの声が林の中に響き渡る。「でも、行かせるわけにいかない。これは私たちの仕事だから」

「あの人はこれから死ぬんだ」階段の下を指差して、アズミに向かって声を上げた。「電車で轢かれて死ぬんだよ！ それでいいの!？」

アズミの瞳が曇る。その手の握力が弱まったところを見計らって、アズミを払い退け、また斜面を駆け下り始めた。すでに右手の肘から下は麻痺したように重くなっていたが、半ば滑り落ちるようにして、道路のすぐ上にあるコンクリートの崖に出る。一メートル半ほどの高さを飛び降りて、誰かの家の駐車場を抜け、表の道へと飛び出した。でも、そのすぐ前を勢いよく白いセダンが走り去っていく。セダンの後ろ姿を茫然と見ながら立ち尽くしていると、アズミが追い付いてきて、横に並んで言った。

「どうするの？」

アズミの声が不安を湛えていた。携帯の時計を見て、男たちが言っていたことを思い出す。七時二十分に八王子駅。——まだ三十分以上ある。道の向かいには、五倉山の駅へとつながる商店街の入口が見えていた。

「まだ間に合う——」

そう言って、横断歩道を駆け出し、危うく車にかすられそうになりながらも、ためらわず道を渡った。アズミも後ろから付いてくる。もう止めようとはしなかったが、表情は複雑なままだった。

普段は人通りの少ない道も、今日は花火に向かうカップルと家族連れで埋まっている。その間を走り抜けながら、片手でもう一度携帯の時計を確認した。覚えている時刻表が正しかっ

たら、あと五分ほどで八王子行きの電車が五倉山駅に着く。それにさえ乗ることができれば、充分間に合うはずだった。

「高塚、どうするつもりなの？ 高塚は駒じゃないんだよ!」

アズミが同じように人の波を避けて走りながら言った。その避け方はとても鮮やかで、いつものおどおどしたイメージとは別人のようだった。

「分からない」 ずっと走り続けているせいで、息が乱れている。「とにかく行くしか——」

「行くつてどつちに!? お母さんの方？ お姉さんの方？」

その声に、一瞬アズミの方を見て、下唇を強く噛んだ。八王子と豊田は隣合わせの駅だったが、時間はギリギリだった。どちらかを助けても、どちらかは飛び込んでしまう。

「どうするの、高塚——？」

アズミが押し殺した声で再び尋ねた。

「分からない」

そう繰り返して、人混みの中、永児は闇雲に先へ進んだ。酸素が足りないのか、前方は歪んで見えて、商店街の賑やかな雑音が意識を溺れさせる。

花火大会開始まで、残り十五分を切っていた。

電車の窓の外を都心の雑多な風景が流れていく。それを眺めながら、喜多見は束の間、横に立っている穴井と愛実の存在も忘れて、昨夜のことに思いを馳せていた。起きた瞬間からずっと誰かが側にいたために、その時まであまり頭の中と向き合う時間がなかった。でも、いざ考える時間ができてみると、閉じ込めていた不安は一気に顔を出して、膨らみ始める。

――塾長を信じるな。

その言葉を思い出して、網棚に載せたカバンを見上げた。小さな旅行カバンの中には桜色の弓袋が入っていて、それを渡された時の静の顔がはつきり浮かんできく。優しくて穏やかな人だけど、絶対に手放して信じてはいけない。――塾にいる時はいつも、自分にそう言い聞かせていた。でも、それを他人からはつきり聞くのは、背筋の凍るような思いがした。

「楽しかったね、海」

ふいに隣にいる愛実がつぶやいた。その声で愛実の方を見ると、愛実は笑顔で続けた。

「なんか夏休みを満喫した感じ」

「そうだね」

一言、そう答えると、頭の中のものもやまとしたもの少し薄れて、また潮の香りを思い出せるようになった。そうすると、自然に笑顔がよみがえってくる。海にいる間は本当に楽しかった。あんなに楽しいと思つたのは初めてだったかもしれない。

「――なんか喜多見、最近ちょっと感じ変わった？」

じつとこつちを見ながら、愛実がいきなりつぶやいた。

「変わった？」

愛実の言葉を繰り返すと、愛実が小さくうなずく。同時に、混み合った中央線がガタンと大きく揺れて、穴井と三人揃って同じ方向に傾いた。電車が東京駅を出てから、二十分近くが経過したところだった。花火の開始時間には間に合わなかったが、中盤の盛り上がりまでにはなんとか到着できそうだった。

「浴衣……のせいかな？」

裕美に借りた浴衣を見下ろしながら、ごまかすように言った。一人だけ普段着の穴井が、愛実の後ろからちらりとこつちを見る。黒地に赤の、金魚が泳ぐ浴衣は、着ているのが少し恥ずかしくなるくらいに鮮やかだった。

「ううん。そうじゃなくて」愛実が笑顔で言う。「なんか変なこと言ったらごめん。でも、喜多見、前より明るくなった感じがする。笑ってること多いし」



思つてもみなかつたことに、赤くなつて口を閉ざすと、後ろで穴井がにやりとしているのが目に入る。愛実も自分の言葉に若干照れたように笑つていた。それでまた自然に笑顔が洩れる。——確かにこういう時、前はなかなかうまく笑えなかった。

「江戸時代から明治くらいになつたかも」

穴井がぼそつと付け加える。それに反射的に「ひどい」と返すと、愛実が吹き出した。そういうえば、いつの間にか自分の言うことに相手がどう反応するか、いちいち心配しなくなつていた。最初はそれも裕美一人だけの話だったが、その数が二人、三人と増えていくに連れて、学校にいることが楽になつていった。それでも、今回も穴井が無理に誘つてくれなかつたら、泊まりがけで海に行く勇氣なんてさすがに出なかつたはずだ。

浴衣の袖から覗く自分の腕がうつすらと赤く焼けている。周りの人はよく夏にこんな色になつていたが、自分の肌で見るのは初めてだった。穴井と愛実の腕も同じ色になつているのが、なんとなく嬉しい。

私が少しでも変わったのなら、みんなのおかげだよ——と二人に言いたかったが、そんなことをわざわざ言わなくてもいいことも、みんなから教えてもらつていた。だから、代わりにちよつと膨れてみせる。

「せめて昭和にしてほしかつたな」

愛実がそれでまた吹き出している間に、帯の隙間に挟んでいた携帯が振動していることに気が付いた。「ごめん」と言つて携帯を取り出すと、裕美からのメールが届いていて、その文面に何気なく視線をやる。すると、いきなり顔から笑みが消えるような内容が飛び込んできた。『高塚が駅の辺りで急にバス降りたの。峰に電話してたみたいだけど、何があつたのかよく分からない。とにかく高塚は花火これなそう』

読みながら、一文字ごとに体が冷えていく。それほど効いていないはずの車内の冷房が、急にとても冷たく感じられた。ちょうど穴井と愛実が二人でしゃべつていたので、その間に新しいメール画面を呼び出す。こつそり永兎に宛てて『だいじょうぶ？』と大急ぎで打つて、それを送った。

窓の外は都心のビル街が続いている。それを見ながらしばらく待つてみたが、返事は戻つてこなかつた。不安だけがどんどん募つて、いつそ電話しようか——と思い始めた時、阿坂の言葉を思い出す。

——高塚を峰に関わらせるな。

途端に、冷えた肌の上にはやな汗が滲み出す。辺りを見回すと、車内は完全に人で埋まつていた。ここで電話をするわけにはいかない。——でも、八王子に着くまでなんて、とても待つていられなかつた。

「どうかした？」

キョロキョロしていると、穴井が首を傾げて尋ねてくる。愛実も不思議そうな顔でこつちを見つめていた。その様子に慌てて表情を緩める。

「ごめん。ちよつと——」

なるべくさりげなく二人にそう言つて、人波をかき分けながら、車両の連結部の扉まで進んだ。その中に潜り込むと、内側からドアを閉じる。連結部の摩擦と、レールの金属がすごい騒音を立てていて、耳がおかしくなりそうだったが、ほかに選択肢がなかった。即座に携帯から永児の番号を探し出して、発信する。

三回目の呼び出し音で通話はつながった。でも永児の声よりも先に、こつち側に負けないほどの雑音が携帯の向こうから返ってくる。

「高塚くん——？ 聞こえる？」

連結部の騒音を越える声でそう訴えかけると、隣の車両にいた女子高生の一団が気が付いて、ガラス越しにこつちを睨んできた。それでもやめるわけにはいかず、女子高生たちに背を向けて、もう一度声を上げる。

「高塚くん！ 喜多見です！」

『小松さん——』

ひどく途切れ途切れの永児の声が返ってくる。走りながらしゃべっているような息遣いだつた。

「何かあったの？ バスから降りたつて、裕美から連絡があつて——」

そう尋ねると、何かにぶつかような音と共に、永児のくぐもつた声が返ってくる。

『——お母さんと、お姉さんが——』

耳に携帯を押し当てて、辛うじてそれだけ聞き取る。同時にいやな想像がすごい勢いで頭の中を広がつて、さらに音量を上げて言つた。

「お姉さんがどうしたの!? 病院で何かあつたの？」

『違うんだ。峰のお母さんとお姉さんが——』

「峰くん——？」

そう聞き返すと、永児の声が急に近くなる。

『——借金のために連れ去られたんだ。このままだと電車で飛び込んでしまう』

一瞬、連結部が激しい金属音に包まれた。電車が斜めにカーブして、蛇腹の方へ体が傾く。慣れない下駄履きで重心をなんとか揺り戻して、ドアのガラス窓に手を突きながら聞いた。

「高塚くん——どうするつもりなの？」

冷房が届かない連結部は息苦しいほどの暑さに蝕<sup>むし</sup>まれていたが、それでも寒気が止まらな

かった。永児の途切れ途切れの声が答える。

『今、追いかけてる——』

息を呑んで、携帯を握り締めた。

「それって『会』の仕事だよな？ 阿坂さんがそう言ってたよ。高塚くんが行かないといけないの？」

携帯が沈黙する。向こう側の雑音とこっち側の騒音が混ざって、通話がつながっているのかどうかもよく分からなかった。一旦切ろうかと思いかけた時、永児がやっと一言つぶやく。

『ごめん。でも、ほっとけないんだ』

ガラスに突いた手に力が入りすぎて、割れてしまいそうで怖かった。永児が峰と特別仲がいいという覚えはなかったが、「お母さんとお姉さん」という組み合わせを聞いた時から、もう何を言っても無駄だという気はしていた。

一瞬だけためらってから、電話の向こうの永児に告げる。

「今どこなの？ 教えて。私もそこに行く」

電車がまたガタンと揺れた。返事はない。でも、携帯が何かに当たる音はちゃんと響いていた。言葉が失っているだけで、永児が聞いているのも分かった。

「高塚くんが行くなら私も行く。——昨日、私、そう言ったよね」

騒音を越えて伝わるように、ひとつずつ丁寧に言葉を区切って言った。電車がまたぐんと曲がつて、足元のバランスを失いかける。それでも携帯を耳から離すことなく、強引に蛇腹をつかんで、倒れるのを堪えた。

「高塚くんは一人じゃないからね！」

硬い蛇腹の素材が歪むほど強く握り締め、大声で携帯にそう叫んだ。携帯の向こうでまたしばらく人混みの騒音だけが鳴り響く。遠くからは聞き覚えのあるマルサカの曲も聞こえていた。やがて、少し息の整った声で永児がぼつりと言った。

『小松さん——』

永児が電話の向こうで立ち止まるのが分かる。息遣いは激しく乱れていたが、雑音が消えて、はつきりと声だけが聞こえるようになった。そうして、少しの間があつたあと、永児の声のトーンが変わる。

『ぼくだけじゃどうしようもないんだ』

永児の声が弱く響く。今まで聞いたことのないような声だった。きつとこれは永児が家族に向けて話す時の声だ、と心のどこかで気付いていた。

『ぼくはお母さんを止めに八王子に行くけど、豊田駅でお姉さんが飛び込むことになってる。誰かにお姉さんのいる豊田に行ってもらわないと——』

携帯を握り締めたままで固まった。息の合間に永児の絞り出すような声が聞こえてくる。

『八王子でお母さんを止めても、豊田駅でお姉さんが同じ電車に飛び込まされる。ぼく一人じゃ片方しか間に合わない。でも、どっちも死なせないんだ』

——それは峰くんの家族のことを言ってるの、高塚くん？ と、喉元まで疑問がこみ上げてきたが、言葉を呑み込んで、冷静に告げた。

『どうしたらいいか教えて』

永児が唾を飲む気配がする。明らかにためらっていた。でも、その束の間のためらいのあと、はつきりとした声が聞こえてくる。

『豊田に着いたら電車を降りて、七時二十五分の電車がホームに入ってくるようなら、非常停止ボタンを押して』

そう告げたあと、永児の声が再び途切れる。きつとまた走り出していった。それで「分かった」とだけ、永児に答える。

『とにかく、無理しないで——』

永児の声がより聞き取りにくくなって、後ろに駅のアナウンスが流れ始める。おそらく五倉山の駅に入ったのだろう。「そっちも」とだけ言って、電話を切りかけたが、その前にとつさに思い出して付け足した。

「スイッチ——。スイッチは切っちゃだめだよ、高塚くん！」

言い終わったタイミングでちょうど通話が切れたので、永児に伝わったかどうかは分からなかった。一瞬だけ携帯を耳に当てていたあと、液晶画面の時間を確認すると、六時四十分を回っていた。このまま乗ってれば、豊田には七時十分くらいには着く。でも——。

ガラス越しに穴井と愛実の方を見た。八王子でみんなと落ち合う予定なのに、自分だけひとつ手前の駅で降りるのは不自然だった。それにもし二人が一緒に降りてしまつたら、身動きが取れなくなる。

まもなく中野駅に到着するというアナウンスが、車内に流れ始めた。もう一度時間を確認して、頭の中で計算してみる。やるなら今しかなかった。——どうする、と考えたが、もう電車の速度が落ち始めている。迷っている時間はなかった。

連結部のドアを開けて愛実たちの元へ戻ると、「何かあったの？」と、愛実がすかさず聞いてきた。電車が駅のホームへ入っていく。速度がどんどん落ちて、通過する看板や柱が窓の外に見えた。浴衣の袖に構う余裕もなく、網棚上げてある自分のカバンを降ろしながら、穴井と愛実の顔を交互に見た。

「ちよつとおなか壊しちゃって。——ごめん」

それだけで、慌ててドアの方へと向かい始める。せつかく変わったって言ってもらえたのに、

また嘘をついている。——その苦い思いを嘯みつぶして、一回だけドアのところで振り返った。愛実自分も降りようと荷物に手を伸ばしていた。それを見て、どうしていいか分からずに戸惑っているうち、後ろの穴井と目が合う。困った顔で穴井を見ると、穴井はちよつとの間こつちを見たあと、ドアへ向かい始めた愛実の肩を引き戻した。愛実がびつくりして立ち止まる。「なんかあったらメールしろ！」

穴井はそう叫ぶと、一瞬置いて、笑みを見せた。自分を海水浴に連れ出してくれた、あの安心感のある笑顔だった。「うん！」とだけ叫び返して、人波に押し出されるようにホームに足を下ろす。

すぐに発車の合図と共にドアが閉まって、電車が動き出した。窓越しに心配そうに手を振っている愛実の姿が見える。でも、愛実も笑顔だった。きつと次に会う時も笑顔で迎えてくれる。

——そう思えることに、たまらなく安心感を覚えた。

二人の乗った電車を見送って立ち尽くしている横を、大勢の人が通り過ぎていく。夕方のホームの巨大な人の波が一斉に階段やエスカレーターの方へと向かっていた。その真ん中で、一人だけ同じ場所に立つたまま、頭上の電光掲示板に目をやる。次の電車は四分後だった。

——だいじようぶ。間に合う。

人混みが徐々に出口へと去って、ホームがにわかに空っぽになっていく。やがて辺りが静

かになると、もう一度携帯を開いて、迷わず阿坂の番号に電話をかけた。しかし、『この電話は電源が入っていないか——』というアナウンスが聞こえてくる。一回切ってかけ直したが、結果は同じだった。

阿坂はおそらく永児の側にいる。そう思いたかったが、もし違っていたらと思うと怖かった。豊田に行く約束を破ることはできない。——それが永児にとつてどんなに大事なことが、よく分かっていた。でも、永児を一人にしておくこともできなかった。

ほかに頼むしかない。

そう思って、もう一度別の番号を選んで、携帯を耳元へ持つていく。後ろからは次の電車に備えて、またホームにたくさんの人たちが上がってきていた。中には浴衣姿の人もある。何人かが左右を通り過ぎていく間、電話の向こうの呼び出し音にだけ、じつと集中した。

とめどなくホームに人が増えていく。後ろに列ができ始めて、遠くから次の電車が近づいてくるのが見えた。その時になつてようやく電話はつながったが、当たり前のように、向こう側にいる人物は何も言わなかった。

それは予想していた。だから、慌てることなく携帯を口元に近付けて、落ち着いた声で告げた。

「私です。小松喜多見です」

『私です。小松喜多見です』

よく冷えたカフェオレのグラスの中で氷がカランと音を立てて、茶色と白の液体の底へ沈んでいく。オーブンテラスのテーブルだと、氷の溶け方が速かった。会長はカフェオレに差したストローを軽く回しながら、はずしたヘッドホンを首にかけて、電話の向こう側に尋ねた。  
「どうしたの？」

『千原さん——』ためらいのある声が聞き返してきた。『そう呼んでいいですか？』

「名前だからね」

そう答えて、三角巾で吊られた左腕を胸元に当て、ガーデンチェアの背もたれにゆったりと身体を預けた。首のヘッドホンからはまだ微かに音楽が洩れている。

『今、どこにいるんですか』

喜多見が緊張した声で聞いてくる。思わず口元に笑みが浮かんだ。一番最初にするはずの質問をしないのが、この人の面白いところだ。——そう思いながら、八王子の外れにあるきれいなカフェのテラスを見渡した。周囲のテーブルに聞こえないことを確認してから、携帯に

向けて返事をする。

『よくおれが生きてるって分かったね』

電車の到着ベルのような合図が電話の向こうから聞こえていた。記憶が正しければ、たぶん中央線のベルの音だった。

『あなたが死ぬわけがないと思ってました』

一分の疑いもないような言い方に、口元の笑みが深くなる。喜多見は息をつく、鋭さを増した声で続けた。

『今、高塚くんが八王子の駅に向かっています。七時二十分頃に起きる飛び込み自殺を防ぐつもりです。阿坂さんが仕事だつて言ってたから、たぶん「会」が絡んでいると思います』

電車の大きな音が電話口から洩れていた。穏やかな住宅街のカフェにはまるでそぐわない音だったが、それ以上に大きな音が道を挟んだ向かいのガレージの前から響いている。法被姿の高校生がバイクにまたがって、無意味にアクセルを吹かしていた。テラス席に座っているほかの数人の客が迷惑そうにそっちに顔を向けたが、男はヘルメットで完全に周囲を遮断して、どこ吹く風でエンジンを唸らせ続けた。

飛び込み自殺。——そういえば、ゴリラがそんな話をしていたな、と思い出しながら、喜多見に聞き返す。

「だからヅカさんを守れって？」

『それが千原さんの仕事じゃないんですか』

声にわずかに震えが混ざっているのはごまかせていなかったが、なんのためらいもない言い切り方が気持ちよかった。――さすがにヅカさんが一年の頃から惚れているだけのことはある。

カフェの店内の時計をちらつと見て、テラスの外にも目をやると、日はもうほとんど暮れていた。これだけ駅から離れていても、浴衣姿の人が結構頻繁に目に付くのは、近くの高台にでも集まって花火を鑑賞するためなのだろう。法被姿の男も、明らかにこれから祭りに出かける出で立ちだった。

「花火、ゆつくり見ようと思ってただけだね」

向こうからは見えないと知りつつ、笑みを浮かべながら喜多見に告げると、喜多見の平坦な声が返ってくる。

『私に冗談言っても無駄ですよ。すごい堅物ってみんなに言われてますから』

喜多見の声がたくさんの人の声に混ざって聞こえる。ホームに着いた電車に大勢の人間が乗り込んでいる様子が目に浮かんだ。押されているのか、声は大きくなったり小さくなったりしていたが、それでも途切れることはなかった。

『私は行きたくても行けないんです。いやだけど、千原さんに行ってもらうしかないんです』『もうすぐ七時だよ』増えていく浴衣姿の人たちを見ながら言った。「渋滞してるだろうし、タクシーで行っても間に合わないと思うけど」

一瞬、喜多見の返事が遅れる。でも、そのあとに返ってきた声は少し挑戦的になっていた。『あなたならなんとかできるはずですよ』

カラン、と音を立ててカフェオレの氷が崩れる。電話のおかげですっかり飲み頃は失っていた。まだしびれの残る左手をじつと見つめながら、動きの悪い右足をテーブルの下で伸ばす。『信用あるんだね』

そう言つて、机に置いてあるもうひとつの携帯の画面をいじつて、ヘッドホンから流れる音楽を切った。電話口から発車の合図が鳴り響いて、その背後から人の話し声が絶え間なく聞こえてくる。その中で、喜多見が早口で付け加えた。

『信用なんて、できるわけじゃないです』

それだけで通話は一方的に切れる。あまり無碍に電話を切られることはなかったのですが、ちよつと新鮮な感覚だった。携帯を耳から離して液晶画面を見ると、『ヅカさんの難破船』との通話記録は四十六秒で終わっていた。

息をついて、薄くなったアイスカフェオレを飲み干し、携帯を二つとも懐にしまった。向



こうでは相変わらず法被姿の男がバイクを吹かしている。その音があまりに耳障りで、テラス席の客が何人か店の中へ引き上げていた。自分も椅子から立ち上がると、まだ重たい右足を少しひきずりながら、テラスを囲む柵の方へと歩いていく。そして、右手で柵をつかんで飛び越え、反対側に降りたのと同時に、トランプを一枚、法被男に向かって投げた。

「まったく、静さんよりも人使い荒いね」

そうつぶやいて、周囲を確認しながらガレージに足を踏み入れ、気を失って倒れている男のヘルメットを拾う。鍵はオートバイに付いていた。

「借りるよ」

意識のない男にそれだけ告げると、男の体を足でガレージの内側へと転がした。それから外に出て、ガレージのシャッターを閉め、バイクにまたがる。右手だけで十分だと思つたが、一応、左手も三角巾から抜き取つた。

眼鏡を外してポケットに入れ、ヘルメットをかぶる。次の瞬間には、会長のまたがつたバイクは一気に加速して、八王子駅の方へと消えていった。ちょうど最初の火花が八王子の空に上がったところだった。

永児が満員電車の車内で携帯の時間を確認しようとした時、窓の外に大輪の花が咲いた。ドン！と、大きな一発目の火花に続いて、四本の緑の玉が、光の線を引きながら空中へ上がつていく。――七時。予定通りの時間に火花は始まった。薄闇の空に次々に光の花が咲いて、鈍い爆発音が腹に響いてくる。すぐ隣ではアズミがドアの窓に両手を付けて、その様子を息を呑んで見守っていた。

ほかの乗客も一様に窓から外を覗いて、歓声を上げている。一人だけ、その声援を遠くに感じながら、ドアにもたれかかって、八王子駅が近付いてくるのを息を殺して待った。あと二十分。――できればホームの中央に近い車両に移動しなかったが、電車はぎゅうぎゅう詰めでまったく身動きがとれなかった。

どうすることもできずにじっと固まっていると、人混みに潰されかけているアズミが、ふいに袖をひっぱってくる。その気まずそうな視線の先を追うと、人混みを押し退けて、よく知っているゴリラ顔が現れた。

「よう」

隙間に強引に入り込んできた阿坂が言った。その登場を祝うかのように、窓の外で花火がいくつも炸裂する。数週間ぶりに会った阿坂は、覚えているよりも一回り大きく感じた。最後に会った時は担架に運ばれていたからかもしれない。

阿坂はアズミの頭の上に大きな手を載せて、アズミがいやがるのも構わず、髪の毛をくしゃくしゃにかき回す。アズミはぶつぶつ言いながら乱れた髪の毛を直して、膨れた顔でうつむいていた。

二回目の大きな尺玉で、また車内が歓声で満たされる。花火を見ようと乗客が車両の片側に寄ってきて、そのしわ寄せでアズミがドアとの間で苦しうな声を上げた。半歩後ろに移動すると、アズミの小さな体が阿坂と自分の間に潜り込んでくる。アズミはなんとか息をついて、隙間から赤くなった顔で「ありがと」と一言つぶやいた。

『社』のことは知ってるよな

ドアの窓ガラスに肩をもたせかけていた阿坂が、おもむろに言った。うなずくと、阿坂は低い声で続ける。

『どうもその一部が裏切ってるらしくてな。そいつらの資金源のひとつが『踏切屋』って言って、おれとアズミが追ってる連中だ』

ガラスに映り込んだ阿坂と自分の影が、花火の光で一瞬完全に消え去る。光の下では、八

王子市郊外の街並みが影絵のように淡々と過ぎていった。花火の色に染まった川を渡って、電車は八王子の駅へ近付いていく。

「峰のお母さんがその人たちに殺されようとしてるんです」

声を最小限に落として阿坂に告げた。すると、阿坂はしばらくこつちを見ていたあと、窓の外にそつと視線を流す。気のせいかな、その横顔は少し寂しそうだった。

「殺されるんじゃないよ」あまり周りを気にしていない感じで、阿坂が言った。「あれは峰の母親の方から頼んだんだ。借金まみれの母親にはありがたい話なんだろ。自分の命と引き替えに子供がまともな人生送れるんなら」

花火の光がまた窓に跳ね返って、ガラスに束の間、色とりどりの反射を映り込ませる。その色がひとつずつ窓ガラスから消えていくと、あとには八王子の住宅街の灯りが残って、ずつと遠くまで続いていた。

「そんな人間が案外大勢いるんだ、この街には」

阿坂が外の景色を見つめたままつぶやく。その静かな声音で、峰の母親のあきらめたような——むしろどこかほつとしたような表情を思い出した。以前、台所の椅子にベルトを持っていた時の自分の母親と同じ顔だった。死ぬのを選んでことよりも、それに安心してゐることの方がずつと悲しかった。悲しくて、それ以上に悔しかった。

「だからってなんで、電車なんか——」

右手に汗が染みてきて、ズキズキと痛みが増すのを感じながら、感情を抑え切れない声で言った。間に挟まれたアズミが、大きな瞳でこつちを見上げる。

「電車の人身事故ってのは東京じゃ天災みたいな扱いだ」阿坂が感情のあまり入っていない声で答えた。「高い金出してでも、好きな時に都合良く天災を起こしたい人間が、いくらだっているんだろ」

『まあなく八王子、八王子です——』

車内に到着のアナウンスが流れる中、電車の外を大きな建物がちらほらと通過して、その隙間から花火が見え隠れしていた。『お出口は左側——』という放送が続いて、それと共に電車が速度を緩めていく。花火に見入っていた乗客は一斉に携帯をしまつて、荷物をまとめ始めた。

「助けないんですか」

阿坂の目をじつと見つめながら聞いた。アズミが低い位置で身をすくめる。阿坂は視線を逸らすことなく、こつちを見返したままで答えた。

「証拠は揃つてる。でも孤児院には連絡してない」

「なんでですか」

思わず強い声で阿坂に聞いた。アズミが上目遣いの困った顔になっていたが、構わずに阿坂を睨み付ける。

「まだ口座に金が入ってない」阿坂が平坦な声で返した。「母親が飛び込む一分前に振り込まれることになってる。連絡はそれからする」

「なんで——」

「母親が生き残ったら借金も生き残る。あのおばちゃんはそんなことは望んじゃねえよ」

ドンと大きな花火がまたひとつ咲いた。峰の家から見た青空のような、きれいな群青色だった。スイカを受け取った時の母親の優しい笑顔がよみがえってくる。阿坂の言っていることはたぶん本当だった。それが分かるからこそ、喉の奥から焼けるような酸がこみ上げてきた。

下唇を噛みしめて、力なく頭を垂らす。逆流した胃酸の味が舌の隅に溜まつて、右手の痛みがますますひどくなつた。アズミが心配そうに「高塚？」と声をかけてくる。それを覆い隠すように、阿坂が身を乗り出してきて、耳元で囁いた。

「心配するな。おばちゃんが死んだあとで、あいづらはおれが叩き殺してやる。それでハッピーエンドだ」

「違う！」反射的に、痛む右手で阿坂のシャツをつかんだ。「そんなのおかしい！」

アズミがびつくりしたように身を縮める。何人かの乗客も一瞬、こつちを見た。阿坂もい

くらか身を引いて、それまでの悟ったような表情がわずかに揺らぐ。

「そんなこと、望む子供なんているわけない。阿坂さんには分からないだけだ」

そう告げると、阿坂の眉が一瞬、ぴくりとなる。外のネオンの数が増えて、それと連動するように電車の速度が落ちていた。高い建物が窓の外を埋め尽くして、車内に弾けていた色とりどりの光が見えなくなる。まもなく八王子駅だった。

「ああ」阿坂が低い声で言った。「そうだな。おれには分からねえな」

八王子駅前のビル街に電車が滑り込んでいく。シャツをつかんでいる手を、阿坂があつさり振り払った。そして携帯の時計をもう一度確認してから、淡々と、でもどこか怒っているような口調で告げた。

「どっちも手遅れだ。この電車が着くのは八王子の駅の端っこだぞ。花火大会の真っ最中で、駅のコンコースは人で埋まつてる。五分で中央線の改札まで行つて、満員のホームでおぼちゃん一人、見付けられると思うか？」

「五分——」

とつさに繰り返して、周囲を見回した。この人数が一斉に階段に向かったら、とてもまともにも動けない。——中央線のホームに行くには一旦階段を上がって、私鉄の改札を出たあと、長い中央コンコースを抜けて、もう一度JRの改札をくぐらないといけなかった。駅が普通

の状態でも優に五分はかかる距離だ。この人混みなら、十分で行けるかどうか怪しかった。

電車が駅のホームに入る。案の定、ホームにも電車の中と同じぐらいたくさんの人が待っていた。無数の家族連れ、カップル、中高校生が、窓の向こうを流れていく。

五分——。

「やめとけ」考えていることを見抜いたように、阿坂が鋭く念を押す。「八王子で母親止めたところで、豊田で姉貴が死ぬだけだ。このままでいいんだ、高塚」

口の中に溜まつた苦いものを全部、無理やり飲み込んだ。刺すような痛みが喉の奥を走ったが、右手の痛みに比べれば、それもないことはなかった。

「豊田には小松さんが向かつてます」

そう言うと、阿坂の眉がまた動く。それまで黙っていたアズミも驚いた声を上げた。

「きたみんな——？　だめだよ、高塚！『踏切屋』には駒崩れもいるんだよ！」

胃の上の方が強く痛んだ。携帯の写真に残っている喜多見の儂い笑顔を思い出して、目の前がぐらりと歪むのを感じる。自分でも正しいことをしているのかどうか、よく分からなかった。でも、もう電車は停まりかけていた。後悔している暇も、考えている暇もない。残されているのは五分だけだった。

電車が完全に停車すると同時に、車両がぐくと片側に傾く。ブシュッとドアのロック

がはずれる音がして、ドアが開くまでのわずかな間、阿坂と目を合わせていた。でも、互いに何ひとつ言わないうちに、全車両のドアが一斉に開く。

五分――。

次の瞬間、人並みが合流する混沌の中へと、永児は一気に押し出された。

「高塚、行つて！」

ホームに降り立った瞬間、アズミの叫び声が耳に届いた。でも、すぐにそれも人波に呑み込まれて、阿坂もアズミも姿が見えなくなる。二人を探す余裕はなかった。とにかく人の流れに沿って前へ進むしかない。電車に乗るために並んでいる人の列を通り抜けると、人波は階段の方へと動き始める。分厚い人の壁の先、数メートル前方に、駅のコンコースへ続く階段があった。

手の中の携帯にちらりと視線を落とす。――七時十五分。

花火の音がする度に立ち止まる人々の間を強引に通り返けて、階段を目指した。しかし、階段の麓で人が密集していて、徐々に数歩の距離さえも進むのが難しくなる。人の流れが完全に滞って、奥歯を噛み締めて足を止めるしかなかった。

頭の中をずっというんなことが回っていた。――高塚くんが行かないといけないの？　という喜多見の言葉と、阿坂の話が脳裏に焼き付いている。圧倒的な人混みを前にすると、一瞬、自分がこんなところで何をしているのかさえ分からなくなった。自分が行ったところで、何

もできないかもしれないのに――。

でも、蜂の助けを求める声も頭から離れなかった。自分も家の玄関で、父親の写真を見上げながら同じことを思ったからこそ、どんな気持ちで、どんな思いで、蜂がその言葉を発したのか、痛いほどよく分かった。

――誰か助けて。

気が付くと、目の前で火花を見ながら携帯を打っている男子高校生の肩を、左手でつかんでいた。「何すんだよ――」と文句の声が返ってきたが、構わず高校生を横に押しやった。そして、地面に手が突くぐらいに身を屈めると、その先の二人の男性の足元を強引に通り返ける。何人もの人に体がぶつかって、怒声があつちこつちから上がった。それでもすべてを振り切つて、階段までたどり着いたが、大学生風の集団が行く手を阻んでいた。感覚がなくなりかけた右手で、そのうちの一人をつかんで横へひっぱる。

「おい――」

相手の男が怒つてつかみかかっていたのを力いっぱい振り払つて、男の方を睨んだ。途端に相手の表情が怯えたものになる。「すみません」とつぶやいたが、相手は顔を背けた。

階段の上の時計が七時十六分になっている。慌て周りを見渡すと、階段の右端にわずかにスペースが空いていた。斜めに階段を横切り始めると、よほど自分が異様な雰囲気放つ

ているのか、周りの人が徐々に道を空けてくれるようになる。それをいいことに、一気に階段を駆け上がった。

上に出ると改札だった。胸ポケットの切符を取り出そうとして、そこに差していたお土産のボールペンがなくなっていることに気が付く。でも、それを残念がるのもあと回しにした。大勢の人が並んでいる自動改札を無視して、一番端の駅員のいる改札へとまっすぐに向かう。そこにも行列ができていたが、列の後ろをすり抜け、人の間から切符を駅員の手元に向けて放り投げた。そして、文句を言われる前に広いコンコースの廊下へと飛び出す。

コンコースも人で埋まっていた。でも、無理やりその中を駆け出す。スーツ姿の会社員や、大荷物の家族連れの中に、いろんな色の浴衣が見える。もしかしたら六組のみんなもどこかにいるのかもしれない。でも、もう人の顔はよく見えなくなっていた。

華やかな看板やショーウィンドウの前を駆け抜けながら「すみません!」と叫んで、空いている隙間から隙間へと、体を右へ左へ、角度を変えながら進み続ける。せめてお年寄りや子供にぶつかるのだけは避けようとしたが、途中からはそれも気にしていられなくなった。誰かのカバンに左手が当たって、その人がカバンを落とすのが分かったが、振り返ることもせず、さらに走った。

――このままでいいんだ、高塚。

阿坂の声が引き留めるように頭の後ろから聞こえてくる。喜多見が豊田に向かっていることを告げた時の、アズミの青ざめた顔も忘れられなかった。喜多見のことを考えると、後悔が胸を過ぎるのを止められない。でも、もうどうしようもなかった。小松さんなら、きつとなんとかしてくれる——。そう信じるしかなかった。

ようやくJRの改札が見えてくる。改札の上の時計は——七時十七分を指していた。中に入るための切符が必要だったが、隣にある券売機の方を見ると、気が遠くなるほどの長蛇の列ができています。

冷たい汗が額に吹き出してきた。花火の人出で、警備の駅員や警察官が何人も改札の近くに配置されている。でも、電光掲示板に表示された次の電車はすでに七時二十分のものになっていた。——どうしたらいいのか分からなかったが、それでも改札の方へと進み続けるしかなかった。人の声と雑踏の中に混ざって、時々花火の音が響いてくる。辺りはすごい熱気と湿気で、息をするのも苦しいほどに暑かった。

やっと改札の前にたどり着いて、乾いた喉をわずかな唾で潤す。時計はまだ七時十七分のままだった。でも、秒針が怖いほどの勢いで進んでいる。強引に行くしかないのか——と違って、改札の列へ向かいかけた時、突然大きな体が行く手を塞いだ。

「阿坂さん——」

息を弾ませた阿坂が、目の前に立ちほだかっていた。アズミも両手を膝に突いて、ゼエゼエ言いながらその横にくっついていて。とつぎに包帯の中のガラス片を握ったが、それ以上動ける前に、阿坂がポケットから何かを取り出して、それをこっちの胸に突き付けてきた。

「どうしても行くなら、取れ」阿坂が言った。「ホームには踏切屋もいる。連中とやり合うなら、おまえも仕事の一部だ」

視線を胸元に落とすと、阿坂の手にはチャージ式のマネーカードがあった。建物の外から連続で花火の炸裂音が響いて、体の芯まで届く。改札の前で立ち尽くした自分たちを気にも留めずに、大勢の人が周りを通り過ぎていた。あまりに人が多すぎて、かえって誰もいないような、そんな世界から切り離された感覚があった。

胸をカードでぐいっと押される。息が乱れていて、視界がすごく狭い。阿坂の顔と、頭上の電光掲示板以外、すべてがぼやけて見えた。

「無理です」

阿坂にそう言い返すと、カードを突き付けていた手が胸ぐらをつかんでくる。そのままかかとは持ち上がるほどひっぱられて、至近距離まで引き寄せられた。

「いいから取れ」

そう告げる阿坂の目は冷たかった。学校での阿坂じゃない。それでも何も言わずにいると、



呼吸が伝わる距離で、苛立ちを抑えた阿坂の声が降ってくる。

「なんで人殺しちゃいけないのか分かるか？」

アズミが「阿坂！ 聞こえるよ！」と低い声で囁いたが、人混みは何もないかのように自分たちを避け続けていた。爪先しか地面に付いていなくても、右手はいつでも振りかざす準備ができていた。

「止まらなくなるんだ」阿坂が胸元を締め付けながら、唸るような声で言った。「おまえ、もうその兆候が出てるぞ。色々まずいものが見え始めてるんじゃないのか？」

何も言わなかった。阿坂の後ろでコードに付いたスイッチが揺れている。ガラス片を握った右手を上げようとしたが、アズミがその腕をつかんで止めた。そして、泣きそうな顔で首を横に振る。アズミのもう片方の手は、阿坂のシャツの裾をひっぱっていた。

阿坂がアズミの顔をちらつと見たあと、突き放すようにこっちの胸から手を放す。そして、もう一度マネーカードを突き出しながら言った。

「人殺して、壊れずにいられるのは、仕事でやつてるやつだけだ。おまえだって、もう分かってんだろ。——南棟の時のこと、忘れたのか？」

視界の隅で、アズミの顔が一瞬、強ばるのが分かる。頭上の時計の針が、十八の位置に動いた。電車が来る。もう時間がない。——とつさにカードを阿坂の手からつかみ取って、改札

の列へと向かう。阿坂はすぐにアズミの背中を「行け」と突いて、自分も別の改札へと向かった。阿坂が携帯を操作すると、自分の携帯とアズミの携帯が同時に鳴る。左手で携帯を耳に当てると、阿坂の声が聞こえてきた。

『おれはホームの東京側に下りる』改札をくぐるピツという音と共に、阿坂が言った。『おまえら二人は逆側に下りろ。携帯はつないだままにしとけ』

アズミが横で「了解」と電話に答えて、改札を抜けた。自分も続こうとしたが、右手に握ったマネーカードの冷たさで足の動きが鈍くなる。包帯の中のガラス片よりも冷たかった。阿坂の姿はすぐに人混みで見えなくなったが、声だけが電話から聞こえ続ける。

『踏切屋には人前で絶対に手を出すな。でも、死んでも逃がすなよ』

阿坂の言葉で、前を走るアズミの体が縮こまる。

『それからアズミ。高塚が勝手なことをしたら、構わないから殺せ』

アズミはこつちをちらつと振り返って、か細い声で「了解」と言った。それを聞きながらも、改札の手前で止まったままだった。後ろの人が背中につつかってきて、文句を言いながら隣の改札へと向きを変える。握り締めたカードの感触が掌を切り裂くようだった。——使っていないわけがない。こんなこと、許されるはずがなかった。

「高塚！ 時間！」

アズミが叫ぶ。十八分を指していた長針が、その瞬間、カチッと動いて、十九分になった。目を一瞬閉じて、開く。心の中でうねり狂うものを押し殺しながら、カードを改札に当てた。はつきり数字は見えなかったが、かなりの桁数の金額が視界の隅を掠める。でも、今はそれを考えている余裕がなかった。下のホームからはもう電車の到着のアナウンスが聞こえてくる。

峰の母親の命はあと数十秒しかなかった。

「危険です！ 押さないで下さい！」

手持ちのスピーカーでそう叫ぶ駅員の声が階段の下から飛んでくる。永児はホームへ下りる階段の上で足を止めて、目の前の光景に愕然とした。

階段は完全に人で埋まっていた。快速電車を降りた人たちと、特別快速待ちの人が階段の下に溜まって、完全な膠着状態になっている。なんとか人を押し退けながら、無理やり半分開らいまで下りることができたが、それで限界だった。次の電車が来るまでは、もうびくりとも動きそうにない。これ以上進むためには人をなぎ倒していくしかなかった。

「だめだ。降りられないよ」

アズミが近くの手すりの上に背伸びをして、下の様子を見ながら首を横に振った。目を凝らして、その場から峰の母親の姿を探したが、遠くは視界が霞むほどの人で、とても一人の人間を見付けられるような状態ではなかった。

『——まもなく二番線、電車がまいります。黄色い線の内側までお下がり下さい』

再び到着のアナウンスがホームに流れる。それを聞いて、下唇を血の味にするまで嚙んだ。

もう何秒、時間が残っているのかも分からない。耳に当てた携帯からは、阿坂も人に揉まれている音が聞こえていた。

「阿坂、こつち無理！」アズミの声がすぐ横と、携帯の向こうから二重に聞こえる。「そつちは!?」

『無理に決まってるだろ。とにかく一旦引き——』

阿坂がしゃべっている途中で、携帯を耳元から離れた。満員のホームの中では、駅員が「押さないで下さい! 押さないで下さい!」とスピーカーで同じことを叫んでいて、あつちこつちから文句の声飛び交っている。そのすべてを覆うように、『大変危険です。黄色い線の内側まで下がってお待ちください——』というアナウンスが何度も繰り返されていた。

「たぶん、ホームの先端だ」

携帯を完全に下ろして、人混みを見つめながらつぶやいた。アズミがこつちを見て、「高塚?」と聞く。それに何も答えずにじつと目を細めていると、アズミが慌てた様子でシャツの袖をつかんできた。

「——何かする気なの?」アズミが大きな目で訴えてくる。「これ以上無理だつて。どう考えても進めないよ。お願いだからあきらめて! じゃないと、私——」

喉に何かが支<sup>つか</sup>える。自分の母親が線路の上に立っている様子が頭を過ぎった。それを見て

いる自分の姿が、峰の背中に置き換わっていく。

「母さん——」

思わず口から洩れた一言を聞いて、アズミが顔をしかめる。

「違うよ」アズミがどこか怯えたように言った。「高塚のお母さんじゃ——」

言い終わるのを待たずに、アズミを横に押しやって、手すりの外を覗き込んだ。下のホームまでは三メートルぐらいの高さがある。真下も人でいっぱいだったが、一箇所だけ人のいないところがあった。——黄色い安全線の外側。

ぐつと息を止めて、通話状態になったままの携帯をポケットにねじ込む。アズミが「え?」と言うのが聞こえたが、次の瞬間には左手で手すりを持って、その上を飛び越えていた。アズミの「高塚!」という叫び声を聞きながら、無数の人の頭上を越えて、線の外側に音を立てて着地する。周囲の人たちが一斉に叫んで、後ろへ飛び退いた。

バランスを崩して、片足がホームからはみ出す。危うく線路に落ちかけたが、黄色い凸凹の付いたタイルをつかんで、なんとか持ち堪えた。顔を上げると、もう電車の入ってくる音が線路を伝って響いている。

「くっ——」

感覚の鈍い右手をコンクリートに強く突いて、黄色いタイルを蹴った。そして、電車が入っ

てくる方向へ一気に走り出す。線路との間にあるわずか数十センチほどのスペースは、片側が人で溢れていて、右半身が立っている人を次々にかすめていった。ホームから悲鳴や怒号が重なって、駅員の制止の声が飛んでくる。でも、それも遠くに聞こえた。視界が歪んで、斜めに傾いていた。

もつと——もつと速く。そう思う度に体が前のめりに倒れていって、線路に転げ落ちるのを覚悟で走り続けた。風景の色が滲んでいく。たくさん人の服の模様が万華鏡のように混ざって、その中にスイッチの付いたコードがぶら下がっていた。コードは絶えず数歩先で、誘うように揺れている。母さん——そう心の中で繰り返した。

母さん、死んじやだめだ。

ホームの端が見えてくる。電車の先頭が近付いて、それに合わせて人影がひとつ、安全線から踏み出すのが分かった。峰の母親だった。奥歯を割れるほど強く噛み締めて、さらに前の空間を引き寄せるように走る。ぶら下がったコードが徐々に近付いてきて、電車のヘッドライトが母親の体の輪郭をくつきりと浮かび上がらせた。

時間の流れが自分と母親以外、止まって感じられた。逆光に輝いた母親の体がゆらりと前へ傾く。悲鳴が遠いところから聞こえてきて、電車からものすごい音の警笛が上がった。母親がホームの端から線路へ倒れ込んでいく。あと少し。——コードがもう体に当たりそうな距離で揺れていた。

「じゃまだ!」

そう言って、スイッチのコードを横になぎ払い、地面を踏み切って跳んだ。止まることも、落ちることも考えなかった。斜めになった母親の体を辛うじて左手がつかむ。その重みで、二人揃って線路へひっぱられた。目の前がヘッドライトでいっぱいになって、瞬間、母親と姉、そして喜多見の顔が頭を過ぎった。

父さん——。

体が電車に接触する直前、父親の顔がいつぱいに浮かぶ。同時に何かが自分を引き戻すような感覚があった。

とつさに体をひねり、電車の車体を足の裏で力いっぱい蹴った。靴のゴム底が電車を捉えて、母親を両手でひっぱりながら、動く電車の側面を一步駆ける。そのまま疾走する電車に弾かれて、猛烈な勢いでホームの中央へ母親ごと跳ね返された。

母親を抱きかかえて守りながら、人の中へと突っ込み、コンクリートの地面を激しく転がる。そのうちにつかんでいた腕が解けて、上も下も分からなくなつた。耳がおかしくなつて、悲鳴も叫び声も聞こえなくなる。口の中は血の味でいっぱいだった。

やがて体が何かにぶつかって止まる。どこにどんな形で倒れているのかさえ分からなかつ

たが、それでもなんとか顔を上げた。喉に血が流れ込んできて、激しい咳が出る。欠けた歯が、血と一緒に地面の上を転がった。

「高塚！ 高塚、だいじょうぶ!?」

鼓膜を貫くようなアズミの甲高い声と共に、小さな手が背中<sup>に</sup>に当てられる。視界が滲<sup>に</sup>んで、風景が回る中、アズミに向かって叫んだ。

「母さんは——？ 母さんは——!?」

「だいじょうぶ！」アズミが興奮した様子で腕をしっかりつかんでくる。「無事だよ！ 高塚、すごいよ！ 信じられない！」

やっと辺りの様子が見えるくらいに視界が回復して、ベンチの足元に横たわっている峰の母親の姿を見付けた。やってきた駅員が声をかけていたが、意識を失っているようだった。自分が助かったことに気が付いていないのか、母親はボロボロになった革のコート姿で、微かにやり遂げたような笑みを浮かべていた。子供を守ったことに満足している母親の顔だった。

口の中に溜まった血を飲み込む。横にいるアズミが腕を握り締めたまま、息を詰めていた。目頭が熱くなってきた、ぐつと唇を噛むと、峰の母親のまぶたが少しだけ瞬く。その横では、急停車した電車がゆっくり正規の停車位置まで動き出していた。

「あいつらだ——」

少しだけ力を抜ぎかけた瞬間、アズミがつぶやくのが聞こえる。その視線の先を追うと、人波の中でベンチに座っていた二人の男と目が合った。稲荷の階段で擦れ違った二人だった。ピアスの男は夏なのにジャケットを着ていて、無表情でもう一人の若い男に何かを告げている。その時、ちょうど電車のドアが開いて、何事もなかったように、大量の人がホームに溢れ出してきた。

ピアスの男が人に紛れるようにそそくさとベンチを離れ、階段の方へ去っていく。若い男の方もこつちを一聲したあと、ホームの人の流れに乗って、電車のドアへと向かった。同時に背中からアズミの手が離れるのを感じる。振り返ると、そこにアズミの姿はなかった。

「アズミ——!?」

とつきにアズミを下の名前で呼んでいた。でも、その時にはアズミはピアスの男を追って、すでに走り出していた。小さな体で人波をすり抜けて、アズミが男に向かってパチンコ大の玉を投げる。それは見事にピアスの男に命中して、黄色い染みが男の背中一面に広がった。蛍光弾——。自分の右手と同じ色だった。男が慌てた様子で人混みの中へと突っ込んでいく。

「アズミ!!」

もう一度呼び止めようと叫んだが、アズミは片手に折りたたみ式の傘を構えて、男のあと

に続いて階段の方へと消えていった。

「君、だいじょうぶか？」

駅員が後ろから声をかけてくる。それに「だいじょうぶです」とだけ答えて立ち上がった。

「本当にだいじょうぶかい？ 医務室へ——」

「いいです。だいじょうぶです」

そう言つて、心配そうに尋ねてくる駅員を振り払つて駆け出した。花火が鳴り続ける中、人の流れをかき分けながら、またホームを逆方向に向かつて走る。足がズキズキと痛んで、右手はもう感覚が麻痺していた。気配——。よく知っている気配を、ピアスの男から感じていた。

若い男も、太った人も、たぶん違う。

でも、ピアスの男は——あれはたぶん駒だった。

電車はブレーキ音を立てながら、ホームの途中で停車した。

それと同時に反対側の端から叫び声上がるのを聞いて、阿坂はつながったままの携帯を耳に当て、「どうした、アズミ!？」と呼びかけた。だが、返事はなく、携帯からは激しい騒音が鳴つて、そのあと、聞き取れないほどの大声が飛び交い始めた。周りの乗客も異変に気が付いて、一様にホームの先を気にしている。しかし、電車が再び動き出して、目の前へ滑り込んでくると、早くもそんなことを忘れたようにみんな降車客を避けて、電車に乗り込む態勢に入っていた。

何やつてんだ、あいつら——。

人波が大きく移動する中で、辺りを見回すと、『二番線、現在安全確認中のため、一時発車を見合わせております』という即席のアナウンスが流れてくる。腹いせに電車の側面を力いっぱい蹴つてから、携帯に向かつて怒鳴つた。

「アズミ！ 返事しろ！」

『阿坂さん——』

電話の向こうから返ってきたのは永児の声だった。その背後では、聞き取るのが難しいほどいろんな音が鳴っている。声だけでなく、定期的に上がる花火の音がとにかく邪魔だった。「何があった？ 言え！」

携帯に向けて声を荒げながら、永児たちのいる方向へ電車で沿って歩き出す。永児は走っているのか、息を切らしながら早口で返してきた。

『お母さんは無事です。若い方の男が電車に乗りました。後ろから二面目くらい——』

その言葉で立ち止まって、横の電車を見る。同時に、駅員が今までと違うアナウンスを流すのが耳に届いた。

『迷惑をおかけしました。安全が確認できましたので、二番線、運転を再開致します』

それと共に、発車の音楽がホームに響き始めて、階段を降りてきた数人が電車へと駆け込んでいく。ちらりとホームの先を見たが、アズミや永児の姿はまるで見えなかった。

「そっちはおれが追う」そう言って、すぐ側のドアから自分も車内へ足を踏み入れる。「もう一人のピアスはどこだ」

『アズミが追いかけていました』

間髪容れずに永児が答えた。思わず口元が歪む。西野というピアス野郎が駒崩れなのは間違いなかった。どう考えても、アズミ一人では荷が重すぎる。一瞬、電車から降りるべきか

と迷ったが、その前に永児が続けて言った。

『ぼくも追います』

永児の声が耳元で強く響く。そのまま発車の合図が鳴り終わるまで、ドアのすぐ内側に立ち竦んでいたが、やがて「頼む」とだけ永児に告げた。電車のドアが閉まる油圧の音がする。直後に車体が大きく一回揺れて、電車が動き始めた。

『この電車は中央線特別快速、東京行きです。次は豊田、豊田——』

出発のアナウンスが流れて、車内の様子を目をやる。それなりに人は多かったが、花火の真っ最中だったので、歩けないというほどでもなかった。たむろして騒いでいる男子高校生を「どけ」と押し分けて真ん中に出ると、車内の通路を見つめる。そして、携帯を左手に持ち替えて、右手を「ぎ」と鳴らした。

立っている乗客はみんな、花火を見るために車体の片側へ集まっていた。それで空いた通路の片側を歩きながら、右手の指を軽く振る。サダクラ以来、久しぶりに右手に熱が戻っていた。足を速めて、短パン姿のおっさんや、団扇うちわを持った浴衣の女の子の横をすり抜けると、段々口元に笑みが浮かんでくる。

携帯に登録してある銀行のサイトを左手で開いた。峰の母親の部屋から見付け出したＩＤとパスワードはすでに入力してある。目の端で母親の口座に金が振り込まれていることを確



認して、携帯をポケットに突っ込んだ。それから歩く速度をさらに上げ、連結部を抜けて後ろの車両を目指す。

大きな花火が破裂する度に、控え目な歓声や拍手が車内に巻き起こった。赤や青の光の反射で、暗い空が色鮮やかに変化していた。その色の中を、白の吊革が右へ左へ、電車の傾きに合わせて一斉に揺れる。

次の車両も素早く通り抜けると、さらにまた連結部に差し掛かる。その辺から目を凝らして、沢田の姿を探し始めた。――沢田はきつと次の豊田駅で降りて、もう一人の仲間と合流するつもりだった。そうなったら、見付け出すのは至難の業だ。

また右手の関節を鳴らす。連続で上がる花火に背中を押されるように、気持ちが高揚していくのが分かった。こんな人混みで見付からないように人を殺すのは狂気の沙汰だったが、それでも楽しくて仕方がなかった。血が沸騰していく。生きている感覚が全身を満たしていた。前を塞ぐ酔っ払いの一团を横に押し退けながら先へ進んで、床にしゃがんでゲームをしている子供の頭上も跨ぎ越えた。窓の外では風景が逆方向へ、すごい勢いで流れていく。そのまま三両目、四両目、五両目の車両を抜けると、ちょうど反対側の連結部が開いて、焦った様子の若い男がそこから姿を現した。沢田だった。首に提げた下品なネックレスですぐに分かる。視線を少し下げたものの、進む速度は落とさなかった。

沢田が後ろを気にしながら、こつちへ向かって歩いてくる。ちょうど花火大会が佳境に入つて、今まで以上に大きな音が何発も連続で響いていた。立っている乗客はみんな窓の方へ体を寄せながら、一心に外を眺めている。座席の乗客も、ほぼ残らず窓の外に意識を集中させていた。

「たーまやー!」

学生が叫ぶ声が響いて、大きな拍手で車内が沸いた。一緒に笑いも起きる。逆側の席の乗客も花火を見ようと身を乗り出す中、沢田が近付いてきた。まだこつちに気が付く様子はない。強く右手を握り締めてから、いつばいまで大きく開いた。関節が伸びる心地いい音がする。揺れる吊革を手で避けて進むと、沢田はもう間近まで迫っていた。

シューッという打ち上げ音が窓の外でこだまして、乗客が息を呑む。それに合わせるように、車両の中央部で、沢田と正面から向き合った。ほんの一瞬、視線が絡む。

「よう」

つぶやくのと共に、大きな笑みをプレゼントする。沢田が怪訝な顔で脇に避けて、やり過ぎそうとした。でも、その時にはもう沢田の左肩をつかんでいた。打ち上げ音が頂点に達するのを聞きながら、逃げるような素振りを見せる沢田の肩をしつかりとつかみ直す。そして、外で巨大な尺玉が破裂するのと同時に、沢田の心臓に掌底を放つた。

掌底の音と重なって、夜空に大輪の花が咲く。車内が一瞬、昼のように明るくなって、片側の観客が思わず何人か立ち上がった。その数人が携帯のカメラを手に逆側の窓へと移動したので、一番端の空いた席に沢田を座らせる。

「あらあら、酔っ払ったのかしら」

横に座っていたばあさんがそう言うのに笑みを返しながら、沢田の体を座席の端板にもたせかけた。

「いつもなんだよ。放つといていいからね、ばあちゃん」

ばあさんは微笑んでうなずいた。窓の外では花火が次々に咲き乱れて、『まもなく豊田、豊田』と、アナウンスを響かせながら、電車が豊田駅へ近付いていく。喜多見が豊田で何をするつもりかは分からなかったが、早くやらないと、この電車が峰の姉を殺すはずだった。

ポケットから携帯を取り出してみたが、通話とはつくに切れている。電車に乗ったからなのか、それとも人が多すぎて基地局がパンクしているのか、表示は圏外になっていた。一応、もう一回通話を試みたが、電波を拾うことができない。

あきらめて携帯を閉じると、花火が窓の向こうで激しく夜空を染めていた。こんな風景の中で気持ちよさそうに死んでいる沢田が、うらやましく思えるほどだった。

小松――。

阿坂は衝撃に備えて、吊革をつかみながら思った。  
あとはお前次第だ。

吊革が揺れて、電車がぐくと横に傾く。喜多見は乗客の間をすり抜けるようにして車内を移動しながら、もう一度携帯に目をやった。

七時二十二分。まもなく豊田駅だった。

到着してすぐに峰の姉を見付けるつもりなら、自分もなるべく先頭車両に近いところに乗っていた方がいい。——さつき通過した日野駅のホームを見て、やっとそのことに気が付いた。だから、浴衣の袖がほかの人にひつかかるのも気にせず、先へと歩き続けた。

間に合うけど、きわどかった。電車が到着してから、七時二十五分まで、二分も残っていないはずだ。もしその間に峰の姉らしい人を見付けることができなかったら、とにかく非常停止ボタンを押すしかない。駅員の人には怒られるかもしれないが、そのくらいならきつと中学生というのが言い訳になるはずだ。

強い衝撃音が電車の窓に走って、携帯から顔を上げる。真横の線路を、上り電車がすごい勢いで逆方向へ擦れ違っていた。色の斜線にしか見えないスピードで通過していく電車の姿に唾を飲み込んで、一瞬、足を止める。上り電車が動いているということは、永児が間に合っ

たのだろう。——でも、それは同時に、次の電車が定刻通り豊田に着くことを意味していた。

ボタンを押すだけだ。そう自分に言い聞かせたが、緊張感是否応なく高まっていく。乾いた唇を合わせて、浴衣に不似合いな旅行カバンを抱え直し、再び電車の中を歩き出した。

「あ、花火——」

小さな女の子が母親につぶやくのが聞こえて、歩き続けながら女の子の指している方向を見る。八王子の平野に無数の民家が連なっていて、その向こうの夜空で、小さく花火が咲いていた。「ほら」とか「あそこ」とか、花火のことを教え合う声が車内のあちこちから上がって、多くの人が同じ方向に視線を向ける。まだかなり距離があるせいか、光だけで、音は聞こえてこなかった。

あの下に、きつと高塚くんがいる。——そう考えると、得体の知れない不安を覚えた。千原に頼んだのが本当によかったのか、疑問が湧き上がってくる。それでも、もうどうしようもなかった。せめてあと何分あるのか、最後にもう一回だけ時間を確認しようと携帯を開けると、いつの間にか、裕美からのメッセージが届いている。

『喜多見、具合だいじょうぶ？ 心配してるよー』

愛実たちから事情を聞いたのだろう。心配顔のマークが文の最後に付いていた。

『ありがとう。もう電車に乗ってるから』

急いで返事を打ってから携帯を閉じようとしたが、すぐにまた折り返しのメッセージが表示される。

『じゃあ、八王子に着いたら教えて！ 迎えに行くよ』

今度は笑顔のマークが文末に付いていた。ちょうど花火の音のひとつが微かに聞こえた気がして、窓の方へ視線を向けると、徐々に花火の鈍い爆発音が耳に届き始める。その音を遮るように、車内に到着のアナウンスが流れてきた。

『まもなく豊田、豊田です。お降りのお客様は——』

もう時間がない。慌てて裕美のメッセージに返信した。

『ごめん。まだちよつとだけ具合悪いから、一旦豊田で下りるかも。でも、心配しないで』

そう打ってから、使ったことのない笑顔マークの一番大げさなやつを最後に付けて、送信ボタンを押した。それから携帯を帯の間に挟み、ガラスに手を突いて、窓の向こう側に目を凝らす。

電車はすでに豊田駅の構内に入っていた。花火に向けて出払ったあとなのか、ホームには思ったほど人がいない。祭りの夜の日曜日——一人で立っている女性は数えるほどだったが、峰の姉らしい人は見当たらなかった。

やつぱりホームの先頭の方だ。と、思った瞬間、凍り付くようなことに気が付く。

ホームの向こうに、もうひとつホームがあった。とつさに上の表示を見ると、自分がいるのは下り電車専用のホームで、上りのホームは別になっていた。豊田は一度も降りたことのない駅だったので、五倉山と同じような小さな駅だと勝手に思い込んでいた。

まずい——。

ホーム中程にある階段を電車が勢いよく通過する。鼓動が速くなって、ホームの端から端まで見渡したが、階段はそこにしかなかった。しかも、電車はまだ止まりそうにない。向かいのホームへ渡れる唯一の階段が、どんどん遠ざかっていく。

パニックが襲ってくるのを感じて、落ち着け、と自分に言い聞かせた。峰の姉を見付けることができなくても、非常停止ボタンさえ押せば、電車は停まる。そう思い直しながら、軋んだ音を立てて停車する電車の窓を見てみると、ふいに背筋に戦慄が走った。

——いた。

線路を挟んだ向かいのホームの先端に、大学生くらいの若い茶髪の女性が一人で立っている。峰とどこか似た顔立ちのその女性は、カモフラージュのためなのか、不自然にファーストフードの紙袋を提げて、ぼんやりとその場に佇んでいた。そこから少し離れたベンチに、見張りらしい太った男も座っている。

——自分が何もしなければ、あの人は死ぬ。

その実感が一気に湧いてきて、手が震えた。永児も阿坂もいなかった。自分しかこの場にはいないことの重さが、今さらずつしりと背中に伸じかかってくる。

次の瞬間、ドアが開く。それ以上考える余裕もなく、下駄履きで転がるように電車を降りると、すでに隣のホームには上り電車の入ってくるアナウンスが流れていた。人の流れの中、急いでホームに視線を走らせて、近くの柱に取り付けられた黄色い箱を見付ける。

「非常停止ボタン」——そう書かれた赤いボタンに飛び付いて、すぐにガラスの上から拳で叩こうとした。でも、その瞬間、絶望的な表示が目飛び込んでくる。「非常停止ボタン」の文字の下には、はつきりと「三番線用」と書かれていた。頭上を見ると、大きな「3」の数字がある。息を呑みながら、線路の向こう側に目をやると、峰の姉のいるホームには「2」と表示されていた。

——別のボタンだ。

まったく考えていなかった事態に、貴重な一瞬をその場で完全に凍り付いて過ごしてしまふ。峰の姉が目を閉じるのが分かった。口元が小さく動いて、何かをつぶやいているようだった。姉が飛び込むための電車の先頭が、もうホームからはつきりと見えている。

階段の方を見たが、かなりの距離がある。下駄で走っていたら、絶対に一分以上かかった。裸足で走ったとしても、電車が来るまでに隣のホームにたどり着くのは不可能だ。

息を吸い込んで、止める。向こうのホームの柱にも、同じ黄色い箱があった。——もう、できるときとはひとつしかない。やれるかどうかなんて分からなかった。でも、やらなければ、あの人は死んでしまう。

両方の下駄を脱ぎ捨てて、邪魔にならないところへ足で払う。そして、ざらつとしたコンクリートの感触を足の裏に感じながら、柱の陰にバッグを降ろした。その中から桜色の弓袋を抜き出す。同時に、髪を束ねているピン留めをつかんで引き抜くと、ホームに入ってくる風で、長い髪がぶわつと舞い上がった。

ホームの端には、もう乗客はいなくなっている。それだけ確認してから、弓月を右手につかんで、柱の陰で一回、小さく深呼吸をした。

弓月さん。力を貸して——。

そう念じながら、弓を回した。その声が届いたかのように、弓は一瞬で最大の長さに展開する。喜ぶ暇もなく、弦をひっぱって、反対側の端にひっつけた。体のすべての神経を右側に集中させると、右目の視界が徐々に赤くなり始める。

電車が迫ってくる。それを睨みながら、なびく自分の髪の毛の中から、一本を引き抜いた。強く振ると、頭皮から離れた髪の毛は手に触れている部分を除いて、針金のようにまっすぐに張る。

熱可塑性高分子材。ねつかせいいこうぶんしざい

——確か、静はそう呼んでいた。山田の剣もおそらく同じ素材だった。体温に反応して柔らかなる物質だとしか、静は教えてくれなかった。

弓を構えて、左目を閉じると、右目だけを通した風景は血のように赤く染まっていた。峰の姉の表情がはつきり見えて、唇の動きでなんとつぶやいているのが分かった。——お母さん。繰り返し、お母さん、とつぶやいていた。

はずせない。今までにやったことがないところまで、右目にすべての神経を集中する。電車はずぐそこに迫っていて、車両のヘッドライトが峰の姉のところまで届いていた。峰の姉が目を開けて、黄色い線から一歩足を踏み出す。

右目を細めた。二番線の非常停止ボタン以外、何もかもを風景から消し去る。電車が入ってきた。

中れ。

そう唱えながら、真つ赤な風景の中に矢を放った。一瞬の光がまっすぐに飛んで、その直後、すごい音で隣のホームに非常ベルの音が鳴り響いた。耳を劈くようなブレーキ音が車体の下から上がって、峰の姉が思わず後ろに飛び退く。

金属の焼ける音と共に、ホームの入口ギリギリまで滑り込んだきた電車は、やっと急ブレーキで停車した。峰の姉が立っていた場所のすぐ手前——わずか一メートルほどのところだった。

た。

数秒のあと、非常ベルが鳴り止む。峰の姉が恐怖に固まった表情のまま、見張りの男の方を振り返った。男は携帯を手にしち上がると、慌てた様子で階段の方を指差す。それを見て、峰の姉が震える足でホーム中央の階段へと走り出した。見張りの男も周囲を窺いながら、そのあとを早歩きに追っていく。

追いかけなきゃ——と思つたが、体が痺れて動かなかつた。静が注意した通り、右半身全部が言うことを聞かなくなっていた。それでもどうにかもう一本、髪の毛を抜き取って、再び弦に矢髪を番える。そして、赤く染まった風景の中、小さくなっていく男の背中に狙いを定めた。——見える。今度ははつきり、中ると思つた。

しかし、弦を放すことができなかった。ためらっている間に、ゆっくり動き出した電車が視界を阻んで、男の姿をその向こうに隠してしまう。やつと我に返って、自分が今、何をするつもりだったのかを悟ると、胸が強く打ち始める。慌ててごまかすように下駄を履き、カバンを拾い上げて、もつれる足で自分も階段へと向かった。

隣のホームで電車のドアが開く音がして、たくさんの人が降りるのが分かる。何もかもが真つ赤で、足元がよく見えなかった。よろけながらも、なんとか階段にたどり着いて、その端のエスカレーターに乗り込んだが、そこまでだった。

完全に体に力が入らなくなつて、動く手すりにしがみついたまま、上へと運ばれていく。そしてエスカレーターの終わるところで支えを失つて、前に倒れ込んだ。裕美から借りた浴衣が汚れる——と思つたが、どうすることもできなかった。でも、その前に、誰かに体を受け止められる。お礼を言うこともできずに、やつとの思いで少しだけ顔を上げると、見覚えのある大きな体がそこに立っていた。

「おまえか、電車停めたの」

阿坂が片方の眉を上げて、そう聞いてくる。唇が動かなかつたので、ただ一回うなずいて返した。すると、阿坂がぼつりとつぶやいた。

「敵わねえな、おまえには」

その言葉と共に、阿坂に軽く抱き上げられて、弓とカバンごと近くのベンチへと運ばれた。大きな掌が頭の上にボンと置かれるのを感じる。阿坂はにつこりしてから、改札の方に目をやった。はつきり分からなかつたが、その視線の先はきつと見張りの男を捉えているはずだった。

「きつと手の関節を鳴らす音が聞こえる。」

「よくやつたな、小松」阿坂はそうつぶやいて、真つ赤に染まつた顔で微笑んだ。「あとは任せとけ」

41

マネーカードを改札に付けて、自動ゲートが開くと、アズミはカードをひつたくつて八王子駅の南口へ抜ける自由通路の方へと飛び出した。人を避ける。右へ、左へ。コインロッカーとデジタルポスターが並ぶきれいな通路を飛ぶように走つて、だいぶ前に行く西野の背中を必死で追つた。

走ることには自信があつた。姉にも、素早さで引けを取つたことはなかつた。——それなのに、永児のあとを追つてホームを駆け出した時は、まったく追い付かなかつた。懸命に背中を追いかけたが、追い付いた時にはもうすでに永児が母親を助けたあとだった。

今度は絶対に追い付く。そう誓いながら、さらに速度を上げていく。視点が低いために、何度も西野の姿を見失いかけたが、その度に黄色く光る西野の背中が目印になった。その背中を見ていると、自分でも戸惑うほどの強い怒りが湧き上がってくる。ホームに倒れた峰の母親の姿。泣いて助けを求める峰の声。——いたらいいな、とずつと思ひ続けてきた「お母さん」という存在を、子供から奪い取る連中がこの世界にはいた。自分や姉のような孤児を作っているのは、こいつらのような人間だった。



西野の光は左右へ揺れ動きながら、止まることなく進み続けている。それを追って自由通路から二階の空中歩道に飛び出した途端、勢い余って目の前の手すりに体がぶつかった。わずかな一瞬で、光が見えなくなつて、汗を拭く余裕もなく左右を見渡す。でも、黄色い光はどこにも見当たらなかった。

見失つた——。そう思つて、全身に冷たい汗が噴き出してくる。いつもの情けなさがこみ上げてくるのを感じたが、すぐにそれを潰すように奥歯を噛み締めた。

あきらめるからだめなんだ。高塚なら——きつとあきらめない。

折りたたみ傘を握り締めて、努めて冷静に周りを観察すると、一階の広場へつながるエスカレーターがすぐ側にあることに気が付いた。息を呑みながら、手すりから下を覗き込む。一階は四方を建物に囲まれた大きな広場になっていて、たくさんの人がそこを行き交つていた。屋台で売っている蛍光色のスティックやブレスレットの光が辺りに散らばつて、小さな火花のように、眼下一面を埋め尽くしている。

どこ——？

あっちこっちに目をやつて、その無数の光の中から西野を探した。胸が激しく脈打っている。——緊張しているからだけじゃなかった。ホームで永児が母親を助けた時から、ずっと胸がいつぱいになつていた。あんなすごいもの、ほかに見たことがなかった。

あきらめない。

私だつて、あきらめない。

「どっ——!?」

思わず声に出して、手すりを握り締めた瞬間、訓練で鍛え上げた目が暗闇と蛍光色の踊る中に、独特の黄色い光を見付け出した。光は広場を斜めに横切つていく。その移動する先へ向けて、自分も上の空中歩道を手すりに沿つて駆け出した。瞬く光を横目に見ながら走つて、転びそうになりながらも、なんとか光の行く先に回り込む。広場の一角にあるマンション。その脇の住民専用の通路へ駆け込むと、西野が自分の真下へ走り込んでくるのが見えた。

気味の悪いピアスがこの距離からでも鮮明に分かる。西野の姿はそのまま張り出した空中歩道の下へ消えたが、足音だけははつきりと階下から聞こえ続けた。

響く足音を頼りに、真上の通路を追つて走る。通路はほとんどひとけがなくて、どんどん細くなつていた。このまま行けば、数十メートル先の階段で行き止まる。そこにはPという文字と、下向きの矢印があった。

西野は地下の駐車場に向かつている。それに気が付いて、折りたたみ傘を右手でしっかり持ち直した。車に乗られたらアウトだ。——走りながら徐々に通路の端へと寄つていく。手すりの下を素早く覗き込むと、生け垣があるのが見えた。

できるか——？ 齒を食いしぱりながら、さっきの永児の姿を思い浮かべる。できる。——できなかったら、なんのために訓練してきたのか分からない。

周囲に人がいないのを確かめて、手すりをつかむ。そして、思い切つて手すりをひと跳びに乗り越えた。重力に任せて落下すると、直後に下の生け垣に着地する。大きな音と共に葉っぱが散つて、足や手に細かい枝が刺さる痛みを感じたが、どうにか片手を地面に突いて体を支えた。

「誰だ——!？」

無人の駐車場の入口に、引き攣つたような声が響く。生け垣の葉っぱを引きちぎりながら立ち上がると、目の前に西野がいた。すぐに西野が自分のジャケットの袖口に手を伸ばす。とつさに生け垣の土台を蹴つて、西野に飛び付いた。その勢いで、折りたたみ傘の柄を首に叩き込もうとしたが、あつさり横へ振り払われる。そのままビルの壁面に投げ飛ばされたが、激突する直前に両足を壁に突き、なんとかコンクリートの地面に降り立った。

「院の駒か——」そう言つて、西野が左手の袖口から何かを抜き出す。「若いな」

出てきたのは、薄い剃刀かみばさみだった。——やつぱり駒崩れはこいつだ。そう思つて身構えると、西野は一步後ろに下がつてから、いきなりジャケットを脱いで、こつちに向けて放り投げる。黄色く染まつたジャケットを反射的に避けようと屈んだが、そこに西野が待つていた。

地面を蹴つて、後ろへ跳んだ。でも、その前にジャケットの向こうから西野の蹴りが飛んでくる。鋭い革靴の一撃を辛うじて折り畳み傘で防いだが、勢いまでは殺し切れなかった。もう一度壁際まで弾き飛ばされて、頭を壁面にぶつける。地面に倒れ込み、激しく転がりながら、それでも必死に傘をつかみ直そうとした。

「遅い」

そう言つて、西野が革靴のかかとで伸ばした右手を踏み付ける。骨が折れるような痛みが走つて、押し殺した悲鳴が喉から洩れた。西野を睨むつもりで顔を上げたが、視線を迎えたのは剃刀の刃だった。

西野が剃刀の刃を傾けると、赤い光が刃に反射する。西野の後ろ——生け垣の向こうの拓けた夜空で、大きな一尺玉が真つ赤な火花を散らしていた。夢中で西野を追つていて、火花の音さえ今まで聞こえていなかった。

ドン、と続けて火花が上がる。その音を、体全体ではつきりと感じた。西野の剃刀が首元に向かつて下りてくる。——私、ここで死ぬんだ。そう悟つて、目を閉じた。いろんな人の顔が勢いよく目蓋の裏を通り過ぎる。姉が見えた。阿坂も、蜘蛛も見えた。意外なことに、永児や喜多見の姿も見えた。その瞬間にはつきりと、死にたくない、と思つた。どんなに格好悪くてもいいから、もう少し生きたかった。生きて、みんなと一緒にこの火花みたいにきれ

いなものを、もつといっぱい見たかった。

でも、痛みはいつまで経ってもやってこない。すでに切られたあとなのかと思ったが、熱い液体が飛び散る感覚もなかった。代わりに右手にかかった重さがなくなつて、目を開けると、すぐ前に西野以外の誰かの足があった。

その足の間に赤い液体が滴つて、地面の上で飛び散る。ゆっくり視線を上げていくと、擦れ違うようにして、ガラスの破片がバラバラと地面に落ちてきた。頭の上では、ボロボロになった包帯が一本、らせん状に揺れていた。

「高塚——」

思わず、息を呑んでそうつぶやいた。包帯の先で、独特の蛍光色を放つ右手が、西野の剃刀を直接掌で受け止めていた。割れたガラス片の残りが永児の掌から滑り落ち、地面に当たつて、きらきら光る透明な砂粒に変わっていく。

西野が剃刀を引こうとした。だが、その前に永児が素手で剃刀の刃をつかみ返す。血の飛沫がボタボタと永児の手から床に垂れて、その一部が頬に跳ね飛んできた。西野の表情が恐ろしいものを見たかのように歪む。瞬間、永児の左手が凄まじい勢いで動いた。ゴスツという鈍い音が辺りに響く。

声にならない呻きを上げて、西野が地面に膝を突く。続けて、真つ赤になった剃刀がすぐ

側に転がった。両膝を突いた西野の後ろで、花火が激しく鳴る。その明かりで、永児の左手に握られているものが初めて見えた。

血にまみれたガラスのスノードーム。きれいなミニチュアの海の景色が、ガラスの中に垣間見える。そのひび割れたドームを永児がまた振り下ろした。ガラスが派手に砕ける音がして、西野の体が横へ吹き飛ぶ。一緒に青い水と、珊瑚の欠片のようなものが辺りに降ってきて、西野の上にキラキラとした金色の粉をまき散らした。西野の目は見開かれて、片側の頭蓋が明らかに陥没していた。

永児の左手に残っていたドームの台座が、地面にカランと落ちる。永児の名前を呼ぼうとしたが、その時、またひとつ上がった花火が永児の横顔を照らし出して、とっさに言葉を呑み込んだ。

光の悪戯かもしれない。でも、そこに立っている永児は、自分の知っている優しい男の子ではなかった。右手の包帯の最後の一卷きが、はらりと手首からはずれて、生き物のようにうねりながら赤い血溜まりの中へ落ちていく。紫色に変色した永児の右手は血で染まっていた、まるで悪魔の手のようなだった。

体中の皮膚に鳥肌が立つ。ゆつくりと上下する永児の背中から、目を逸らすことができなかった。巨大な花火が永児の背中越しに二度、三度、四度と咲いて、その輪郭を闇に浮かび

上がらせる。

「高塚——？」

やつと小さく声が出た。それでも永児は何も答えない。仕方なく、もう一度問いかけた。

「右手……だいじょうぶ？」

火花が夜空から消えて、遠くから大きな拍手が響いてくる。永児がやつとこつちを見て、口を開いた。

「だいじょうぶ」

そうつぶやいた永児の声は、いつもの優しい声だった。思わず安堵したが、永児が続けて言った。

「もうあんまり感覚ないんだ」

それになんと返事をしていいか分からなくて、口を閉ざす。永児の右手の皮膚はボロボロになって、傷口から止めどなく血が流れていた。それでも振り返った永児の表情は、さっきの一瞬が目の錯覚だったと確信するほど、穏やかで優しいものだった。

耳の端に微かな金属音が響く。軽いカチャツという音でそつちを見ると、事切れたのかと思つた西野が永児の背後で、頬を地面に擦りつけるようにして起き上がっていた。西野の左目はこつちを見ていたが、顔の右側はびくりともせずに垂れ下がっていて、右の眼球はどこ

か別のところを向いている。それでも、西野は生け垣にもたれかかるようにして体を起こし、青く変形した唇でしゃべり始める。

「報復のつもりか」顔の左側だけで、西野は笑おうとしているようだった。「それなら八つ当たりもいいとこだ。命を売りたいやつなんていくらでもいる。あの女があんまり悲惨だから、気の毒に思つてリストを繰り上げてやつたつていうのに」

そう言つて、西野が背中に回していた手を前に出す。そこには鈍い輝きを放つ拳銃が握られていた。銃口がまつすぐこつちを向いている。西野が銃を突き出しながら、引き金に指をかけた。

「高塚、逃げて——！」

とつさに永児をかばおうと前へ出たが、逆に永児に横へ突き飛ばされた。コンクリートの地面を滑りながら、顔の左半分だけで西野が笑うのが見える。声を出す暇もなかった。しかし、声よりも速く飛んできた何かが、銃を持った西野の手に突き刺さる。

何が起こったのか分からずに固まっていると、頭上から真つ黒な影が降ってきた。影は顔に巻き付けた黒い布をなびかせながら、西野の後ろに音もなく着地する。そして、西野がその存在に気付く間もなく、影は西野の首筋を刃物のようなもので叩き切った。

残った左半分の顔からも笑みが消え、西野の体は命の糸が切れたように地面に崩れ落ちる。

次の瞬間にはもう、黒い影は目の前から姿を消していた。上の階へ飛び移ったことに気が付くまで、一秒の半分くらいしかかからなかったが、その頃には影の気配さえ感じられなくなっていた。

火花が終わったのか、真つ黒な空だけが生け垣の向こうに残っている。永児は立ち竦んだまま、動かなかった。

「今の——？」全身の痛みも忘れて、永児につぶやいた。「今の何——？」

永児は黒い影が消えた方を茫然と見つめていたが、やがてわずかに唇を動かして、何かを囁いた。それがあまりにも変な一言だったので、聞き間違いかと思った。

でも、その時、永児は確かに「会長……？」と言ったような気がした。

駅の中の風景が真つ赤だった。

痺れた体で吐き気を感じながら、喜多見は改札内のベンチに座って、ただぼんやりと豊田駅の構内を見渡していた。右目だけじゃなく、左目も赤くなっている。小刻みの浅い息が苦しくて、できるだけ呼吸を落ち着けようと努力したが、どうしても深く息が吸えなかった。とにかく人目を引かないように、目を閉じて、ひたすら気持ち悪さが治まるのを待つしかなかった。

裕美から借りた大事な浴衣に砂埃が付いていたが、払いたくても、それをするだけの力が出ない。弓も開いたまま不自然に膝に置いていて、握力を失った手ではそれを閉じることもしゃななかった。

いつもなら、そろそろ赤みが引く頃なのに——。そう考えた途端、静が言っていた「あまりやると命に関わる」という言葉を思い出して、恐怖がこみ上げてくる。じつと座っていればそのうち治るはずだ、とどこかで楽観的に考えていたが、そうとも限らないことに気が付いた。もしどんどん悪化していくのなら、どうしたらいいのか分からなかった。実際、下のホー

△にいた時よりも、今の方が症状がひどくなっている気がした。

さらに呼吸が浅くなつて、手が震えてくる。心臓が破裂するほどの勢いで脈打っていた。鼓膜の側で拍動する血管がうるさくて、世界から赤い壁で意識が切り離されていくようだった。

怖い――。

そう思つて、じつと弓月を握り締めていると、低い振動音を感じる。自分の頭の中で響いているのかと思つたが、そうではなかった。浴衣の帯のところ、携帯が鳴っていた。右手は動かすのが難しかったが、幸い左手で取りやすい位置に携帯は刺さっていた。なんとか携帯を開くと、赤く染まつた液晶にぼんやり『アズミ』の文字が表示されている。受話ボタンを押すのにだいぶ手こずつたが、なんとか携帯を耳に持つて行くことができた。

『きたみん?』

すぐにアズミの声が聞こえてくる。後ろはこつちと同じような騒音だった。おそらく向こうも駅の中だ。

「アズミ? 高塚くんも一緒?」

『うん』アズミが答えた。『高塚、無事だよ。ちよつと休んでる。きたみんは? 一人で豊田に行つたつて聞いたから、すごい心配で――』

「平気」

それだけ言うので、せいといっぱいだった。息が切れていて、話すのが苦しい。でも、アズミは気付いていないらしく、少しテンションの高い声で続けた。

『高塚に替わるね』

「あ――」

待つて、と言おうとしたが、その前にアズミが電話を耳から離す心配がする。まだ話せないのに――と思つているうちに、ごそそと電話を交換する音がして、永児の声が耳元に届いた。

『小松さん、無事?』

ちよつと疲れている感じはしたが、元気そうな声だった。それで大きく息をついて、目を閉じる。――千原さんが行つてくれたんだろうか、と考えたが、それを知る術はなかつた。

「平気。高塚くんは――」

と、言いかけて止まる。息が苦しいのもあったが、また「だいじょうぶ?」と聞こうとしている自分に気が付いたからだつた。永児にそれを聞いても無意味なのを思い出して、目を閉じたまま、可能な限り穏やかな口調で聞き直した。

「――ケガなかった?」

『右手をちよつと切つたけど——』永児が明らかに無理をしている声で言った。『たいしたことないよ。今、アズミと一緒に社が来るのを待つてる』

きつと何かあつたんだ——とは思つたが、今それを聞いても仕方がなかった。代わりに、一言だけ尋ねる。

「間に合つたの？」

すると、電話の向こうの空気が少しだけ柔らかくなる。

『うん。峰のお母さんは無事だよ』

「お姉さんも無事。お姉さんと一緒にいた人は、阿坂さんが追つていった」

そう言いながら、徐々に普通の声が出せるようになっていくことに気付いた。閉じていた両目をゆっくり開くと、視界の赤みもずいぶん回復している。もうだいじょうぶだ、と思つて、ベンチの背にもたれかかった。——少なくとも、今回は。

「また、一緒に帰つてくれたね」

電話の向こうの永児にそつと告げる。すると、永児がちよつとだけ間を置いてから、夜の海岸の澄んだ空気を思い出す口調で言った。

『小松さんが一緒なのは、ずっと感じてた』

その一言で、弓月をぎゅつと握り締めた。よかつた。そう思いながら体の力を抜いて、頭

を後ろの壁にもたせかけたが、ちよつとその瞬間、ホームの階段から現れた浴衣姿の集団が目に入る。

集団の先頭にいるのは裕美だった。びつくりして、ちよつと固まる。その後ろに穴井と相沢がいた。脇に立つて巾着袋を振り回しているのはトモちゃんで、止めようと手を伸ばしているのが愛実だった。花火帰りの人で溢れた構内で、裕美がキョロキョロと何かを探す素振りを見せている。

「ごめん。裕美たちが——」

携帯に告げると、永児はあつさり『分かつてる』と答えた。それで携帯を耳から離したが、切るのがなんとなく忍びなくて、そのまま携帯を帯に挟んだ。裕美たちが来る前に、せめて浴衣の乱れを直さなきゃ——と思つたが、胸元に手をかけた瞬間、膝の上に展開されたままの弓月に視線がいった。

裕美たちがいろんな方向を見ながら、こつちに向かつて歩き出していった。もういつ見付かつてもおかしくない。お願い——と祈るような気持ちで弦の輪をはずし、弓月を右手でつかんで思い切り振つた。すると、ホームの時に続いて、弓月は一回で最小の長さに縮む。そこでようやく、振り方ではなく、止め方にコツがあることに気が付いた。強く振つて、いきなり止める。ホームで展開した時も、緊張で動きが固くなつていたから成功したのかもしれない。



「喜多見！」

辛うじて弓月を弓袋に収めた直後、裕美の声が聞こえてくる。その声で、ほかのみんなもこつちを見た。浴衣に下駄履きとは思えないスピードで、裕美が一気に走ってくる。弓袋をカバンにしまいながら、今、裕美に抱き付かれたら倒れるんじゃないか、と心配したが、目の前に来た裕美は、いつもとは違う深刻な表情を浮かべていた。

「お腹痛いのか？ 病院行く？」

裕美が浴衣の膝に手を突くようにして屈み込んでくる。その目を見て、思った以上に心配させていたことを悟った。そのあとに駆け付けてきた愛実とトモちゃんも真顔だった。さらに後ろから相沢も早足でやってくる。唯一、穴井だけがみんなの様子を見て、安心した顔で歩いていた。

トモちゃんと愛実がベンチの両側に腰掛ける。冷たくなった手を、二人が同時に握ってくれた。じわつと温かさが伝わってきて、さつき独りで座っていた時の孤独感が嘘のように消えていく。視界はすっかり普通の色に戻って、みんなの声もはっきりと聞こえていた。

だいじょうぶだよ、と言いたかったが、声に出すと泣いてしまいそうだった。どうしよう、と思つて穴井の方を見て、すぐに声を出さなくても伝える方法があるのを思い出した。

みんなに向けて微笑む。穴井の真似だったが、それでもうまく笑うことができた。裕美が

それを見て、ほつとした顔をする。トモちゃんと愛実も顔を見合わせて笑みを浮かべ、相沢は腰に手を当てて「なんだ、元氣そうじゃん」とだけつぶやいた。自分の笑顔を拝借されたことを知っているように、穴井だけはちよつと含みのある笑い方でこつちを見ていた。

「ごめんね、なんか大げさになって」体から緊張が抜けて、やつと普通にしゃべることができた。「でも、もう平氣。帯で苦しくなっちゃったのかも」

「や！ 私もそういう経験ある！」

トモちゃんが言うのと、愛実も「私もあつた！」と続ける。二人が盛り上がっているところに、相沢が不満そうな声で告げた。

「それよりマジ腹減ったんだけど、なんか食わね？ 血糖値やばいんだけど」

それで全員の声がいきなり「腹減った」コールに変わる。裕美が「お好み焼き！」と大きな声で宣言した。トモちゃんが負けじと「アメリカンドッグ！」と訴える。

「なんでもいいけど、早くしないと混むから」

穴井が冷静な声でそう告げて、裕美が「行こう」とこつちに手を差し伸べてくる。立てるかどうか不安に思いつつ、その手をつかみ返した。でも、心配するまでもなく、愛実とトモちゃんが左右から支えてくれて、楽に立ち上がることができた。足の震えもすっかり治まっている。見ると、カバンは相沢がすでに持つてくれていた。

そのままみんなで改札に向けて歩き出すと、ちょうど改札の外から峰の姉が戻ってくるのが見えた。姉は携帯で誰かと話していた。「だいじょうぶ。これから帰るね」と涙混じりの声が聞こえて、すぐ真横の改札を峰の姉が擦れ違つていく。改札を出てから振り向くと、峰の姉の後ろ姿はホームに続く階段へと消えていった。

「花火、終わっちゃったね」

また巾着袋を振り回しながら、トモちゃんがつぶやく。駅の外のロータリーには、すでに祭りのあとの寂しさが漂っていた。そういえば、花火の音がいつの間にか途絶えている。真つ暗な空は花火のあとだと、やけに寂しく感じられた。

「みんなで見たかったな——」

ちよつと残念そうに言う裕美を、穴井が溜息をつきながら諫めた。

「しょうがないだろ。もう終わったんだから。末たちともはぐれたんだし」

裕美もあきらめたように肩をすくめたが、ちよつとその瞬間、いきなり白い光の筋が一本、空の真ん中に走った。思わずみんな同時に足を止める。その直後、遠い空に大きな白い花火がひとつ上がった。

「え、なんで？」相沢が声を上げた。「終わったんじゃないの？」

続けてもう一発花火が上がる。周りでも歩いている人たちが、驚いて八王子の方向を見て

いた。パン、パンと遠くの空に光が弾けるのを眺めていると、穴井が携帯の画面を読み上げた。

『手違いで打ち忘れがあつた』つてサイトに出てるよ』

「そんなこと、あり得るの？」

トモちゃんが驚いた声で言ったが、顔は満面の笑みだった。終わったはずの花火が連続で空に咲き続けて、円形のロータリーのあちこちで、驚きの声が上がっていた。

「なんだか、私たちのために上げてくれてるみたいだね」

携帯のカメラで花火の写真を撮りながら、愛実が感慨深げにつぶやく。それで無言のまま、肩を寄せ合つて、みんなで白く輝く夜空を見上げた。裕美が横にくっついてきて、携帯のカメラを自分の方に向けてくる。

「よかった。喜多見とちよつとでも一緒に見られて」

パシャツというフラッシュの音と共に、携帯の画面に写真が現れた。目が赤くないかと心配しながら液晶を見たが、写真はほとんど白飛びしていて、細かいところは全然写っていない。それでも裕美は嬉しそうにそれを保存する。

二人で笑みを交換して、一緒に空を見ていると、ふいに空気に夏の終わりの匂いがわずかに混ざっている気がした。まだ暑さは和らいでいなかったが、きつと自分たちの知らないところで、夏はもう終わりに近付いていた。

裕美がトモちゃんたちと写真を撮りに行ったので、こつそり帯から自分の携帯を取り出して、耳に当ててみる。すると、まだ通話がつながっていて、反対側から少し遅れて花火の打ち上げ音が響いていた。

「高塚くん？」

ほかのみんなに聞こえないように、小さく囁く。すぐに『いるよ』という永児の声が返ってきた。

「そこからも見えてる？」

そう尋ねると、永児が静かな声で答えた。

『うん。白い花みたいだ』

永児の後ろで、アズミが興奮気味にはしゃぐ声がある。上で咲く花火よりもちよつとだけ遅れて、電話の向こうからいくつもの破裂音が聞こえ続けた。白い花。その大きな光の花弁は、どこか蜘蛛の巣のようにも見えた。

ロータリーを回っていた数台の車が停まって、窓を降ろして花火を見ている。その景色の中にふと、阿坂の姿を見付けた。阿坂はロータリーの反対側で、階段の上に立って、ズボンのポケットに両手をつつまみながら、花火を見上げていた。視線に気が付いたのか、阿坂がちよつとだけこつちを見て、首を傾げる。

夏を惜しむような最後の数発が空に散って、わずか三十秒ほどの花火の延長戦は終わった。まばらな拍手が周囲に起きて、また駅前が当たり前に動き始める。トモちゃんと裕美と愛実の三人が、口笛を吹きながら大きな拍手をしていた。

おかしい偶然の悪戯――。そんなことばかりの夏休みだった。

そこに意味があるのか、ないのかなんて、どうでもいいのかもしれない。そう思いながら、商店街に向かうみんなの背中を追って歩き始めた。意味なんか何もなくても、中学三年の夏休みに友達と見たこの景色を、きつと自分は一生忘れない。

大事なものは、たぶんそれだけだった。

晴れた千年川<sup>ちとせ</sup>の河原に座っていると、短く刈ったばかりの草地から、青い匂いが漂ってくる。川面は太陽をキラキラと反射させながら、緩やかに五倉山の町を流れていた。八月が終わりかけても、暑さはいくらかましになった程度だったが、空の色と雲の形はだいぶ秋が近づいたことを物語っていた。

土手の斜面に寝転んで空を見上げながら、永児は眩しい午前中の陽射しから目を守るように、包帯で固めた右手を目蓋の上にかざした。そして、上空を漂う雲の動きを眺める。――積雲が音もなく風に流されていた。五倉山を越えてどこか遠くへと、ゆつくり去っていくようだった。

そうしていると、急に陽射しが遮られて、辺りに影が落ちる。雲が太陽を覆ったのかと思っただけ、影はもつと身近なところにあつた。視線を上げると、後ろに立っている大きな短パン姿の人影と目が合う。

「阿坂さん」そう言いながら、慌てて体を起こして、草の上に座り込んだ。「――すみません、わざわざ」

阿坂は頭到手ぬぐいを巻いて、両手にひとつずつミニサイズのカップ麺を箸で蓋して持っていた。何も言わずに横に腰を下ろした阿坂が、カップ麺の片方を「ん」と、こつちに差し出す。仕方なく、それを黙って受け取った。すでにお湯が入っているところを見ると、どこか近くのコンビニで買ってきたのだろう。カップには海岸にいるゴリラのイラストが描かれていて、「シーフード味」と銘打たれていた。

「三分経つてんぞ」阿坂がカップ麺の蓋を開けながら言った。「のびるから食え」

なんでカップ麺？ ――と、聞きそうになったが、その疑問は呑み込んで、自分も蓋を開けた。箸を割っていると、さつそく横からズブツと麺をすすする音が聞こえてくる。阿坂なら二口くらいで終わつてしまいそうな小さなカップだった。

うっかり汁をこぼさないように、慎重にカップ麺を一口食べると、予想以上に塩辛かった。でも、塩分を失った体にはそれがちょうどおいしくて、しばらく黙って二人で川を横目に、麺をすすっていた。川の真ん中ではおじさんが一人、貸しボートを浮かべて釣りをしながら、眠そうに欠伸をしている。早くも麺を食べ終わった阿坂は、残った汁を飲み干していた。

「これ、別にシーフード味じゃないですよね」

なんとなくそうつぶやくと、阿坂はなぜか急に不機嫌な顔になって、こつちを見る。直後に、ラーメンのカップをいきなり手からひったくられた。

「そりや、本当の海行ってきたやつにはそうだろうよ」

膨れた顔で吐き捨てると、阿坂は自棄<sup>ヤル</sup>気味に二杯目のスープを麵ごと一気に飲み干す。そして、思い切り咽せて、激しく咳き込みながらスープを地面に吹き出した。

「大丈夫ですか？」

親切で聞いたつもりだったが、また睨まれただけだった。手に残った割り箸をどうしようかと思っていると、阿坂がそれもひったくる。そして、二つ重ねた空のカップに二組の割り箸を突っ込んで、傍らの草むらに置いた。そのあと、ちよつと恨みがましい目で阿坂がもう一度こつちを見る。

「で——？」怒っているような口調で、阿坂が言つた。「小松はどんな水着だったんだよ。どうせスクール水着かなんかだろ」

苦笑しながら、川の方に視線を戻して答えた。

「ビキニでした」

「んなわけねえだろ」その言葉と共に、靴の裏で足を蹴られる。「膝もろくに見えないスカート丈のやつが、なんでビキニ着るんだよ！」

阿坂はそう言いながら、靴のかかとで草がなくなるまで、地面に八つ当たりしていた。蹴り飛ばされた土が斜面を転がり落ちて、川辺に散らばる。その先で、さつきからあまり釣れ

ていないボートのおじさんが、ついにあきらめたらしく、顔に帽子をかけて横になつていた。

「写真ないのか」

阿坂が横でつぶやく。

「ないです」

つぶやき返す。すると、また地面をガツガツ蹴る音がした。

上から降ってくる陽射しは稲荷で眠った日に比べたら、結構弱くなっている気がした。あの時の暑さは、体の内側まで貫くような鋭いものだったが、今は我慢できる程度だった。

視線を膝に下ろすと、稲荷で借りたアズミのイチゴ模様のハンカチがそこにある。洗濯して部屋に干したあと、人生で初めてアイロンを当ててみた。うまくできたのかどうかは分かんなかったが、とりあえずハンカチは紙みたいになんて平べったくなつていた。それを手に取って、阿坂の前に差し出す。

「これ——」ハンカチの上には駅で渡されたマネーカードと、入場料に使った百三十円分の小銭が載っていた。「ハンカチはアズミのです」

阿坂はそれをじろつと見てから、上の小銭だけを拾い集めて、胸ポケットに入れる。そのあとで、ハンカチをカードの下から引き抜いた。それもズボンのポケットに押し込むと、阿坂は用事が終わったように、空いたカップを手にとり立ち上がる。

「阿坂さん——」

手の中に残ったマネーカードをもう一度突き出しながら言ったが、阿坂はそつげなく告げてきた。

「おまえがいなきや、アズミは死んだ。——それはおまえのだ。あのバカの命でも、そのくらいの価値はあるだらう」

「こんな大金、もらえないですよ」

その言葉を無視して、阿坂はズボンに付いた草をパンパンと払った。阿坂の大きな体でまた陽射しが遮られて、辺りに影ができる。日を一身に浴びながら、阿坂は対岸の方を見ていた。「まあ、いらなかったらその川にでも捨てるんだな」

そう言って、阿坂は手に持っているカップをバキツと握り潰して、土手を上がっていく。マネーカードを手に、所在なく自分も立ち上がった。そして、斜面を登る阿坂の背中に向かって呼びかけた。

「阿坂さん——」

阿坂が足を止める。

座っていた時には感じなかった柔らかい風を額に受けて、寝癖の付いた髪が揺れた。涼しいというほどではなかったが、爽やかな風だった。

「八王子の駅で……ばくもアズミも、顔に黒い包帯を巻いた人に助けられました」

「包帯——？」阿坂が振り返って、自分の顔の前で人差し指を旋回させながら聞いた。「包帯って、ぐるぐる巻きか」

「はい」と答えると、なんとなく阿坂が笑った気がした。でも、阿坂はすぐにまたこつちに背を向けて、土手を上がり始める。

「知ってるんですか？」

その背中を見つめながら尋ねたが、阿坂は「いや——」と、首を振っただけだった。阿坂が頭に巻いた手ぬぐいを左手でつかんでひっぱると、髪がふわつと鬢かんむりのように広がる。

「大方、あの塾長さんが護衛でも付けてくれたんじゃないのか」

そう言いながら、阿坂は土手の上にたどり着いて、肩越しに小さく手だけ振ったあと、土手の向こうに姿を消した。しばらくその場に佇んでから、手の中に残ったマネーカードに視線を落とす。

——いらなかったら、その川にでも捨てるんだな。

また心地いい風が吹いてくる。小さく溜息をついて、土手を川に向かって降りていった。ボートの中で横になったおじさんは、顔を覆う帽子と立てた膝しか見えなくなっている。向かいの河原では小学生が野球をやっていて、そのずつと先に五倉山赤十字病院の建物が覗いてい

た。

川辺まで降りると、水音が強くなる。水が足元に跳ねてくる距離まで川に近付いて、マネーカードを肩の上に振り上げた。そのまま、ためらわずにカードを川に投げ込もうとしたが、ちょうど一歩踏み出した瞬間、ポケットの中で携帯が鳴る。カードを振りかざした体勢で止まって、聞き慣れたメールの受信音が河原に響き終わるのを待った。

カードをゆつくり下ろして、右手でポケットの携帯を抜き取る。画面には久しぶりに見る「会長」の名前が表示されていた。ボタンを押すと、いきなり『恋愛成就』と腹に書かれた狸の置物の写真が現れて、びくつとなる。その下には『旅先より難破船の寄港を願って』という短い一文が添えられていた。

写真に写っている狸の情けない目と目が合って、思わず大きく息をつく。強張っていた肩から一氣に力が抜けた。狸の後ろの背景は、どこか旅館のような場所だった。

「やっぱり旅行中か——」

口に出してつぶやくと、心配していた分だけ馬鹿馬鹿しくなる。会長はいつも暢<sup>のんき</sup>気ではないよ——と思つて、手の中のマネーカードを再度捨てようかと考えたが、なんとなくそんな気持ちも萎えていた。

マネーカードをしまつて、狸の置物の写真に再び目をやる。今度は堪え切れずに、少しだ

け笑った。その勢いで『別に一生帰つてこなくていいよ』と、会長へ返信のメールを打ち始める。そうして再び土手を上がり出すと、ふと花火の日のことが頭をかすめた。

——そういえば、なんであの時、「会長」つて思つたんだろう。

一瞬、土手の途中で立ち止まる。たぶん、あの黒い包帯をした男の背格好が、会長に似ていたからだろう。それに、これのせいもあるだろうか——。

そう考えながら、ズボンのポケットから、一枚のトランプを抜き出した。

おそらくあの黒い影の得物なのだろう。西野というピアスの男の手に刺さっていたものだった。——駒は得物をいつも身に付けている、と阿坂が言っていたから、きつとこの人も始終トランプを持ち歩いているに違いない。

会長へのメールを打ち終わる。一ヶ月も連絡しなかったことを散々罵る内容を送信すると、だいたい気分がすっきりしていた。

きつと会長が駒だったなら、得物は手品の道具だろうな。

土手を去る寸前、そんな考えが東の間頭を過ぎつたが、すぐに夏の空へ消えていった。



秋山竜平は流行のアイドルの歌を口ずさみながら、五倉山赤十字病院の中央ロビーを足早に歩いていった。うろ覚えだったので、気が付くとサビの部分ばかりを繰り返して歌っていた。

頭上はきれいなガラスのアトリウムになっていて、斜めに差し込んでくる陽射しが眩しいほどの明かりを室内に提供している。その中を、自動支払機の列と、会計窓口の前を通り過ぎて、正面玄関の自動ドアにたどり着いた。ドアの向こうには、傘を畳むスペースがあつて、その向こうにさらにもう一枚、外につながる自動ドアがある。間の部分は空調が効いていなかったたので、サウナのように蒸し暑かった。

ふいに外から自動ドアが開いて、人が入ってくる。歌うのを止めて顔を上げると、同じくラスの峰だった。

「おう」

驚いて峰に言うのと、峰も驚いた顔で「おう」とだけ返してくる。その顔には、鼻を中心に何重にも包帯が巻かれていた。

「どうしたんだ、それ」

その言葉に、峰がちよつと気まずそうに答える。

「鼻、折ったんだよ。喧嘩してさ」

峰のすぐ後ろには、松葉杖を突いた女の人が立っている。二年の時に何度か家に遊びに行ったので、見覚えがあつた。峰の母親。丁寧に頭を下げる母親に自分もぺこつとやってから、ドアとドアの間で擦れ違ったが、ふいに思い立って、峰を呼び止める。

「あのさ——」

そう声をかけると、峰と一緒に母親も立ち止まる。峰は母親に「いいよ。先行つて」と促してから、ガラスドアの間の暑いスペースに戻ってきた。——心なしか、以前よりも峰の表情が柔らかくなっている気がする。

「なんだよ」

と、峰がつぶやく。

「おまえんちに高塚来た？」

そう聞くと、峰はちよつと怪訝な表情を見せたあと、少し間を空けて答えた。

「来たよ。スイカ持つて」

ガラス越しの猛烈な暑さに、早くも汗が浮かんでくる。それでも、その場に立ったまま聞き返した。

「スイカ？ ヅカがスイカ持ってたの、おまえんちに？ なんで？」

「分かんねえよ。あいつんとこ金持ちだから、余裕こいてるの見せたかったんじゃない？」

冗談めかした口調でそう言うてから、峰が肩をすくめて、母親のあとを追おうとする。その姿に、それまであまり味わったことのない重さが下腹に溜まっていくのを感じた。ガラス越しの暑い陽射しを坊主頭に浴びながら、気が付くと峰の方へ足を踏み出していった。

「待てよ」

それと同時に、峰の肩をつかんだ。峰が驚くのが分かったが、こみ上げてくる感情を抑え切れなかった。

「おまえ、ヅカのこと、何も知らねえよな」

自分でも聞いたことがないくらいまじめな声が出た。——訪問者ノートのページをめくると、毎日、毎日、必ず載っている永児の名前。夏休みに入ってから一日に二回、載っていることもあった。自分の名前が一回載る間に、永児の名前は十回は載っていた。

「あいつがどういう状況なのか知ってるの？」

急に声が震えて、目に涙が滲んだ。峰の動きがびたりと止まる。不思議と涙を見られて格好悪いとか、恥ずかしいとは思わなかった。それよりも、たまらなく腹が立っていた。

「意識戻らない姉ちゃんの看病してんだぞ。あいつんとこだって金なくて、自分のものなんて

あいつ、何ひとつ買ってねえよ」

峰にそう告げると、我慢できずに涙が流れた。こんなに悔しいと思ったのは初めてだった。きつと、自分のことだつたら、何を言われても腹は立たなかった。——自分はだめな兄貴だった。でも、ヅカは——。

「分かってんのかよ！」

そう言つて、涙をごまかすように峰の肩を揺さぶる。そのどさくさに紛れて、自分の頬を袖口で拭いた。峰がよろけてガラスの表面に手を突く。その目は見開かれたまま、こつちを見ていた。

「ヅカはそのスイカ、きつと母親のために買ったんだ。でもあいつのお袋、元気ないからさ。たぶん食わなかったんだよ。だからさ、代わりに——」

そう言っている最中に、あまりにもいろんな感情が内側からいつぱんに溢れてきて、何が言いたいのかわからなくなった。それで、自動ドアの外に顔を背けながら、大きな声で怒鳴った。

「あいつ言わねえけど、すっげー辛いんだぞ！」

自分でも言葉に出して初めて、ずつとそう思っていたことに気が付いた。何度か面会時間ギリギリまで姉の部屋に座っている永児の姿を見た。それを目にするのがいやで、隠れたこ

ともあつた。病院でつい先日まで一度も会わなかったのは、別に擦れ違っていたからじゃなく、自分が会わないようにしていただけだった。——妹の顔を見るのも、永児の顔を見るのも怖くて、できるだけ避けていた。そんな自分が恥ずかしくて仕方がなかった。

あいつの姉さんは一言も話せないのに。

表情さえ変わらないのに。

ずっと、何時間もあそこに座って——。

「おれの親友のこと、今度悪く言ったらぶつ飛ばすからな」

峰に背中を向けてそう告げたが、そんな資格が自分ないことくらいは分かっていた。情けなさで口元が歪んで、ついへらつと笑ってしまう。ろくに見舞いに来ない長男がこんなことを言うところを母親が聞いたら、きつとあきれるはずだ。リカだって、永児みたいな兄貴が欲しかったに違いない。

「……つて、おまえに偉そうなこと言えねえの、おれも」

そうおどけてごまかすと、まだ壁にもたれている峰の側に行つて、よれたシャツのしわを直した。その間も、峰はただぼんやりとこつちを見つめていた。気のせいか、峰の目も微かに潤んでいる気がして、余計に自分の言ったことが恥ずかしくなっていく。

「アホすぎるわ、おれ」

独り言のようにつぶやいて、峰をその場に残し、外へ続く自動ドアを抜けた。海で遊んでいる間、ずっと罪の意識が頭から離れなかった。集中治療室の入口まで来たのに、ガラスに映り込んだ自分の真つ黒に焼けた顔を見ると、とても中に入れなかった。

すぐ側のバス停まで歩いている間、涙がどんどん出てきて、拭つても拭つても止まらなかった。頭の中で今日告げられた妹の手術の日程がぐるぐる回っていて、医者から教えられた成功する確率の数字を必死に忘れようとしていた。でも、否が応でもそれを思い出させるように、まったく同じ数字がロータリーの制限時速の看板に書いてあった。

逃げるように、やってきたバスの方へ走った。妹が窓から見ているかもしれないと思うと、病院を振り返る勇氣さえなかった。——ごめんな、と、心の中で謝りながら、秋山は行き先も確かめず、バス停に停まったバスに無言で乗り込んだ。

こんな兄貴でさ。ごめんな、リカ。

両手で抱えた花束がなんとなく大げさな気がして、喜多見は場違いな自分を感じながら、五倉山赤十字病院の五階の廊下に足を踏み出した。エレベーターのドアが音もなく閉まっていく。しっかりとした木製の手すりの付いた廊下が、突き当たりのガラスドアまでまっすぐ続いていた。

ガラスドアには『集中治療室』という文字が無機質に刻まれている。その言葉の重みで一回立ち止まった。家族でもないのに、こんなところに来ていいのかどうか、よく分からなかった。

とにかく花だけでも渡そう——と思つて、歩き出した時、ガラスの向こうからやってくる永児の姿が見えた。永児がこつちに気が付いて、足を止める。小さく頭を下げると、永児が優しい笑みを返して、ガラスのドアを抜けてきた。

「小松さん、来てくれたんだ」

いつもの柔らかい声で永児がつぶやく。その視線が花束に留まっているのが分かつて、とつさに花を隠すように持ち手を回しながら、永児に告げた。

「ごめん」声が少し掠れている。「来てよかったのかな」

「姉さん、喜ぶよ。小松さんにずっと会いたがつてたから」

永児はそう言つて、自然な表情で微笑んだ。そして、ナースステーションの看護師に向けて、カウンター越しに声をかける。

「水田さん。クラスの友達がお見舞いに来てくれたんだけど、入つてもいいかな？」

顔見知りなのだろう。気さくな感じで永児がそう聞くと、水田さんと呼ばれた中年の女性は、笑顔でこつちを見た。

「面会謝絶つてわけじゃないから、風邪症状がなければ構わないわよ。でも、手の消毒とマスクは忘れないでね。あと、ほかの病室には絶対に入らないように」

「はい」と答えたが、鼓動が少し速くなつていた。もう引き返せない。——意識がない、というのがどんな状態なのか考えると少し怖かった。昏睡状態の人に直に接したことはなかったし、それが永児のお姉さんの第一印象になるのもいやだった。もし目を逸らしてしまつたり、話せなかったりしたらどうしようと思うと、花を持つ手に緊張が走る。

永児が箱から使い捨てマスクを紐で持ち上げて、こつちに一枚差し出した。それを受け取つて、受付の机の上に花束を一旦置く。マスクを顔にかけると、表情が半分以上隠れたので、むしろ気が楽になる。消毒薬の正しい使い方は分からなかったが、スーパリーの出入口で使っ

ていた人のまねをして、手に液体を吹き付け、両手をよく揉み合わせた。アルコールの刺激臭が一瞬、鼻について消えていく。自分の息がマスクに当たって、心持ち速くなった呼吸をはつきりと感じた。

「ごめん。ちよつと急いで一階に行つてこないといけなくて」

その永児の声が若干遠ざかつていることに気が付いて、後ろを振り向くと、永児はすでにエスカレーターの方へ歩き出していった。

「すぐ戻るから、先に姉さんの部屋に行つてて。入つて三つ目の部屋だから」

小さくうなづくしかなかった。そのまま、永児の姿はあつさりエスカレーターの下へ消えていく。仕方なく花束を拾つて、一回息を吞んでから、自動ドアの前に立つた。真昼のためか、中はそれほど暗くない。ドアを抜けると、誰かが作つた千羽鶴が天井からぶら下がっているのが目に入る。そのひとつひとつに「がんばつて」「早く元気に」といったお見舞いのメッセージが書かれていた。

廊下では、同じマスクを付けた人たちが、一様に深刻な表情でベンチに座っている。その中を、花を胸元にしっかりと抱いて、足音をなるべく立てないように歩き出した。最初の部屋を通り過ぎる時、廊下の窓ガラス越しに中の女の子と目が合う。毛糸の帽子を被つた女の子はちよつと照れたように笑つて、小走りで窓を離れていった。

それを見送りながら、ふいに放課後にいつも永児がここに来ていることのリアリティーに襲われて愕然となる。永児の姉に会つたことのない自分でさえこんな緊張するのに、永児がいつもどんな気持ちでここに来ているのかを考えると、その重さに圧倒された。思わず先に進むのをためらつたが、その時にはもう三つ目の部屋の前に着いていた。ドアの脇を見ると、急いで書かれたような名札が目に入る。

高塚沙希。

それで初めて永児の姉の名前を知つた。胸がトクトク音を立てている。――沙希さんは一年の時の手紙のことも知っている。だから、私が誰かも知っているはずだ。

ドアに手をかけて、目を閉じた。なかなかドアを開けられずにいると、永児の父親の写真がふと心をかすめる。それにそつと背中を押してもらうような感覚を得ながら、ドアを開けた。部屋に入つて目蓋を開くと、想像していたような怖いものは何もなくあった。ただ、プップツという単調な電子音だけが鳴っている。沙希は口に酸素マスクと、手の甲に点滴が付いていることを除けば、寝ているようにしか見えなかった。顔色もほんのりピンク色で、髪の毛もきれいに整えられていた。

想像していた通りの明るくて、優しそうな人だった。永児の姉だというのがすぐに分かる。たとえ意識がなくても、部屋を包み込む沙希の空気が迎えてくれていた。柔らかくて優しい

空気が部屋に入ってドアを閉めた途端、かえって気持ちが落ち着いた。

ベッドサイドのテーブルには花瓶が二つあって、ひとつにはきれいな向日葵の花束が——もうひとつには何も入っていないかった。部屋を横切って、その空の花瓶を手に取り、代わりに空いたスペースに花束を置く。そして、傍らにある洗い場で花瓶に水を汲んだ。その間、沙希にずっと背を向けていたが、不安も、緊張も感じなかった。よく知っている人の側にいるような気がした。

花瓶に水を入れてテーブルに戻り、花束の下端を包むホイルと、濡れた脱脂綿をはずして、花を花瓶に生ける。ちよつとだけ花の位置を整えていると、もうひとつの花瓶の横に、掌に収まるくらい小さなガラス瓶があることに気が付いた。浜辺のお土産屋で見かけた、きれいな星の砂の瓶だった。

お姉さんに買ったんだ——と思いながら、あらためて沙希のベッド脇にある丸椅子をそつと引いて座る。一回、廊下の窓を見たが、永児はまだしばらく戻つてきそうになかった。

「はじめまして。小松喜多見です」

自然とそう言葉が口を付いて出て、お姉さんにべこりと頭を下げた。そのあとは、考えなくても続けることができた。

「きつと一年の時はいっぱい心配させたいと思います」

顔を上げて、まっすぐお姉さんの方を見る。微かに永児や永児の父親の面影を感じる顔立ちに、無理をしなくても笑顔になることができた。

「でも、今は高塚ちゃんと仲良くできています。安心してください」

点滴につながれた沙希の手が目の前にある。その指先に自分の手を重ねた。手は温かった。手の先をそつと握つて、命に溢れた温もりを感じていると、沙希の気持ちが伝わってくるようだった。

「沙希さんが起きるまで、私がきつと高塚くんを守ります」

そう囁いた瞬間、微かに沙希の手が動いた。びっくりして沙希の顔を見たが、表情に変化はない。もう一度軽く手を握つてみたが、今度は動く気配はなかった。でも、確かにさつき指先がちよつとだけ動いた気がした。

「沙希さん——」

そう名前を呼ぶと、沙希の表情が笑っているように見えた。そのまましばらく無言でベッドサイドに座っていたが、沙希が自分に何かを伝えたがっているような不思議な感覚が、ずつと胸を離れなかった。

横たわる沙希の頭の後ろにはコードが伝っていて、途中にベッドランプのスイッチが付いている。そのスイッチをじつと見ているうちに、永児の昔の家で見たスイッチのことを思い

出した。

——辛いことがあったら、電気のスイッチをイメージして切る。

永児はそう言っていたが、あれはきつとただのイメージじゃない。少し前からそんな気がしていた。「スイッチが逆」という言葉を聞いた時から、あのスイッチが切っているのは、もつと別のもののように思えてならなかった。

そのことを沙希は知っている。——なぜか、そう確信していた。

「沙希さん、教えてください」唾を飲み込んで、沙希の手を強く握った。「高塚さんのスイッチで、いったいなんなんですか」

ピッピッピッと、沙希の心音が部屋の中にこだまする。その音は何にも答えることなく、静かな部屋の中で四方の壁に響くだけだった。それでも乾いた唇を軽く濡らすように合わせて、答えが返ってこないことを知りながらも、喜多見はもう一度沙希に問いかけた。

「——あのスイッチ、本当は何を切ってるんですか？」

自動支払機の列。

二人並んでる。

午後二時半。自動支払機が終了になる三十分前だった。

永児は列の後ろに立って、下唇を噛み締めた。頭の中では、さつき看護副主任の水田さんが病室で耳打ちしてきた言葉がずっと回っていた。

——たぶん明日には経理から督促の電話がいくと思うの。

水田さんはそう言いながら、申し訳なさそうにうつむいていた。

——そしたらお母さんに来てもらって、一回コンサルタントとお話してもらうことになるかもしれない。

聞いたあと、徐々に重く伸しかかってきた言葉だった。でも、水田さんを恨む気なんてまるでなかった。むしろ、週末に母親が泊まり込んでいた時、何も言わなideくれたことに感謝していた。

列の先頭の人が、空いた機械へと向かっていく。端の一台では、支払いに手こずっている



おばあさんを職員の人が手伝っていて、三台ある機械のうち、回転しているのは事実上二台だけだった。残り時間は気になったが、もつと長い間待たされても構わないという気持ちもあった。

少し前に出て列を詰めながら、一階ロビーの高い吹き抜けのアトリウムを見上げた。数年前に建て替えられただけあって、五倉山赤十字はともきれいな病院だった。雀が天井のガラスの向こうをトントンと歩いているのが見える。通り抜けてくる陽射しは一週間前に比べると、やはり少し弱くなり始めていた。

また機械が一台空いて、前の人があるところに向かう。待機列の先頭まで出て、ポケットの中のマネーカードへと手を伸ばした。昼ご飯の時に、自動支払機でマネーカードが使えることに気が付いてから、ずっとそのことしか考えられなくなっていた。

母さんを仕事になんか出せない。

絶対に電車の駅になんて行かせられなかった。

電車のホームで見た峰の母親の姿が、何かの拍子に、すぐに自分の母親の姿にすり替わる。マネーカードを抜き取ろうとした手が思わず震えて、一緒に入っていたトランプが床に落ちた。

慌ててその場に屈んで、指先をトランプに向けて伸ばした時、ふと手を止める。よく似た

ことが前にもあった気がした。同時に、アメリカンドッグの匂いが鼻先をかすめて、マルサカのテーマが耳の奥に聞こえてくる。——そうだ。マルサカの休憩所で飛び起きた時、確かな夢を見ていた。

マルサカだけじゃない。ここ最近、何度も見ている夢だった。いつも何かを拾おうとするところで夢から覚めた。

なぜか強い不安を感じながら、指先でトランプの端をつまんで持ち上げる。その瞬間、異様な感覚が体の中を通り抜けていった。トランプが無数の赤い糸を引いて地面から離れるのが目に映る。思わず押し殺した悲鳴を上げて、右手を放した。トランプは元通り、床にはらりと落ちる。

おばあさんがやつと会計を終えて、職員にお礼を言いながら、機械の前を離れていく。それで自分の番になったが、床のトランプを見つめたまま、動けなかった。

「順番だよ」

後ろの男性に言われて、なんとか「すみません」とだけつぶやいてから、もう一度トランプを拾い上げた。トランプは今度は普通に床から離れる。そして、無言で支払機まで進むと、姉の患者カードを機械に差し込んで、表示された金額を見ることがすらすらせず、マネーカードを機械に当てた。

ピツという冷たい電子音がする。いつもコンビニやスーパーで聞いている音なのに、今日はその音が背骨まで響いた。下から印刷された領収書が出てきたので、それを受け取って、当たり前のようにその場を離れる。

そのままロビーの中央へと歩きながら、マネーカードをポケットにしまつて、手の中に残ったトランプを見つめた。午後三時近くになって、外来の患者の数はだいぶ少なくなっている。それでも番号が表示される度に、液晶モニタから流れるメロディーと、見当たらない患者の名前を呼ぶ事務員の忙しない声<sup>せ</sup>がロビーに響き続けていた。その中でじつとトランプを眺めていると、周りの雑音がどんどん遠ざかっていく。

姉さんの足元。真つ赤な床に落ちていたもの。

あれはトランプだったんじゃないのか。

姉が救急車で運ばれていったあと、警察もやってきて、自分が病院から戻った時にはもうトイレは片付けられていた。だけど、あの時、確かに何かが姉の足元に落ちていた。考えれば考えるほど、あれはきつと、これと同じもののような気がした。

でも、なんで――。

「高塚？」

いきなり名前を呼ばれて、はつと顔を上げた。ロビーの賑やかさが一気に戻ってきて、ボー

ドを持った事務員が「吉田さん、いらつしやいますかー」と呼びかけながら横を擦れ違つていく。

「高塚、聞こえてんの？」

もう一度そう呼ばれて、初めてすぐ側に立っている峰の姿に気が付いた。鼻に痛々しく包帯を巻いた峰は、片手に病院のマークの入ったプラスチックのファイルを持っていた。

「峰――？」

夢から覚めたばかりのような意識でそう聞くと、峰はちよつと眉を寄せる。

「だいじょうぶか、おまえ？　なんか変だったぞ」

峰の言葉に「いや――」と言いかけたが、先に峰が聞き直した。

「なんかあつたんか、おまえの姉貴――」

そう言つたあとで、峰はこっちの驚いた顔に気が付いたらしく、気まずそうに顔を逸らしてつぶやく。

「あ、悪い。――ちよつとそこで秋山に会つて、聞いた」

何も言うことが見付からず、もう一度「いや――」と繰り返したあと、二人とも黙るしかなかった。館内放送の音楽が鳴つて、ロビーに事務員の声が響く。どうやら吉田さんは見付からなかったようで、全館に向けて吉田さんを探す放送が流されていた。

峰は何か言いたいけど言えないように、指先でしきりに抱えているファイルの角をいじっている。ちょうどその時、松葉杖を突いて、廊下をこつちへ歩いてくる峰の母親の姿が見えた。八王子のホームでは顔を見られていないと思つたが、それでも少し緊張して体が固まる。でも、母親が「高塚くん、こんにちは」と普通に挨拶をしてくれたので、安心して礼を返した。

「こんにちは」

峰が足元の斜めの勾配を指して「そこ、転ぶなよ」と母親に向かつて告げる。その気遣いに少し驚いているうちに、母親はうなずいて、そつと勾配を上がつてくる。母親の後ろからは峰の姉も現れた。姉の鮮やかな赤茶色だった髪は、ほとんど黒に近い色に変わっている。服装もさっぱりしたジーンズ姿で、前とずいぶん印象が違った。

峰の姉も「あら、こんにちは」と言つたので、さらにもう一度「こんにちは」と繰り返した。そして、遠慮のつもりで「じゃ」とだけ峰に言つて、立ち去ろうとすると、峰がいきなり「高塚——」と、慌てた様子で呼び止めてくる。

「何？」

と、言つて振り返ると、峰は呼びかけたのに、そのあとを考えていなかったように口ごもつた。結局、母親と姉の方をちらつと見てから、峰ははにかんだ表情で告げる。

「また、うちこいよ。今度、プラモの作り方教えてやるから」

それを聞いて、廊下の真ん中に立ち止まったまま、うなずいた。すると、峰はいつもの教室でのちよつと皮肉な笑みを浮かべて付け加える。

「なんかおまえ、下手そうだな」

それでお互いに笑みを交わしてから、峰は正面玄関の自動ドアへと歩き出した。峰の姉もにこつとしながら通り過ぎていく。前に会つた時のぎこちなさは峰にも、姉にもなかった。それに安心して前に向き直ると、そこに峰の母親が一人だけ残つていた。

母親はじつとこつちを見つめてから、とても真剣な顔でゆつくりと頭を下げる。深く、長く、静かな礼だった。何も反応できずにいると、母親はやがて顔を上げ、無言で横を通り過ぎていった。

しばらく、その場で去っていく三人の背中を見ていた。その時になって、峰のケガのことをまったく聞かなかつたことに気が付いて、変に思われたかな、とちよつと心配になつたが、仲良く帰っていく峰たちの後ろ姿を見ると、それもどうでもいいことに思えた。

自分も五階に戻れば、姉と喜多見がいる。家に帰れば母親がいて、海に誘つてくれる友達もいた。それを思い出して、気持ちが明るくなつていくのを感じる。

限界だったのは、きつと母さんじゃない。

お金の大きな重みが背中から離れたことで、それがはつきり分かつた。——限界だったのは、

自分の方だった。家の玄関で蛍光灯を見上げていた時は、本当にもう立ち上がる力も残っていなかった。でも、先週の合宿から帰ってきてからは、海でのいろんな出来事を思い出すが、いつでも自然に笑いが湧いてくる。

まだ、だいじようぶ。

ぼくはだいじようぶだよ、父さん。

アトリウム越しの空を見ながらそう心の中でつぶやいて、永児は手に握っていたトランプをズボンのポケットに突っ込み、エスカレーターの方へと歩き出した。永児が去ったあとのアトリウムには、夏の終わりを匂わせる陽射しが、いつまでもロビーを眩しく照らしていた。

文机ぶんぎの上に、一枚の写真が裏返しに差し出された。

静はその写真をちらつと見たあとで、文机の反対側で正座している香坂と視線を交わした。いつも見た目に無頓着な香坂は、今日も緩めたネクタイに無精髭だった。畳の部屋は静寂に包まれて、行灯あんどんが柔らかい明かりで周囲を包んでくれている。定期的に明かりが揺れるように設定されていたが、この十四階にあるほぼすべてのものと同様、行灯の中の炎も偽物だった。

今朝の模擬試験の解答用紙と赤ペンも文机の上に積まれていたが、その写真と一緒に生徒たちのものを並べるのは抵抗があったので、まず解答用紙を文机の下に降ろした。写真を見る前に香坂にお茶でも入れようかと思っただ、どうせ香坂は断るのを思い出した。

そつと手を伸ばして、写真を表にひっくり返す。

写っているのは軍隊のキャンプのような場所だった。カバンか何かに穴を開けて、そこからこっそり撮ったものだろう。斜めになった写真の周りには円形の影ができていて、その中心に銃器を持った東洋系の男たちがいた。全員木箱に座っていて、奥の方は焦点がぼやけていたが、飛行機のようなものも微かに見て取れる。

「よく撮れたわね」

写真を見つめたまま、香坂に言った。香坂がじつところちを見たままで返す。

「ついさつき、送られてきました。九州の駒が一人、魚群との接触に成功したようです」

「さすがにあつちばは潜入が専門ね。無人偵察機も入れなかったようなところによくまあ……」

そう言いながら、写真の手前にいる一際重たい空気を纏った男を見た。短く刈り込まれた髪の毛と、いじめ抜かれた肌。そしてシャツの上からでもはつきり分かる鍛えられた体。――

日本人だというのは伝わってきたが、現代の人間だという感じがあまりしなかった。太平洋戦争の時の日本の軍人を思わせる風貌だった。

「これが鬼灯<sup>おにび</sup>という字？」

香坂に尋ねる。落ち着いた声で、香坂は答えた。

「十年前はそう呼ばれていました。――今は北條<sup>ほうしょう</sup>と名乗っています」

写真から香坂の方へ視線を移す。香坂がおもむろに付け加えた。

「社の零しの金はこの男の部隊に流れていました」

行灯の光が揺らぐ。再び写真に視線を下ろして、北條の目を指先でなぞった。冷たい目だったが、感情のない目ではなかった。哀しい目のようにも思えた。

「どこかの国の軍隊なの？」

そう尋ねると、香坂は正座に疲れたのか、足を崩しながら答えた。

「傭兵です」顎の無精髭に手をやりながら、香坂はその名前を慎重に囁いた。「nameless party――『名無しの部隊』と呼ばれているそうです。人種も思想も宗教も関係なく、雇われた相手によって攻撃対象を変える、無差別な殺戮部隊です。平たく言うと、フリーランスのテロリストですね」

それを裏付けるように、北條以外の男たちは、表情からほとんど何も感じられない冷たさを湛えていた。外国の兵器には詳しくなかったが、男たちが腰かけている木箱には爆発物のマークが記載されていて、一人が握っているのはたぶんグレネードランチャーだった。北條の横に立ってかけられたライフルも、おそらくかなり高性能なものなのだろう。寄せ集めのゲリラというよりも、訓練と武装をしつかり行つた精鋭部隊に思えた。

カタツと音がする。視線を上げると、文机の上に見覚えのある瓶が置かれていた。

「サダクラから持ち帰りました」ラベルが見えるように、香坂が瓶をこつちに向けて回す。「できたばかりのASです。ご存知の通り、成分を安定させるためにサダクラの保管室で半年間寝かせてあります」

透明な液体が瓶の中で揺れていた。その中身がどこからきたのか知っているだけに、産毛が逆立つような感覚を覚える。眉をひそめて見ていると、香坂は瓶を持ち上げて行灯の明か

りにかざした。

「どうも液体の濃度が薄い気がして、社の研究施設で調べてもらったら、中身は生理食塩水でした」

「生理食塩水？」

あまりに突拍子もないことに思わず耳を疑った。香坂が瓶を手の中で何度か揺らしたあと、それをこつちに差し出してくる。受け取って自分も揺らしてみたが、中の液体は確かにASにしてはサラサラし過ぎていた気がした。

「おそらく長期間に亘って、ASが大量に保管庫から持ち去られています」香坂が珍しく鋭い表情で言った。「零しの仕業だとしたら、今回の一連の出来事はASを巡るものかもしれません」

ガラスの瓶は写真の横にそつと戻した。――ゲリラや暴力団ではない、本格的な軍事組織しかも、それを率いているのはこつちの手口を知り尽くした一流の字だった。後ろに写っている感情のない兵隊たちはまだいい。でもこの哀しい目をした男とは戦つてはいけない気がした。

「こんな相手に、うちは武力で対抗できるの？」

写真を指差しながら香坂に尋ねた。香坂はすぐには答えず、しばらくの間、こちらを見つ

めたあとで、ジャケットの内側に右手を入れた。そこから出てきたのは、紙パックのジュースに付いている、小さなビニールのストローだった。

「ぼくの得物です」ストローを文机の上に置きながら、香坂がちよつと苦い笑みを浮かべる。「こんなものでアサルトライフルと戦えると思いますか」

ストローは社が開発した強化プラスチックでできていた。頸動脈に刺せば即死は免れない恐ろしい武器だったが、それも写真に写った大量の近代兵器と比較すると、いささか滑稽に見えることは否定できなかった。駒の武器はほとんどが、そんなものばかりだった。

「我々の方は暗殺部隊というよりも、一種の伝統芸能ですよ。こんな平和な国で殺し屋と言っても、治安の悪い国の一般市民と大差ないレベルです。うちの若い駒では、もう実戦の経験者もほとんどいません」

ストローはあまりに無力に写真の横に並べられて、かわいくさえ見える。

「伝統芸能か」小さく溜息をついて言った。「うまいこと言うわね」

確かに滑稽な話だった。飛行機を打ち落とせる武器を持つ相手に、トランプや弓で挑むなんて狂気の沙汰でしかない。過去に何度かそうしてきた歴史があるのは本当だとしても、それはもうずいぶん昔のことだった。

シスターの顔が頭をかすめて、口の中で苦い味が広がる。現代であっても、院の駒なら対

抗できる可能性があることは分かっていった。――梅がいれば、写真の中のような人間を相手にしても、ある程度は戦えるかもしれない。

「日本に来るのね」

そう聞くと、香坂は「ええ」とさらりと告げて、写真をしまった。いつの間にか、その顔から完全に笑みが消えていた。

「一ヶ月以内ぐらいが濃厚でしょう。千原が戻ったので、ぼくと山田はこつちの件に回らせてもらいます」

香坂が畳の上に片膝を突いて立ち上がる。千原のような優雅さはなく、無骨な動きだったが、独特の柔らかさはあった。

「悪いけど山田さんはもうしばらく貸しておいて」香坂を見上げて言った。「小松さんにしばらく付いてほしいの」

「あんなのでいいなら、好きにしてください」

香坂が意地の悪い声でつぶやく。

「相変わらずひどいわね、香坂くんは」

「ぼくは正直なだけです」

香坂がそれでドアに向かったので、自分もテストの採点に戻ろうと、A Sの瓶をしまつて、

文机の上に解答用紙を取り出した。だが、赤ペンを握って、最初の一間をチェックし始めても、襖を開く音が聞こえてこない。顔を上げると、香坂がまだ襖の手前に佇んでこつちを見ていた。「どうかしたの？」

そう聞くと、香坂はもつと若くてナイーブだった頃を思い出させる、優しい顔で告げた。

「余計なことですけど、高塚くんたちにあまり情を移さない方がいいと思いますよ。いつかすべてがばれた時、誰よりも恨まれるのはあなたなんですから」

持っていた赤ペンをそつと解答用紙の上に置いた。文机の端に並んだたくさんの折り鶴が目に入って、香坂のその言葉がじわりと体に染みる。

「覚悟はできてるわ」

そう答えると、香坂はただうなずいて、畳の部屋を出ていった。襖が閉まって一人になったあとも、たくさん増えてしまった折り鶴をしばらく見つめたままでいた。

もしこの世界が思っているよりも優しいところで、いつかこと違うどこかで子供たちと会うことができるなら、今度は子供たちが望む通りの優しい母親になったかった。うんとうんと甘やかして、毎日頭を撫でてやりたかった。どの子にも、いくら謝っても足りない。でも、だからこそ、もう引き返すことは許されなかった。

赤ペンをもう一度手にすることなく、文机の引き出しを開けて、そこからたくさんストラッ



プの付いた携帯電話を取り出す。こんな時にはあまりに完璧すぎるこの十四階の防音が恨めしかった。音ひとつ聞こえてこない。部屋の外に人がいる息吹がまったく伝わってこなかった。自分の名前と同じ——この空っぽの世界が憎く思えた。

携帯を手にとり、長い住所録の中を探す代わりに、いつの間にか覚えてしまった番号を直接携帯に打ち込んだ。番号を入力し終えると、携帯が勝手に住所録と照合して、相手先の名前を表示する。

——五倉山赤十字病院。

その文字が一回点滅して、呼び出し音が聞こえた。それでためらいながら、電話を耳の側にかけていく。

電話がつながると、すぐに向こう側に知っている声が出た。なるべく平静に、その人に向かって告げる。

「水田さん。私です」

偽の行灯の光が後ろで揺らいだ。

「高塚沙希さんへの薬の投与量を増やして。まだ目覚めてもらうわけにはいかないわ」

「こんなところかな……」

アズミは独り言をつぶやきながら、月明かりに照らし出された孤児院の部屋を見渡した。シートをはずしたベッドと、空っぽになったカラーボックスが、住人のいなくなった部屋の寂しさを強めていた。

残っていた荷物は全部取り出して、ひとつずつ寄り分けながらバックパックに詰めていた。あとは机の引き出しの中身だけ。——初めて飲んだバヤリースの缶。最後の数粒が残ったマールチョコの筒。授業で一緒だった子にもらったシャツのボタン。どれも一度は捨てようとしたものの、手に取ると、どうしてもごみ箱に入れることができないものばかりだった。

バヤリースは阿坂から飲みかけのをもらった。「おまえも飲むか」——そう言って渡された時のことを思い出すと、捨てられなかった。予備のボタンはどのシャツにも合わない。でも、それをくれた子はこの前、サダクラ製薬から帰ってこなかった。だからもう、一生持つていられなかった。

最後に手元に残ったマールチョコ二粒を手にとり、それを口の中に放り込んだあと、

ためらいながらも空っぽの筒はごみ箱に捨てた。途端に罪悪感がこみ上げてくる。——あんなに大事に食べていたのに、簡単に買えるようになったらもう捨てるんだ。そう考えて、一瞬ごみ箱に手を伸ばしかけた。でも、筒を拾い上げる直前にその手を止める。それならすべてのお菓子の箱を取っておかないといけなくなる。外で買ったものは食べたあと、普通に捨てた。これだけ取っておくなんて、それこそ偽善だ。

唇を結びながら、ベッドの縁に軽く腰かけ、バックパックを閉じて、それを背負う。そして、五年近く自分の唯一の居場所だった小さな部屋を見渡した。階段の真下にある部屋は、天井が一部斜めになっていて、片側が廊下の物置の分だけ内側に引っ張っている。最初はここに姉と二人、小さめの二段ベッドで暮らしていた。

ドアの方を見ると、今にもそれが開いて蜘蛛がいつもの軽い調子で入ってきてさうだった。ノックもせずにやってきて、何か最低の冗談を言つて、笑いながら去っていく。怒つてばかりいたけど、嬉しかった。いつもああやって、無事を確かめてくれているのは知っていた。

ぱたりと、力なく剥き出しのマットレスの上に横向けに寝転んだ。背中に背負ったリュックが邪魔で、おかしい態勢になったが、構わなかった。髪が垂れ下がって、目に入る。でも、それも気にせずに頬をマットレスの表面にくっつけた。出窓から月明かりが差し込んできて、四角い光を床の真ん中に落としている。眠れない夜、ベッドに横たわったまま、いつもその

光を眺めていた。光がじりじり床板の目を移動していくのが分かるほど長時間見ていたことも、一度や二度じゃない。——そんな時には、きつと自分は一生このまま、ここでこの光を見て暮らすのだと考えていた。だからこそ、こうして部屋を出て行く自分が信じられなかった。

寝転んだ勢いでポケットから蜘蛛の眼鏡が少しはみ出している。それを手に取って、片方だけになったつるを広げ、窓の月明かりの方へと掲げた。汚れたレンズを通して、月はきれいで、蜘蛛にはこんなように世界が見えていたのかな、と思うと、目の奥が熱くなってくる。もう泣かない、と決めていたので目をぐつと閉じて、涙を押し返した。これからは駒として生きていかなきゃいけない。——そうだよ、ね、蜘蛛、と心の中で話しかけて、目を開けると、レンズの向こうの出窓に人影が立っていた。

心臓がドクンと脈を飛ばす。とっさにベッドから跳ね起きて、バックパックの脇に吊した折りたたみ傘をつかんだ。出窓は屋根の上に斜めに張り出していたが、四階だった。人が普通に歩けるところじゃない。——敵？　——と思いながら、眼鏡をしまつて、床の上で身を低く屈めた。

カチャッと鍵がはずれる音がして、出窓が内側に向けて開いた。白い髪が揺れて、笑みが見える。次の瞬間、見覚えのあるケープを纏った少年が、月明かりと共に部屋の中へ入り込んできた。

押し殺した悲鳴を上げて、後ろに下がろうとしたが、そのままつまずいて、床の上に尻餅をついた。バックパックの蓋が開いて、黄色い四角の上にコンビニで買ったお菓子が散乱する。その上に影を落とすようにして、少年が床に降り立った。

「驚かせた？」

そう言いながら、シスターとよく似たケープを、少年が頭からはずす。さらりと広がった髪の毛は月明かりでうつすらと銀色に見えたが、確かに白髪だった。――間違いない。おじさんと一緒にサダクラ製菓の階段から覗き見た、あの少年だ。

「ごめん。屋根の上を散歩してたんだ。この部屋、今、誰も使っていないって聞いてたから」

口元に笑みを浮かべたままで、少年が窓を閉める。再び響いたカチャツという音に、傘を持つ手が震えた。――あの時のことを知られたんだろうか、と考えながら、壁に背中が付くまで必死に後退った。もしかしたらすでに廊下にも人が来ているのかもしれない。

だって、シスターが見逃すはずがない。きつとあのバスでのことも全部ばれて――。

白髪の少年は膝に手を突いて、じつと興味深そうに床に落ちたお菓子の箱を見ていた。

「珍しいね、これ」床の箱を指差しながら、少年が丁寧な口調で尋ねる。「見てもいい？」

首を傾げる少年にどうしていいかわからず、傘を握り締めたままで小さくうなずいた。すると、少年は手袋をした指でお菓子をとり上げ、宝石か何かのように窓に向けてかざした。

「これってホワイトチョコもあるんだ……」

そうつぶやく少年の目は月明かりで輝いていて、ほんの少しだけ緊張が緩む。本当にお菓子にしか興味がなさそうだった。処理場のおじさんが言っていたことが警告のように頭の中で繰り返されたが、少年からはなんの敵意も感じられなかった。それどころか、お菓子の箱を少しうらやましそうに見ている気さえした。構えた傘を少しずつ下ろすと、少年が箱をこっちへ返す。

「見せてくれてありがとう。邪魔してごめんね」

その優しい声で、やっと床から立ち上がり、少年から箱を受け取った。少年はそのままドアへと足を向ける。手の中のお菓子は孤児院ではプレインの味しか手に入らなかった。これはそのホワイトチョコ版で、最初、外のコンビニで見かけた時、少年とまったく同じように驚いたことを思い出した。

「た……食べる？」

去りかけた少年に箱を差し出しながら、震える声でおずおずとそう言った。声と一緒に、手も震えている。

「いいの？」

少年は立ち止まって、ぱつと嬉しそうに微笑んだ。ここではあまり見ることもない、無邪

気な笑みだった。

「またいつでも買えるから」

傘を完全に下ろして、箱の蓋を開け、中の銀の袋を破る。少年が月明かりの中に立って、遠慮がちに手を差し出してきた。その手には、指先の部分にだけ変わった手袋がはめられていて、細い影が床にきれいな形を作っている。

「いつでも買えるって、すごいことだね」

少年はそう言いながら、箱から白いチョコのかかったお菓子をひとつ取り出して、それをそつと口元に持っていた。カリッと音がする。

入ってくる月明かりが少年の表情をきれいに照らし出していた。とてもきれいな目。味わうように少年がお菓子を丁寧に噛む間、囁くように告げた。

「でも、外では当たり前のことみたいなんだ。誰もあんまりすごいなんて思わないよ」

「へえ」少年が不思議そうに声に出して笑った。「そうなんだ」

箱をもう一回差し出すと、「まだもらっているの？」と少年が聞き返してくる。今度は笑顔でうなずいた。気が付くと、肩の力がすっかり抜けていた。もうひとつお菓子をつまみ上げながら、少年が箱の横に貼り付けられたキツネのマスコットを覗き込んでくる。

「このおまけの人形もかわいいね」

少年がそう言うのを聞いて、つい考えるより先に身を乗り出した。

「でしょ!? そう思うよね?」

少年が小さくうなずく。それが嬉しくて、ぐつと傘を持った手を握り締めた。少年が笑う。自分も一緒に笑って、ベッドのマットレスに腰を下ろした。

「あたしは自分のこと、タヌキだと思っているんだ」

そう言つて、傘を部屋の中で開くと、中心から垂れているタヌキのマスコットを少年に向けて見せた。少年はタヌキを指で突きながら、「うん。似てるね」とつぶやく。

「そうでしょ。そういうキツネっぽいよね、はくはつ——」

そこまで言つて、出かけた言葉を飲み込んだ。

「——ごめん」

慌てて目を逸らしながら謝つたが、少年は気にする様子もなく、「ん? いいよ」と言つて、口の中のお菓子を味わっていた。

「そう呼ばれてるのは知ってる。的確な字じゃないかな」

少年が穏やかな声で言う。近くで見ると、驚くほど優しい顔をしていて、おじさんがなんであんなに怖がっていたのか、よく分からなくなってきた。

「その呼び方しか知らなくて——」少年にそう言つて、傘を畳んだ。「——名前、あるの?」

「あつたけど、とつくに忘れた」

少年はにこやかに言つて、すぐ横に腰を下ろした。——自分と同じくらいの年齢だろうか、と思う。学校の同級生よりわずかに顔立ちが幼い気がしたが、肌が異様に白いからかもしれない。

「じゃあ、白<sup>はく</sup>と呼んでもいい?」

と、聞くと、少年は微笑んで聞き返した。

「いいよ。ぼくはなんて呼べばいいの?」

「アズミ」そう言つてから思い直す。「あ、でもそれだと双子のお姉ちゃんと同じだから『あずみん』がいいな」

「分かつたよ、あずみん」

白はそう言つて笑つた。孤児院でこんなに気軽に、誰かと話したのは初めてのような気がした。阿坂や蜘蛛のように、年上の人が可愛がつてくれることはあつたが、同世代では姉以外とあまり仲良くなつたことはなかつた。——おじさんの忠告が再び頭を過ぎつたが、それは心の奥に押し戻した。喜多見の時と同じだった。頭でどんなに考えていても、それよりも気持ちの前に出るのを止められない。

「白は……すごく怖い人だと思つてた」

自分もお菓子をひとつ口に入れてから言つた。ベッドの下で、床に着かない足がぶらり揺れる。白がこつちを見ていたので、もう一度お菓子の箱を差し出しながら付け加えた。

「だつて、『会』の歴史上、一番強い字だつて聞いてたし」

「ふふつ」白は笑つて、またひとつお菓子を取つた。「ぼくはめつたに人前に出ないから、大げさに言われるだけだよ」

白が両手を重ねるようにして前に上げると、その影が黄色い四角の中にキツネの影絵を作り出す。キツネははふはふと口を動かして、おいしそうにチョコのお菓子を食べていた。思わず、笑顔が顔いっぱいに広がつていくのを感じながら、白の方を見た。白がお菓子を自分の口の中に放り込んで、苦笑いと共につぶやく。

「ぼくは皮膚が弱くて日に当たれないんだ。子供の頃は外に出ないようにずっと地下に閉じ込められてたし、こんな月明かりでもびくびくしながら散歩してる。——むしろ最弱の字だよ、ぼくは」

しばらく月明かりだけが差す空つぼの部屋で、黙つて交互にお菓子を食べ続けた。白は時々、キツネの影絵を作つてくれて、一度はタヌキにも挑戦したが、うまくいかなかった。時間がゆっくり過ぎていくような気がして、お菓子を食べ終わつたあとも、しばらくそうして白と二人でそこに座つて、窓から外の雲のかかつた空を一緒に見ていた。

きれいな月だった。白の肌や髪と同じ色だった。その月明かりの中で、ふいに白が小さな声でつぶやく。

「人間なんて、最強でも最弱でも、そんなに大差ないと思うよ」

胸ポケットに入っている蜘蛛の眼鏡にそつと右手を当てながら、アズミは小さくうなずいた。

凄まじい轟音が世界を包んでいた。北條猛は無言でジェット機の入口からタラップに踏み出して、重く立ち込めたアジアの空を見上げた。低いところに浮かぶ雲の連なりと、呼吸を邪魔する強い湿気。相変わらず気の滅入る気候だった。

滑走路で鳴り響く飛行機の激しいエンジン音が、ほかのすべての音をかき消している。タラップの階段を下りて、古くひび割れた滑走路に立つと、飛行場とは名ばかりのアスファルトの平野が目の前に広がった。滑走路の脇にはどこからか移設してきた中古のプレハブが立ち並んでいる。すべて違う国から持ってきたため、形も大きさも不揃いなプレハブには、ペンキで1から6までの数字が振ってある。

2の数字が描かれたプレハブに向かって滑走路を横切りながら、衛星電話の電源を入れた。途端に液晶に一件の着信履歴が表示される。大きなコンテナの間を通り抜けて、エンジン音が少し離れるのを待ってから、電話の通話ボタンを押した。

「加奈子。おれだ」

そう言いながら、貨物についている荷札をいくつか確認して通り過ぎる。電話の向こうか

ら聞こえてくる日常の音が、周囲の冷やかな世界と噛み合わなかった。

「聞こえにくくて悪いな。今、飛行機から降りた」

クリップボードに挟まれた貨物のインボイスを運搬屋の男が差し出す。電話を耳に当てたまま、その下の欄にサインを走り書きして、ボードを男に返した。コンテナ三つを列車のように引き連れた運搬車が前を通っていく。各国の税関のステッカーが、コンテナの側面を色鮮やかに飾っていた。

「こっちの空港は外を歩かされるからうるさくてかなわん。舞は元気にしてるか？」

止まっているコンテナ車のひとつから部下が大きな木箱を運び出している。少し離れた場所では長さ一メートル半ほどの金属の箱を、別の部下二人が一番のプレハブの方へ搬入していた。コンテナの中を覗くと、あとひとつだけ木箱が残っている。

「そうか。発表会か」

そう答えながら、コンテナの中へ入って木箱を抱え上げ、一旦斜めに傾けたあと、右肩の上に載せた。中の金属の重さが静かに肩に食い込んでくる。

「見に行けないのが残念だな」

荷物を抱えて2番のプレハブの方へ横切りながら、電話の向こうの声に耳を傾け続けた。プレハブの前で待機している男がこっちに会釈をする。男の前に荷物を降ろすと、男は荷札

をバーコードリーダーで読み取ってから、セキュリティカードをこっちへ手渡した。それをプレハブのドアに通しながら電話口に告げる。

「急に大きな仕事が入ったんだ。すまないな」

中へ入ると、電話がいくらか聞こえやすくなった。ドアの脇には国籍不明の自販機がひとつ設置されていて、あらゆる言語圏の商品が並んでいる。ほとんどは聞いたことのないものだったが、地の果てまで行ってもコーラだけはあった。

「He's waiting. (来します)」

最近見かけるようになった二十代初めのアジア系の若者が、廊下の途中でそう囁いて、奥の扉を指した。若者は斜めにライフルを抱えていたが、持ち方が慣れていない。何も言わずにうなずいて、古くて据えた匂いのするプレハブの廊下をまっすぐ奥に向けて歩いた。窓はまったくなかったが、ドアが左右にいくつもある。途中の小さな机には段ボール箱が置いてあって、その中に各国の煙草が無造作に突っ込まれていた。日本の煙草が目についたので、それを取ってポケットに入れた。

「ああ。すまない。ちょっと歩きながら話してるもんでな。舞は今、先生のとこか？」

足音が無機質に廊下に響く。突き当たりのドアの横で、古い木の椅子に日本人の男が腰かけていた。ここでの顔なじみだった。うなずきを交わすと、男は椅子の下のカバンに手を伸



ばず。そこから取り出したハンドガンのグリップを軽くシャツの裾で拭いてから、男が銃口を逆に向けて差し出した。

「帰ったらシユヴァルト夫妻にもお礼を言わないといけないな」

電話に話し続けながら男から銃を受け取る。衛星電話を肩口に挟んで、受け取ったハンドガンのマガジンを両手で引き抜いた。中の弾数を確認し、再びマガジンを戻す。そして、座っている男にもう一度うなずくと、男は自分のセキュリティカードをドアロックに通した。

「加奈子。ちよつと待ってくれ。仕事の電話が入った」

そう言って電話を保留に切り替えてドアを開ける。中のソファセツトには三人の男が座っていた。その中の、眼鏡をかけた十代のアジア人が、こつちを見て立ち上がる。そして、握手を求めるように、右手を差し出しながら近付いてきた。

「北條さん。私、社から来ました——」

銃を持ち上げて、アジア人の額の真ん中を撃ち抜いた。アジア人の体は後ろに弾け飛んで、中東系の男が座っているソファに、血飛沫と共に叩きつけられる。中東系の男は血を浴びて怒りの声を上げたが、構わずにさらにアジア人を撃った。オートマチックの弾を六弾全部撃ち込むと、空になった銃はもう一人の部下に放り投げる。白人の部下は、熱くなった銃を両手で受け取って、罵りながら銃を脇に投げ捨てた。

アジア人の少年の血は滝のようにソファに流れ落ちて、すでにクッションの中へ染み込み、下からボタボタと垂れていた。全身血まみれになった中東の男は、自分の手足に視線を落として困惑していたが、白人の男はただ無感情に少年の死体を見つめていた。

「We checked the kid. He wasn't armed. (子供は調べた。武器を持ってなかった)」

白人の男は不満そうに言った。それを無視して、床に落ちていた少年の眼鏡を拾うと、フレームからレンズを取る。その縁は磨き込まれた剃刀のように鋭利になっていた。そのまま白人の男の目の前で、ソファに向けてレンズを投げる。レンズは一瞬で本草のソファを貫いて、綿の中へと消えた。

「He's not a kid. He's a Koma. (子供じゃない。駒だ)」

白人の男に告げた。白人の男は黙ってソファに空いた穴と、一見まじめな留学生のように見える少年の死体を見比べていた。その足元に眼鏡の残りを放り投げて言った。

「Kill them - first chance. You won't get a second. (最初のチャンスに殺せ。次はない)」

血がまだ少年の体から流れ続けていた。高校生ぐらいだろうか。顔の右半分は原型を保っていないかったが、驚いた表情のまま固まっている左半分には、まだ微かに幼さが残っている。中東系の男は体付いた血をタオルで拭き取りながら、少年の死体の始末に取りかかっていた。後ろでドアがカチャツと開く。顛末を確認するように、外の日本人が顔を覗かせて言った。

「やっぱり『駒』でしたか」

「ああ」

「よく一瞬で分かりましたね」

「分かるさ」

そうつぶやいて、もう一度死体を見下ろした。駒の少年は日本を遠く離れた地で宙を見つめたまま、床の上を引きずられていく。おそらくは自分の死んだ場所がなんという地名かも知らないだろう。

「どうやら資金源のひとつを潰されました」日本人の男は死体をひっぱる道を空けながら、冷静な声で言った。「孤児院<sup>オρφネイト</sup>が気付いたようです」

血の跡を残して、死体が廊下にひっぱり出されたあと、再びドアがボタンと閉ざされる。

「あの女なら気が付く。遅いくらいだ」

靴にわずかに散った血をソファの端で落としながら言った。日本人の男がうなずいて、ドアの外へと姿を消す。それを待つて、もう一度衛星電話を耳に当て、保留解除のボタンを押した。

「悪かったな。待たせて。もう用事は終わった」

床にできた血溜まりを踏み越えて、裏口の方へ向かいながら、電話に告げた。部屋の奥に

はさっきの木箱がたくさん並んでいて、ひとつは蓋が開いている。その中に入っていたものは分解されて、テーブルの上に確認用に並べられていた。銃弾五百発も、その横に小分けにされて積まれている。同じような箱が壁際に三十はあった。

「久しぶりの日本だ。何がおみやげにほしいか、舞に聞いといてくれ」

そう言うと、裏口の横にあるフライトスケジュールの黒板に目をやる。行き先を記入する欄には荒っぽい文字で書かれた「narita」という文字が目立っていた。

「分かった。また連絡する。運転に気をつけろよ」

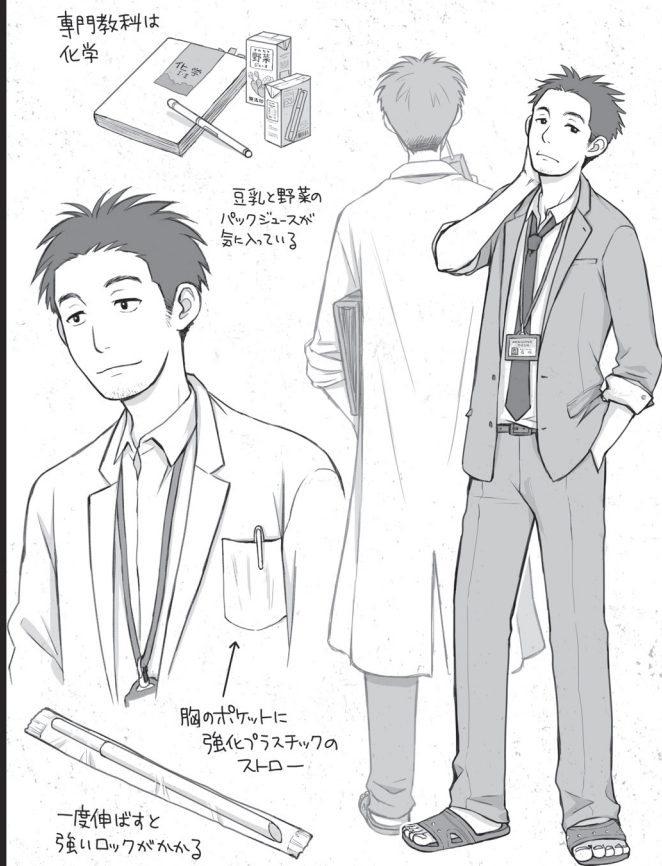
通話を切ると、裏口から外に出た。ちょうどヘリコプター二台が同時に飛び立とうとしているところで、ローターの音が空気を激しく揺さぶっている。その向こうでは次の飛行機がビーコンもない滑走路で旋回していた。どのみち、数週間ごとに移動する飛行場だった。来月の今頃にここにきたら、すべてはただの空き地になっている。

日本——と思うと、自然と首筋に手が伸びた。荒々しい傷の縫合跡が指先をかすめる。埋め込まれたマークカーを自分で取り出した時に付いた勲章だった。その傷口をさすりながら、東の方の空を見ると、太陽が雲の間から顔を覗かせていた。

ポケットから煙草を取り出して、一本を口にくわえている間に、ヘリコプターが突風を巻き起こして空へ舞い上がっていく。ジェット機のエンジン音もどんだん巨大になっていた。

北條はその様子を見守りながら、煙草の先を手で守るようにして、そっと火を点けた。  
吐き出される白い煙は、懐かしい味がした。

ほたるの群れ5・希 こいねがう  
完



# ほたるの群れ 5

第五話 希

原作・文・監修

編文・演出

イラスト・演出  
キャラクターデザイン

本文デザイン

筆文字

協力

俳句・訳詩

ウェブサイト製作

映像製作

声の出演

音楽

制作

向山貴彦

吉見知子

平山けいこ

スタジオ・エトセトラ

小島明子

井上貴子／井上裕

向山義彦／吉見純世

吉見知子

大西哲也 (funghiDesign)

川崎健司 (イアリンジャパン)

星川かすみ／米本志穂

oo39 ドットコム

studio  ET CETERA

special thanks to:

秋山乗祐・足達雅一・五十嵐真理・甲斐大輔・笠島久嗣・加藤知実  
木村敬子・小泉幸代・末岡こうじ・橘史恵・永野文香・永島賞二・舟津潤・向山淳子  
山崎壮・山鹿晃・山中武・山田悦子・山田美里・山田初美・由良明美（敬称略）

そして、下関市立山の田中学校 1986 年度卒業生の人みんなに。

and a very special thank you to :

ヒューマンアカデミー札幌校

喫茶みわく & 町内会の皆様